仙台市文化財調査報告書第458集

沓形遺跡他

発掘調査報告書

沓形遺跡第7次、南小泉遺跡第80次・第81次、今泉遺跡第13次、

北目城跡第8次、郡山遺跡第260次・263次、富沢遺跡第148次

2017年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第458集

沓　形　遺　跡 他

発 掘 調 査 報 告 書

沓形遺跡第7次、南小泉遺跡第80次・第81次、今泉遺跡第13次、

北目城跡第8次、郡山遺跡第260次・263次、富沢遺跡第148次

2017年３月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には現在約760箇所の遺跡が確認されており、このうち約610箇所が一般に遺跡と呼ばれている埋蔵文化財包蔵地です。これらの一つ一つが先人が遺した貴重な文化遺産です。

平成23年3月11日の東日本大震災より6年が経ち、復興・創生期間1年目を迎えておりますが、個人住宅等の建築に伴う発掘届の件数や発掘調査の件数は、平成23年度以降、震災前を上回る状況が継続しております。仙台市教育委員会といたしましては、復旧・復興事業との調整を図りながら、埋蔵文化財の保護と啓発に日々務めているところです。

本報告書には、各種事業に伴って平成28年度に発掘調査を実施した、沓形遺跡第7次調査、南小泉遺跡第80次、第81次調査、今泉遺跡第13次調査、北目城跡第8次調査、郡山遺跡第260次調査、第263次調査、富沢遺跡第148次調査の調査結果を収録しています。

文化財は、地域の歴史を将来へ伝えるために守るべき大切な財産です。先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たちの使命であります。地域が育んだ文化を語る上で歴史や文化資源がその根底をなしているからです。本報告書が学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただいた多くの方々に心より感謝申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。

平成29年３月

仙台市教育委員会
教育長　大越　裕光

例　　言

1．本書は、平成28年度に実施された民間の開発事業に伴う発掘調査報告書であり、沓形遺跡第7次、南小泉遺跡第80次・第81次、今泉遺跡第13次、北目城跡第8次、郡山遺跡第260次・第263次、富沢遺跡第148次の各発掘調査報告を合本にしたものである。
本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。

2．本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は及川謙作が行った。
第1章・第2章第1・2節－庄子裕美　第2章第3節・第3章－小林航　第4章・第5章第3節－及川謙作　第5章第1・2節－五十嵐愛　第6章－高橋純平
遺物の基礎整理～実測図作成－佐藤洋、向田整理室作業員
遺物図・遺構図デジタルトレース－向田整理室作業員
遺物観察表作成－佐藤洋　　遺構註記表作成－各担当職員
遺物写真撮影・図版作成－及川謙作、向田整理室作業員　　遺構写真図版作成－及川謙作

3．本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．文中および図中の方位は真北を示している。

2．図中の標高を測定した基準点のデータは平成23年3月11日の東日本大震災以前に測定したものと、その後改定されたものを使用している。

3．遺構の略称は以下の通りで、郡山遺跡は全体の通しNo.で、その他の遺跡の遺構番号は各調査別の通しNo.である。
SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡・堀跡　SE：井戸跡　SI：竪穴住居跡　SK：土坑
SX：性格不明遺構　P：ピット

4．遺物の略称は以下のとおりである。
A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ調整）　D：土師器（ロクロ調整）・赤焼土器
E：須恵器　F：丸瓦　G：平瓦　H：その他の瓦　I：陶器　Ｉｃ：中世陶器　J：磁器
K：石器・石製品　Q：自然遺物　L：木製品　N：金属製品　P：土製品　X：土師質土器

5．土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原1999）を使用した。

6．遺物実測図中の網点は黒色処理を示している。

7．遺物観察表の（　）がついた数値は図上復元した推定値と残存値である。

8．本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田a火山灰（To－a）」と考えられている。降下年代は西暦915年と推定されている。
庄子貞夫・山田一郎1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰」について『多賀城跡－昭和54年度発掘調査概報』宮城県多賀城跡調査研究所
仙台市教育委員会2000『沼向遺跡　第1～3次発掘調査』仙台市文化財調査報告書第241集
小口雅史2003「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題―十和田aと白頭山（長白山）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

9．各遺跡の自然科学分析に関しては古代の森研究舎に業務を委託した。また北目城跡の噴砂痕については東北学院大学松本秀明教授よりご教示を賜った。また、北目城跡の各知見については仙台市博物館および宮城県考古学会中世部会の諸氏から様々なご教示を頂いた。記して御礼を申し上げる。

目　　次

第1章　沓形遺跡の調査……1
　第1節　遺跡の概要……1
　第2節　第7次調査……1
　　1. 調査要項　3. 基本層序　5. まとめ
　　2. 調査に至る経過と調査方法　4. 発見遺構と出土遺物
第2章　南小泉遺跡の調査……11
　第1節　遺跡の概要……11
　第2節　第80次調査……11
　　1. 調査要項　3. 基本層序　5. まとめ
　　2. 調査に至る経過と調査方法　4. 発見遺構と出土遺物
　第3節　第81次調査……23
　　1. 調査要項　3. 基本層序　5. まとめ
　　2. 調査に至る経過と調査方法　4. 発見遺構と出土遺物
第3章　今泉遺跡の調査……29
　第1節　遺跡の概要……29
　第2節　第13次調査……29
　　1. 調査要項　3. 基本層序　5. まとめ
　　2. 調査に至る経過と調査方法　4. 発見遺構と出土遺物
第4章　北目城跡の調査……37
　第1節　遺跡の概要……37
　第2節　第8次調査……38
　　1. 調査要項　3. 確認調査の発見遺構と出土遺物　5. 本発掘調査と追加調査の発見遺構と出土遺物
　　2. 調査に至る経過と調査方法　4. 基本層序　6. まとめ　7. 樹種同定
第5章　郡山遺跡の調査……75
　第1節　遺跡の概要……75
　第2節　第260次調査……75
　　1. 調査要項　3. 基本層序　5. まとめ
　　2. 調査に至る経過と調査方法　4. 発見遺構と出土遺物
　第3節　第263次調査……95
　　1. 調査要項　3. 基本層序　5. まとめ
　　2. 調査に至る経過と調査方法　4. 発見遺構と出土遺物　6. 樹種同定
第6章　富沢遺跡の調査……119
　第1節　遺跡の概要……119
　第2節　第148次調査……119
　　1. 調査要項　3. 基本層序　5. 自然科学分析
　　2. 調査に至る経過と調査方法　4. 発見遺構と出土遺物　6. まとめ

挿図目次

第１図　沓形遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第２図　沓形遺跡第7次調査区位置図……2
第３図　沓形遺跡第7次調査区設定図……2
第４図　第7次調査区断面図……3
第５図　4層水田跡平面図……3
第６図　4層水田跡大畦畔断面図・
水口エベレーション図……4
第７図　5層上面検出遺構平面図……5
第８図　SD1～SD5・SX1断面図……5
第９図　第2次・第7次調査区合成図……8
第10図　南小泉遺跡の位置と周辺の遺跡……11
第11図　南小泉遺跡第80次調査区位置図……12
第12図　南小泉遺跡第80次調査区設定……12
第13図　第80次調査区平・断面図……13
第14図　SI1竪穴住居跡平・断面図……14
第15図　SI1竪穴住居跡出土遺物……15
第16図　SI1竪穴住居跡出土遺物……16
第17図　SK1土坑出土遺物……18
第18図　南小泉遺跡第81次調査区位置図……24
第19図　南小泉遺跡第81次調査区配置図……24
第20図　第81次調査区平・断面図……25
第21図　SI1竪穴住居跡出土遺物（1）……25
第22図　SI1竪穴住居跡出土遺物（2）……26
第23図　今泉遺跡の位置と周辺の遺跡……29
第24図　今泉遺跡第13次調査区位置図……30
第25図　今泉遺跡第13次調査区配置図……30
第26図　３トレンチ出土遺物……31
第27図　１～３トレンチ平面図……32
第28図　１～３トレンチ断面図……33
第29図　第13次調査区及び周辺調査区の遺構……34
第30図　北目城跡の位置と周辺の遺跡……37
第31図　北目城跡第8次調査区位置図……39
第32図　５トレンチ遺構配置図……40
第33図　確認調査区配置図……40
第34図　５トレンチSK1出土遺物（1）……41
第35図　５トレンチSK1出土遺物（2）……42
第36図　SD1堀跡・整地層位置図……45
第37図　SD1堀跡出土遺物……46
第38図　追加調査区３区西・北壁整地層断面図……46
第39図　SD2・3溝跡・SD4堀跡位置図……46
第40図　北目城跡第8次調査区（S=1/250）……47、48
第41図　SD1堀跡平面図（東・西区）、調査区土層
断面図……49、50
第42図　SD3土層断面図・出土遺物……51
第43図　SD3土層断面図・出土遺物……51
第44図　SD4堀跡出土遺物……51
第45図　SD8・12・14・17溝跡位置図……52
第46図　SD17溝跡出土遺物（1）……52
第47図　SD17溝跡出土遺物（2）……53
第48図　SD18～21溝跡位置図……54
第49図　６区東壁・７区西壁土層断面図
（SD18～20溝跡・SM13）……54
第50図　SD18溝跡出土遺物……55
第51図　SK5土坑平面図……55
第52図　SE6井戸跡平・断面図……56
第53図　SE6井戸跡出土遺物……56
第54図　SE9井戸跡・SK16土坑土層断面図……57
第55図　SE9井戸跡出土遺物……57
第56図　SE13井戸跡平・断面図……58
第57図　SE13井戸跡出土遺物……58
第58図　SE15井戸跡平・断面図……59
第59図　SE15井戸跡出土遺物……59
第60図　SK22～26土坑平面図（追加調査区12区）……60
第61図　SK7・10・11土坑平面図……60
第62図　調査区北側ピット平面図……60
第63図　本発掘調査範囲ピット断面図……61
第64図　SM1～14小溝状遺構位置図……61
第65図　第1次調査4区深堀2区南壁土層断面（上）、
第8次調査区東区西壁土層断面……62
第66図　1952年の北目城跡周辺の空撮写真（米軍撮影）
と各調査区合成図……63
第67図　SD1・4堀跡断面図……64

第68図　郡山遺跡と周辺の遺跡……75
第69図　郡山遺跡調査地点位置図……76
第70図　郡山遺跡第260次調査区位置図……77
第71図　確認調査区土層断面模式図……78
第72図　確認調査5トレンチ出土遺物……79
第73図　郡山遺跡第260次調査区配置図……79
第74図　調査区北壁断面図・各層の主な遺構配置図‥80
第75図　Ⅲ層上面検出遺構配置図・SD2374溝跡北壁断面図……82
第76図　SD2374溝跡出土遺物……83
第77図　SD2376溝跡出土遺物……83
第78図　SD2377溝跡と重複する遺構配置図・北壁断面図……84
第79図　SD2377溝跡出土遺物……85
第80図　SK2382土坑土層断面図……85
第81図　Ⅲ層類似層中出土遺物……86
第82図　SD2379溝跡出土遺物……86
第83図　SD2379溝跡平面図・土層断面図……87
第84図　SX2380性格不明遺構平面図・土層断面図‥‥88
第85図　郡山遺跡第260次調査区周辺の遺構……90
第86図　郡山遺跡第263次調査区位置図……95
第87図　郡山遺跡第263次調査区配置図……96
第88図　SD2385溝跡位置図……96
第89図　1トレンチ平・断面図（1）……97
第90図　1トレンチ平・断面図（2）……98
第91図　SD2385溝跡出土遺物（1）……99
第92図　SD2385溝跡出土遺物（2）……100
第93図　SD2385溝跡出土遺物（3）……101
第94図　SD2386位置図……102
第95図　SD2386溝跡土層断面図……102
第96図　SD2386溝跡出土遺物……102
第97図　SD2387位置図……103
第98図　SE2391・2位置図……103
第99図　SE2391井戸跡土層断面図……103
第100図　SK2389土坑・SE2392井戸跡土層断面図‥103
第101図　SE2392井戸跡出土遺物……103
第102図　SK2388～90位置図……104
第103図　SK2388土坑出土遺物……104
第104図　SK2389土坑出土遺物……104
第105図　SK2390土層断面図……105
第106図　SA74・SK2393位置図……105
第107図　SK2393位置図……105
第108図　SK2393土坑・SA74材木列出土遺物……106
第109図　２トレンチ平・断面図……107
第110図　SD2394・6・7・SE2398位置図……108
第111図　SD2394溝跡出土遺物……108
第112図　SK2395土坑出土遺物……108
第113図　SK2395土坑土層断面図……108
第114図　SK2395・SX2399・ピット位置図……109
第115図　P2土層断面……109
第116図　調査区一括出土遺物（1）……110
第117図　調査区一括出土遺物（2）……111
第118図　第263次調査区と周辺調査区の遺構……112
第119図　富沢遺跡と周辺の遺跡……119
第120図　富沢遺跡第148次調査区位置図……120
第121図　富沢遺跡第148次調査区配置図……120
第122図　調査区北壁土層断面図……122
第123図　調査区東壁断面図……123
第124図　４層水田跡平面図……124
第125図　７層水田跡平面図……125
第126図　SD1溝跡平・断面図……126
第127図　7層下面畦畔痕跡平面図……127
第128図　第148次調査出土遺物……128

挿表目次

表１　郡山遺跡第263次調査区出土遺物数一覧……112

写真図版目次

写真図版１　沓形遺跡第７次調査区（1）……9
写真図版２　沓形遺跡第７次調査区（2）……10
写真図版３　南小泉遺跡第80次調査区（1）……19
写真図版４　南小泉遺跡第80次調査区（2）……21
写真図版５　南小泉遺跡第80次調査区（3）……22
写真図版６　南小泉遺跡第80次調査区出土遺物……22
写真図版７　南小泉遺跡第81次調査区（1）……26
写真図版８　南小泉遺跡第81次調査区（2）……27
写真図版９　南小泉遺跡第81次調査区出土遺物……28
写真図版10　今泉遺跡第13次調査区（1）……34
写真図版11　今泉遺跡第13次調査区（2）……35
写真図版12　今泉遺跡第13次調査区（3）・出土遺物……36
写真図版13　北目城跡第8次調査区確認調査（1）……42
写真図版14　北目城跡第8次調査区確認調査（2）……43
写真図版15　北目城跡第8次調査区確認調査出土遺物……44
写真図版16　北目城跡第8次調査区（1）……65
写真図版17　北目城跡第8次調査区（2）……66
写真図版18　北目城跡第8次調査区（3）……67
写真図版19　北目城跡第8次調査区（4）……68
写真図版20　北目城跡第8次調査区（5）……69
写真図版21　北目城跡第8次調査区出土遺物（1）……70
写真図版22　北目城跡第8次調査区出土遺物（2）……71
写真図版23　北目城跡第8次調査区出土遺物（3）……72
写真図版24　郡山遺跡第260次本発掘調査区（1）……91
写真図版25　郡山遺跡第260次本発掘調査区（2）……92
写真図版26　郡山遺跡第260次調査区出土遺物（1）……93
写真図版27　郡山遺跡第260次調査区出土遺物（2）……94
写真図版28　郡山遺跡第263次調査区（1）……113
写真図版29　郡山遺跡第263次調査区（2）……114
写真図版30　郡山遺跡第263次調査区（3）……115
写真図版31　郡山遺跡第263次調査区出土遺物（1）……116
写真図版32　郡山遺跡第263次調査区出土遺物（2）……117
写真図版33　富沢遺跡第148次調査区（1）……135
写真図版34　富沢遺跡第148次調査区（2）・出土遺物……136

第１章　沓形遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

沓形遺跡は仙台市若林区荒井字矢取東・荒井広瀬東他に所在する。JR 仙台駅から南東約 6.0km に位置し、標高は２～４ｍの後背湿地上に立地する。本遺跡は、高速鉄道東西線建設事業や土地区画整理事業等に伴い、平成 19 年度の第１次調査から平成 26 年度の第６次調査まで断続的に調査が実施され、弥生時代中期中葉以前、弥生時代中期中葉、古墳時代前期、古代から中世の水田跡が広範囲にわたって確認されている。特に弥生時代中期中葉の水田跡は砂に覆われており、この砂は粒度分析などの結果から約 2000 年前の津波堆積物であることが判明している。

沓形遺跡の周辺では、西側の自然堤防上に立地する中在家南遺跡や押口遺跡で弥生土器や石器、木製品等が河川跡から出土した。木製品には農耕具の完成品と未完成品や建築部材がある。また中在家南遺跡では、墓域が確認されており、磨製石斧などの副葬品を伴う土坑墓が見つかっている。沓形遺跡の南西側にある荒井南遺跡でも、約 2000 年前の津波堆積物に覆われた弥生時代中期中葉の水田跡が確認されている。沓形遺跡周辺では、居住域、墓域、食糧生産域が一体となった集落が弥生時代中期中葉に存在していたと考えられる。

第２節　第７次調査

１．調査要項

遺　跡　名　沓形遺跡
（宮城県遺跡登録番号 01563）

調 査 地 点　仙台市若林区荒井字広瀬東 54-1 他

調 査 期 間　平成 28 年 10 月 3 日
～ 10 月 18 日

調査対象面積　401.61 ㎡

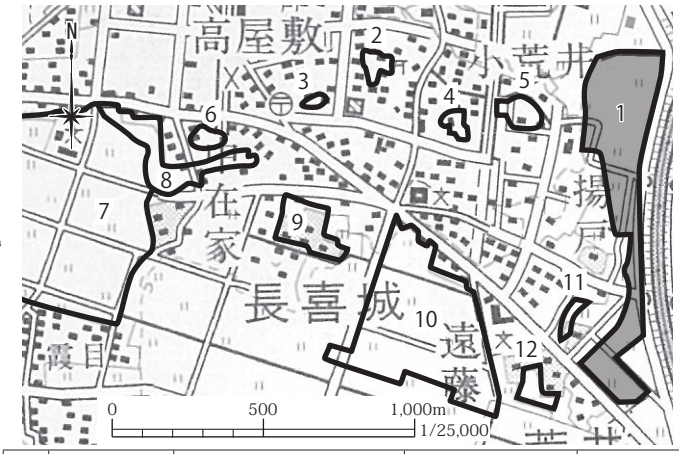
調 査 面 積　153 ㎡

調 査 原 因　事務所の新築工事

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部
文化財課調査調整係

担 当 職 員　主事　庄子裕美
文化財教諭　及川基



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	沓形遺跡	生産遺跡	自然堤防	弥生～中世
2	押口遺跡	河川跡・水田跡・包含地	自然堤防・後背湿地	弥生～近世
3	高屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
4	荒井畑中遺跡	散布地	自然堤防	古墳～中世
5	荒井館跡	城館跡	自然堤防	中世
6	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
7	仙台東郊条里跡	条里跡	自然堤防	平安
8	中在家南遺跡	土器棺墓・土壙墓・方形周溝墓・河川跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	弥生～近世
9	長喜城館跡	城館跡	自然堤防	中世
10	荒井南遺跡	水田跡	後背湿地	弥生
11	荒井広瀬遺跡	河川跡	後背湿地	弥生・古墳
12	下荒井遺跡	散布地	自然堤防	平安

第１図　沓形遺跡の位置と周辺の遺跡

２．調査に至る経過と調査方法

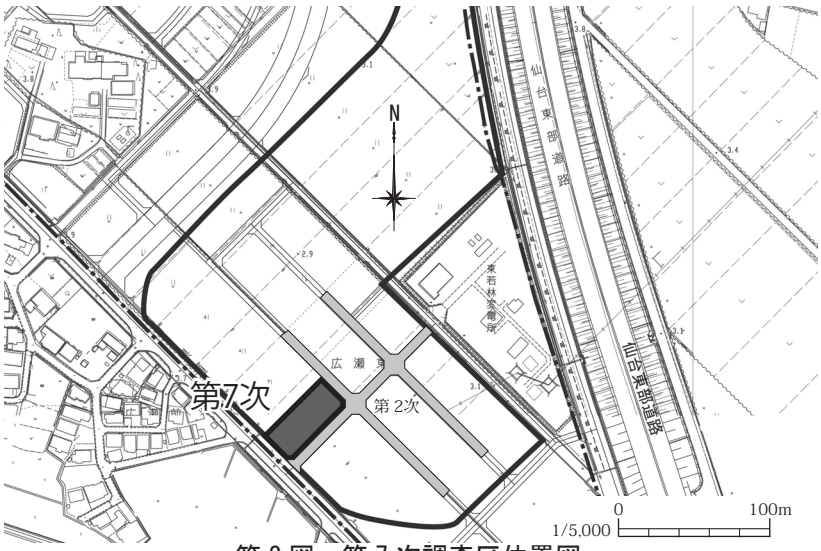
今回の調査は、平成 28 年８月１日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（平成 28 年８月４日付 H28 教生文第 103 － 047 号で回答）に基づき、平成 28 年 10 月３日に着手した。

建築範囲の北部分に長さ 18 ｍ×幅７ｍ、面積 126 ㎡の調査区を設定した。重機で盛土と基本層１層と２層の上部を除去したが、調査区の東半部側が造成時の土取工事で遺構確認面より深く掘削が及んでいたことから、代理人と協議の上、調査区を南西側に拡張した（長さ 18 ｍ×幅 8.5 ｍ・153 ㎡。そのうち遺構面が残存している範囲は長さ７ｍ×幅 8.5 ｍ・面積 59.5 ㎡。）。調査区の壁際に側溝を設定し壁断面の観察を行い、GL-1.3 ～ 1.4 ｍで津波堆積物である砂層（３層）を、その直下で水田耕作土（４層）を確認した。４層で検出された畦畔は大畦畔２条と小畦畔１条であり、４層の下面では水田跡に伴う畦畔痕跡である擬似畦畔 B を１条検出した。また、５層上面で

は溝跡を７条と性格不明遺構を１基検出した。

平面図と調査区壁面、遺構の断面図は1/20で作成した。記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。

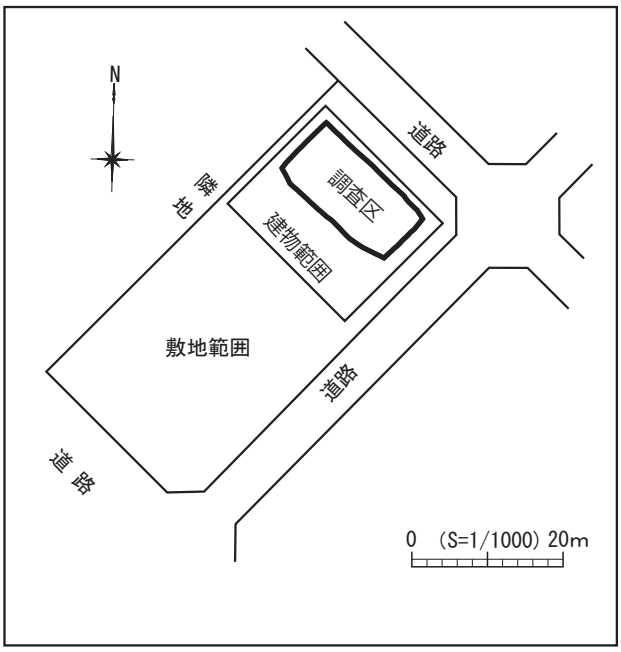
10月17・18日に現地での調査器材の撤収作業を行い、10月19日に代理人に現場の引き渡しを行い、調査を終了した。



第２図　第７次調査区位置図

３．基本層序

調査区内の盛土の厚さは1.1～1.3ｍである。盛土より下位で基本層を５層確認した。今回の調査の基本層序は、本調査区の北側と東側に隣接する平成22年度の第２次調査の層との対比を行いながら分層した。



第３図　第７次調査区配置図

１層　宅地造成以前の水田の耕作土。黒色の粘土で、層厚は０～32㎝である。

２層　黒色の粘土で、層厚は２～28㎝である。下面に凹凸があり、灰白色火山灰粒・ブロック（径２～80㎜）をやや多く含む。第２次調査3a層に対応し、古代から中世の時期と考えられている水田耕作土である。

３層　黄褐色の均質な砂で、層厚は０～12㎝である。第２次調査5b層に対応する。この砂層は第１次調査で粒度分析と放射性炭素年代測定の結果、約2000年前の津波堆積物層であることが判明している（松本・吉田　2010）。

４層　黒褐色の粘土で、層厚は３～24㎝である。下面に顕著な凹凸があり、酸化鉄班と植物遺体を少量含む。第２次調査6a1層に対応し、弥生時代中期中葉の水田耕作土である。

５層　にぶい黄褐色の粘土で、層厚は45㎝以上である。黒褐色粘土を微量に、酸化鉄を少量含む。第２次調査7a層に対応する。

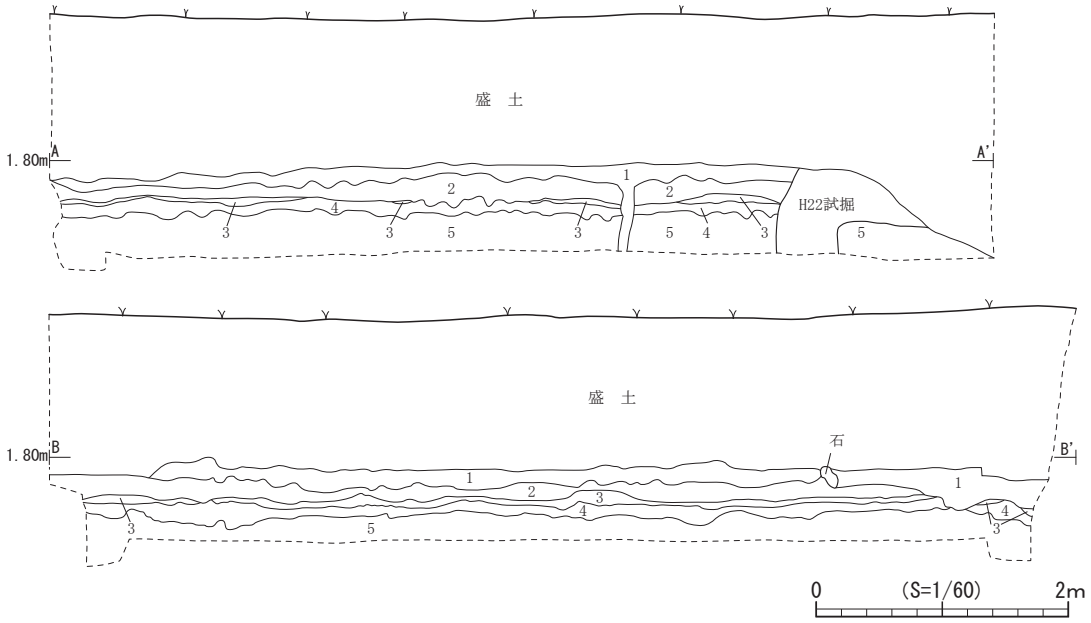
４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では４層を耕作土とする水田跡を検出した。５層上面では溝跡を７条と性格不明遺構を１基検出した。

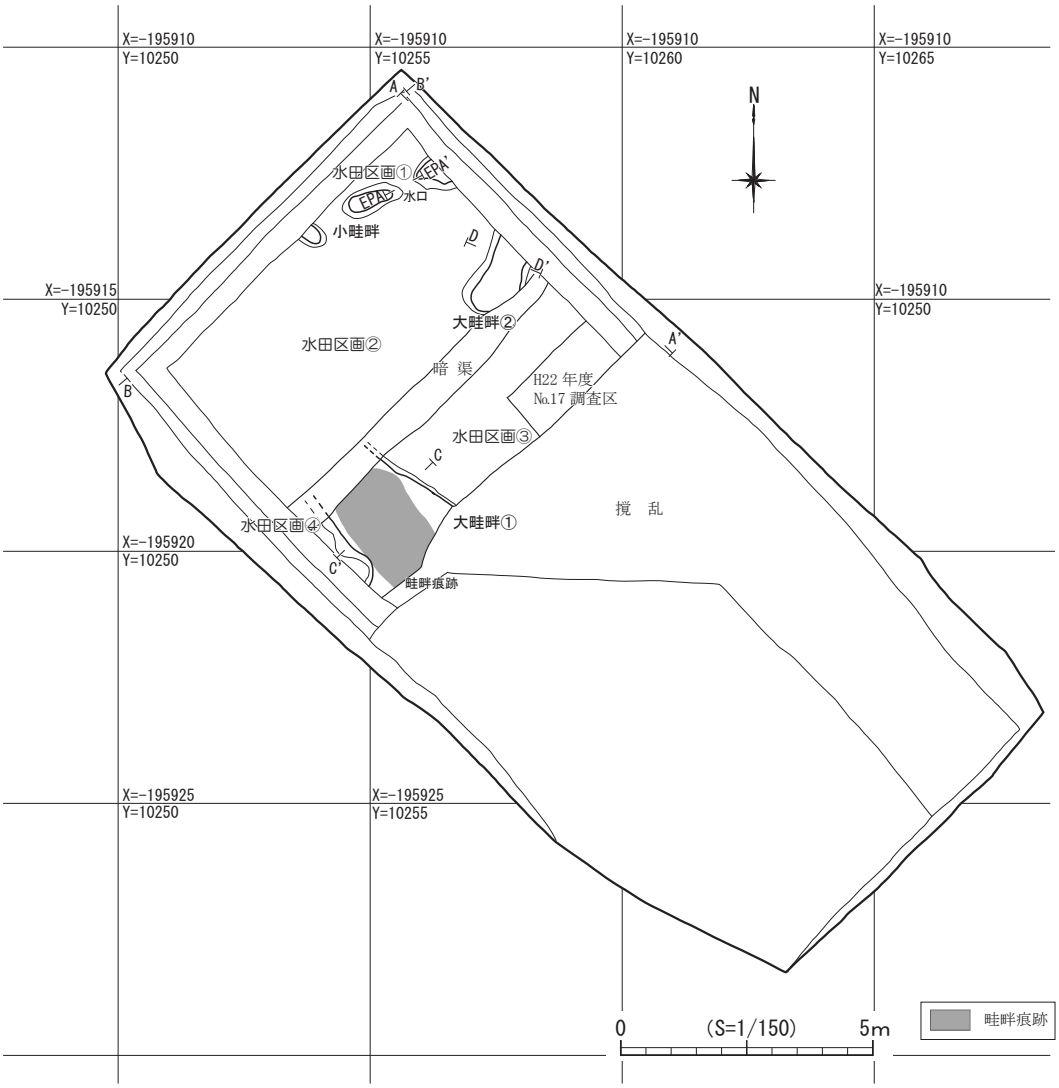
(1) ４層水田跡

ｉ．検出・遺存状況

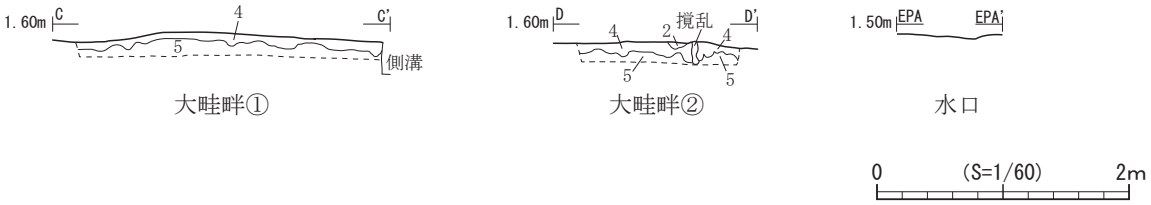
水田跡は津波堆積物である砂層に覆われた状態で検出された。調査区の東側は造成時の土取工事によって削平されている。



第４図　第７次調査区断面図



第５図　４層水田跡平面図



第６図　４層水田跡　大畦畔断面図・水口エレベーション図

ⅱ．耕作土

耕作土である４層の下面には凹凸があり、５層の黄褐色粘土が巻き上げられてブロック状になっている箇所もある。耕作土には植物遺体と酸化鉄が含まれている。層厚は最大で 24 ㎝である。

ⅲ．畦畔

大畦畔２条と小畦畔１条を検出した。

大畦畔①は調査区南部で確認した大畦畔で、規模は検出長が 205 ㎝、上端幅が 190 ㎝、下端幅が 215 ㎝で、N－57.4°－W の方向である。畦畔と水田面との比高差は約６㎝である。大畦畔②は調査区の北東部で確認された大畦畔で、規模は検出長が 135 ㎝、上端幅が 77 ㎝、下端幅が 88 ㎝ある。N－26.8°－E の方向で調査区外の北側へ延びている。畦畔と水田面との比高差は約１㎝である。

小畦畔は調査区北西部で確認され、規模は検出長が 315 ㎝、上端幅が 27 ～ 45 ㎝、下端幅が 44 ～ 70 ㎝である。N－65.4°－E の方向で調査区外の北側と西側へ延びており、水田面との比高差は約１～３㎝である。

ⅳ．水田区画

水田区画は４区画（水田区画①～④）検出された。畦畔が途中で途切れることや部分的な検出のため、水田区画の規模は不明である。水田面の標高は水田区画①は 1.48 ～ 1.51 ｍである。水田区画②は 1.48 ～ 1.54 ｍで、北西側が高く南東側が低い。水田区画③は 1.45 ～ 1.50 ｍで、北側が高く南側が低い。水田区画④は 1.39 ～ 1.46 ｍで、北西側が高く南東側が低い。

ⅴ．水口

水口は小畦畔で１ヵ所（水口①）確認された。水田面の標高値の差から水田区画①から水田区画②へ用水が供給されたと考えられる。

ⅵ．畦畔痕跡

４層水田耕作土を掘り下げている際に、大畦畔①と重なった位置で５層の帯状の盛り上がりを確認した。この盛り上がりの方向は北西から南東で、大畦畔①と同一方向であることから、４層水田跡に伴う擬似畦畔 B であると考えられる。規模は検出長が 203 ㎝、幅が 134 ～ 145 ㎝である。

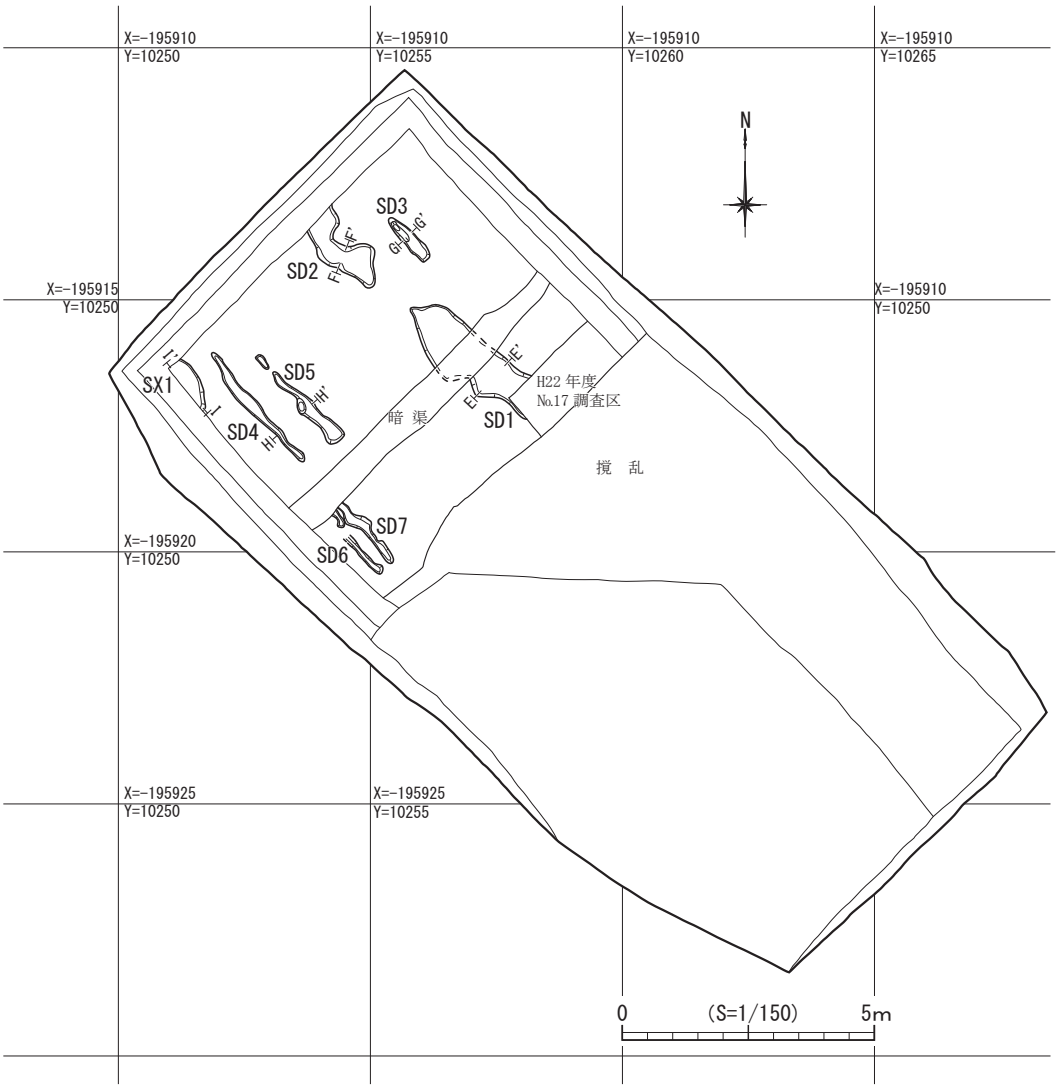
(2) ５層上面検出遺構

SD1 溝跡

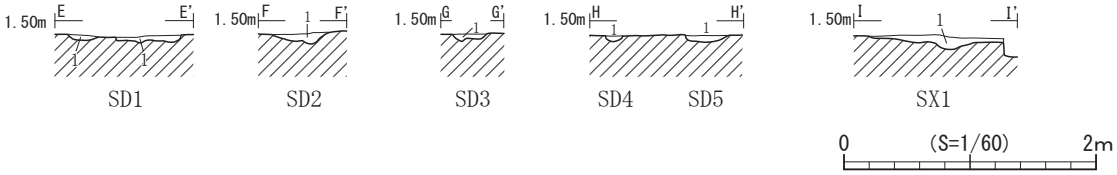
調査区の中央部で検出した北西－南東方向の溝跡である。検出長は 3.18 ｍで、上端幅は 111 ㎝、下端幅は 96 ㎝、深さは１～４㎝である。断面形は浅いU字状で、底面には凹凸が見られる。堆積土は単層であり、基本層４層を起源とする粘土である。黄褐色粘土ブロックをやや多く、酸化鉄を少量含む。検出位置と方向、堆積土から、SD2 溝跡と同一の溝跡の可能性が考えられる。

SD2 溝跡

調査区の北部で検出した北西－南東方向の溝跡である。検出長は 1.69 ｍで、上端幅は 70 ㎝、下端幅は 60 ㎝、



第７図　５層上面検出遺構平面図



遺構名	層位	色調	土質	備考
SD1	1	10YR3/1 黒褐色	粘土	7 層粘土小ブロックをやや多く含む。酸化鉄を少量含む。
SD2	1	10YR2/1 黒色	粘土	7 層粘土小ブロックをやや多く含む。酸化鉄を少量含む。
SD3	1	10YR2/1 黒色	粘土	7 層粘土ブロックと酸化鉄を少量含む。
SD4	1	10YR2/1 黒色	粘土	7 層粘土ブロックと酸化鉄を少量含む。
SD5	1	10YR2/1 黒色	粘土	7 層粘土ブロックと酸化鉄を少量含む。
SX1	1	10YR2/1 黒色	粘土	7 層粘土ブロックと酸化鉄を少量含む。

第８図　SD1 ～ SD5・SX1 断面図

深さは３～９㎝である。断面形は上部がやや開いたＵ字形を呈し、底面には凹凸が見られる。堆積土は単層であり、基本層４層を起源とする粘土である。黄褐色粘土ブロックをやや多く、酸化鉄を少量含む。検出位置と方向、堆積土から、SD1 溝跡と同一の溝跡の可能性が考えられる。

SD3 溝跡

調査区の北部で検出した北西から南東方向の溝跡である。検出長は 1.16 ｍで、上端幅は 27 ㎝、下端幅は 21 ㎝、深さは３～７㎝である。断面形は浅い皿形を呈する。堆積土は単層であり、基本層４層を起源とする粘土である。黄褐色粘土小ブロックと酸化鉄を少量含む。

SD4 溝跡

調査区の北西部で検出した北西から南東方向の溝跡である。検出長は 2.82 ｍで、上端幅は 26 ㎝、下端幅は 20 ㎝、深さは１～７㎝である。断面形は浅いＵ字形を呈する。堆積土は単層であり、基本層４層を起源とする粘土である。黄褐色粘土小ブロックと酸化鉄を少量含む。大畦畔①と同方向で堆積土が４層水田耕作土であることから、４層水田跡の耕作に関わる遺構と考えられる。

SD5 溝跡

調査区の北西部で検出した北西から南東方向の溝跡である。検出長は 2.34 ｍで、上端幅は 37 ㎝、下端幅は 25 ㎝、深さは２～10 ㎝である。断面形は浅いＵ字形を呈する。堆積土は単層であり、基本層４層を起源とする粘土で黄褐色粘土小ブロックと酸化鉄を少量含む。大畦畔①と同方向で堆積土が４層水田耕作土であることから、４層水田跡の耕作に関わる遺構と考えられる。

SD6 溝跡

調査区の西部で検出した北西から南東方向の溝跡である。検出長は 1.77 ｍで、上端幅は 17 ㎝、下端幅は 10 ㎝、深さは１～７㎝である。堆積土は単層であり、基本層４層を起源とする粘土で黄褐色粘土小ブロックと酸化鉄を少量含む。大畦畔①の西側の下端とほぼ同じ位置で検出されている。大畦畔①と同方向で堆積土が４層水田耕作土であることから、４層水田跡の耕作に関わる遺構と考えられる。

SD7 溝跡

調査区の南西壁際で検出した北西から南東方向の溝跡である。検出長は 1.95 ｍで、上端幅は 25 ㎝、下端幅は 18 ㎝、深さは３～８㎝である。堆積土は単層であり、基本層４層を起源とする粘土で黄褐色粘土小ブロックと酸化鉄を少量含む。大畦畔①とほぼ同じ位置で検出されている。大畦畔①と同方向で堆積土が４層水田耕作土であることから、４層水田跡の耕作に関わる遺構と考えられる。

SX1 性格不明遺構

調査区北西部で検出した。一部分の検出であるため平面形は不明である。規模は長軸が 101 ㎝以上、短軸が 36 ㎝以上、深さは 10 ㎝である。堆積土は基本層４層の粘土で黄褐色粘土ブロックをやや多く、酸化鉄を少量含む。

５．まとめ

今回の調査地点は、沓形遺跡の南部に位置する。本調査区の北東側と南東側では区画整理事業に伴う調査（平成

22 年度第 2 次調査）が行われており、約 2000 年前の津波堆積物に覆われた弥生時代中期中葉の水田跡が検出されている。

今回の調査では津波堆積物に覆われた 4 層水田跡を検出した。4 層水田跡では大畦畔 2 条と小畦畔 1 条を検出した。このうち、大畦畔②は検出位置と規模から、第 2 次調査の大畦畔㉕の延長部分と考えられる。また、大畦畔①と同じ位置の 5 層上面で擬似畦畔 B を 1 条検出した。調査区の東側が造成時の土取工事で削平されていたため、水田の構造や区画の平面形や面積をとらえることはできなかった。この水田跡は周辺の調査結果から弥生時代中期中葉の水田跡と考えられる。

5 層上面では溝跡 7 条と性格不明遺構 1 基を検出した。このうち、SD4 ～ 7 溝跡は 4 層水田跡大畦畔①とほぼ同一方向である。SD4 溝跡と SD5 溝跡は大畦畔①の直下で確認された擬似畦畔 B の下端の延長上の位置で検出されている。これらの溝跡の堆積土は 4 層水田耕作土で、4 層水田跡の耕作に関わるものと考えられ、大畦畔の際が深く耕された痕跡の可能性がある。SD4 溝跡と SD5 溝跡の位置には、大畦畔①が延びていたことが推測される。

引用・参考文献

仙台市教育委員会　1996『中在家南遺跡他―仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 213 集

仙台市教育委員会　2007『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（３）概要報告書』仙台市文化財調査報告書第 316 集

仙台市教育委員会　2010『沓形遺跡―仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第 363 集

仙台市教育委員会　2012『沓形遺跡第２・３次調査―仙台市荒井東土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 397 集

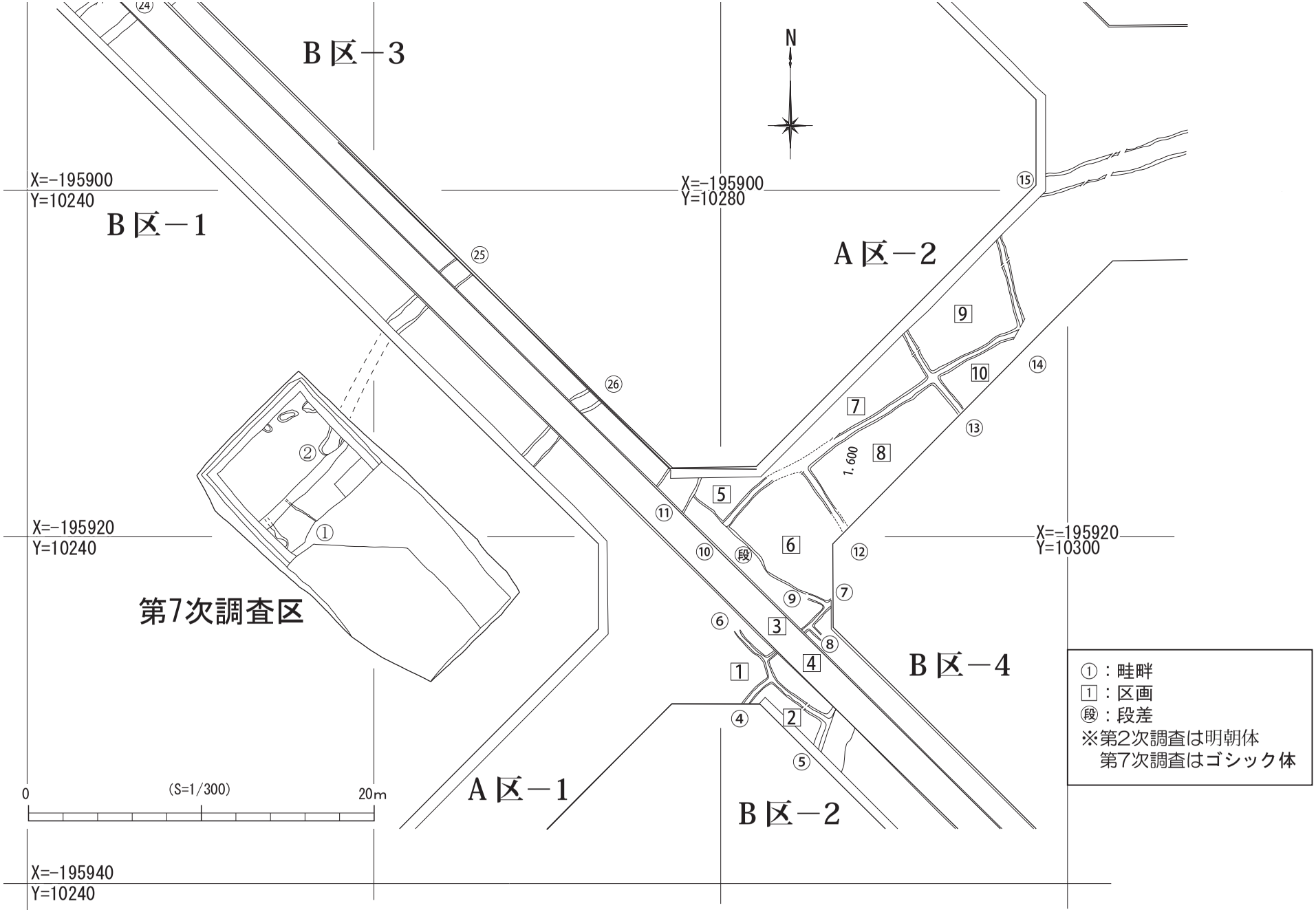
仙台市教育委員会　2015『沓形遺跡　第４次調査―仙台市荒井東土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 435 集

仙台市教育委員会　2014『荒井南遺跡第１次調査―仙台市荒井南土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 425 集

仙台市教育委員会　2015「沓形遺跡第５次・６次」『山の寺廃寺ほか　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 436 集

松本秀明・吉田正幸　2010「第１章第３節　仙台市東部沓形遺跡にみられる津波堆積物の分布と年代」『沓形遺跡―仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第 363 集

松本秀明　2014「第 4 章第 1 節　荒井南遺跡の津波堆積物と放射性炭素年代」『荒井南遺跡第１次調査―仙台市荒井南土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書―』 仙台市文化財調査報告書第 425 集



第９図　沓形遺跡第２次・７次調査区合成図

１．４層水田跡検出状況（北西から）

２．調査区北壁断面（南から）

３．調査区西壁断面（東から）

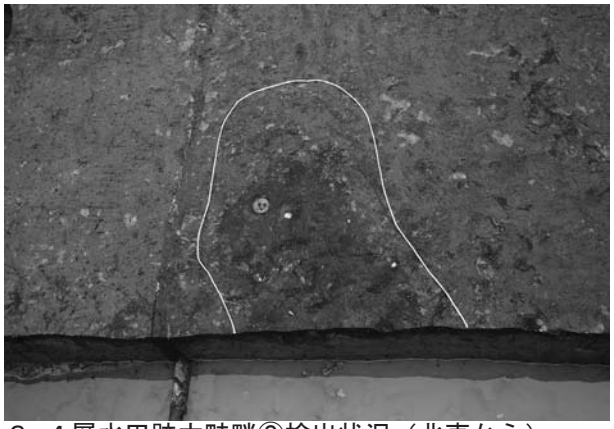
４．４層水田跡確認状況（北から）

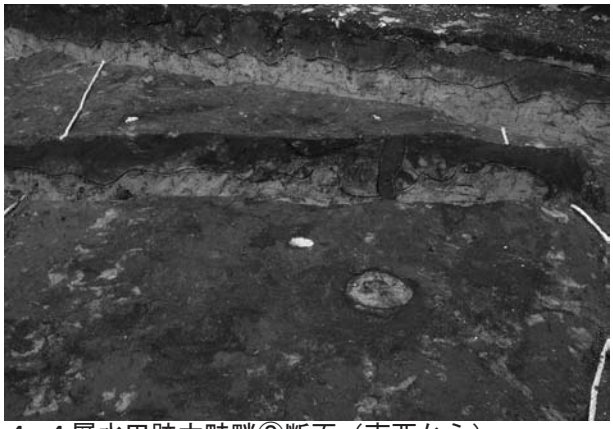
５．４層水田跡検出状況（北から）

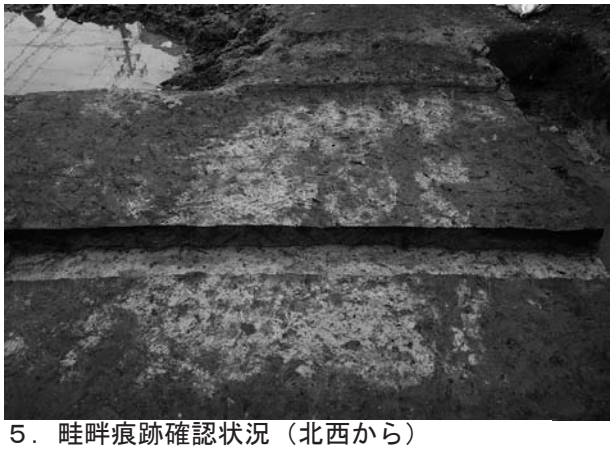
写真図版１　沓形遺跡第７次調査 (1)

１．４層水田跡大畦畔①検出状況（南西から）

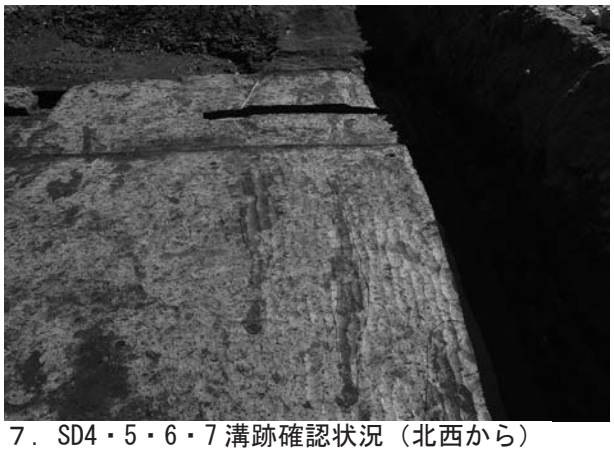
２．４層水田跡大畦畔①断面（北西から）


３．４層水田跡大畦畔②検出状況（北東から）


４．４層水田跡大畦畔②断面（南西から）


５．畦畔痕跡確認状況（北西から）

６．５層遺構確認状況（北から）


７．SD4・5・6・7溝跡確認状況（北西から）

８．調査区全景遺構完掘状況（北東から）

写真図版２　沓形遺跡第７次調査 (2)

第２章　南小泉遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

南小泉遺跡は、仙台市の若林区南小泉、古城、遠見塚、霞目に所在する。JR 仙台駅から東南約 3.5 ㎞、広瀬川と名取川の合流地点より北へ約 3 ㎞の場所に位置し、「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野の標高 6 ～ 13 ｍの自然堤防上に立地する。遺跡は東西約 2 ㎞、南北約 1 ㎞の範囲に及んでおり、仙台市内でも最大級の規模を持つ遺跡である。遺跡内には遠見塚古墳を含み、また、西部では若林城跡、北西部で養種園遺跡と接している。周辺には法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳などが分布している。本遺跡は、これまでに 79 次の調査が実施されており、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。昭和 14 年の霞目飛行場拡張工事の際に弥生時代と古墳時代の遺構と遺物が発見され、両時代の集落跡として知られており、東北地方南部の古墳時代中期の土師器の標式になっている遺跡である。

第２節　第 80 次調査

１．調査要項

遺　跡　名　南小泉遺跡
（宮城県遺跡登録番号 01021）

調 査 地 点　仙台市若林区遠見塚１丁目
34 － 1 の一部、34 － 7、37 － 8

調 査 期 間　平成 28 年 7 月 20 日～ 7 月 26 日

調査対象面積　147.21 ㎡

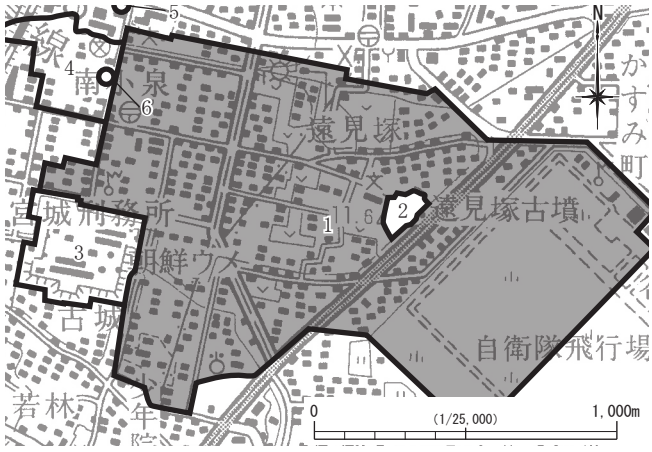
調 査 面 積　30 ㎡

調 査 原 因　共同住宅の新築工事

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部
文化財課調査調整係

担 当 職 員　主査　平間亮輔　　主事　庄子裕美
文化財教諭　吉田真太郎　　文化財教諭　及川基



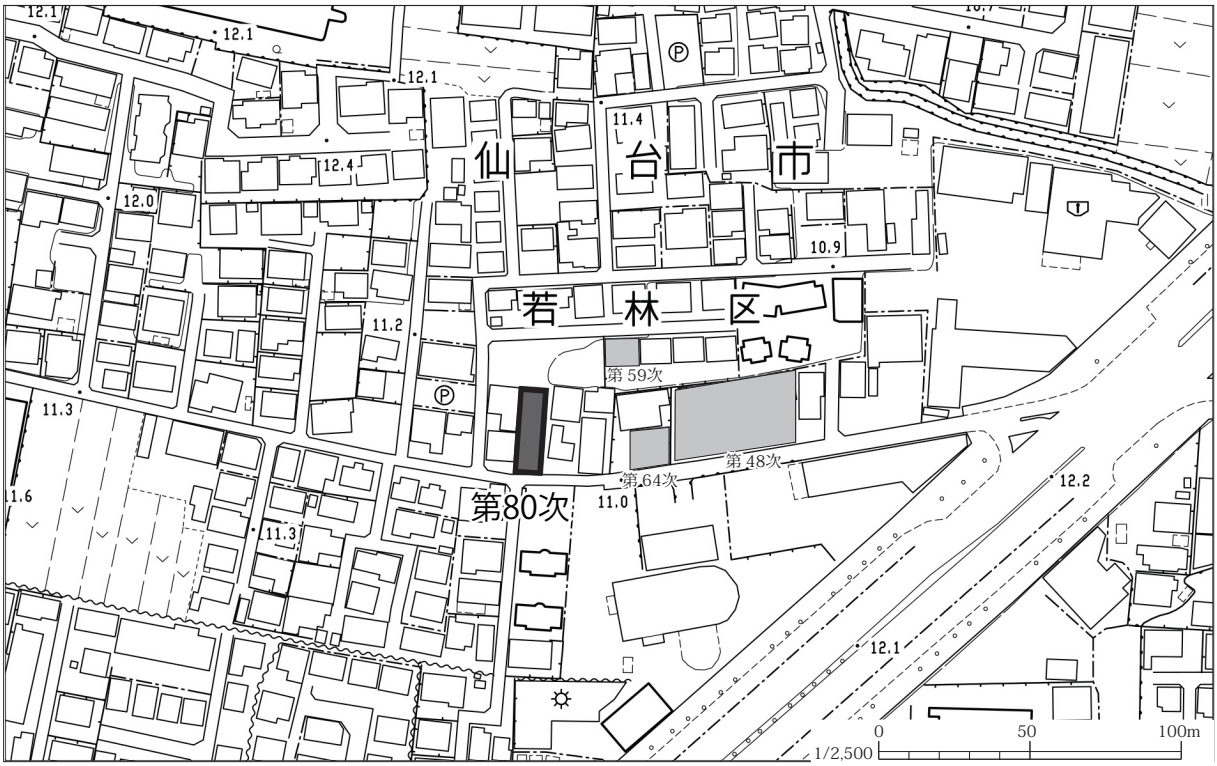
番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文～近世
2	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
3	若林城跡	円墳・集落跡・城館跡	自然堤防	古墳～近世
4	養種園遺跡	集落跡・屋敷跡・包含地	自然堤防	縄文・古墳～近世
5	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
6	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳

第 10 図　南小泉遺跡の位置と周辺の遺跡

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成 28 年 6 月 1 日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（平成 28 年 6 月 21 日付 H28 教生文第 103 － 020 号で回答）に基づき、平成 28 年 7 月 20 日（水）に着手した。建築範囲の南西部分に南北 5 ｍ×東西 4 ｍ、面積 20 ㎡の調査区を設定した。重機で盛土と基本層Ⅰ～Ⅲ層を除去し、基本層Ⅳ層で遺構確認作業を行ったところ、調査区の西部で竪穴住居跡の南東隅部分を検出した。竪穴住居跡の規模を確認するため、代理人と協議の上、調査区を北側に拡張した（南北 7.5 ｍ×東西 4m・30 ㎡）。あらためて遺構確認作業を行った結果、竪穴住居跡 1 軒、土坑 3 基、小溝状遺構 2 条、ピット 5 基、性格不明遺構 3 基を検出し、記録保存を目的とした本発掘調査に移行した。

平面図は竪穴住居跡を S=1/20 で、調査区の外形と住居跡以外の遺構を S=1/40 で作成し、断面図は西壁の断面図を S=1/20 で作成した。記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。7 月 26 日に代理人に現場を引き渡し、調査を終了した。



第 11 図　第 80 次調査区位置図

３．基本層序

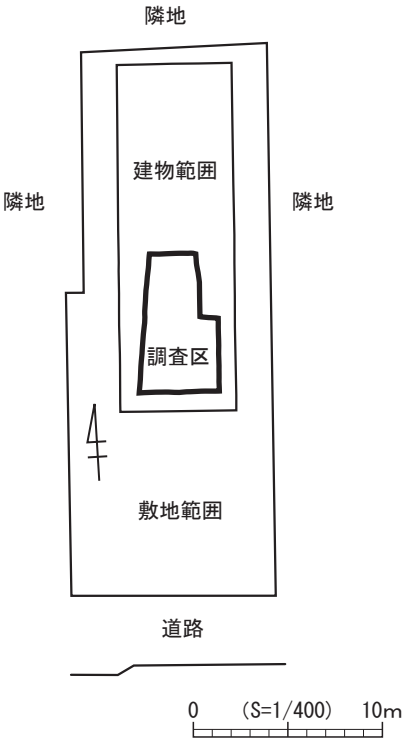
盛土より下位で基本層を４層確認した。今回の調査における遺構検出面であるⅣ層までの深度は約 1.0m である。

Ⅰ層　暗褐色シルトで、層厚は 50 ～ 70 ㎝である。宅地造成以前の畑の耕作土である。

Ⅱ層　褐色砂質シルトで、層厚は５～ 32 ㎝である。耕作土の可能性がある。

Ⅲ層　暗褐色粘土で、層厚は約 12 ㎝である。φ５～ 10 ㎜のにぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。

Ⅳ層　にぶい黄褐色粘土で、今回の遺構検出面である。



第 12 図　第 80 次調査区配置図

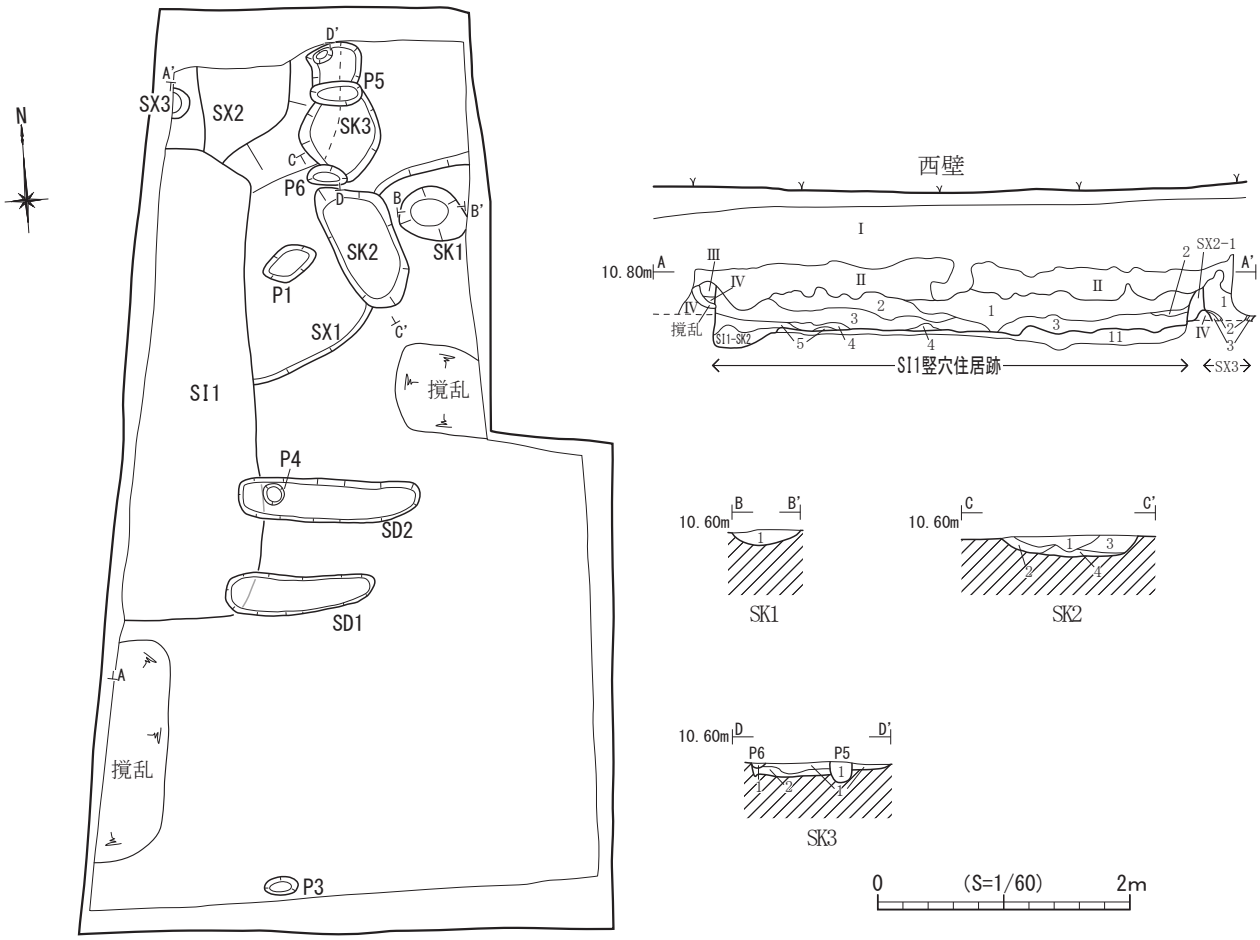
４．発見遺構と出土遺物

今回の調査ではⅣ層上面で竪穴住居跡１軒、土坑３基、小溝状遺構２条、ピット５基、性格不明遺構３基を検出した。また、竪穴住居跡や土坑などからロクロ土師器や須恵器などが出土している。

(1) 竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡

調査区西部で検出した。西側が調査区外に広がっている。平面形は隅丸方形を呈する。SX1、SX2 性格不明遺構より新しく、SD1・２小溝状遺構よりも古い。規模は南北 3.7 m、東西が 1.05 m以上である。堆積土は 11 層に細分される。１～５層は住居内堆積土で、６～ 10 層はカマド内堆積土､11 層は住居掘方埋土である。床はほぼ平坦で、住居掘方埋土の上面を床面にしている。壁高は 32 ㎝である。東壁の中央部の南寄りの位置からカマドの燃焼部と両袖を確認した。燃焼部の規模は奥行き 56 ㎝、幅 61 ㎝である。右袖が長さ 56 ㎝、幅 17 ～ 27 ㎝、高さ７㎝、左

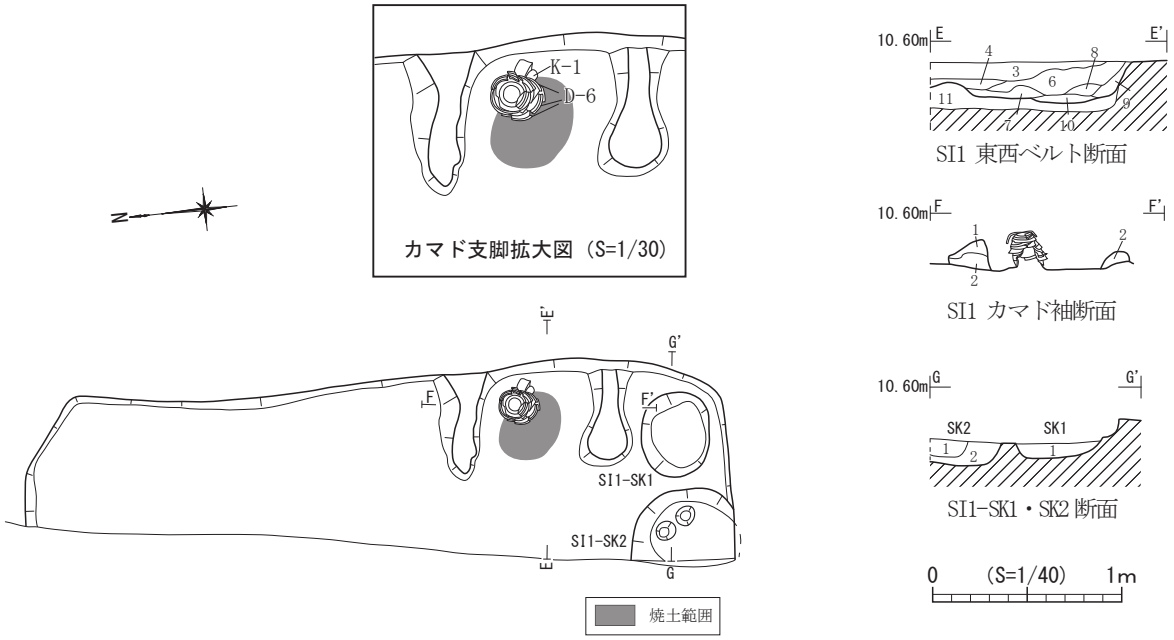


遺構名	層位	色調	土質	備考	
基本層	Ⅰ	10YR3/3 暗褐色	シルト		
	Ⅱ	10YR4/4 褐色	砂質シルト		
	Ⅲ	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土小ブロックを少量含む。	
	Ⅳ	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土		
SI1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	住居内堆積土	にぶい黄褐色粘土ブロックと炭化物粒を少量含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土		にぶい黄褐色粘土ブロックを多量に、炭化物粒を少量含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土		にぶい黄褐色粘土ブロックと炭化物粒を少量含む。
	4	10YR4/1 褐灰色	木炭		にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。
	5	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土		にぶい黄褐色粘土ブロックを多量含む。
	6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	カマド内堆積土	焼土粒と炭化物粒をやや多く含む。
	7	10YR2/3 黒褐色	粘土		黄褐色粘土粒をやや多く、焼土粒と炭化物を少量含む。
	8	5YR3/3 暗赤褐色	粘土		黄褐色粘土粒を微量に含む。
	9	7.5YR3/2 黒褐色	粘土		炭化物粒を多量に、焼土粒を微量に含む。
	10	5YR3/2 暗赤褐色	粘土		(カマド内堆積土)
	11	10YR4/6 褐色	粘土	掘方埋土	にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。

遺構名	層位	色調	土質	備考
SX2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭化物粒を少量含む。
SX3	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物粒を少量含む。
	2	10YR1.7/1 黒色	木炭	
	3	5YR4/4 にぶい赤褐色	焼土	内側が硬化している。
SK1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土粒をやや多く、焼土粒を少量、炭化物粒を微量に含む。
SK2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土粒を多量に、炭化物粒を少量、焼土粒を微量に含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色粘土粒を多量に含む。
	3	10YR3/3 暗褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土粒を微量に含む。
	4	10YR4/4 褐色	粘土	砂を少量含む。
SK3	1	7.5YR2/3 極暗褐色	粘土	炭化物粒と焼土を多量に、にぶい黄褐色粘土粒と砂を少量含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	砂を少量含む。
P5	1	7.5YR3/2 黒褐色	粘土	炭化物粒を多量に、焼土をやや多く、にぶい黄褐色粘土粒を少量含む。
P6	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒と焼土を多量に含む。

第 13 図　第 80 次調査区平面図・断面図

袖が長さ 57 ㎝、幅 11 ～ 32 ㎝、高さ 14 ㎝である。燃焼部でロクロ土師器坏と甕、須恵器坏計 11 点が底部を上にし、重ねられた状態で出土した。ロクロ土師器甕（第 15 図 9･D-6）は 3 個体に割られており、折り重なった状態で出土している。また土器の下には磨石が据えられていた。これらの土器は内外面とも被熱しており、支脚として使用されていたと推定される。カマドの南側床面からは土坑が 2 基検出された。SK1 の平面形は円形を呈し、規模は長軸が 45 ㎝、短軸は 38 ㎝、深さが 8 ㎝である。堆積土は単層で、炭化物を極少量、褐色粘土粒を少量含む暗褐色粘土質シルトである。SK2 は西側と南側が調査区外に及んでおり、平面形は不明だが、円形を呈するものと思われる。規模は長軸が 56 ㎝以上、短軸は 39 ㎝以上、深さが 15 ㎝である。堆積土は 2 層で、1 層は焼土粒と炭化物粒を少量含む暗褐色粘土質シルトで、2 層は焼土粒を極少量、黄褐色粘土粒と黄褐色粘土ブロックをやや多く含む褐



遺構名	層位	色調	土質	備考
SI1 カマド構築土	1	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土粒を微量に含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土	黒褐色粘土粒をやや多く含む。
SI1-SK1	1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化物粒と褐色粘土粒を少量含む。
SI1-SK2	1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒をやや多く、炭化物粒と焼土粒を少量含む。
	2	10YR4/4 褐色	粘土	黄褐色粘土粒をやや多く、焼土粒を微量に含む。

第 14 図　SI1 竪穴住居跡平・断面図

色粘土である。堆積土中からロクロ土師器坏が 1 点（第 15 図 6）出土している。両者とも検出された位置から貯蔵穴であると考えられる。なお、周溝と主柱穴は検出されなかった。

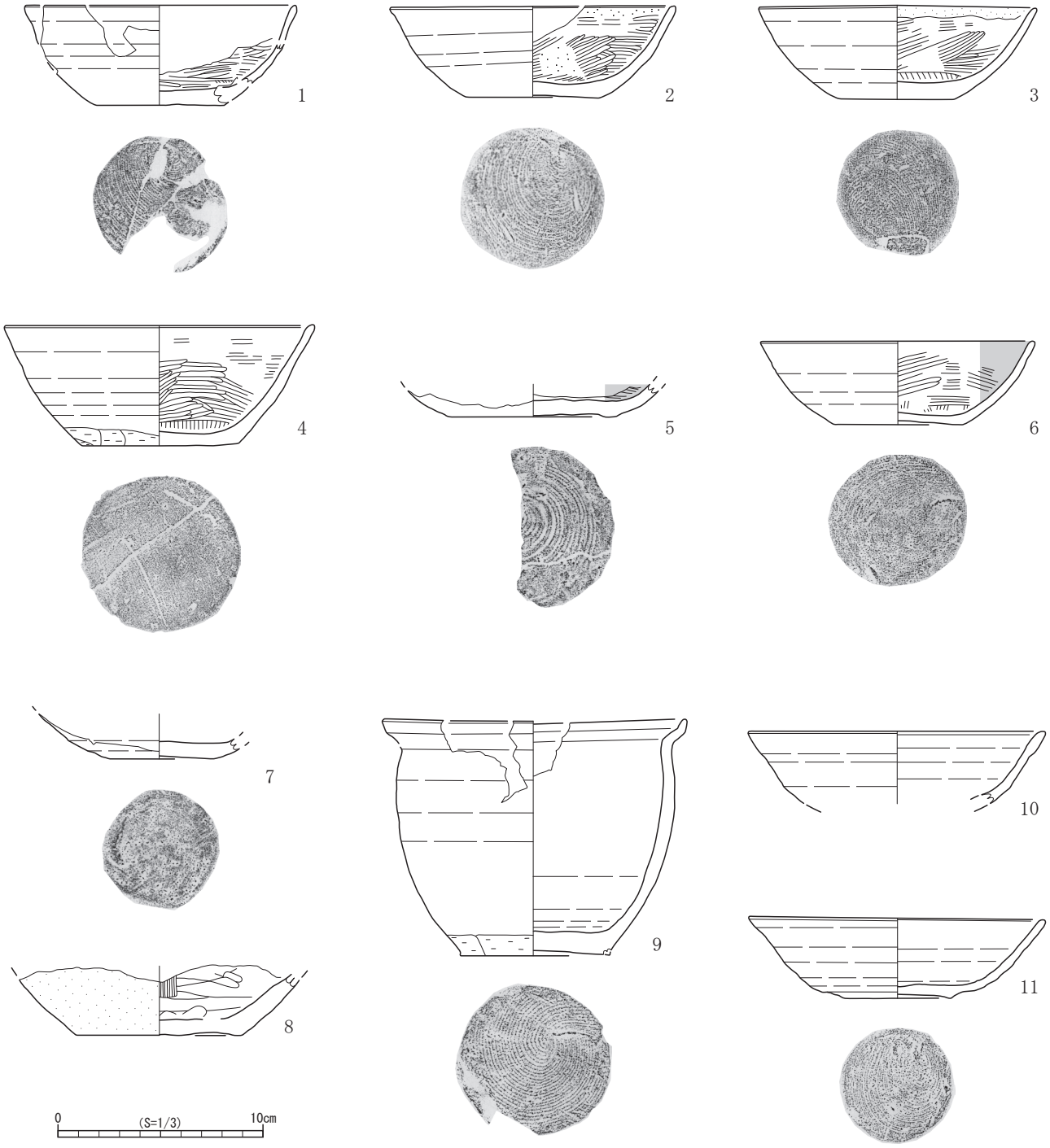
遺物は確認面や住居内堆積土、カマド内堆積土、SK1 の堆積土からロクロ土師器と須恵器、石器が出土しており、このうちロクロ土師器 9 点、須恵器 6 点、石器 1 点を図示した。ロクロ土師器は坏と甕があり、このうち 7 点（第 15 図 1 ～ 5・8・9）がカマドの支脚として使用されたもので、土器の外面には被熱による磨滅が見られる。坏は 5 点あり、器形は、体部が緩やかに内弯し、口縁部はやや外傾している。全ての坏の内面は被熱によって消失している。甕は 2 点出土した。第 15 図 9（D-6）は底部から体部にかけて内弯して立ち上がっており、口縁部はやや直立気味に外傾して立ち上がっている。第 15 図 8（D-4）は底部から体部下部のみが残存しており、内外面とも被熱により著しく磨滅している。須恵器は全て坏で、このうち 4 点（第 15 図 10・11、第 16 図 1・2）がカマドの支脚として使用されたものである。第 16 図 2（E-4）の底面には工具で十字に線刻が施されている。石器は磨石で川原石を素材としている。この磨石はカマドの支脚の据え石に転用されており、表面にはわずかに被熱の痕跡が見られる。

（2）土坑

SK1 土坑

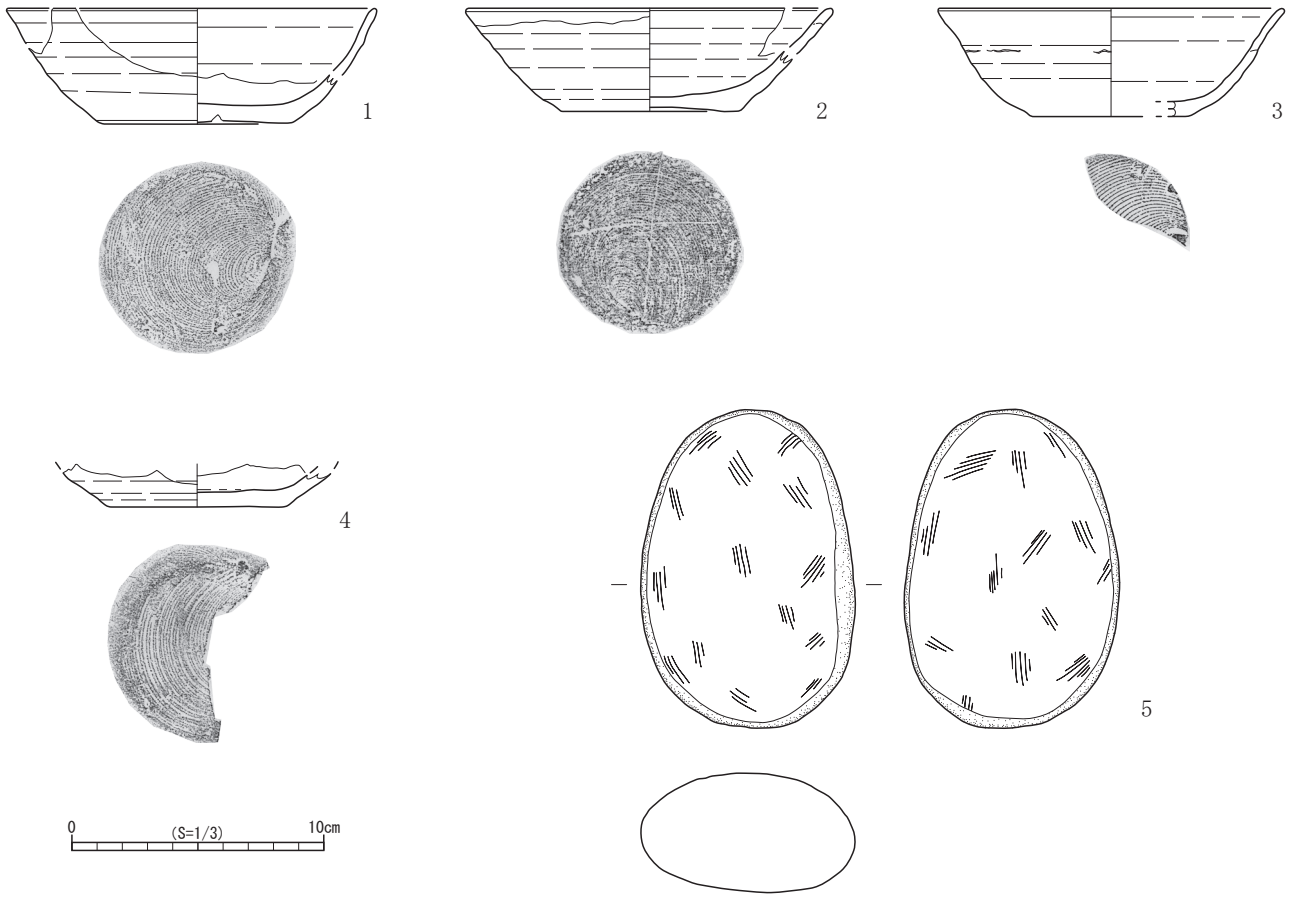
調査区北東部で検出された。平面形は円形を呈し、規模は長軸が 58cm、短軸が 42cm、深さは 12 cmである。断面形はＵ字形を呈する。堆積土は単層で、暗褐色粘土を主体とし、黄褐色粘土粒をやや多く含み、焼土粒と炭化物粒を少量含む。

遺物はロクロ土師器と赤焼き土器が出土している。このうちロクロ土師器 3 点、赤焼土器 3 点を図示した。ロクロ土師器は坏と高台付坏がある。第 17 図 1（D-10）の器形は体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がっている。赤焼土器は全て坏である。第 17 図 4（D-13）と 5（D-14）の器形は体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がっており、口唇部にやや厚みがある。第 17 図 2（D-15）は底部から体部にかけてやや緩やかに内弯しており、口縁部は外反している。



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	D-1	カマド	ロクロ土師器	坏	(13.1)	6.3	4.9	ロクロナデ　磨滅　被熱	ヘラミガキ　黒色処理？	支脚として使用回転糸切り　内面黒色処理は被熱で消失の可能性あり	6-1
2	D-2	カマド	ロクロ土師器	坏	14.0	6.4	4.5	ロクロナデ　磨滅(使用痕か)	ヘラミガキ　黒色処理？	支脚として使用　回転糸切り	6-2
3	D-3	カマド	ロクロ土師器	坏	13.6	5.6	4.6	ロクロナデ　磨滅(使用痕か)	ヘラミガキ　黒色処理？	支脚として使用	6-3
4	D-5	カマド	ロクロ土師器	坏	15.0	7.6	5.9	ロクロナデ　手持ちヘラケズリ　磨滅	ヘラミガキ	支脚として使用　骨針　回転糸切り	6-4
5	D-7	カマド	ロクロ土師器	坏	－	(8.2)	(1.6)	ロクロナデ　磨滅	ヘラミガキ　黒色処理　被熱	支脚として使用　回転糸切り	6-5
6	D-8	SK2 2層	ロクロ土師器	坏	13.2	6.3	4.1	ロクロナデ　磨滅	ヘラミガキ　黒色処理	回転糸切り	6-6
7	D-9		ロクロ土師器	坏	－	5.1	(2.2)	ロクロナデ　磨滅	ロクロナデ　磨滅	内底面に籾痕（1個）　回転糸切り	6-7
8	D-4	カマド	ロクロ土師器	甕	－	8.0	(3.4)	ロクロナデ　磨滅	ヘラナデ　指ナデ	支脚として使用	6-8
9	D-6	カマド	ロクロ土師器	甕	(14.7)	7.3	11.6	ロクロナデ　手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	支脚として使用　小型　回転糸切り	6-9
10	E-1	カマド	須恵器	坏	14.4	－	(3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	支脚として使用	6-10
11	E-2	カマド	須恵器	坏	14.4	5.2	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	支脚として使用　骨針　回転糸切り	6-11

第 15 図　SI1 竪穴住居跡出土遺物（1）



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	口径・長（cm）	底径・幅（cm）	器高・厚（cm）	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	E-3	カマド	須恵器	坏	(14.5)	7.4	4.6	ロクロナデ	ロクロナデ	支脚として使用　回転糸切り	6-12
2	E-4	カマド	須恵器	坏	14.4	7.0	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	支脚として使用　「×」の刻印あり 回転糸切り	6-13
3	E-5	堆積土	須恵器	坏	(13.6)	(6.3)	4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	6-14
4	E-6	堆積土	須恵器	坏	－	(7.0)	(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	6-15
5	K-1	カマド	礫石器	磨石	12.7	8.5	4.7	磨面1	磨面1	支脚として使用	6-16

第16図　SI1竪穴住居跡出土遺物（2）

SK2土坑

調査区北東部で検出された。SX1性格不明遺構より新しい。平面形は不整な長楕円形を呈し、規模は長軸が1.09m、短軸が50㎝、深さは17㎝である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は4層に細分され、黒褐色粘土を主体とする。遺物は土師器片が出土している。

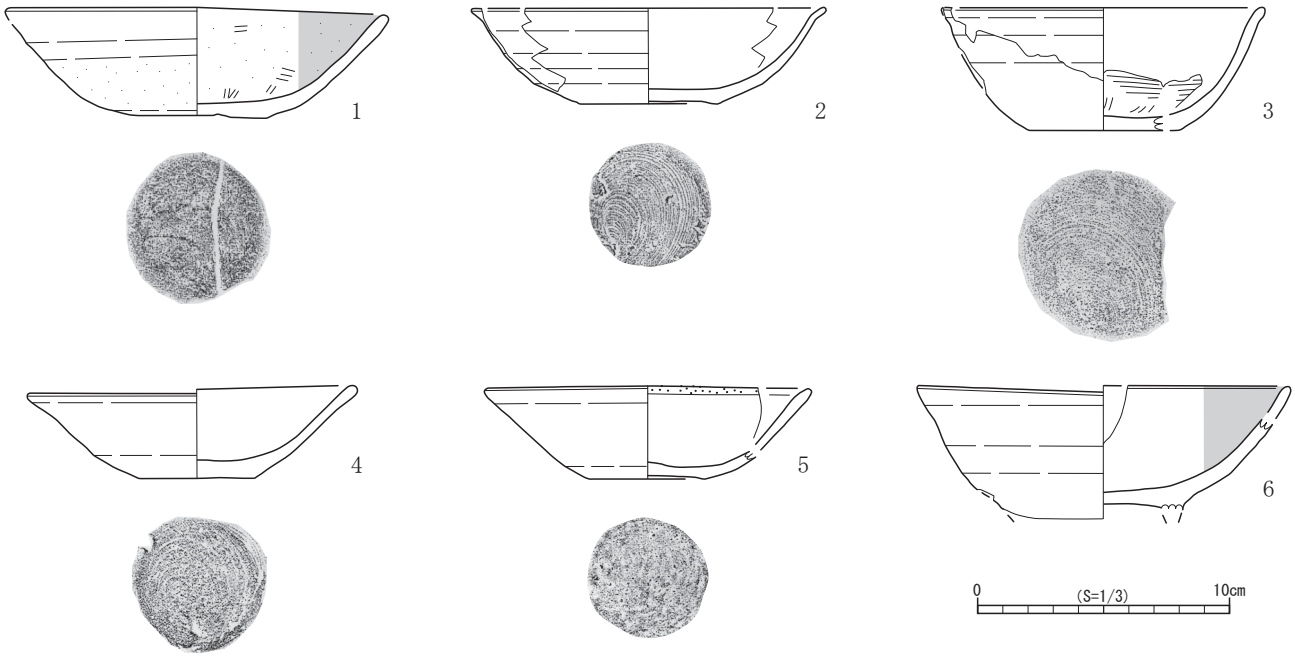
SK3土坑

調査区北東部で検出された。P5とP6よりも古く、SX1性格不明遺構より新しい。平面形は不整な円形を呈し、規模は長軸が1.14m、短軸が64㎝、深さは11㎝である。断面形はU字形を呈する。堆積土は2層に分層され、粘土を主体とする。遺物は土師器片と焼けた骨片が出土している。

(3) 小溝状遺構

SD1小溝状遺構

調査区中央部で検出された東西方向の小溝跡である。SI1竪穴住居跡よりも新しい。検出長は1.2ｍで、上端幅



図版番号	登録番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	D-10	ロクロ土師器	坏	15.0	5.3	(4.4)	ロクロナデ　磨滅	ロクロナデ　ヘラミガキ 黒色処理　磨滅	回転糸切り	6-17
2	D-12	ロクロ土師器	坏	(12.7)	(5.2)	4.9	ロクロナデ　磨滅	ロクロナデ　ヘラミガキ　黒色処理？	骨針　回転糸切り	6-19
3	D-13	赤焼土器	坏	13.4	4.6	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り　褐色粒含む	6-20
4	D-14	赤焼土器	坏	12.8	4.6	3.7	ロクロナデ　磨滅　被熱赤変	ロクロナデ　磨滅（使用痕か）	回転糸切り　褐色粒含む	6-21
5	D-15	赤焼土器	坏	(14.0)	5.4	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	6-18
6	D-11	ロクロ土師器	高台付坏	14.2	－	(5.3)	ロクロナデ	ロクロナデ　黒色処理　磨滅	回転糸切り	6-22

第 17 図　SK1 土坑出土遺物

は 16 ～ 33cm、下端幅は 10 ～ 26cm、深さは 4cm である。堆積土は単層でⅡ層を主体とする。

SD2 小溝状遺構

調査区中央部で検出された東西方向の小溝跡である。SI1 竪穴住居跡と P1 よりも新しい遺構。検出長は 1.4 m で、上端幅は 17 ～ 32cm、下端幅は 12 ～ 26cm、深さは 6cm である。堆積土は単層でⅡ層を主体とする。

(4) 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構

調査区北部で検出された。北東側が調査区外に広がる。SI1 竪穴住居跡、SK2、SK3 土坑、P1 と重複し、これらより古い。平面形は不整形を呈し、検出規模は長軸が 2.50m 以上、短軸が 0.98m、深さは 20 cmである。堆積土は単層で、暗褐色砂質シルトを主体とし、褐色砂質シルトブロックを多量に含む。

SX2 性格不明遺構

調査区北西部で検出された。西側と北側が調査区外に広がる。SI1 竪穴住居跡、SX3 性格不明遺構と重複し、これらよりも古い。部分的な検出であるため、平面形は不明である。検出規模は長軸が 50cm 以上、短軸が 24cm、深さは 18 cmである。断面形は不明である。堆積土は単層で、暗褐色砂質シルトを主体とし、褐色砂質シルトブロックを多量に含む。

SX3 性格不明遺構

調査区北西部で検出された。西側が調査区外に延びる。SI1 竪穴住居跡よりも古く、SX2 性格不明遺構より新しい。部分的な検出であるため、平面形は不明である。検出規模は 24cm、短軸が 13cm である。堆積土は 3 層である。性格不明遺構として報告するが、遺構の形状と堆積土の特徴から竪穴住居跡の煙出しと考えられ、調査区西側に竪穴住居跡が存在している可能性がある。

(5) ピット

ピットは 5 基検出された。平面形状は円形と方形を基調としており、規模は直径 19 ～ 46 ㎝、深さは 4 ～ 19 ㎝である。堆積土は暗褐色の粘土質シルトが多い。また、P5 と P6 の堆積土には焼土と炭化物がやや多く含まれている。いずれのピットからも柱痕跡は確認されなかった。

５．まとめ

今回の調査地点は、南小泉遺跡の南部に位置する。平成 20 年度に当調査区の北東側で個人住宅建設に伴う第 59 次調査が行われ、古墳時代中期と平安時代前半の竪穴住居跡などが検出されている。

今回の調査では竪穴住居跡 1 軒、土坑 3 基、小溝状遺構 2 条、ピット 5 基、性格不明遺構 3 基を検出した。このうち竪穴住居跡ではカマドの燃焼部で支脚を検出した。この支脚はロクロ土師器坏などの土器で構成されており、底部を上にして重ねられた状態で出土している。仙台市内ではカマドの支脚に瓦や円礫を用いる例はあるが、今回検出した住居のように複数の土器を逆さまに重ねてカマドの支脚として用いた例は見られない。支脚に使用された土器は第 15 図 9（D-6）のように破損した土器破片を重ねた状態で出土していることから、不要になった土器を用いたと考えられる。出土した土器の特徴から、竪穴住居跡の時期は 9 世紀後半から 10 世紀の時期と考えられる。SK1 土坑からはロクロ土師器と赤焼土器が出土しており、その器形の特徴から 11 世紀以降と思われる。SX3 性格不明遺構は堆積土の特徴から竪穴住居跡の煙出しと推測されるが、一部分の検出のため性格不明遺構として報告した。出土遺物がないため時期については不明である。

引用・参考文献

加藤道男　1983 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』

仙台市教育委員会　1983『南小泉遺跡―青葉女子学園移転新営工事地内調査報告―』仙台市文化財調査報告書第 55 集

仙台市教育委員会　2009「南小泉遺跡第 58 ～ 60 次」『仙台平野の遺跡群ⅩⅨ―平成 20 年度発掘調査報告書―』仙台市文化財調査報告書第 346 集

1．調査区全景（南から）

1．調査区全景（西から）

写真図版 3　南小泉遺跡第 80 次調査区（1）

１．S 調査区北側遺構検出状況（東から）

２．SI1 竪穴住居跡カマド検出状況（南西から）

３．SI1 竪穴住居跡カマド支脚検出状況（西から）

４．SI1 竪穴住居跡 SK1・2 遺物出土状況（南から）

５．SI1 竪穴住居跡 SK1 断面（南から）

６．SI1 竪穴住居跡 SK2 断面（南から）

写真図版 4　南小泉遺跡第 80 次調査区（2）

１．SI1 竪穴住居跡カマド断面（南から）

２．調査区西壁土層断面（東から）

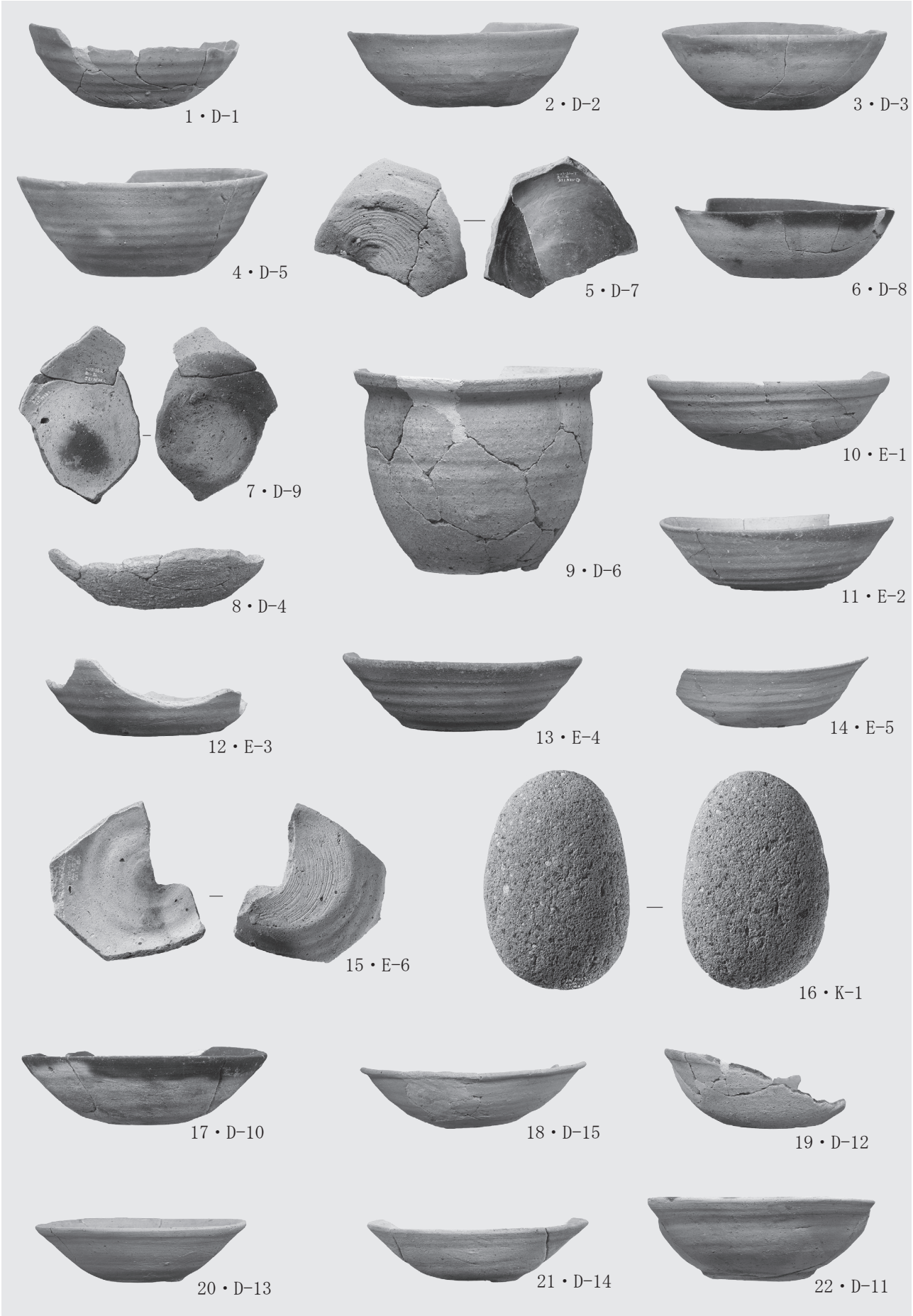
３．SK １土坑遺物出土状況（南から）

４．SK2 土坑土層断面（西から）

５．SK3 土坑土層断面（南東から）

６．SX2・3 性格不明遺構確認状況（東から）

写真図版 5　南小泉遺跡第 80 次調査区（3）



写真図版 6　南小泉遺跡第 80 次出土遺物

第３節　第81次調査

１.調査要項

遺　跡　名	南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号 01021）
調査地点	仙台市若林区遠見塚２丁目 291-29
調査期間	平成 28 年 10 月 11 日～ 12 日
敷地面積	100.00 ㎡
調査対象面積	36.43 ㎡
調査面積	5.25 ㎡
調査原因	建売住宅の新築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事　小林 航　　文化財教諭　吉田 真太郎

２.調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成28年9月9日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(H28年教生文第101-371で通知)に基づき実施した。調査は平成28年10月11日に着手した。残土置き場などの都合から、建築予定範囲内に当初予定より縮小した1.5×3mの調査区を設定し、重機により盛土およびⅠ・Ⅱ層を除去し、基本層Ⅲ層上面で遺構検出作業を行い、竪穴住居跡1軒を検出した。竪穴住居跡からは多数の土師器が出土した。その後、下層調査のために調査区東西に側溝(サブトレンチ)を掘削し、下層からピット1基を検出した。

調査では、調査区平面図と、土層断面図をS=1/20で作成し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。記録終了後、重機により埋戻しを行い、現場を申請者側に受け渡し、調査を終了した。

３.基本層序

盛土より下位で基本層を3層確認した。今回の調査における遺構検出面であるⅢ層までの深度は約80cmである。

Ⅰ層:褐色(10YR4/4)を呈する均質なシルトで、盛土以前の耕作土である。

Ⅱ層:Ⅰ層以前に形成された層であるが、時期は不明である。境界が明確でないことや、土質が不均質なことから、撹乱であると判断される。一部に土師器片を含むが、下層より巻き上げたものと思われる。

Ⅲ層:褐色(10YR4/6)を呈する均質な砂質シルトである。今回の遺構検出面である。

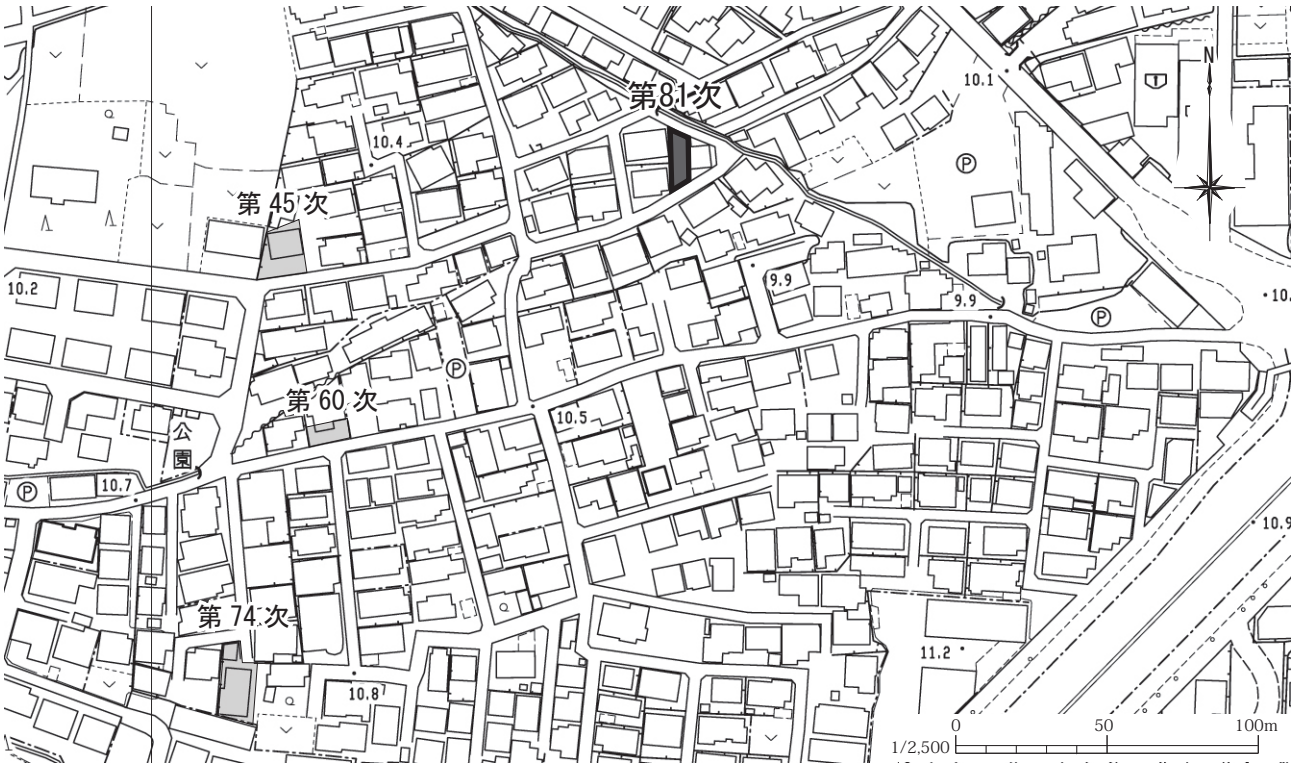
４.発見遺構と出土遺物

今回の調査では竪穴住居跡1軒、ピット1基を確認した。遺物は土師器が出土した。

（１）竪穴住居跡

SI1竪穴住居跡

調査区北東部で検出された。検出された規模は東西1.7m、南北2.0mで、北側および東側は調査区外に広がる。西側および南側は一部撹乱を受けており、基本層第Ⅰ層と遺構堆積土を母材として撹拌された基本層Ⅱ層に削平されている。そのため、本来の遺構範囲や平面形、断面形などは不明である。ただし、炭化物が層状に認められる平坦面が床面と考えられることや、出土遺物の数量と種類から住居跡と判断された。堆積土は3層に細分された。1層は遺構全体を覆っている、住居廃絶後の堆積土である。2層は炭化物を主体とした薄い層で、炉跡起源と考えられる炭化物が床面に堆積して形成されたものと考えられる。3層は掘方埋土であり、遺物の出土状況や2層の堆積状況から、この上面が床面であると判断される。3層は調査区東壁の断面で調査区半ば(P1ピット直上)まで続くことが確認され、南北の検出幅はおよそ

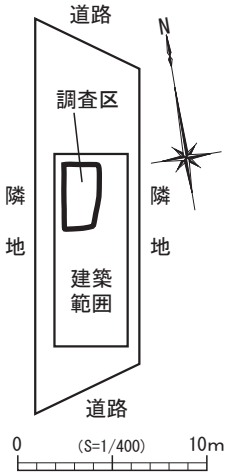


第18図　南小泉遺跡第81次調査区位置図

1.7mである。

床面から約20cmの礫が据えられた状況で出土しており、何らかの形で用いられた可能性がある。また、調査区北東側の東壁断面で3層上面に炉跡と考えられる赤変硬化が確認された。

遺物は堆積土中、床面もしくは床面直上から複数の土師器が一括出土した。器種は高坏、甕、壺である。高坏第21図1～3(C-5～7)の脚部は中空で、いずれも形状や調整が若干異なる。C-5は中膨らみの脚部、大きく広がり水平になる裾部をもち、坏部の下部に段がつくなど典型的な南小泉式の特徴を有する。甕は単純な形状の口縁部をもち、胴部の残存する第22図1(C-3)、第22図2(C-8)は胴部中央で最も幅が広く球に近い形状を呈する。壺第22図5(C-11)は、胴部中央が張り出す扁平な形状を呈しており、頸部の直径もやや狭い。高坏と甕は南小泉式の典型と判断されるが、壺については引田式に近い様相を呈すると考えられ、南小泉式期から引田式期にかけての時期の住居跡と考えられる。



第19図　南小泉遺跡
第81次調査区配置図

（2）ピット

P1

調査区東側の中央で確認されたピットである。検出された規模は直径約30cm、平面形は円形を呈する。基本層の堆積状況から、SI1竪穴住居跡以前の遺構と判断される。SI1竪穴住居跡との関連性は不明である。

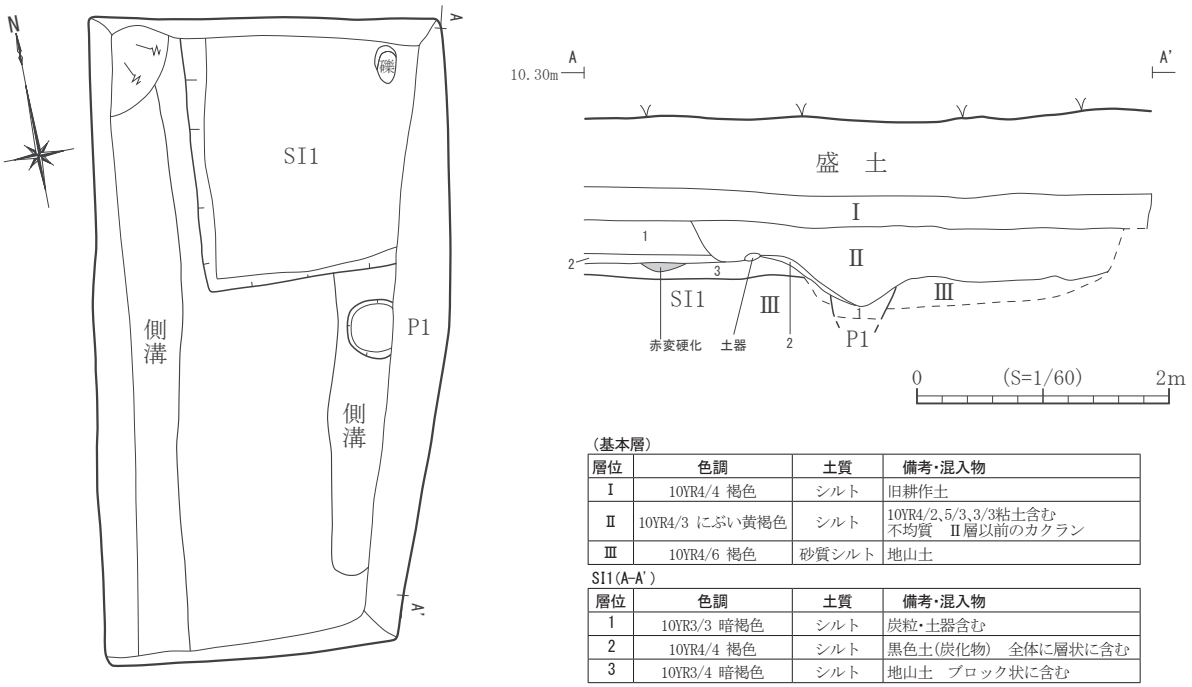
5．まとめ

調査地点は遺跡範囲北側、遠見塚古墳から北に約200mに位置する。周辺における調査では、溝跡や河川跡などが発見され、土師器を中心とした遺物も出土しているが、竪穴住居など集落に直接的に関わる遺構は見つかっていない。竪穴住居跡が確認された最も近い地点は平成24年の第74次調査地点で、今回の調査地点からは200m以上の距離がある。

今回の調査では、竪穴住居跡が1軒確認された。時期不明の撹乱を受けており、また調査区の制約もあり平面プラ

ンや主軸などを含めた全容は明らかにすることはできなかったが、遺跡範囲北東部で集落の存在を示す貴重な資料となった。遺物は竪穴住居跡の床面から多数の土師器が出土した。器種は高坏、甕、壺である。これらは南小泉式から引田式にかけての特徴がみられ、住居の時期は5世紀代であると考えられる。

なお、平成28年12月15日に実施した東側隣接地の立会調査では遺構は確認されず、遺構面は削平を受け失われていることが判明した。今回の調査地点と東側隣接地は、調査当時約40cm～50cmの比高差があった。宅地造成の際に受けた削平の深さに差があり、今回確認した遺構は部分的に残存していたものと考えられる。



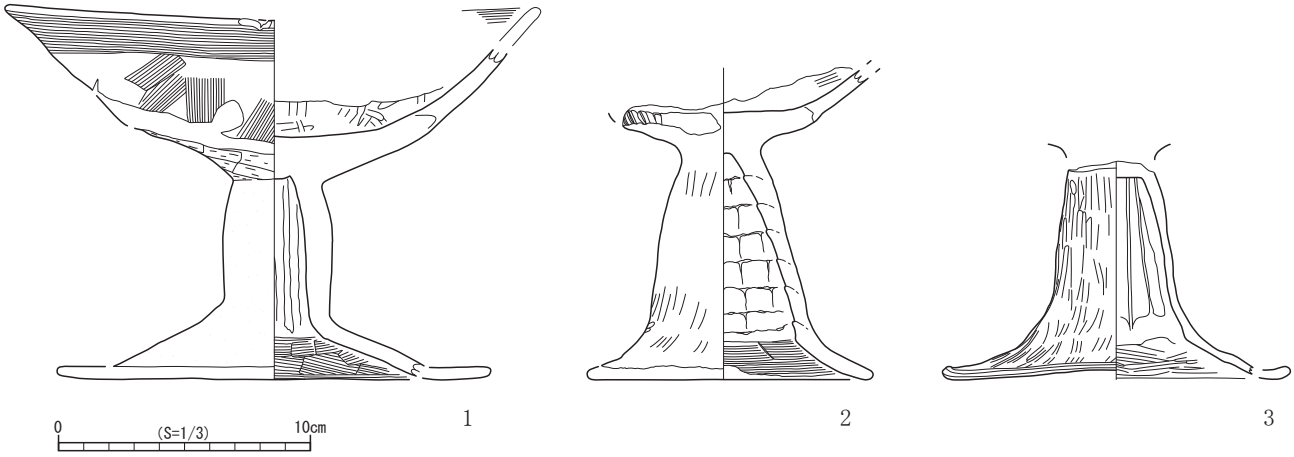
（基本層）

層位	色調	土質	備考・混入物
Ⅰ	10YR4/4 褐色	シルト	旧耕作土
Ⅱ	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR4/2、5/3、3/3粘土含む 不均質　Ⅱ層以前のカクラン
Ⅲ	10YR4/6 褐色	砂質シルト	地山土

SI1(A-A')

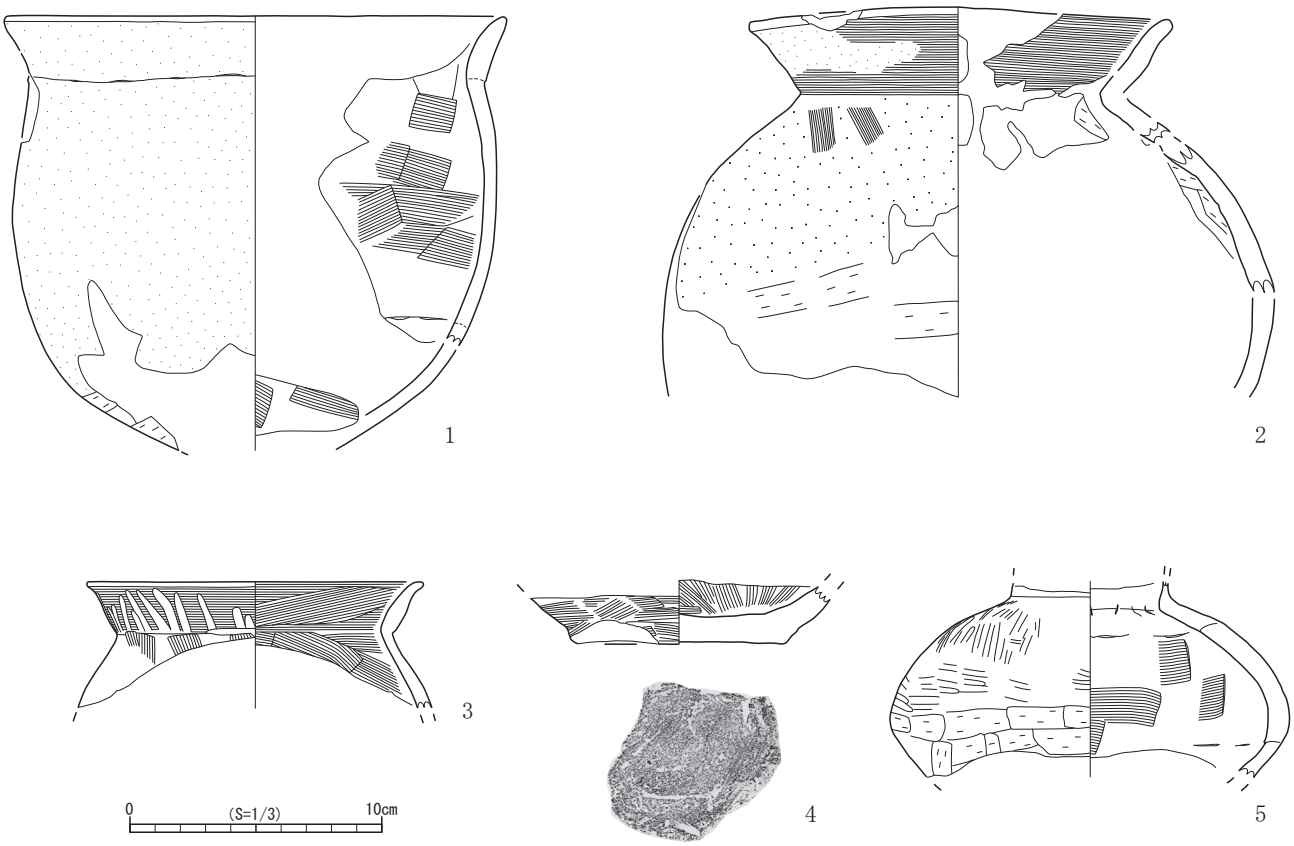
層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭粒・土器含む
2	10YR4/4 褐色	シルト	黒色土(炭化物)　全体に層状に含む
3	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山土　ブロック状に含む

第20図　南小泉遺跡第81次調査区平・断面図



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	口径・(cm)	底径・(cm)	器高・(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	C-5	堆積土	非ロクロ土師器	高坏	21.3	(17.2)	14.9	ヨコナデ　ヘラナデ	ヨコナデ　ヘラナデ　ヘラケズリ ヘラミガキ		9-7
2	C-6	堆積土	非ロクロ土師器	高坏	－	(11.0)	(12.4)	ヨコナデ　ミガキ　磨滅	ヨコナデ　ミガキ　ヘラナデ　磨滅	坏部に刻みのあるつなぎ目あり	9-5
3	C-7	堆積土	非ロクロ土師器	高坏	－	(13.8)	(8.75)	ハケメ　ミガキ　ヨコナデ	ハケメ　ヨコナデ		9-4

第21図　SI1竪穴住居跡出土遺物(1)



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	C-3	北壁一括	非ロクロ土師器	甕	20.0	−	(17.3)	磨滅　被熱赤変	ヘラナデ	底部欠損	9-9
2	C-8	堆積土	非ロクロ土師器	甕	16.7	−	(15.5)	ヨコナデ　ハケメ　ヘラケズリ　磨滅	ヨコナデ　ヘラケズリ　磨滅	球胴形	9-11
3	C-9	堆積土	非ロクロ土師器	甕	(13.4)	−	(5.0)	ヨコナデ　ヘラナデ　ミガキ	ヨコナデ　ヘラナデ	小型	9-1
4	C-10	堆積土	非ロクロ土師器	甕	−	8.5	(2.5)	ヘラナデ　底部　ヘラケズリ　ミガキ	ヘラナデ		9-2
5	C-11	堆積土	非ロクロ土師器	壺	頚径(6.15)	−	(7.8)	ケズリ　ミガキ	ヘラナデ	褐色粒　骨針含む	9-6
写真のみ	C-1	堆積土	非ロクロ土師器	壺	−	−	−				9-10
	C-2	堆積土	非ロクロ土師器	壺	−	−	−				9-3
	C-4	北壁一括	非ロクロ土師器	甕or壺	−	−	−				9-8

第22図　SI1竪穴住居跡出土遺物(2)

1. 遺構検出状況（南から）

2. SI1 遺物出土状況（南から）

写真図版7　南小泉遺跡第81次調査(1)

1. SI1 竪穴住居跡床面（南から）

2. SI1 北壁断面（南から）

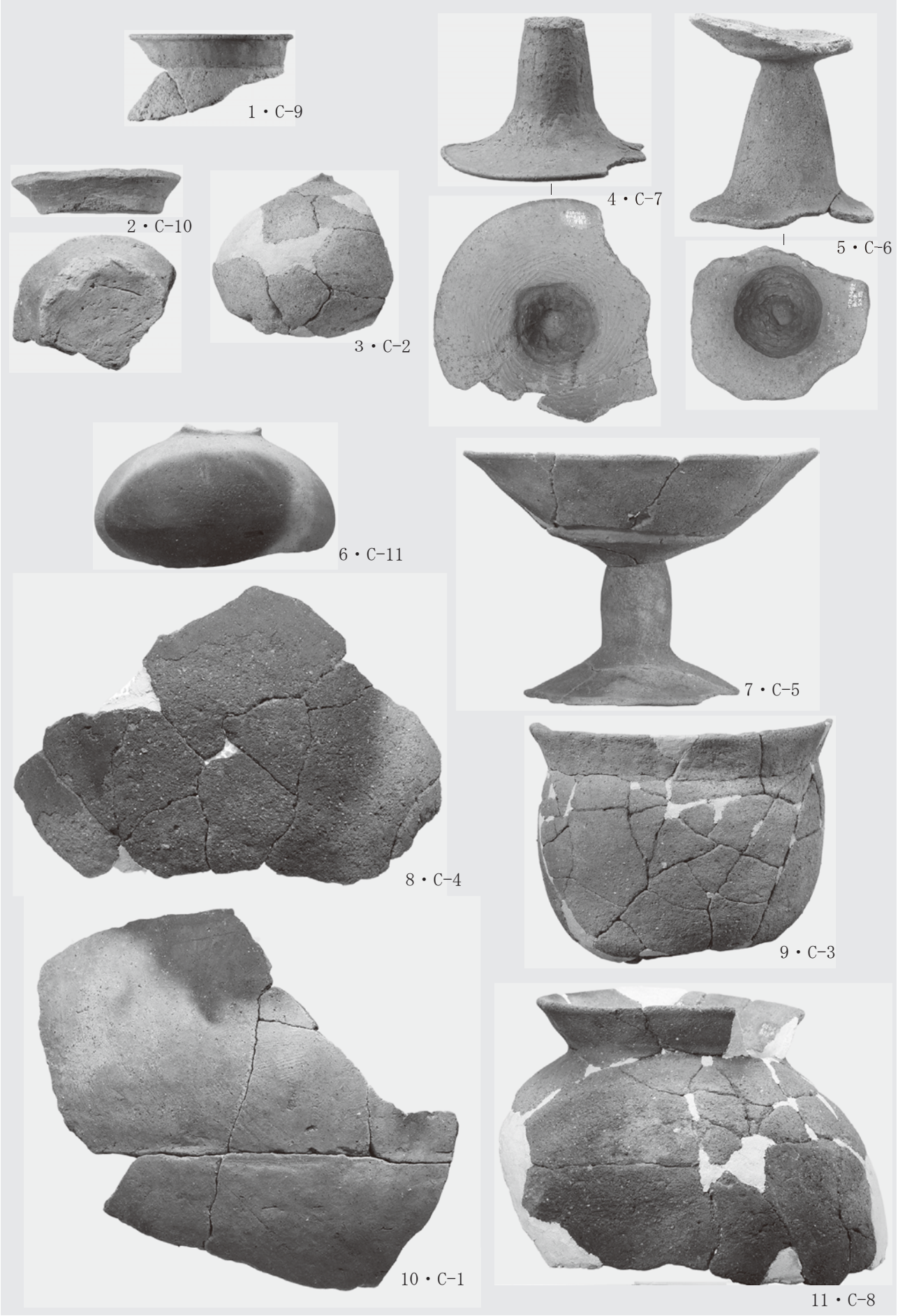
3. SI1 ２層検出状況（南から）

4. SI1 東壁断面（北西から）

5. 調査区全景（南から）

6. 調査区全景（西から）

写真図版8　南小泉遺跡第81次調査(2)



写真図版9　南小泉遺跡第81次調査区出土遺物

第３章　今泉遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

今泉遺跡は、仙台市若林区今泉２丁目に所在する。JR 仙台駅の南東約 6.5 ㎞、仙台南部道路今泉インターの北西約 500 ｍの標高２～３ｍの自然堤防土に立地している。この遺跡は、文献などにより須田玄蕃（すだげんば）が居住した中世の城館「今泉城」として古くから知られていた（『仙台領古城書立之覚』）が、仙台市教育委員会による調査で、縄文時代後期から近世にかけての時代幅をもつことが明らかにされている。

遺跡の主体は、中世の城館である今泉城に関わる遺構群である。城館の構造は不明確であるが、外堀の範囲が想定されており、付近から実際に複数の溝跡や堀跡等が発見されている。その内部には、掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡などの遺構が数多く見つかっており、12 世紀代に屋敷が成立し、南北朝時代に城館として改変・整備され、17 世紀前半頃まで使われていたと推定されている。

第２節　第 13 次調査

１．調査要項

遺　跡　名　今泉遺跡
（宮城県遺跡登録番号 01235）

調 査 地 点　仙台市若林区今泉２丁目 55

調 査 期 間　平成 28 年４月 11 日～４月 13 日

調査対象面積　503.00 ㎡

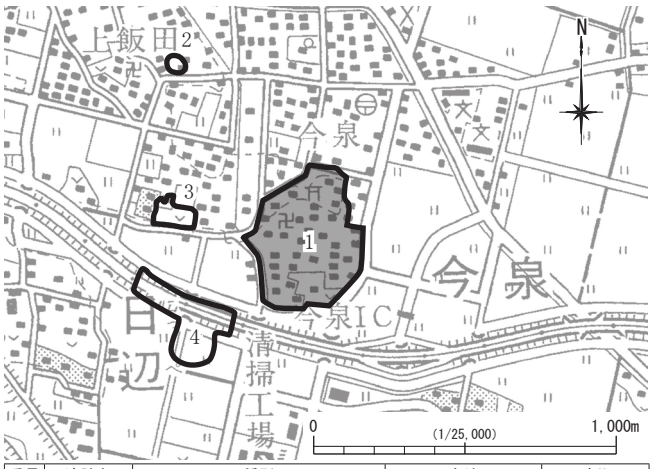
調 査 面 積　48.0 ㎡

調 査 原 因　宅地造成工事

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

担 当 職 員　主査　平間亮輔　　主事　小林航
文化財教諭　及川基　佐藤慶一



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	今泉遺跡	集落跡・城館跡・包含地	自然堤防	縄文～近世
2	高田Ｂ遺跡	集落跡・建物跡・河川跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～近世
3	高田Ａ遺跡	散布地	自然堤防	古代
4	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代

第 23 図　今泉遺跡の位置と周辺の遺跡

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は，平成 28 年１月 28 日付で申請者より提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成 28 年２月 15 日付 H27 教生文第 103 － 184 号で通知）に基づき，平成 28 年４月 11 日に着手した。調査地点は今泉遺跡の南部に位置し、城館の外堀想定ライン南側に隣接している。調査区は汚水管埋設予定範囲内に３箇所設定し、西から１～３トレンチとした。各調査区とも重機で表土を掘削し、Ｖ層上面で遺構検出作業を行った。１トレンチでは溝跡１条とピット２基を、２トレンチでは溝跡１条とピット６基を、３トレンチでは溝跡２条を検出した。なお２トレンチと３トレンチは調査区端部で遺構を確認したため、それぞれ北側と南側に調査区を拡張している。各調査区は遺構平面図を S=1/40 で、土層断面図を S=1/20 で作成し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。各調査区の埋戻しは重機にて行い、４月 13 日に現場を申請者側に引き渡し、調査を終了した。

第24図　今泉遺跡第13次調査区位置図

3．基本層序

基本層は現表土を含め5層を確認した。

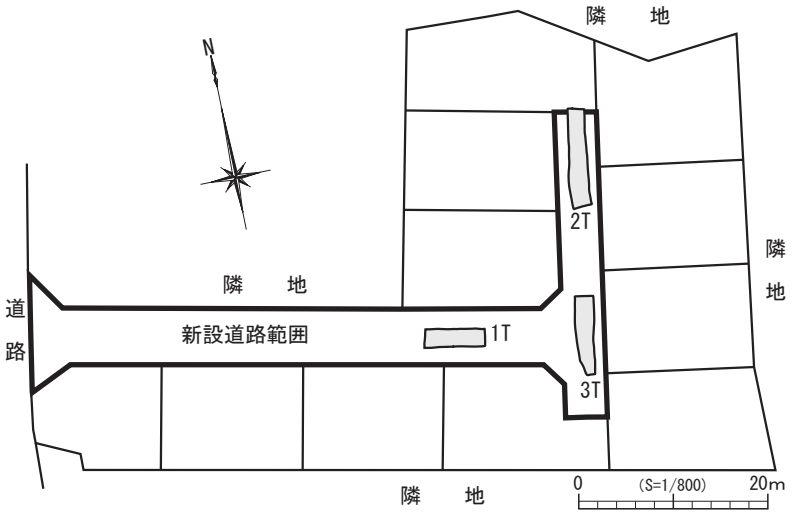
Ⅰ層　現表土であり、耕作土である。

Ⅱ層　にぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する粘土で、旧耕作土とみられる。

Ⅲ層　褐色（10YR4/4）を呈する粘土で、旧耕作土とみられる。

Ⅳ層　黒褐色（7.5YR3/2）を呈する粘土で、Ⅴ層土を部分的に巻き上げている。

Ⅴ層　黄褐色（10YR5/6）を呈する粘土で、黒褐色土を斑状に含む。今回の遺構検出面である。



第25図　今泉遺跡第13次調査区配置図

4．発見遺構と出土遺物

今回の調査では溝跡4条、ピット6基を検出した。遺物は基本層中から弥生土器が1点出土した。

(1) 1トレンチ

SD1 溝跡

東西方向の溝跡である。検出した規模は幅0.2～0.5m、長さ5.5mで、調査区外の東西に延びる。深さは約0.4mで、断面形は上半部が緩やかであるが、下半部は深いU字形を呈する。堆積土は2層に細分される。遺物は出土

していない。

ピット

ピットを2基検出した。規模は直径約20㎝、平面形は楕円形を呈する。いずれも単層である。

(2) 2トレンチ

SD2溝跡

東西方向の溝跡である。検出した規模は上幅6.5ｍ、深さ1.0m以上で、調査区外の東西に延びる。掘削深度の都合から、底面を検出することはできなかった。堆積土は7層に細分される。1層はブロック状の土を多く含むが、2層以下はおおよそ均質で、レンズ状に堆積する。4層は土色が比較的暗く粘性の強い粘土で、植物遺体を含む。検出した規模や位置から、城館に伴う堀の一部であると考えられる。遺物は出土していない。

ピット

ピットはSD2溝跡の南側、Ｖ層上面で6基検出した。直径は15～20㎝、深さは20～35㎝である。P3、P4からは明瞭な柱痕跡が検出された。いずれのピットからも遺物は出土していない。

(3) 3トレンチ

SD3溝跡

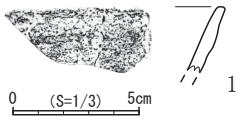
東西方向の溝跡である。SD4溝跡と重複し、これよりも古い。検出した規模は幅1.0ｍ、長さ1.0ｍで、調査区外の東西に延びる。深さは60㎝である。堆積土は3層に細分される。遺物は出土していない。

SD4溝跡

東西方向の溝跡である。SD3溝跡と重複し、これよりも新しい。検出した規模は幅1.4ｍ、長さ1.0ｍで、調査区外の東西に延びる。深さは50㎝である。堆積土は2層に細分される。遺物は出土していない。

出土遺物

3トレンチの調査区壁のＶ層中から弥生土器が1点出土した。小片のため詳細は不明だが、甕の口縁部とみられる。



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	B-1	3T・Ｖ層	弥生土器	甕	－	－	(2.6)	ミガキ？	ミガキ？		12-4

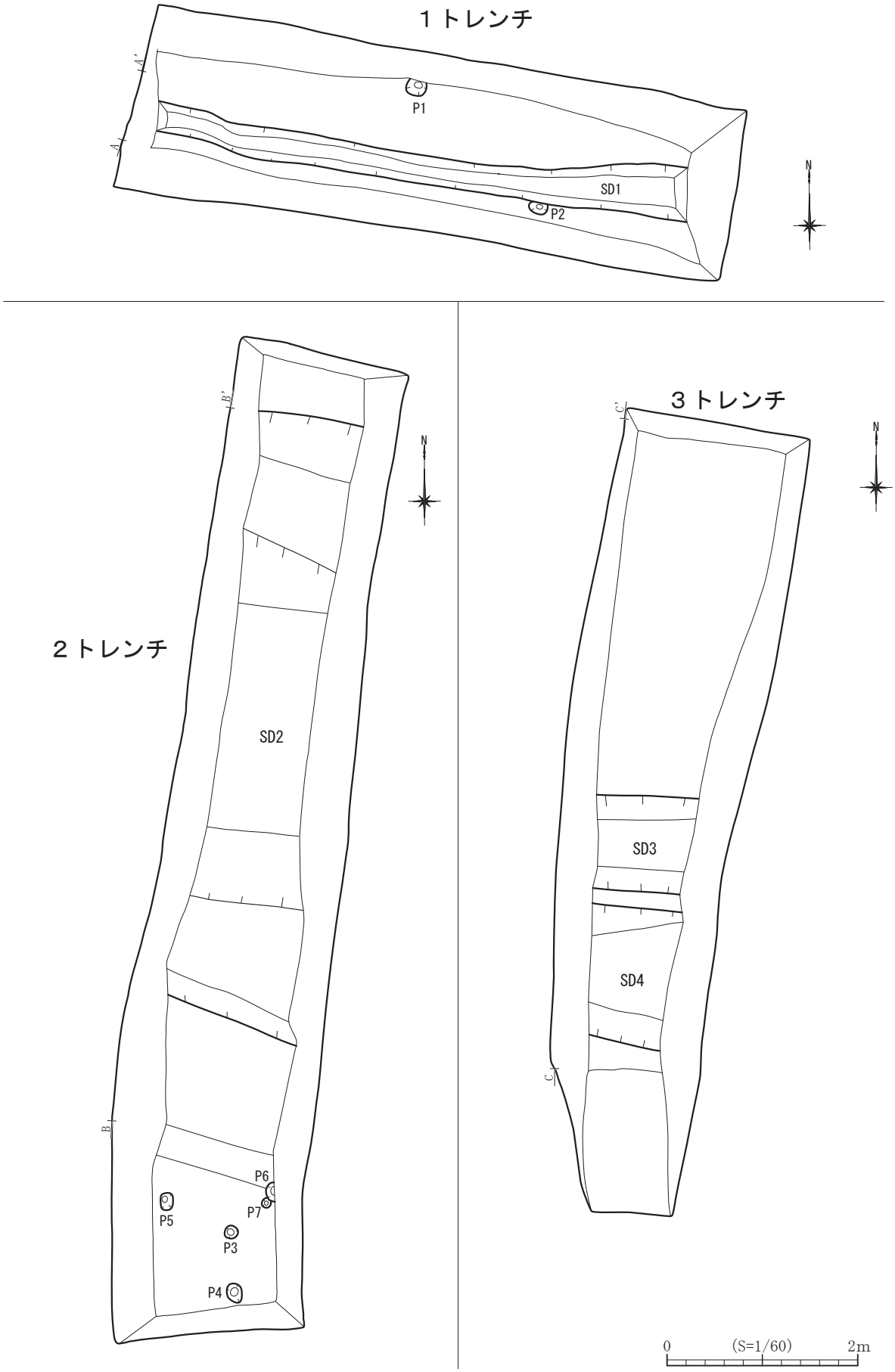
第26図　3トレンチ出土遺物

5．まとめ

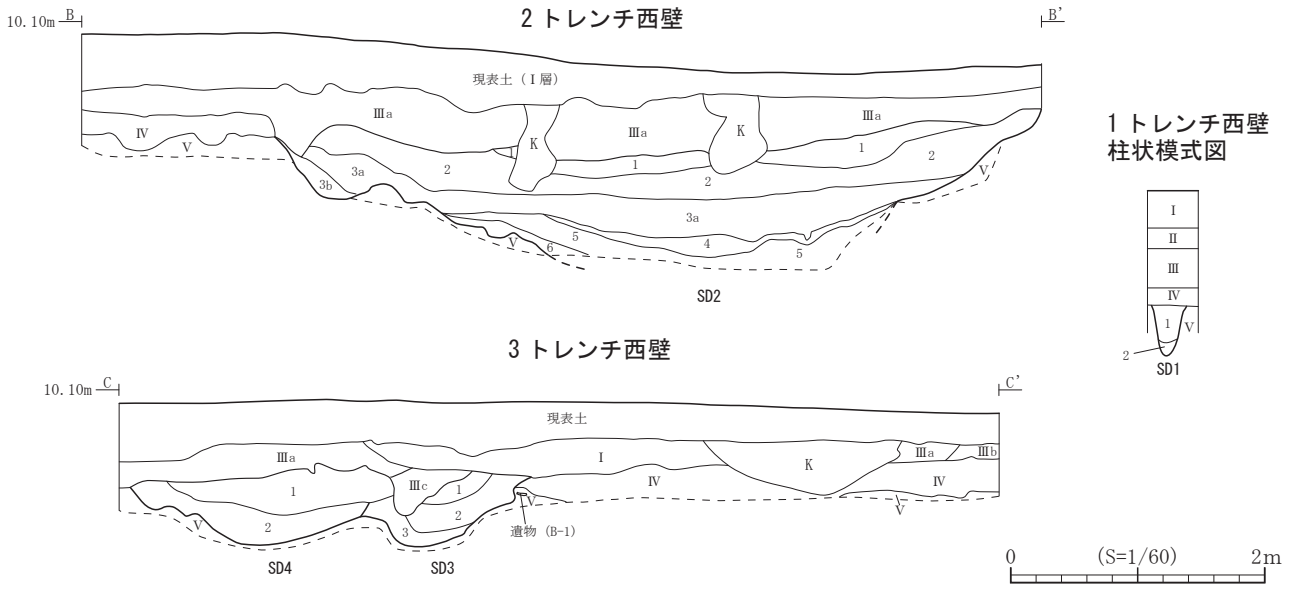
今回の調査地点は、今泉遺跡の南部に位置し、城館の外堀想定箇所南側に隣接している。北東側では今泉遺跡第3次調査が、そのさらに東側隣接地では第4次調査が行われている。第3次調査では調査区南端で幅7m以上、深さ1.6mの溝跡が確認されている。第4次調査では調査区南端で複数の溝・溝状の落ち込みから構成される溝跡が確認されており、その全体幅は7.3ｍ、深さは最大1.5mにおよぶ。この調査以降これらが外堀を構成するものと想定されてきた。

今回の調査では溝跡4条、ピット8基が検出された。2トレンチで検出されたSD2溝跡は、従来の堀の想定箇所より約15m南側に位置するものの、幅6.5ｍ、深さ1m以上と規模が大きく、城館に伴う堀の一部と考えられる。

城館の東側では平成24年に第10次調査が、北側では平成27年に第12次調査が行われており、これらの調査



第 27 図　今泉遺跡第 13 次調査 1 ～ 3 トレンチ平面図



2 トレンチ	層位	色調	土質	備考
基本層	Ⅲ	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	酸化鉄粒を斑状に含む
	Ⅳ	10YR3/3 暗褐色	粘土	炭粒極少量含む　一部でⅢ層巻き上げ　旧耕作土か
	Ⅴ	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	黄褐色粘土を斑状（酸化？）に暗褐色粘土を粒ないしブロック状に含む
SD2	1	10YR4/4 褐色	粘土	にぶい黄橙色粘土をブロック状に含む　人為堆積か
	2	10YR4/4 褐色	粘土	酸化鉄（マンガン）粒を斑状に含む　一部で酸化鉄が互層状堆積　一部グライ化
	3	10YR4/4 褐色	粘土	一部酸化鉄が互層状に堆積　東半でグライ化　黒褐色
	4	2.5Y2/1 黒色	粘土	植物遺存体（アシ類）を少量含む　黒褐色粘土と不規則に混じる
	5	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	灰黄褐色粘土ブロックを含む　西一部で酸化、褐灰色
	6	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	西半で酸化　暗褐色
	7	10YR4/4 褐色	粘土	3 層土をブロック状に含む（2 層土に類似）
3 トレンチ	**層位**	**色調**	**土質**	**備考**
基本層	Ⅰ	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトブロックと混じる　炭粒を含む　現代耕作土の一部
	Ⅲ a	10YR5/6 黄褐色	粘土	灰黄褐色シルトをブロック状に含む
	Ⅲ b	10YR4/4 褐色	粘土	炭粒をわずかに含む
	Ⅲ c	10YR4/4 褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトをブロック状に多く含む　酸化鉄を多く含む
	Ⅳ	10YR3/2 黒褐色	粘土	Ⅴ層土を部分的に巻き上げている　炭粒を含む
	Ⅴ	10YR5/6 黄褐色	粘土	暗褐色シルトを斑状に含む
SD3	1	10YR3/2 黒褐色	粘土	Ⅴ層土ブロックを含む
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	黒褐色ブロックを少量含む　Ⅴ層土を極少量含む
	3	10YR2/2 黒褐色	粘土	Ⅴ層土をブロック状に含む
SD4	1	10YR4/4 褐色	粘土	Ⅴ層土をブロック状に含む、酸化鉄を斑状に含む
	2	10YR3/2 黒褐色	粘土	Ⅴ層土を少量含む　酸化鉄を斑状に含む

第 28 図　今泉遺跡第 13 次調査 1 ～ 3 トレンチ断面図

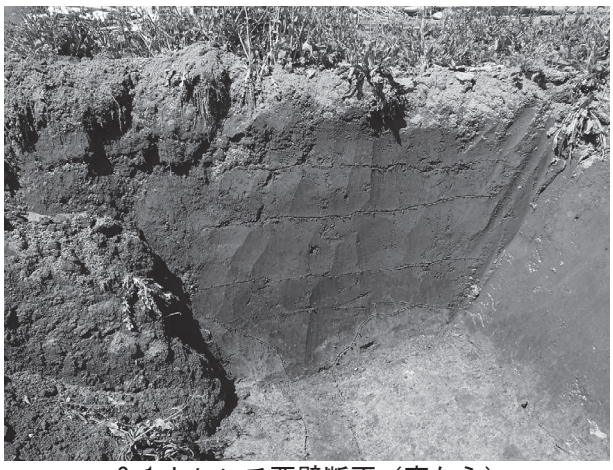
でも大規模な溝跡が確認されている。第 10 次調査で確認された溝跡は幅 5.6 m以上、深さ 1.4 m以上、第 12 次調査で確認された溝跡は幅 5.8 ～ 6.0 m、深さ 1.5 mで、ともに従来想定されていた外堀の範囲から 10 ～ 20 m外側に位置している。このため、従来の想定範囲よりさらに外側に堀が存在し、城館の防御施設は、これまで想定されていたよりも多くの施設を持つ、複合的なものであったと考えられる。

引用・参考文献

仙台市史編さん委員会　2006 『仙台市史　特別編 7　城館』
仙台市教育委員会　1994 『今泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 185 集
仙台市教育委員会　1995 『今泉遺跡』仙台市文化財調査報告書第 201 集
仙台市教育委員会　2016 『荒井南遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 446 集
仙台市教育委員会　2016 『仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第第 448 集

第 29 図　今泉遺跡第 13 次調査区及び周辺調査区の遺構

1.1 トレンチ全景（東から）



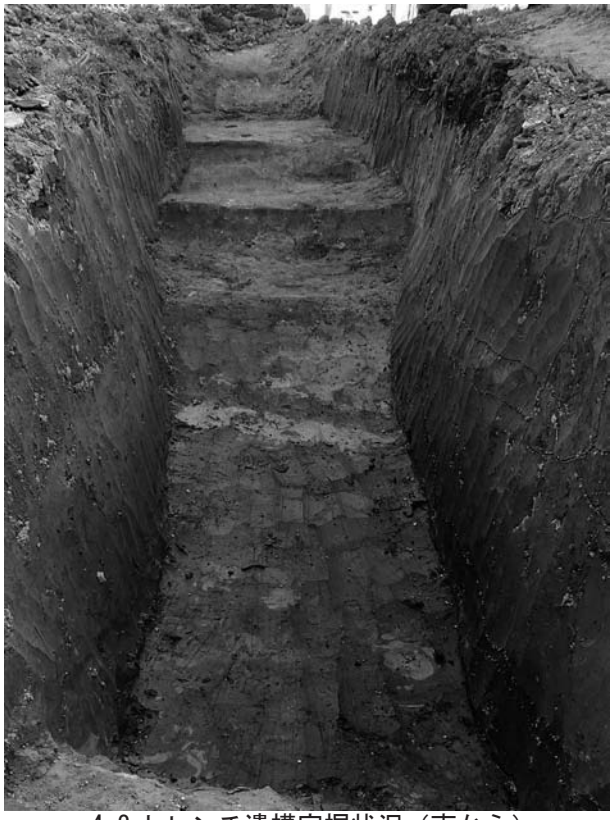
2.1 トレンチ西壁断面（東から）

写真図版 10　今泉遺跡第 13 次調査（1）

1.2 トレンチ遺構検出状況（南から）

2.2 トレンチピット完掘状況（西から）

3.2 トレンチ遺構完掘状況（北から）

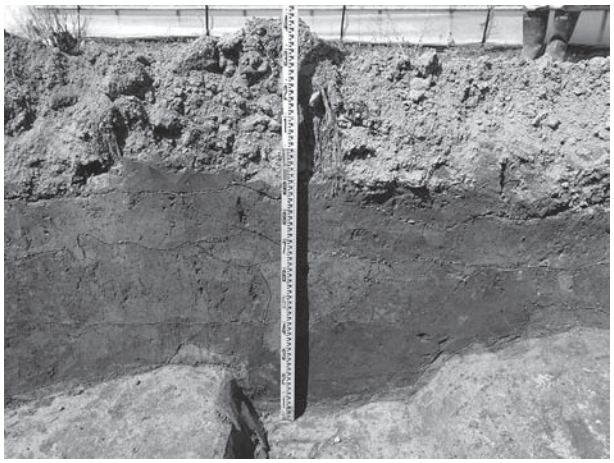

4.2 トレンチ遺構完掘状況（南から）

5.2 トレンチ SD2 溝跡断面（東から）

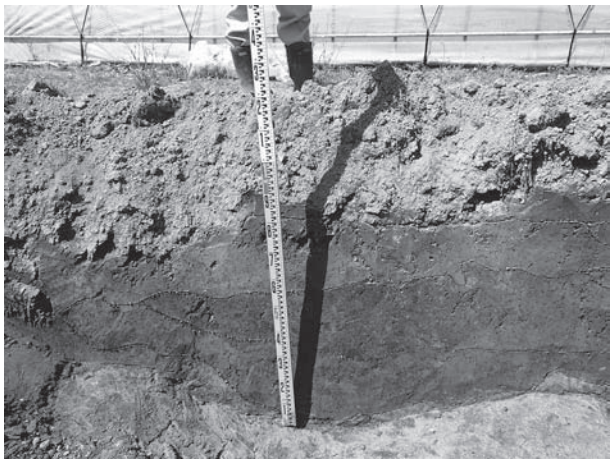
6.2 トレンチ P3 断面（西から）

写真図版 11　今泉遺跡第 14 次調査（2）

1.3 トレンチ遺構完掘状況（南から）



2.3 トレンチ SD3 溝跡断面（東から）



3.3 トレンチ SD4 溝跡断面（東から）

4・B-1

写真図版 12　今泉遺跡第 14 次調査（3）・出土遺物

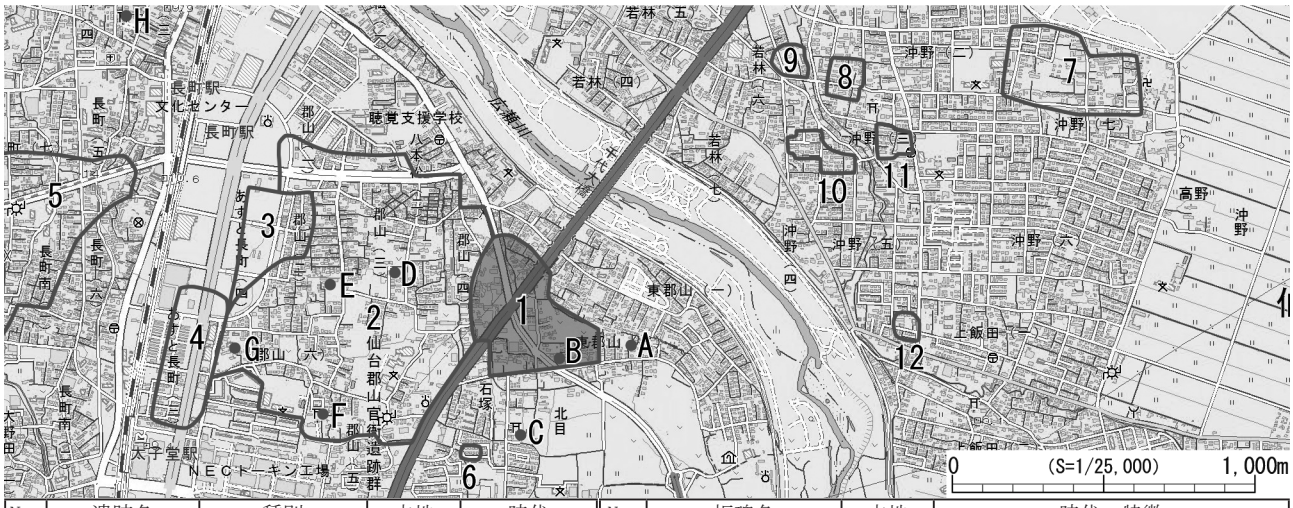
第４章　北目城跡の調査

第１節　遺跡の概要

北目城跡は、仙台市の南東部、太白区郡山四丁目から仙台バイパスをはさんで郡山字宅地、北目宅地、東郡山二丁目にかけて所在する。JR 長町駅の南東 1.2km、北を広瀬川、南を名取川に挟まれ、その両河川の合流点から北西約 1.7km の標高 8 ～ 11 mの自然堤防上立地する。遺跡の範囲は、東西約 470 m、南北約 490 mである。

宝永年間（1670 年代）に記された「仙台領古城書上」によると、北目城の城主は粟野氏で、16 世紀後半までは名取郡の北部を治めていたが、永禄年間以降（1570 年～）に粟野氏は伊達氏の家臣化したものと考えられ、「北目給衆」と呼ばれる伊達氏の家臣たちが粟野領に派遣されているのが確認されている。その後関ヶ原の戦いの際（1600 年）に、伊達政宗はこの北目城に在城しており、翌年に仙台城に居を移したことが知られている。「仙台領古城書上」などには北目城は東西四十六間（約 83 m）、南北五十六間（約 101 m）の規模で、四方に幅八間（15 m）の堀があったと記されているが、これは城の中枢部分を記載したものであると考えられる。都市化が進んだ昭和 40 年代以前までは土塁や堀の痕跡は田畑の区割りなどに残されており、その周囲の字名にも「館ノ内」「出丸」「矢来」「矢口」など城に由来する名前が存在していた。

北目城跡は平成 4 年（1992 年）に初めて発掘調査が行われ、直角に屈曲し、底に障壁を伴う大規模な障子堀や、井戸跡、土坑などが検出され、堀などを中心に 16 世紀後半から 19 世紀にかけての陶磁器、刀、木製品などが出土した。その後も何度か発掘調査が行われており、平成 10 年度（1998 年）に行われた第 2 次調査と、平成 15 年度（2003 年）に行われた第 3 次調査、平成 20 年度（2008 年）に行われた第 7 次調査などで、城を区画する堀跡が一部で障壁を伴って検出されている。またそれ以外の調査においても井戸跡、土坑などが見つかっており、陶磁器や石製品などの遺物が出土している。



No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～近世
2	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	自然堤防	縄文～古代
3	西台畑遺跡	集落跡、甕棺墓	自然堤防	縄文～古代
4	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～古代
5	富沢遺跡	水田跡	後背湿地	旧石器～近世
6	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
7	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
8	神柵遺跡	包蔵地	自然堤防	古墳、古代
9	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
10	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代
11	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生～古代
12	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代

No.	板碑名	立地	時代・特徴
A	古峯神社板碑	自然堤防	嘉暦年間（1326 ～ 9） 種字大日報身真言
B	宅地古碑群	自然堤防	5 基　正安三年（1301） ～応長元年（1311）
C	北目古碑群	自然堤防	2 基　嘉元三年（1305） ～正和三年（1314）
D	郡山三丁目古碑群	自然堤防	4 基　嘉暦二年（1327）
E	郡山八雲神社板碑群	自然堤防	9 基　元亨二年（1323） ～元徳三年（1331）
F	諏訪社古碑群	自然堤防	4 基　乾元二年（1303）？ ～建武元年（1334）
G	長町駅裏古碑群	自然堤防	2 基　徳治三年（1308）、 嘉暦二年（1327）
H	蛸薬師古碑群	自然堤防	2 基　延慶四年（1311）

第 30 図　北目城跡の位置と周辺の遺跡

北目城跡の西側には、飛鳥時代から奈良時代にかけて陸奥国府と付随する寺院がおかれていた郡山遺跡（2）が所在する。さらに西側には西台畑遺跡（3）と長町駅東遺跡（4）が所在しており郡山遺跡と同時期の竪穴住居跡が600軒以上発見されている。広瀬川の対岸、左岸側には、柵列により区画された古代の官衙遺跡と考えらえれる神柵遺跡（8）や、粟野氏の一族が居住していた記録が残る沖野城（7）が所在する。また北目城跡の東側には安山岩製で種字を大日報身真言で五輪塔を表し、嘉暦年間（1326～29）に建立された古峯神社板碑（A）が所在する。この板碑はかつて北目城の北東側にあったものを昭和30年代に移動してきたものであると伝えられる。北目城の内部にも宅地古碑群(B)が所在し、5基の板碑が存在する。確認されている年号は正安三年(1301年)、嘉元四年(1306年)、応長元年（1311年）である。北目城の南の毘沙門堂の敷地内には北目古碑群（C）が所在するが、この毘沙門堂と板碑群はかつて北目城内の北西側に所在していたもので、昭和40年代に仙台バイパスの工事に伴い当地に移転してきたものである。年号は嘉元三年（1314年）と正和3年（1314年）である。また郡山遺跡の範囲内にも郡山三丁目古碑群（D）と八幡社古碑群（E）、諏訪社古碑群（F）、長町駅裏古碑群（G）が所在しており、周辺には14世紀前葉の年代の板碑が多数存在する。

第2節　第8次調査

1．調査要綱

遺　跡　名　北目城跡（宮城県遺跡登録番号01029）

調 査 地 点　仙台市太白区東郡山2丁目108の一部他

調 査 期 間　平成28年1月8日～22日（確認調査）・4月12日～5月31日（本発掘調査）
・10月17日～24日（追加調査）

調査対象面積　2182.54㎡

調 査 面 積　201㎡（確認調査）・811.34㎡（本発掘調査＋追加調査）

調 査 原 因　宅地造成工事・建売住宅12棟の新築工事

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市文化財課調査調整係

担 当 職 員　主査　平間 亮輔（確認調査）　主事　及川 謙作　小林 航　　文化財教諭　吉田 真太郎

2．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成27年10月21日付けで申請者より提出された宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財発掘の取扱いについて（協議）」（平成27年11月5日付けH27教生文第103－137号で通知）に基づき実施した。対象地は北目城跡の東端部分で平成3～4年度に調査が行われた第1次調査区の西側に、平成17年度に調査が行われた第4次調査区の北側に、平成19年度に調査が行われた7次調査区の西側にあたる。平成28年1月8日から1月22日にかけて事業地の道路新設工事範囲内にトレンチを6か所設定し確認調査を実施した。その結果事業地の北側の1～4トレンチを中心に堀跡および溝跡、土坑、ピットなどが検出され、陶器などの遺物が出土した。また遺構は希薄ではあったが5トレンチから近世の陶磁器などが一定量出土した。これらの成果を基に事業者側と協議を行い、事業の代理人と平成28年4月11日に契約を締結し本発掘調査を行うことになった。

本発掘調査は4月12日から着手した。事業者側に依頼し、調査区周辺に世界測地系の基準点を2ヶ所設置した。調査は重機により耕作土である基本層Ⅰ層、Ⅱ層を掘り下げ、Ⅲ層上面、もしくはⅢ層が残存していない調査区の南側ではⅣ・Ⅴ層上面で遺構検出作業を行った。その後さらに下の基本層から地震に伴うと思われる噴砂痕が検出されたことから、堀跡の斜面部分を利用して基本層の深堀りを4か所で行い、5月31日に本発掘調査を終了した。

第 31 図　北目城跡第 8 次調査区位置

その後新たに他の事業者から宅地造成範囲内において平成 28 年 9 月 9 日付けで建売住宅の新築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の取扱いについて（協議）」（平成 28 年 9 月 15 日付け H28 教生文第 103 － 53 号で通知）が提出されたことから、これに基づき追加調査を実施した。追加調査は平成 28 年 10 月 17 日に着手した。重機により耕作土である基本層Ⅰ層、Ⅱ層を掘り下げ、Ⅲ層上面で遺構検出作業を行った。しかし建売住宅新築工事に伴う掘削は大部分が遺構検出面前後の深度までであったことから、遺構の掘り下げは一部にとどめている。10 月 24 日に追加調査を終了した。

遺構の記録は、調査区配置図を S=1/200 で、遺構平面図と調査区断面図を S=1/20 で作成し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。また図化が難しい一部の遺構についてはデジタルカメラを用いた三次元計測を行った。

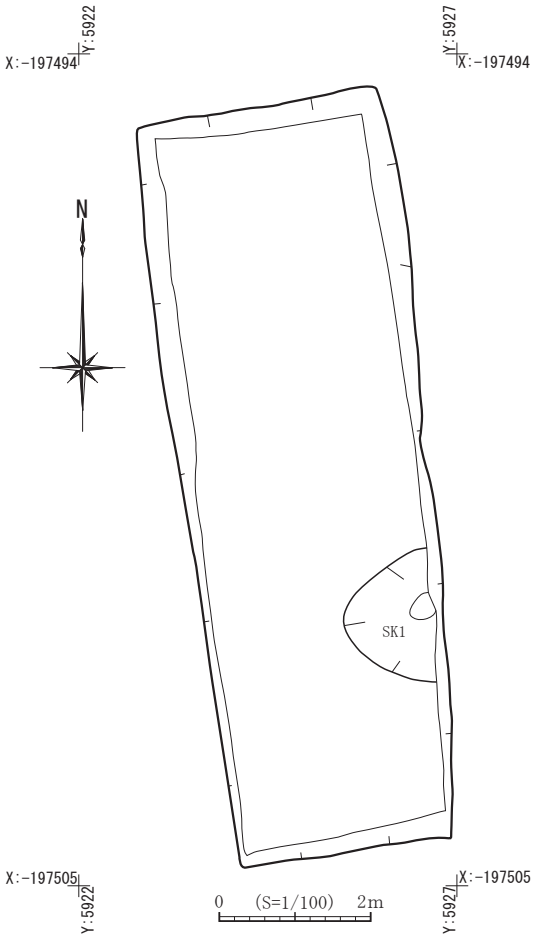
3．確認調査の発見遺構と出土遺物

1～6トレンチからは溝跡4条，土坑1基、ピット8基を確認した。本発掘調査対象となった1～4トレンチからは堀跡と溝跡が東西方向に並んで検出された。5・6トレンチは遺構は希薄であったが、5トレンチから土坑が1基検出され、近世の陶磁器などが多数出土した。また6トレンチからも中世陶器が1点出土している。

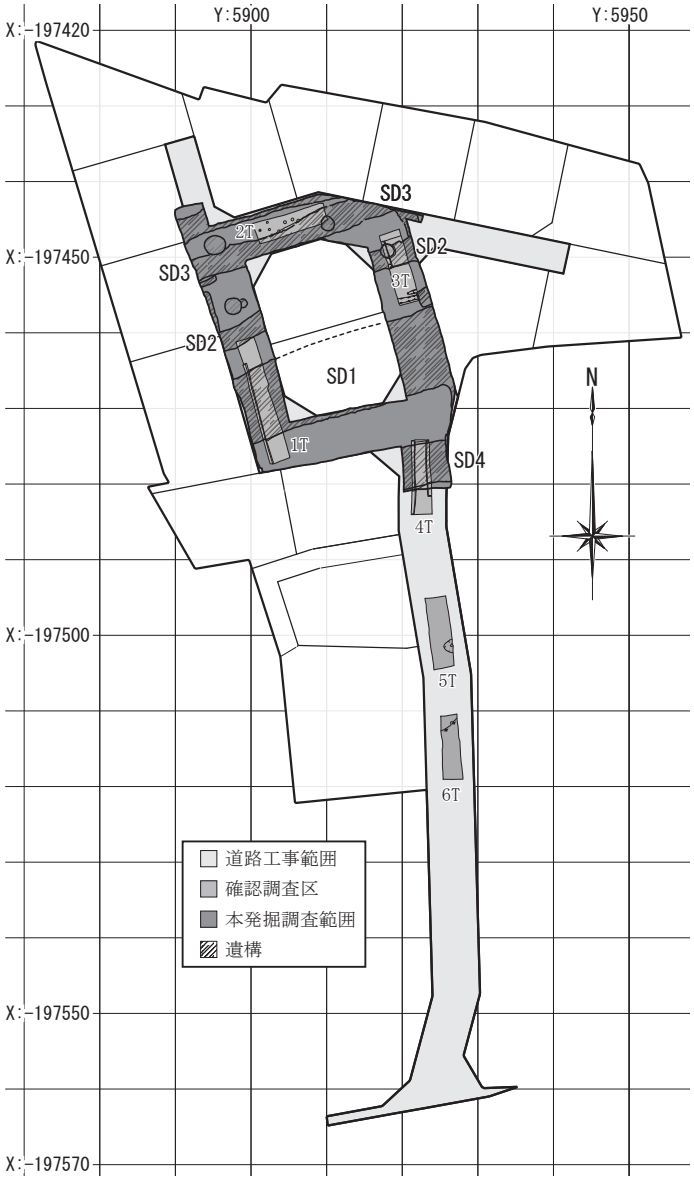
(1) 土坑

SK1 土坑

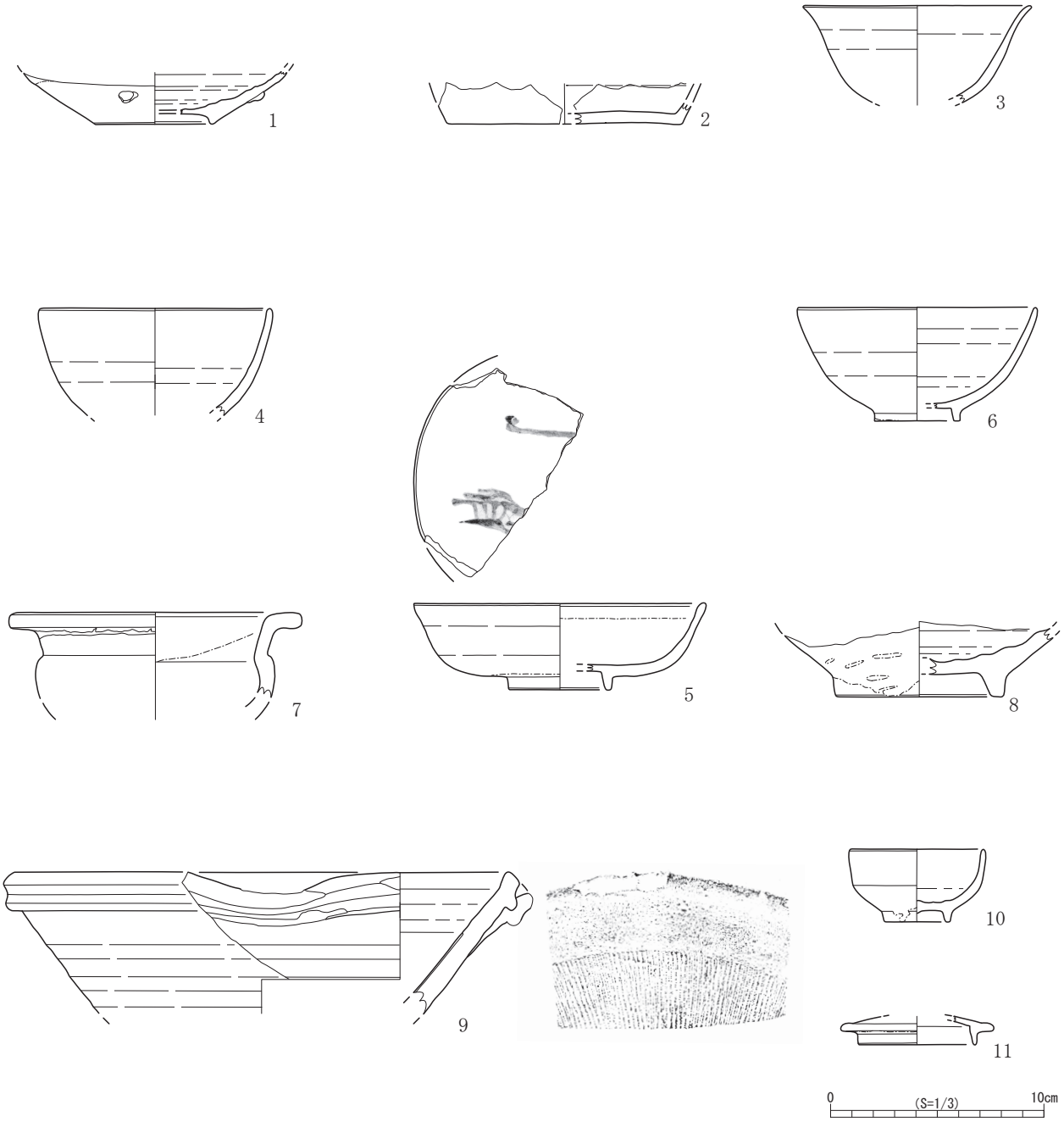
5トレンチの南側で検出された。平面形状はやや歪な円形で直径約1.2～1.6m，遺構検出面からの深さは40㎝で調査区東側にさらに広がる。堆積土中から瓦質土器、陶器、磁器、鉄製品などが出土している。陶器は碗、端反碗、小坏、徳利、土瓶、土瓶蓋、五須絵皿、焙烙、香炉、擂鉢などが出土しており、産地は大堀相馬を主体とし、擂鉢などは堤焼か在地の製品であると考えられる。年代は18世紀後半から19世紀であると考えられる。磁器は染付の碗、皿、輪花皿、鶴首瓶が出土している。いずれも肥前産で、年代は18世紀前半から19世紀中葉と年代幅がある。瓦質土器は五徳と壺が出土している。年代はいずれも19世紀であると考えられる。鉄製品はいずれも釘で最大長は6.7cmである。



第32図　5トレンチ遺構配置図

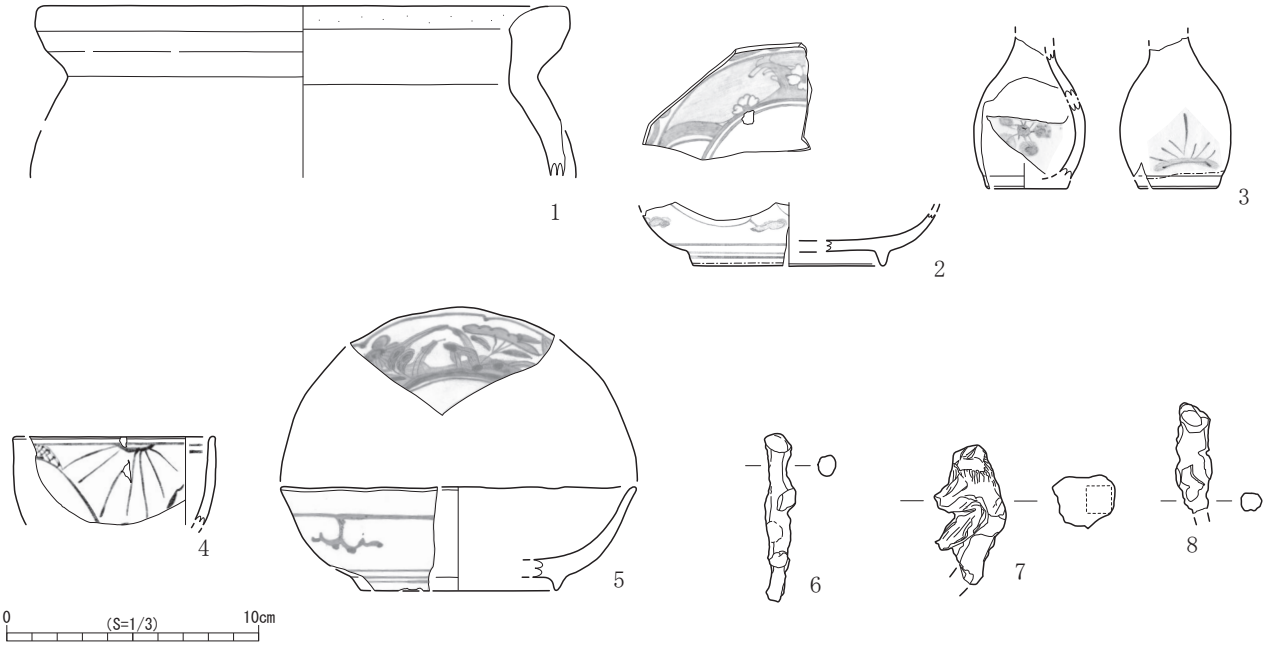


第33図　確認調査区配置図



図版番号	登録番号	出土区	出土遺構	種別	器種	口径・幅（cm）	器高・長（cm）	底径・厚（cm）	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	I-7	5トレンチ	SK1	陶器	土瓶	—	(2.4)	(5.6)	緑釉	無釉	大堀相馬　19c 前～中	15-1
2	I-9	5トレンチ	SK1	陶器	焙烙	—	(1.9)	(11.0)	鉛釉	鉛釉　釉ふき取り？	堤焼　底部回転ヘラケズリ 19c	15-2
3	I-2	5トレンチ	SK1	陶器	端反碗	(10.6)	(4.55)	—	灰釉	灰釉	大堀相馬　19c 前～中	15-3
4	I-1	5トレンチ	SK1	陶器	碗	10.8	(5.0)	—	白濁釉	白濁釉	大堀相馬　19c	15-7
5	I-5	5トレンチ	SK1	陶器	呉須絵皿	(13.6)	(4.0)	(4.8)	白濁釉	白濁釉　山水文	大堀相馬　19c 前～中	15-10
6	I-3	5トレンチ	SK1	陶器	碗	11.2	5.3	4.0	白濁釉	白濁釉	大堀相馬　19c	15-5
7	I-10	5トレンチ	SK1	陶器	香炉（線香立て）	(13.6)	(4.0)	—	鉄釉　釉ハゼ	口縁部：鉄釉 体部：無釉	堤焼？　19c	15-11
8	I-6	5トレンチ	SK1	陶器	徳利	—	(3.5)	(7.8)	白濁釉	一部に白濁釉	大堀相馬　19c	15-4
9	I-11	5トレンチ	SK1	陶器	擂鉢	(23.2)	(6.6)	—	鉄釉　口縁部：釉薬磨滅 隆帯1条	鉄釉	在地？　18c ？	15-13
10	I-4	5トレンチ	SK1	陶器	小坏	(6.2)	3.4	(3.1)	灰釉	灰釉	大堀相馬 18c 後半～ 19c ？　稜あり	15-8
11	I-8	5トレンチ	SK1	陶器	土瓶蓋	(7.2)	(1.8)	—	白濁釉	無釉	大堀相馬　19c	15-9

第 34 図　5トレンチ SK1 出土遺物（1）



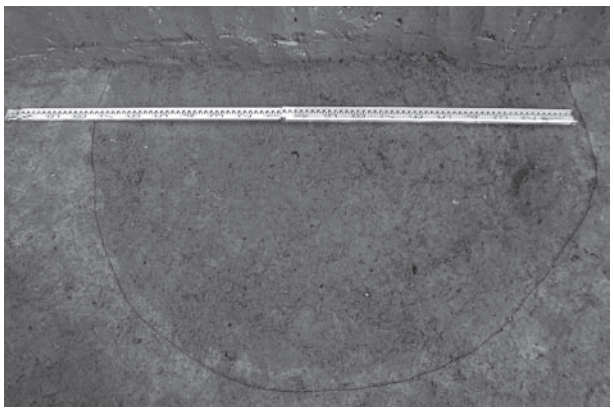
図版番号	登録番号	出土区	出土遺構	種別	器種	口径・幅（cm）	器高・長（cm）	底径・厚（cm）	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	I-13	5トレンチ	1層	瓦質土器	壺（蓋付？）	(21.0)	(6.8)	—	剥落	口縁部：磨滅（使用痕かいぶしがきいていない	在地　19c 火消し壺？、口縁部内側が磨滅著しい、砂多し	15-12
2	J-3	5トレンチ	SK1	磁器	染付皿	—	(2.5)	(7.6)	透明釉　蔓草文　圏線	透明釉　桜花流水文　圏線 高台内圏線	肥前　染付桜花流水文皿 18c 前～中	15-19
3	J-4	5トレンチ	SK1	磁器	染付鶴首瓶	—	(6.0)	(3.1)	透明釉　星梅鉢文	透明釉　草文	肥前　染付星梅鉢文鶴首瓶 19c 前～中	15-20
4	J-1	5トレンチ	SK1	磁器	染付碗	(8.0)	(3.5)	—	透明釉　菊花文　斜格子文	透明　釉圏線	肥前　19c 前	15-21
5	J-2	5トレンチ	SK1	磁器	染付輪花皿	(14.0)	(4.1)	(7.8)	透明釉　蔓草文　圏線	透明釉　草花文　圏線 高台内圏線	肥前　染付草花文輪花皿 18c 後半？　漆継ぎ？	15-22
写真のみ	I-12	5トレンチ	SK1	瓦質土器	五徳？	—	—	—			在地？　19c	15-14
写真のみ	I-14	6トレンチ	—	陶器	皿	—	—	—	灰釉	灰釉	美濃　灰釉皿（大窯製品） 16c　高台内施釉	15-6
図版番号	登録番号	出土区	出土遺構	種別	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚み（cm）	特徴・備考			写真図版
6	N-1	5トレンチ	SK1	鉄製品	釘	6.7	(1.2)	7.0	完形？			15-16
7	N-2	5トレンチ	SK1	鉄製品	釘	(3.7)	(1.9)	(1.4)	木質残存　屈曲変形　先端欠損			15-15
8	N-3	5トレンチ	SK1	鉄製品	釘	(4.4)	(1.4)	(0.8)	先端部欠損			15-17
写真のみ	N-4	5トレンチ	SK1	鉄製品	釘	—	—	—				15-18

第35図　5トレンチ SK1 出土遺物（2）

1.5T 遺構検出状況（南から）

2.5T 遺構完掘状況（南から）

写真図版13　北目城跡第8次調査区確認調査（1）



1.5T　SK1 検出状況（西から）

2.1T　遺構検出状況（南から）

3.1T　SD1 堀跡土層断面（北から）

4.2T　SD3 溝跡検出状況（東から）

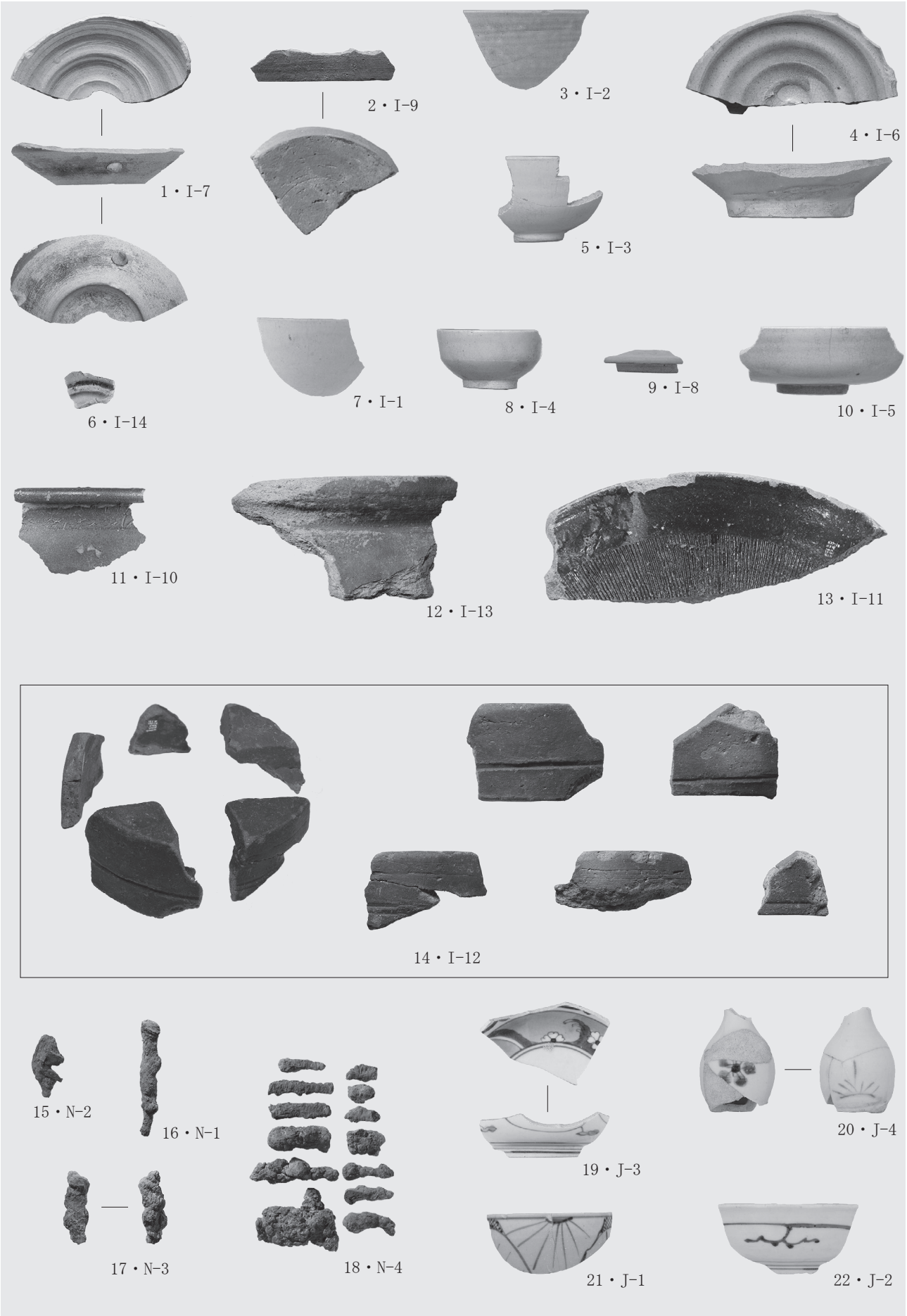
5.3T　SD3 溝跡検出状況（南から）

6.4T 遺構検出状況（南から）

7.4T 西壁 SD4 堀跡土層断面（南東から）

1.6T 遺構検出状況（北から）

写真図版 14　北目城跡第 8 次調査区確認調査（2）



写真図版 15　北目城第 8 次調査区確認調査出土遺物

４．基本層序

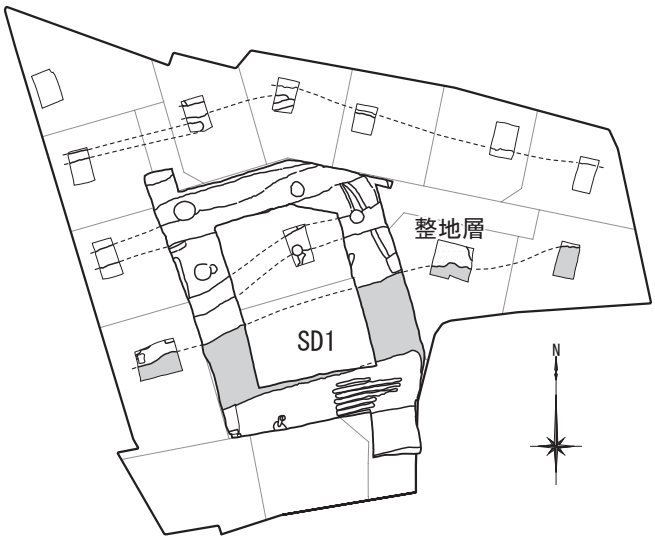
調査区には最近の耕作土層である第Ⅰ層が約 20 ～ 30 ㎝、第Ⅱ層が約 0 ～ 80 ㎝の厚さで存在する。第Ⅲ層上面が古代から中世の遺構検出面であるが、南区ではⅢ層が削平されており、第Ⅳ層もしくは第Ⅴ層上面で遺構検出を行った。調査区の北側は現地形が落ち込んでおり、基本層も落ち込んでいることが確認された。また SD1 堀跡の斜面の一部を掘削し、基本層を第ⅩⅡ層まで確認した。

５．本発掘調査と追加調査の発見遺構と出土遺物

基本層第Ⅲ層上面を中心に堀跡 2 条、整地層 1 ヶ所、溝跡 11 条、土坑 12 基、井戸跡 4 基、小溝状遺構 14 条（近現代 10 条、古代以降 4 条）、ピット 65 基が検出された。基本層中と遺構検出面、各遺構の堆積土を中心に土師器や須恵器、石製品や瓦、土師質土器（カワラケ）、陶器、磁器等の遺物が出土している。また基本層を貫入する形で地震にともなう噴砂痕が確認されている。

(1) 堀・溝跡・整地層

SD1 堀跡・整地層



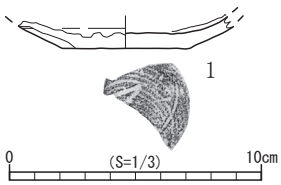
本発掘調査範囲の東・南・西区と、追加調査 2・3・11 区で検出された大型の堀跡である。他の遺構との重複はないが、本発掘調査東区の北側で SK5 土坑と隣接している。方位は E-7 ～ 15°-N の東西方向で、検出長は 60.5 ｍで、さらに調査区外の東西に延びる。幅は 9.3 ～ 10.0 ｍで、遺構検出面からの深さは約 2.5 ～ 2.8 ｍで、断面形状は逆台形を呈するが、北側の斜面は南側よりも傾斜が緩やかである。本発掘調査区の東区の、堀の南側斜面には幅約 1.1 ｍ、深さ約 50㎝の犬走り状の段差が存在する。また本発掘調査区東端部分は堀の上端が南に屈曲していることから、南に張り出して南側の堀跡と接続していた可能性がある。堀底の南側は部分的に約 20 ～ 30㎝掘り込まれている。掘込みの断面形状は浅いＵ字形を呈し、掘り込みの間には杭が打ち込まれているのが確認された（L-2・写真図版 18 － 7）。

堆積土は大部分が自然体積で、底面に近い部分は互層状の水生堆積であることから、水堀として機能していたものと考えられる。北側法面には倒木による法面の崩落土などが確認された。中層から上層の一部は人為堆積土で、堀の南側を中心に白色粘土などの地山ブロックと直径約 3 ～ 5㎝の円礫が多量に混入していることが確認された。これは SD1 堀跡付近の土塁などを用いて堀を埋め戻した層である可能性がある。また 2・3 区で検出された SD1 の堆積土の最上層には、砕石やビニールなども含まれていたことから、堀の窪みは最近まで残存していたもの考えられる。

遺物はロクロ土師器や木製品、自然遺物（クルミ等の種子）などが出土している。また底面および斜面から弥生時代の地震に伴うと考えられる噴砂痕が確認されている。

追加調査区 3 区の SD1 堀跡の北側からは、堀に隣接して整地層が見つかった。整地層は基本層Ⅲ層を一部掘り込んで形成されている。構築土は基本層由来と考えられる地山ブロックを斑状に大量に含んでおり、その中には灰黄褐色の粘土なども含まれていることから、かなり深い深度の基本層を用いたものと考えられる。堆積状況から堀

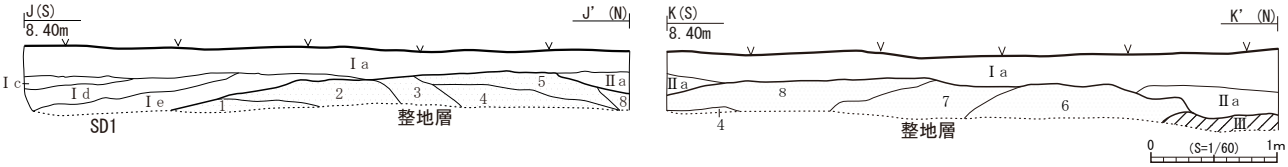
跡の北側隣接部分を基点に南から北に向かって土が積まれているのが確認された。層の厚さは約30cmで、確認された南北の幅は約3.6ｍである。この整地層は土塁の基底部の可能性がある。



図版番号	登録番号	出土区	遺構層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	D-3	東区		赤焼土器	坏（小型）	—	(1.3)	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	皿？	21-1

図版番号	登録番号	出土区	遺構層	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	直径(cm)	特徴・備考	写真図版
写真のみ	L-2	東区	最下層	木製品	杭	—	—	—	堀底と法面境界部分に打ち込まれていた	21-2
写真のみ	L-3	西区		木製品	杭？	—	—	—		21-3

第37図　SD1堀跡出土遺物



基本層

層位	色調	土質	備考・混入物
Ⅰc	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物、円礫少量
Ⅰd	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック少量
Ⅰe	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量

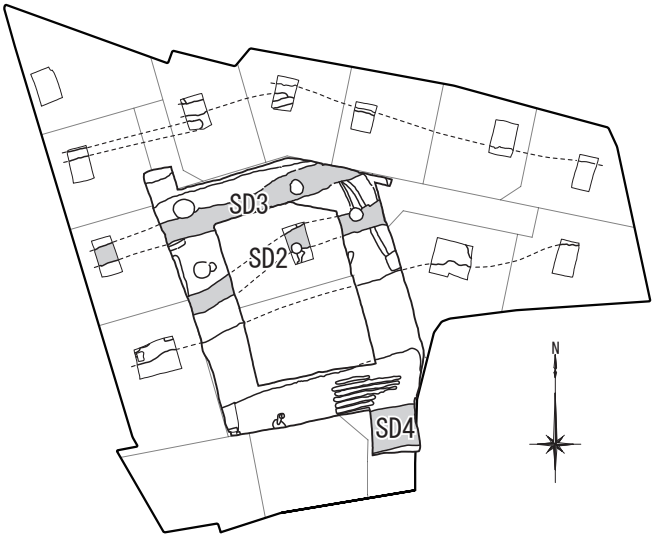
整地層（J-J'・K-K'）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅲ層？）少量
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に含む
3	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	地山ブロック主体
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	地山ブロック斑状に多量に含む
5	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に多量に含む
6	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	地山ブロック斑状に多量に含む
7	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に含む
8	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	地山ブロック斑状に多量に含む、炭化粒少量

第38図　追加調査区3区　西・北壁整地層断面図

SD2溝跡

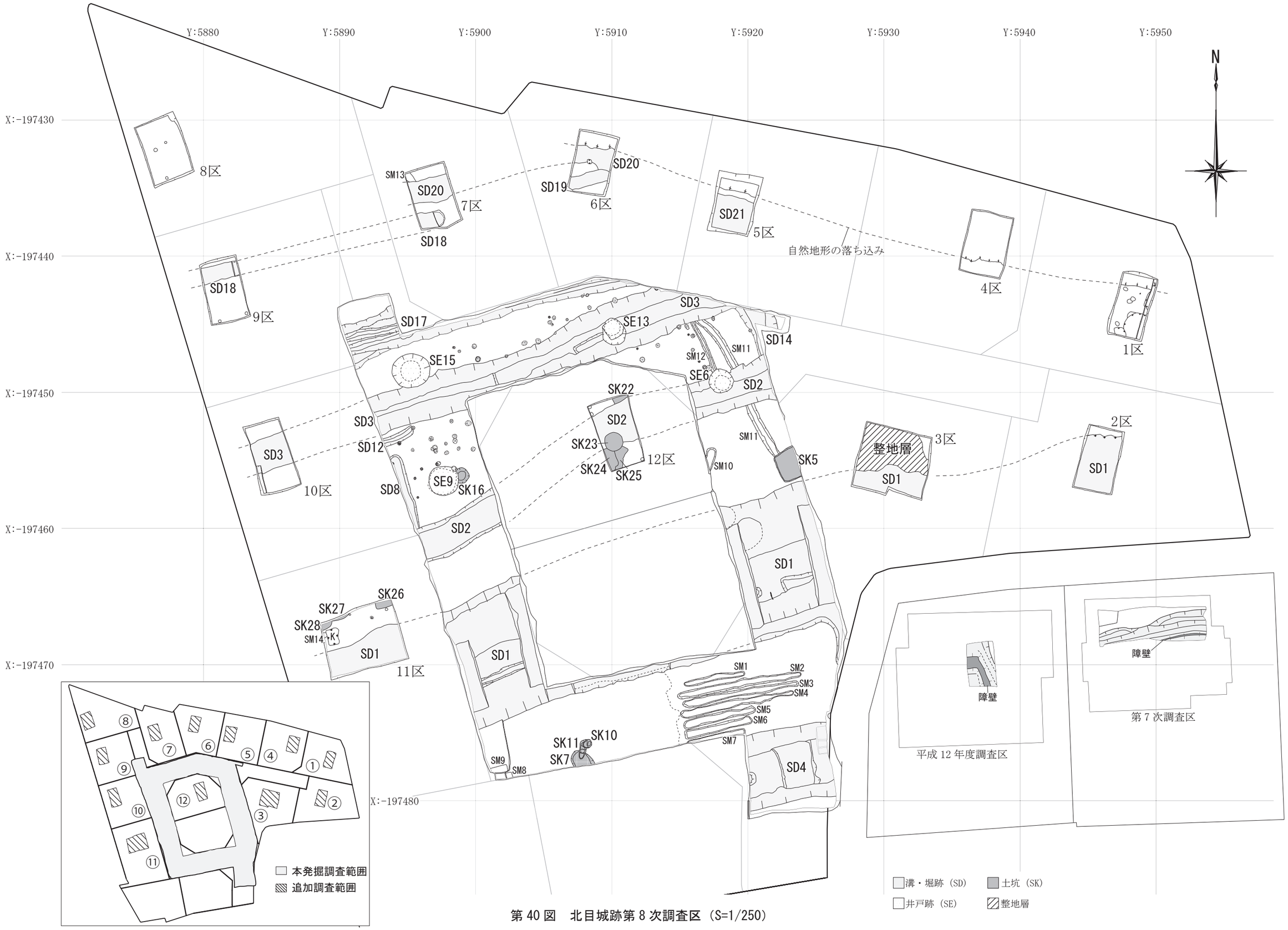
本発掘調査の東区と西区、追加調査の12区で検出された。SE6井戸跡、SD8･14溝跡、SK22～SK24土坑、SM11・12小溝状遺構と重複し、SE6井戸跡、SK23・24土坑よりも古く、SK22土坑、SM11・12小溝状遺構よりも新しい。またSD8・14遺跡よりも新しいか同時期で方位はE-26～35°-Nの東西方向で、検出長は約29ｍ、横幅は2.7ｍで、調査区外にさらに延びる。検出面からの深さは80cmで､断面形状は逆台形を呈する。基本層Ⅲ層から掘り込まれているが、一度上面まで埋め戻され、その後基本層第Ⅱ層が周囲で堆積した後に再度部分的に掘り直されている。12区より西側でやや南西側に屈曲しているものと思われる。遺物は出土していない。



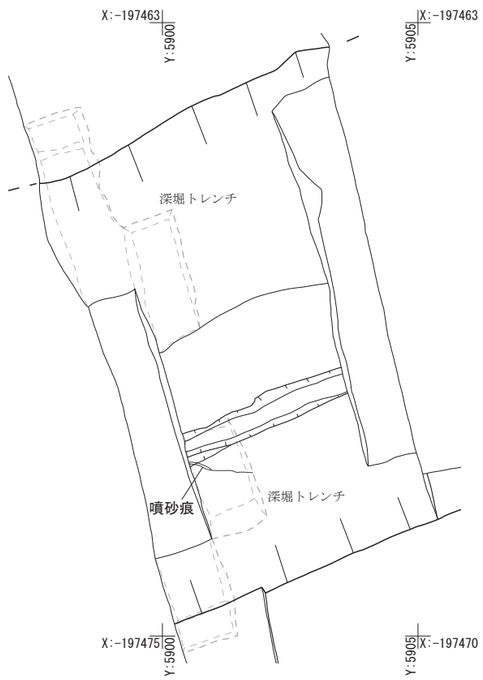
第39図　SD2・3溝跡・SD4堀跡位置図

SD3溝跡

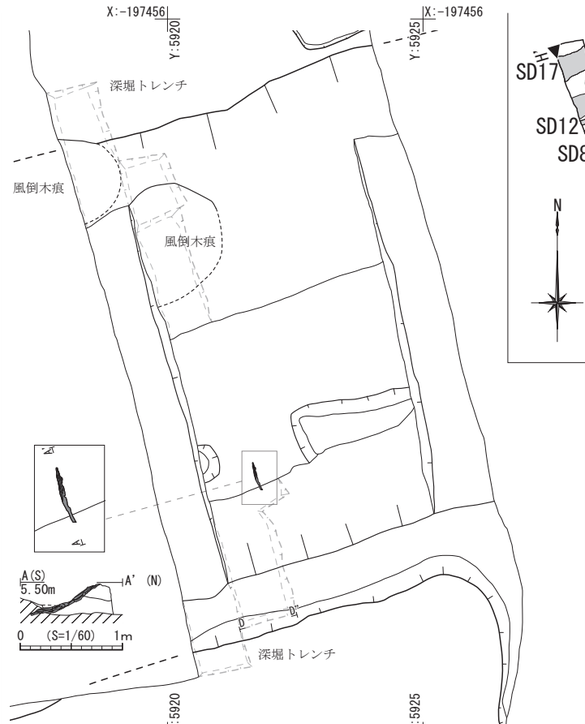
本発掘調査の北区と追加調査10区で検出された。SE13・15井戸跡、SD14溝跡、SM11・12小溝状遺構と重複し、SE13・15井戸跡よりも古く、SM11・12小溝状遺構よりも新しく、SD14溝跡よりも新しいか、ほぼ同時期であると考えられる。方位はE-19～21°-Nの東西方向で､検出長は37.1ｍ､幅は3.7ｍで､調査区外にさらに延びるし、一定ではない。検出面から底面までの深さは約1.2ｍで、断面形状は場所によってはやや緩いV字形、もしくは逆台形を呈する。底面に高さ約15cmの段差が存在する箇所がある。基本層第Ⅲ層から掘り込まれているが、一度上面まで埋め戻され、その後基本層第Ⅱ層が周囲で堆積した後に再度部分的に掘り直されている。



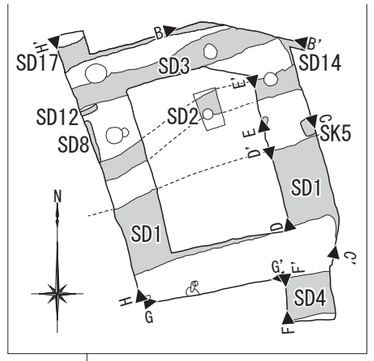
第 40 図　北目城跡第 8 次調査区（S=1/250）

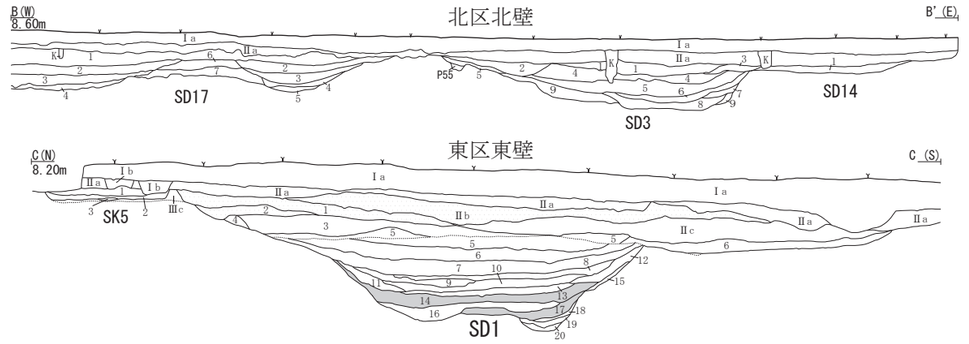


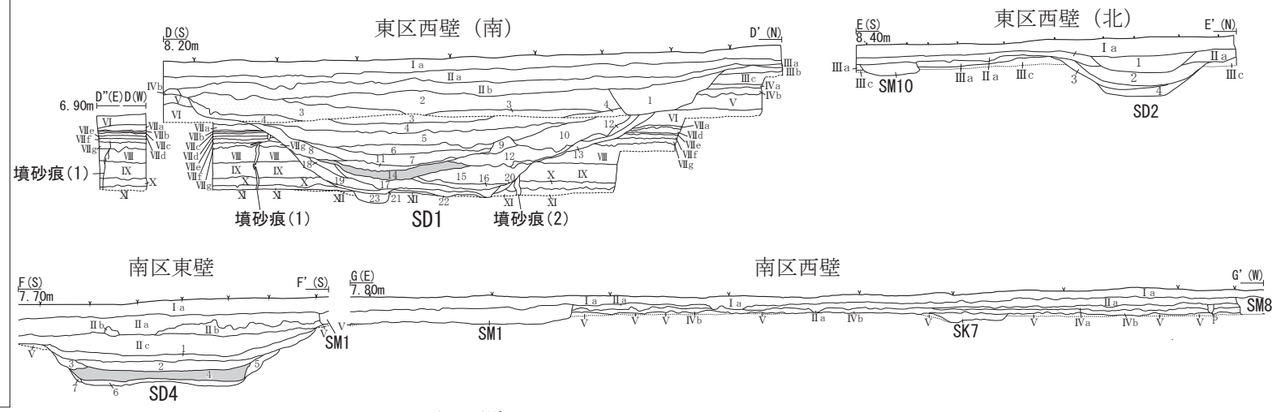
SD1 堀跡平面図(西区)

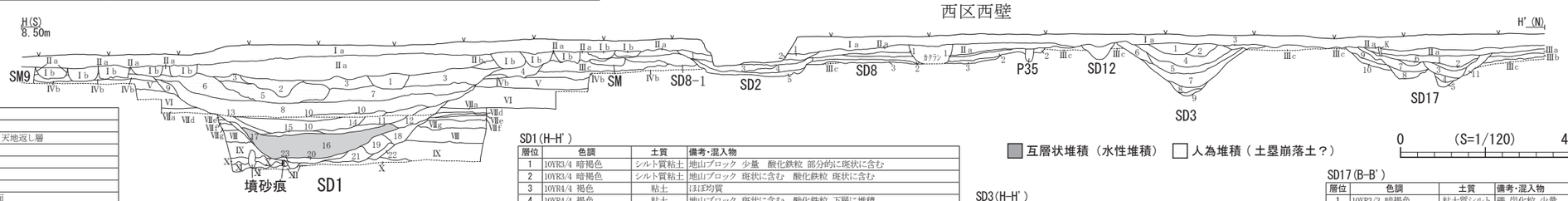


SD1 堀跡平面図(東区)









■ 互層状堆積（水性堆積） □ 人為堆積（土塁崩落土？）

0 (S=1/120) 4m

(基本層)

層位	色調	土質	備考・混入物
Ⅰa	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒 少量　耕作土
Ⅰb	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	地山ブロック 下層に斑状に堆積　天地返し層
Ⅱa	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	炭化物 少量　耕作土
Ⅱb	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	ほぼ均質
Ⅲa	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に含む
Ⅲb	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む
Ⅲc	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	ほぼ均質　古代、中世の遺構検出面
Ⅳb	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック 斑状に含む、地山ブロック(Ⅴ層)下層に斑状に堆積
Ⅴ	10YR6/4 にぶい褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック 斑状に含む
Ⅵ	10YR5/2 灰黄褐色 10YR2/3 黒褐色	粘土	互層状堆積　酸化鉄ブロック 斑状に含む
Ⅶa	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒 少量
Ⅶd	10YR6/1 褐灰色 10YR3/2 黒褐色	粘土	互層状堆積
Ⅶe	10YR2/1 黒色	粘土	酸化鉄粒 少量
Ⅶf	10YR3/3 暗褐色	粘土	酸化鉄粒 少量
Ⅶg	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	下層との境不明瞭
Ⅷ	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂	酸化鉄粒 斑状に多量に含む
Ⅸ	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	炭化粒 少量
Ⅹ	10YR1/2 黒色	粘土	グライ化　下層との境に地山ブロック 斑状に含む
Ⅺ	2.5Y4/2 暗灰黄色	砂質シルト	酸化鉄粒 少量
Ⅻ	10YR5/6 黄褐色	砂	ほぼ均質

SD1(C-C')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に含む
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	地山ブロック 斑状に多量に含む
3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	ほぼ均質
4	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	地山ブロック(Ⅴ層)主体
5	10YR4/4 褐色	粘質シルト	炭化粒 少量
6	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘質シルト	酸化鉄粒 少量
7	10YR4/1 褐灰色	粘質シルト	酸化鉄粒 斑状に多量に含む
8	10YR4/3 暗褐色	粘質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む
9	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む
10	10YR3/3 暗褐色	粘土	酸化鉄粒 斑状に含む
11	10YR2/1 黒色	粘土	円礫 斑状に含む
12	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック 斑状に含む
13	10YR2/2 黒褐色	粘土	酸化鉄ブロック 斑状に含む　炭化粒 少量
14	10YR3/1 黒褐色 10YR4/1 褐灰色	粘土	互層状堆積　酸化鉄ブロック 斑状に含む
15	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	地上粒子 斑状に多量に含む　酸化鉄粒 斑状に含む
16	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	地山ブロック 斑状に多量に含む　酸化鉄ブロック 斑状に含む
17	10YR2/1 黒色 10YR3/3 暗褐色	粘土	互層状堆積　酸化鉄粒 少量
18	10YR3/1 黒褐色	粘土	地山ブロック 少量　酸化鉄粒 少量
19	10YR3/3 暗褐色	粘土	地山(砂)ブロック 少量　酸化鉄粒 少量
20	10YR4/4 褐色	砂	地山(砂)ブロック主体　黒褐色粘土ブロック 少量

SD1(D-D')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	–	粘土質シルト	風倒木痕
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	ほぼ均質
3	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	地山ブロック 斑状に多量に含む
4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒 斑状に含む
5	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に多量に含む
6	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 少量
7	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄粒 少量
8	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む
9	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	地山ブロック 少量
10	風倒木痕		地山ブロック 主体
11	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒 少量
12	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に多量に含む、炭化粒 少量
13	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	風倒木痕の一部
14	10YR2/1 黒色 10YR4/2 灰黄褐色	粘土	互層状堆積
15	–	粘土質シルト	風倒木痕
16	10YR3/2 黒褐色	粘土	地山ブロック 少量
17	10YR3/2 黒褐色	粘土	地山ブロック 斑状に多量に含む　円礫、炭化粒 少量
18	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒 少量
19	10YR2/1 黒色	粘土	地山ブロック 斑状に含む、炭化粒 少量
20	10YR3/3 暗褐色	シルト	ほぼ均質
21	10YR2/2 黒褐色	粘土	地山ブロック 少量
22	10YR5/2 灰黄褐色	砂	酸化鉄粒　下層との境に堆積
23	10YR3/2 黒褐色	粘土	地山ブロック、酸化鉄ブロック 少量

SD2(E-E')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に多量に含む　酸化鉄ブロック 下層との境に堆積
2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に含む 酸化鉄ブロック 斑状に含み下層との境に堆積
3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄ブロック、炭化粒 少量
4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒 斑状に含む

噴砂痕(D-D')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/2 黒褐色	砂	噴砂痕　Ⅻ層から貫入
2	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	噴砂痕　Ⅻ層から貫入

SD1(H-H')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	地山ブロック 少量　酸化鉄粒 部分的に斑状に含む
2	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	地山ブロック 斑状に含む　酸化鉄粒 斑状に含む
3	10YR4/4 褐色	粘土	ほぼ均質
4	10YR4/4 褐色	粘土	地山ブロック 斑状に含む　酸化鉄粒 下層に堆積
5	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土	ラミナ状堆積　炭化物 少量
6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に多量に含む
7	10YR3/3 暗褐色	粘土	地山ブロック 斑状に含む
8	10YR3/3 暗褐色	粘土	地山ブロック 斑状に含む　酸化鉄粒 少量　風倒木痕?
9	10YR4/4 褐色	砂質シルト	炭化粒 少量　グライ化
10	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック主体　黒褐色粘土ブロック 斑状に含む　風倒木痕?
11	10YR2/3 黒褐色	粘土	地山ブロック 斑状に含む　炭化物 少量
12	10YR3/3 暗褐色	粘土	地山ブロック主体　黒褐色粘土ブロック 筋状に混入　グライ化
13	10YR3/2 黒褐色	シルト質粘土	地山ブロック 少量　酸化鉄粒 部分的に斑状に含む
14	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	地山ブロック 斑状に含む　酸化鉄粒 斑状に含む
15	10YR3/1 黒褐色	粘土	ほぼ均質
16	10Y3/2 オリーブ黒色 2.5Y2/1 黒色	粘土	互層状堆積　炭化物 少量
17	10YR3/1 黒褐色	粘土	地山ブロック 斑状に含む
18	10YR3/2 黒褐色	粘土	地山ブロック 斑状に含む　酸化鉄粒 少量　風倒木痕?
19	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック主体　黒褐色粘土ブロック 斑状に含む　風倒木痕?
20	10YR3/1 黒褐色	粘土	地山ブロック 斑状に含む　炭化物 少量
21	2.5Y4/1 黄灰色	粘土	地山ブロック主体　黒褐色粘土ブロック 筋状に混入　グライ化
22	2.5Y2/1 黒色	砂質シルト	炭化粒 少量　グライ化
23	10YR3/2 黒褐色	粘土	地山ブロック 斑状に含む　酸化鉄粒 下層に堆積

SD2(H-H')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒 少量
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に多量に含む　酸化鉄ブロック 下層との境に堆積
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に含む　酸化鉄ブロック 斑状に含み下層との境に堆積
4	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄ブロック、炭化粒 少量
5	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒 斑状に含む

SD3(B-B')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む　円礫 少量
2	10YR6/3 にぶい黄橙色	砂質シルト	炭化物 少量
3	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	炭化物 少量　酸化鉄粒 を含む
4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む
5	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒 を含む
6	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む　炭化粒 少量
7	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	炭化粒 少量
8	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	炭化粒、酸化鉄粒 少量
9	10YR2/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒 少量

SD3(H-H')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に多量に含む
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に含む、炭化物 少量
3	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に多量に含む
4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック、酸化鉄粒 斑状に多量に含む 炭化物 少量
5	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック 斑状に多量に含む 酸化鉄ブロック 下層との境に堆積
6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック、酸化鉄粒 斑状に含む
7	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒、にぶい黄橙色粘土ブロック 斑状に含む
8	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒 少量
9	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック 下層との境に堆積

SD4(F-F')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化粒 少量、下層との境に砂が堆積
2	10YR3/3 暗褐色	粘土	酸化鉄ブロック 少量
3	10YR3/4 暗褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック 斑状に含む
4	10YR3/2 黒褐色 10YR4/1 褐灰色	粘土	互層状堆積
5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄橙色粘土ブロック 斑状に含む
6	10YR4/1 褐灰色	粘土	5Y 5/1 灰色砂質シルトブロック 斑状に含む
7	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	にぶい黄橙色粘土ブロック 少量

SD8(H-H')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒 少量
3	10YR5/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む

SD12(H-H')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック(Ⅲ層)下層との境に斑状に堆積

SD14(B-B')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む

P35(H-H')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック(Ⅲ層)斑状に含む　炭化粒 少量

SD17(B-B')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	礫、炭化粒 少量
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む　円礫 少量
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 斑状に含む
4	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄粒 少量
5	10YR4/4 褐色	粘土	地山ブロック主体　酸化鉄粒 少量
6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒、炭化粒 斑状に含む
7	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック 斑状に含む　炭化粒 少量

SD17(H-H')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒 少量
2	10YR4/4 褐色	砂層	地山(Ⅲ層)由来の砂主体
3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒 少量
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化粒 少量
5	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	地山ブロック 砂斑状に含む
6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒 少量
7	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄 斑状に含む
8	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	地山ブロック 砂、酸化鉄粒 斑状に含む
9	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	地山ブロック(Ⅲ層)主体
10	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック 少量
11	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒 少量

SM8(G-G')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	地山ブロック(Ⅴ層)下層に斑状に堆積

SM10(E-E')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	灰白色火山灰ブロック 斑状に含む

SK5(C-C')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化粒 少量
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	Ⅲ層ブロック 下層に少量
3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	Ⅲ層ブロック主体

SK7(G-G')

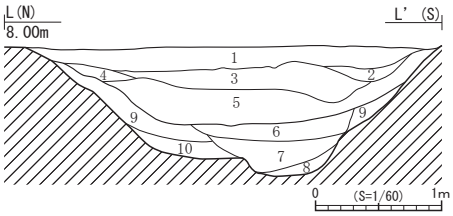
層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック(Ⅲ層)、酸化鉄ブロック 斑状に多量に含む

P55(B-B')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒 少量

第 41 図　SD1 堀跡平面図（東・西区）、調査区土層断面図

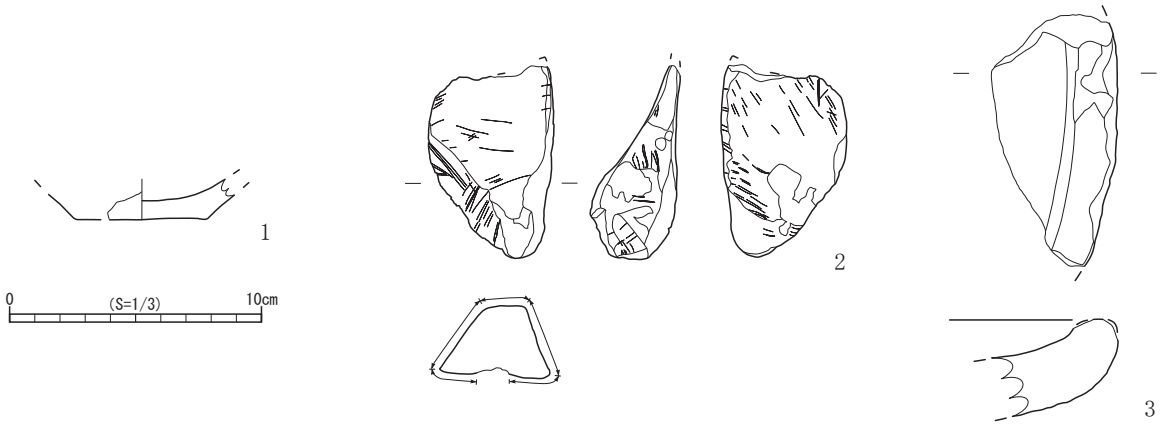
遺物は土師器、土師質土器、石臼（茶臼・下臼部分）などが出土している。



SD3（L-L'）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック、地山ブロック斑状に含む
2	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄ブロック少量
3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に含む　酸化鉄粒少量
4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	ほぼ均質
5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に含む　酸化鉄ブロック斑状に含む
6	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック少量
7	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒斑状に含む
8	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄ブロック少量
9	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒少量
10	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック、地山ブロック下層境に堆積

第 42 図　SD3 土層断面図



図版番号	登録番号	出土区	遺構層	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	X-1			土師質土器	小皿	—	(1.6)	(5.2)	磨滅	磨滅	ロクロ　底面磨滅　中世	21-6

図版番号	登録番号	出土区	遺構層	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	重さ（g）	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	直径（cm）	上縁幅（cm）	特徴・備考	写真図版
2	K-14	ベルト		石製品	砥石	—	—	100	7.6	5.0	3.4	—	—	磨面４面　自然面に溝あり（刃つぶし用か）	21-16
3	K-13			石製品	茶臼（下臼）	(3.8)	—	120	—	—	—	—	(1.4)	受皿部破片	21-15

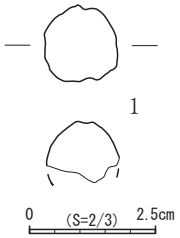
図版番号	登録番号	出土区	遺構層	種別	器種	重さ（g）	特徴・備考	写真図版	図版番号	登録番号	出土区	遺構層	種別	器種	重さ（g）	特徴・備考	写真図版
写真のみ	N-8	10 区		鉄滓	鉄滓	102.2		21-4	写真のみ	N-9	10 区		鉄滓	流状滓	111.1		21-5

第 43 図　SD3 土層断面図・出土遺物

SD4 堀跡

本発掘調査の南区で検出された。他の遺構との重複はない。方位はE-10°-Nの東西方向で、検出長は6.0ｍ、横幅は5.5ｍで、調査区外にさらに延びる。遺構検出面から底面までの深さは約1.2ｍで、断面形状は逆台形を呈する。南区は基本層の上面が削平され、基本層Ⅲ・Ⅳ層が残存していないためⅤ層上面で検出されている。堆積土は7層に細分される。いずれも自然堆積で、底面付近の4層は互層状堆積であることから水掘として機能していたものと考えられる。堆積土の上面の窪みには基本層第Ⅱ層が堆積しているが、地山ブロックが多量に混入している第Ⅱｂ層は、人為堆積層であると考えられる。底面はほぼ平坦だが、高低差約10cmの段が3ヶ所設けられている。東側から西に向かって傾斜しているが、西端部の中央部のみ一段高まっている。

遺物は鉄製品のほか土師器片、須恵器の甕の破片などが出土している。

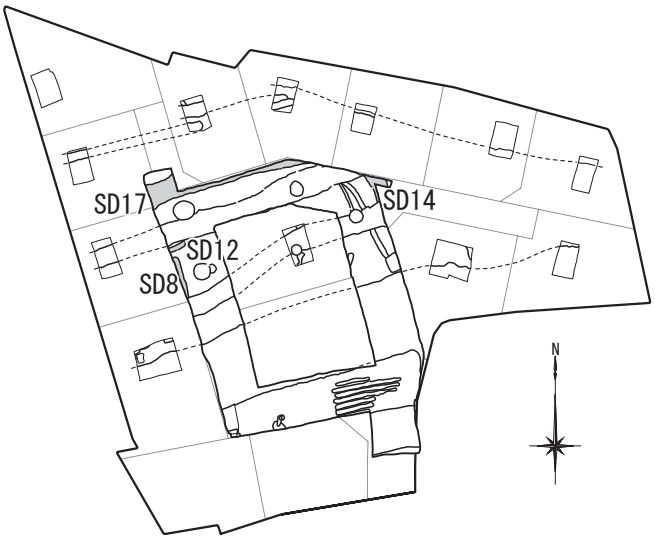


図版番号	登録番号	種別	器種	長さ（cm）	直径（cm）	特徴・備考	写真図版
1	N-5	金属製品	球状鉄製品	(1.2)	1.4	火箸の頭部か？　棒状の破片が付着	21-7

第 44 図　SD4 堀跡出土遺物

SD8 溝跡

本発掘調査の西区で検出された。SD2 溝跡、P35 と重複し、P35 よりも古く、SD2 溝跡よりも古いか、ほぼ同時期であると考えられる。方位はN -15° －Wの南北方向で、検出長は 5.7 m、幅は西側が調査区外にさらに広がるため不明である。検出面から底面までの深さは 30cm で断面形状はやや開いた U 字形を呈する。堆積土層は 3 層に細分され、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。



第 45 図　SD8・12・14・17 溝跡位置図

SD12 溝跡

本発掘調査の西区で検出された。P21・22 と重複し、これらよりも古い。方位は E-25° -N の東西方向で、検出長は 2.2 m、幅 60cm である。検出面から底面までの深さは 30cm で断面形状はやや開いた V 字形を呈する。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

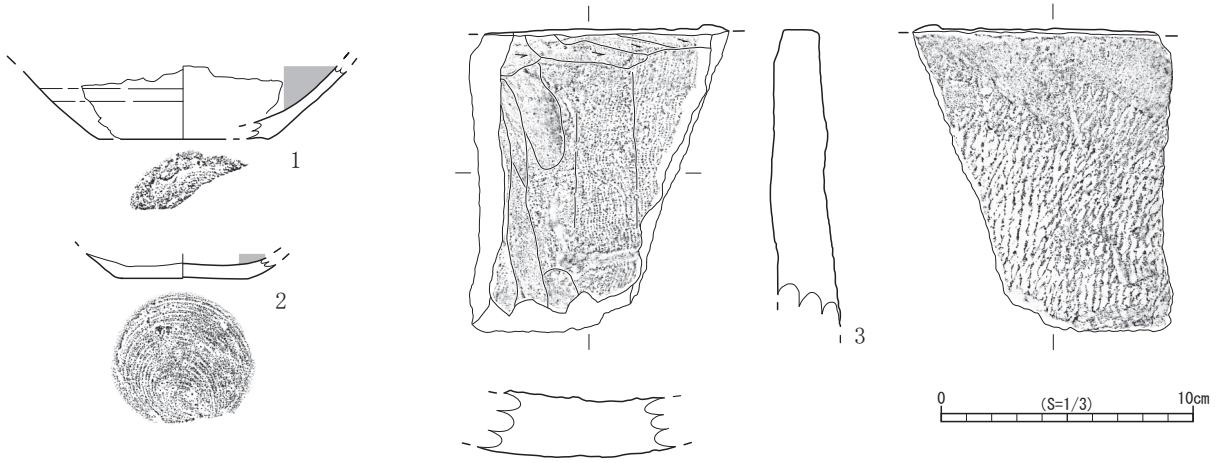
SD14 溝跡

本発掘調査の東区から北区で検出された。SD2・3 溝跡と重複し、これらよりも古いか、ほぼ同時期であると考えられる。方位は N-28° -W の南北方向で、検出長は 3.7 m、幅は 2.5 mで、調査区外にさらに延びる。検出面から底面までの深さは 20cm で、断面形状は浅い皿形を呈する。堆積土層は 3 層に細分され、いずれも自然堆積である。遺物は土師質土器の底部片などが出土している。

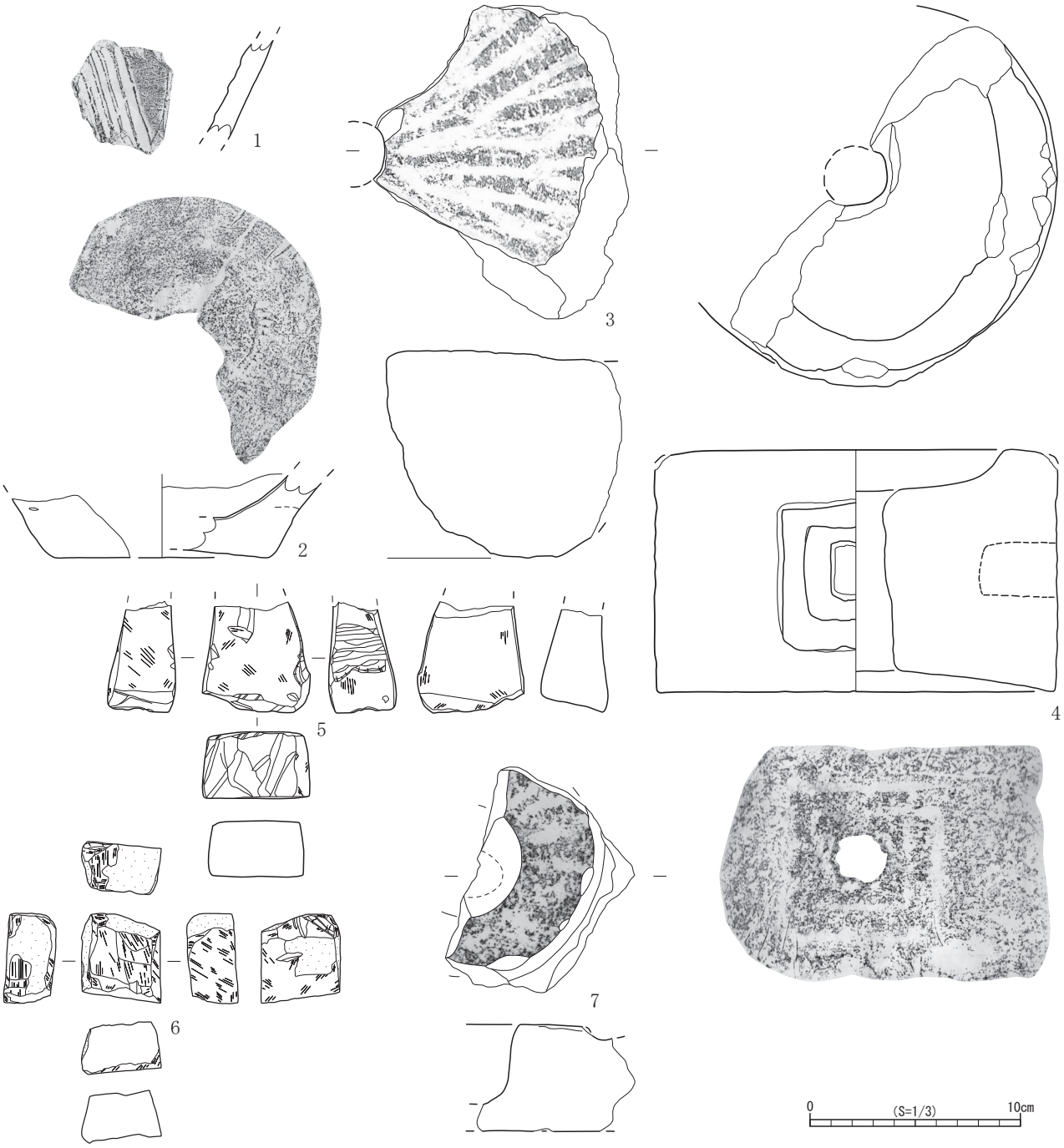
SD17 溝跡

本発掘調査の北区で検出された。P36・37 と重複し、これらよりも古い。方位は E-17° -N の東西方向で、検出長は 20 m、幅は 3.5 mで、調査区外にさらに延びる。検出面から底面までの深さは 90 cmで、３時期にわたって掘り直されており、断面形状はやや開いた V 字形を呈する。

遺物は内面黒色処理された土師器の坏、須恵器、桶巻造りの平瓦、瓦質土器の擂鉢、天目茶碗の破片、磁器の青花碗の破片、砥石、石臼等の石製品が出土している。



第 46 図　SD17 溝跡出土遺物（1）



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
46-1	D-1		ロクロ土師器	坏	—	(2.9)	(6.8)	ロクロナデ，磨滅	黒色処理，磨滅	底部回転糸切　骨針多し	21-8
46-2	D-2		ロクロ土師器	坏	—	(1.0)	(5.2)	ロクロナデ	ミガキ，黒色処理	底部回転糸切り	21-9
46-3	F-1		瓦	平瓦	—	—	—	凸面　縄目痕　ヘラナデ	凹面　布目痕　模骨痕 指ナデ→ヘラケズリ	スス付着	21-10
47-1	I-25		瓦質土器	擂鉢	—	(4.7)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	擂目６条以上　焼成良好焼き締まっている　(陶器に近い)　在地、16c 代	21-13
47-2	I-24		瓦質土器	擂鉢	—	(4.0)	10.0	剥落　磨滅	剥落　磨滅	外面輪積痕　擂目 4or5 単位 在地、16c 代	21-11
写真のみ	I-15		陶器	天目茶碗？	—	—	—	鉄釉	鉄釉	漆継　古瀬戸　15c ？	21-12
	J-5		磁器	青花碗	—	—	—	人物、草文？		明末　16c 後半～	21-14

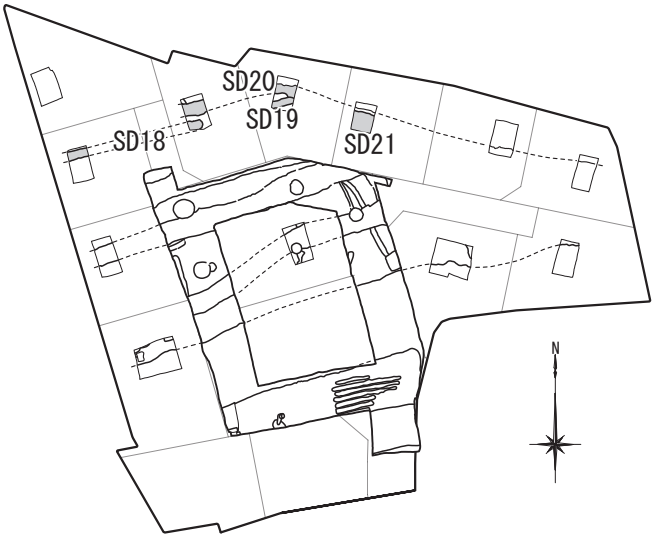
図版番号	登録番号	出土区	遺構層	種別	器種	直径(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	幅(cm)	上縁幅(cm)	重さ(g)	芯棒孔口(cm)	芯棒深さ(cm)	芯棒孔直径(cm)	特徴・備考	写真図版
47-3	K-2			石製品	粉引き臼(下臼)	—	(9.8)	—	—	—	1890	—	—	—	側面剥離 分画溝（2 区画分）あり	21-22
47-4	K-1		2 層	石製品	茶臼(上臼)	19.1	11.5	—	—	2.3	2950	2.8	3.7	(2.3)		21-23
47-5	K-3			石製品	砥石	—	(5.3)	3.2	(5.1)	—	120	—	—	—	表面に錆付着（欠損）	21-17
47-6	K-16	拡張区		石製品	砥石	—	3.9	2.3	3.7	—	54.1	—	—	—	折れた面も使用　6 面使用	21-20
47-7	K-15			石製品	茶臼(下臼)	—	(5.1)	—	—	—	500	—	—	—	放射状の溝あり（分画溝？）くぼみあり（貫通していない芯棒孔か）	21-21

第 47 図　SD17 溝跡出土遺物（2）

SD18 溝跡

宅地造成範囲の北側、追加調査７区と９区で検出された。７区内に溝の東端が検出されている。方位はE-14°-Nの東西方向で、検出された遺構の全長は18.８m、幅は1.１mで、さらに調査区の西に延びる。事業との兼ね合いから掘削は堆積土の一部掘り下げにのみにとどめており、深さは不明である。

遺物は９区の溝の東端部分で堆積土の最上層から瓦質土器の擂鉢、円礫が出土している。検出された位置から、６区で検出されたSD19溝跡と連続する溝跡の可能性がある。



第48図　SD18～21溝跡位置図

SD19 溝跡

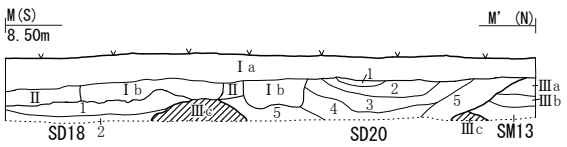
宅地造成範囲の北側、追加調査６区で検出された。方位はE-14°-Nの東西方向で、検出長は3.０m、幅は0.９mで、調査区外にさらに延びる。遺物は出土していない。検出された位置から、７・９区で検出されたSD18溝跡と連続する溝跡の可能性がある。

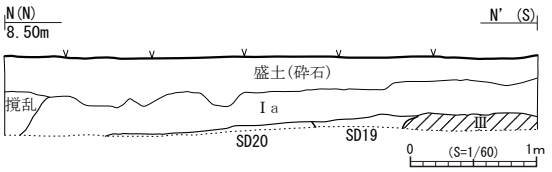
SD20 溝跡

宅地造成範囲の北側、追加調査区6･7区で検出された。方位はE-14°-Nの東西方向で、検出長は15.５m、幅は1.９mで、調査区外にさらに延びる。６区の北側で自然地形を埋め戻した際の盛土によって切られている。遺物は出土していない。５区で検出されたSD21溝跡と同一の溝跡である可能性がある。

SD21 溝跡

宅地造成範囲の北側、追加調査５区で検出された。方位はE-16°-Sの東西方向で、検出長は2.７m、幅は2.５mで、調査区外にさらに延びる。遺物は出土していない。検出された位置から本発掘調査で検出されたSD17溝跡、もしくは６区で検出されたSD20溝跡と同一の溝跡である可能性がある。





SD18(M-M')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒、下層との境に堆積
2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック少量

SM13(M-M')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰白色粘土ブロック斑状に含む

SD20(M-M')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	ほぼ均質
2	10YR8/2 灰白色	シルト	灰白色シルトブロック（火山灰？）主体
3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に含む、炭化粒少量
4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に含む
5	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量

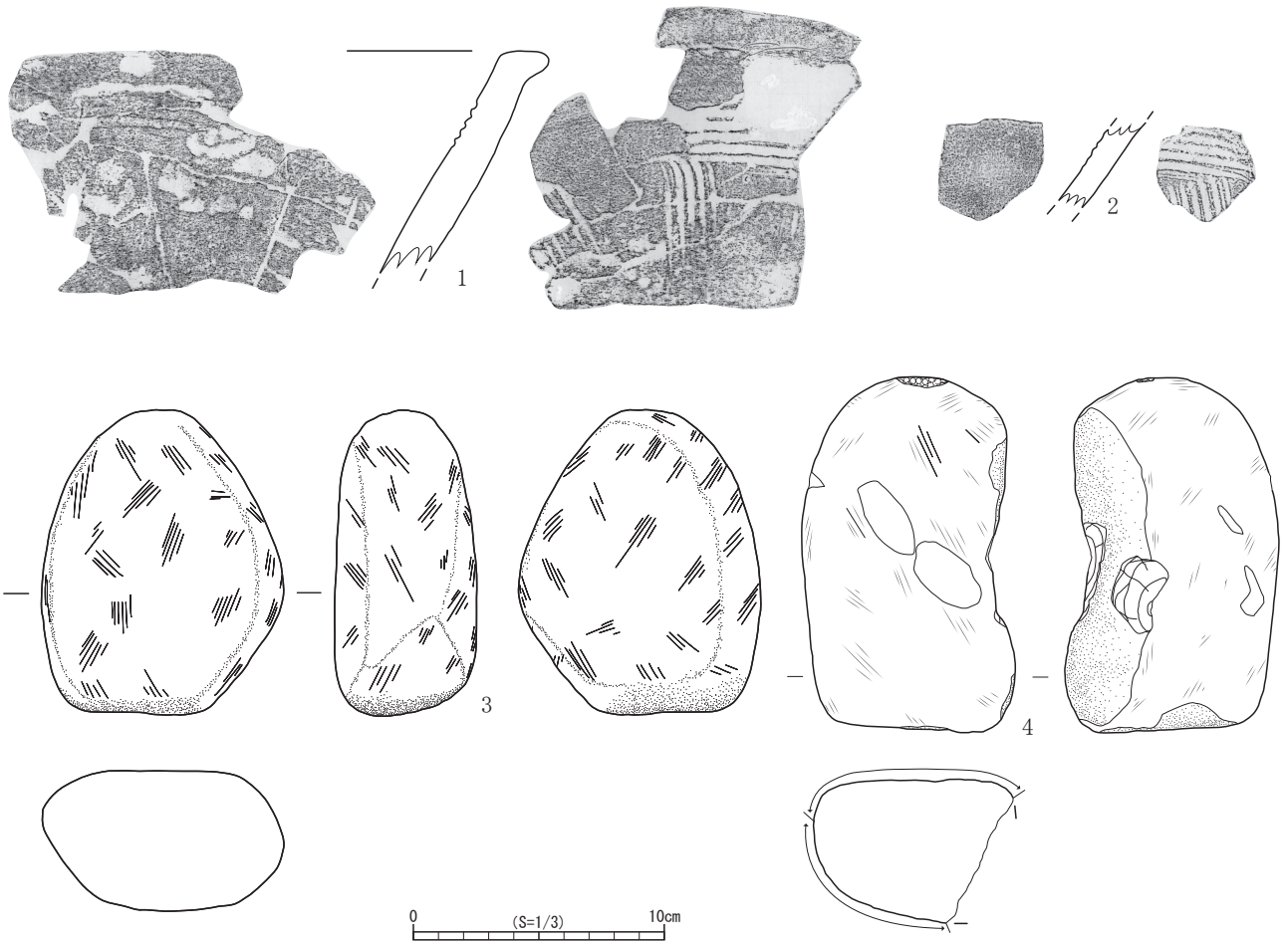
SD19(N-N')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	灰黄褐色粘土ブロック斑状に含む、炭化粒少量

SD20(N-N')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅲ層）少量

第49図　６区東壁・７区西壁土層断面（SD18～20溝跡・SM13）



図版番号	登録番号	出土区	遺構層	種別	器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	I-26	9区	1層	瓦質土器	擂鉢	(26.0)	(8.9)	—	口縁部ヨコナデ　ヘラナデ	口縁部ヨコナデ　使用による磨滅	縦横擂目5条　骨針　16c?	22-1
2	I-27	9区	上層	瓦質土器	擂鉢	—	(3.4)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	縦横摺目6条？16c	22-2

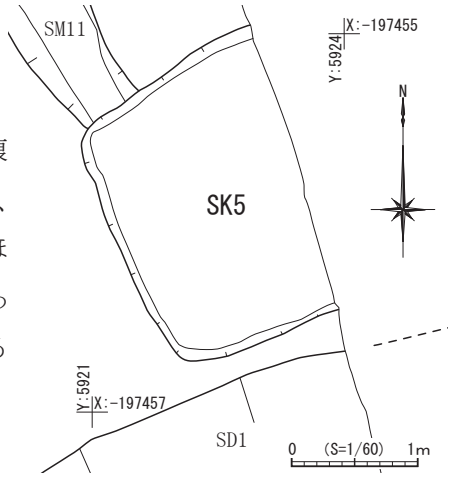
図版番号	登録番号	出土区	遺構層	種別	器種	直径（cm）	長（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	特徴・備考	写真図版
3	K-11		1層	礫石器	磨石＋敲石	—	14.2	(8.6)	(5.8)	750	全体に磨痕上部に敲打痕　下部に自然面欠損　ガジリ	22-4
4	K-12		1層	礫石器	磨石＋敲石	19.1	12.2	9.7	5.7	950	全体に磨痕上部に敲打痕　下部に自然面	22-3

第50図　SD18溝跡出土遺物

(2) 土坑・井戸跡

SK5土坑

本発掘調査東区、SD1堀跡の北側で検出された。SM11小溝状遺構と重複し、これよりも新しい。平面形は方形を呈し、規模は一辺1.5～2.4mで、調査区外にさらに広がる。検出面から底面までの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は3層に細分される。1・2層は自然堆積であると考えられる。遺構の形状から方形竪穴遺構で、3層上面が床面である可能性がある。遺物は出土していない。



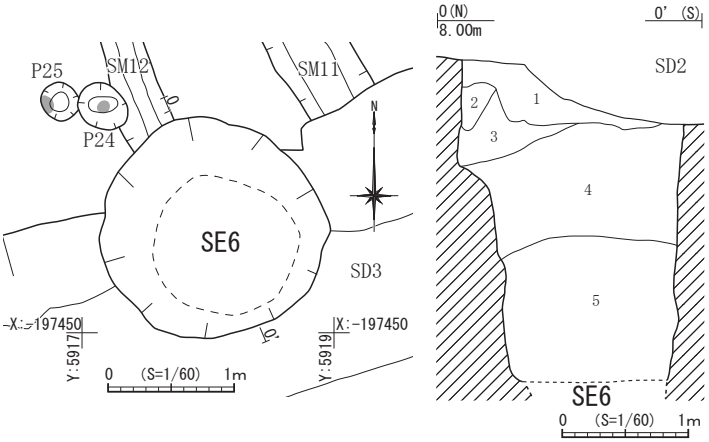
第51図　SK5土坑平面図

SE6井戸跡

本発掘調査東区で検出された。SD2溝跡、SM12小溝状遺構と重複し、これよりも新しい。平面形は円形を呈する。直径1.8mで、遺構検出面から2.6mの深さまで掘削したが、安全性を考慮しそれ以上の掘削を行わなかったため、底面までの深さは不明である。

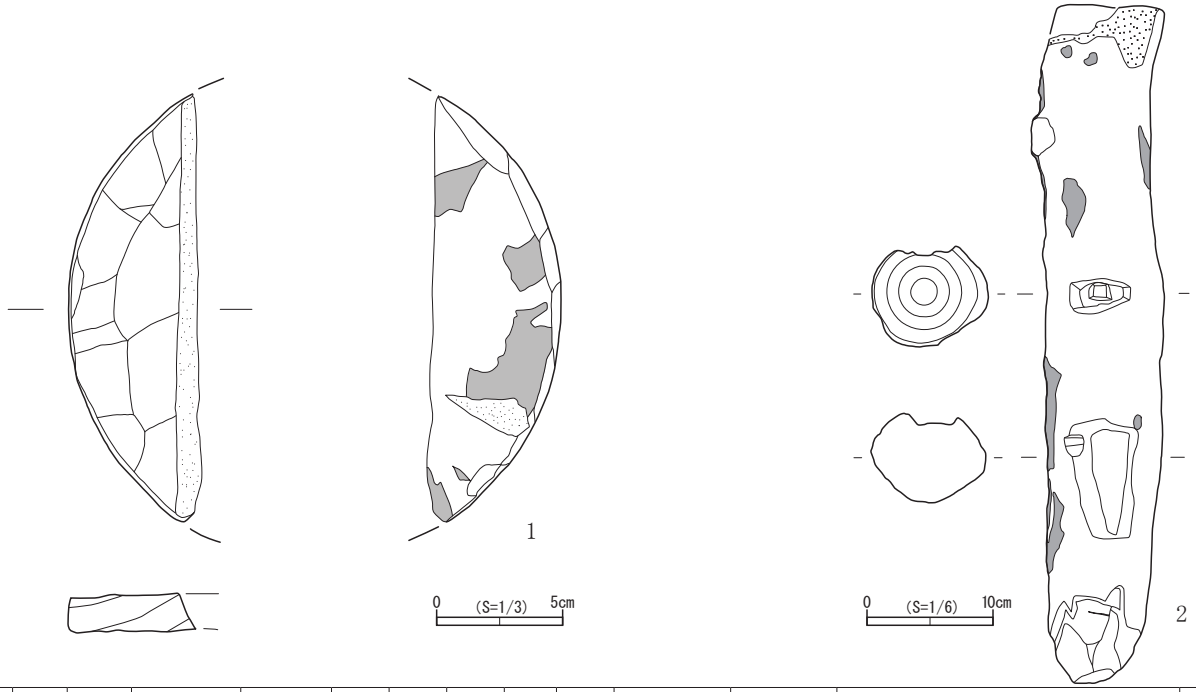
堆積土は5層に細分される。大部分は人為堆積であり、廃絶後に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は木製品（桶の底材）や樹皮の残る丸材に加工して凹みをつけた木材などが出土している。



層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒少量　炭化粒少量
2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅲ層）主体
3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に含む 人為堆積
4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	地山ブロック斑状に多量に含む 人為堆積
5	10YR3/1 黒褐色	粘土	地山ブロック少量　炭化物少量 グライ化

第 52 図　SE6 井戸跡　平・断面図



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	木取	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	直径(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	L-1	5 層	木製品	桶の底板？	板目？	(16.8)	(5.1)	1.5	(20.0)		黒く変色	防腐効果の為に塗った柿渋の可能性あり （表面は全体的に残っている）針帯樹	22-5
2	L-4		木製品	丸太材	—	52.7	9.4	7.4	—	—		芯持ち丸太材　抉りの加工２ヶ所　樹皮残る　ヌルデ	22-6

図版番号	登録番号	遺構層	種別	写真図版	特徴・備考
写真のみ	L-5		木製品	22-7	ヌルデ
写真のみ	L-6		木製品	22-8	ヌルデ

図版番号	登録番号	遺構層	種別	特徴・備考	写真図版
写真のみ	L-7		木製品	ヤナギ属	22-9

第 53 図　SE6 井戸跡出土遺物

SE9 井戸跡・SK16 土坑

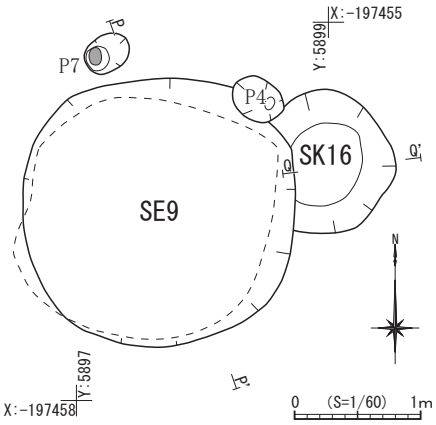
本発掘調査の西区で検出された。P4 と重複し、これよりも古く、SK16 土坑が SE9 井戸跡よりも古い。平面形はどちらも円形を呈する。SE9 井戸跡の規模はが直径 2.1 ～ 2.4 mである。検出面から 1.5 mの深さまで掘削したが、安全性を考慮しそれ以上の掘削は行わなかったため、底面までの深さは不明である。堆積土は 7 層に細分され、下層ほど地山ブロックを多く含む人為堆積で廃絶後に埋め戻されたものと考えられる。

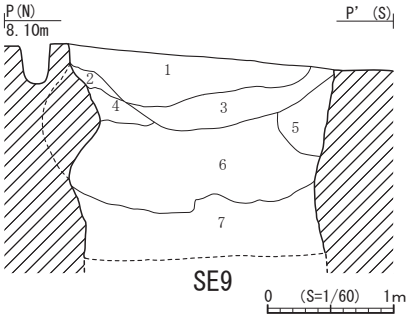
SK16 土坑の規模は直径 1.1 mで遺構検出面からの深さは 35cm である。堆積土は 3 層に細分される。

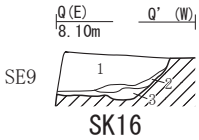
遺物は SE9 井戸跡から瓦質土器の擂鉢や在地産陶器の甕の底部、石皿などの石製品が出土している。

SE13 井戸跡

本発掘調査の北区で検出された。SD3 溝跡と重複しこれよりも新しい。平面形は円形を呈し、直径 1.7 ～ 2.0 m







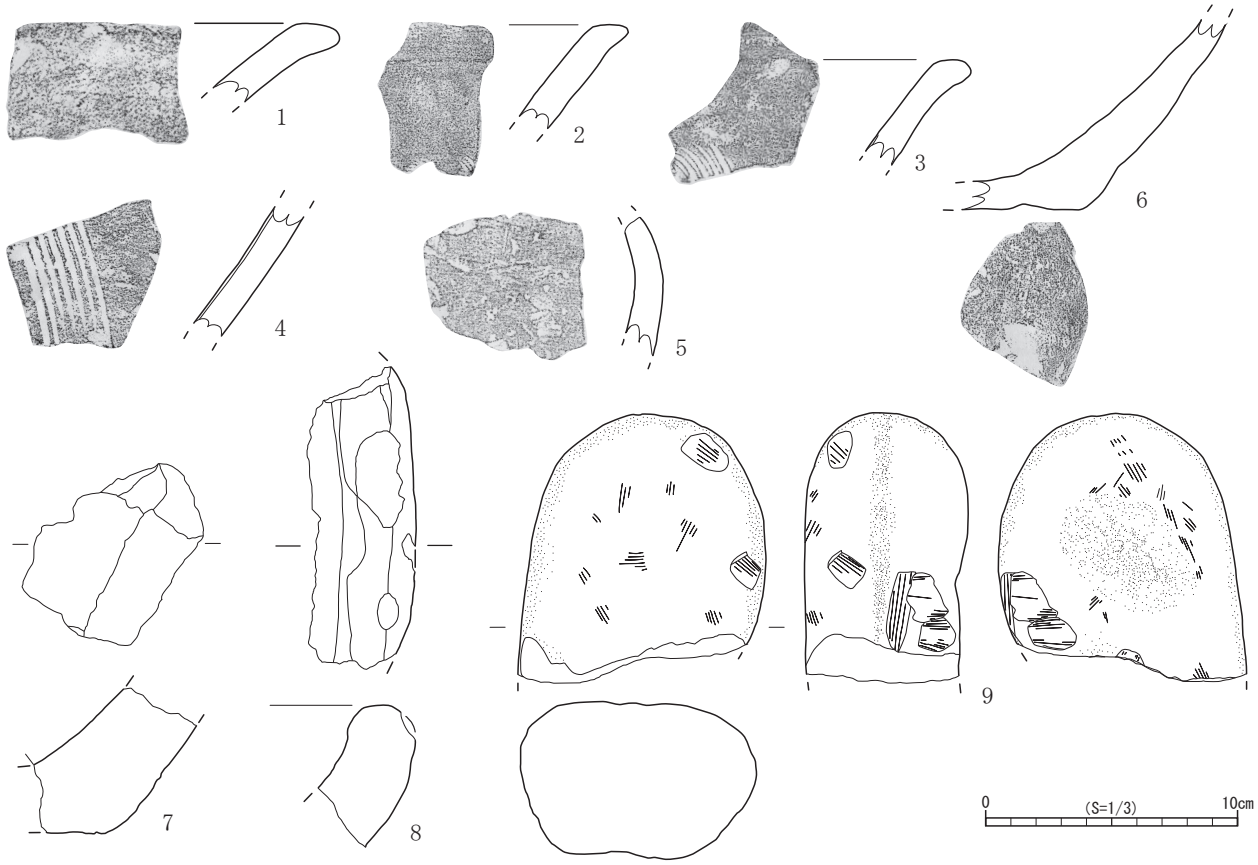
SK16（Q-Q'）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に多量に含む炭化粒少量
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック主体
3	10YR3/3 暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄粒少量

SE9（P-P'）

層位	色調	土質	備考・混入物	層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量　地山ブロック少量	5	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に多量に含む
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量	6	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	地山ブロック（斑状に多量に含む
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物やや多量　地山ブロック少量	7	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	地山ブロック主体
4	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅲ層）主体				

第 54 図　SE9 井戸跡・SK16 土坑土層断面図



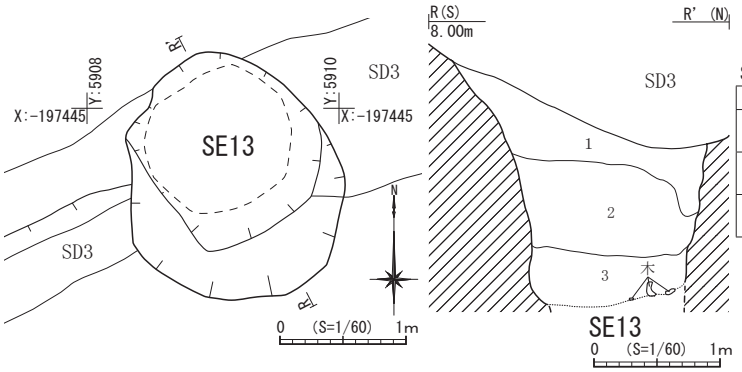
図版番号	登録番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	I-18	瓦質土器	擂鉢	—	(3.1)	—	磨滅剥離	ロクロナデ	在地、16c 代	22-10
2	I-20	瓦質土器	擂鉢	—	(4.2)	—	磨滅剥離	ロクロナデ	擂目 5 条以上　在地、16c 代	22-12
3	I-19	瓦質土器	擂鉢	—	(4.1)	—	磨滅剥離	ロクロナデ	在地、16c 代	22-11
4	I-21	瓦質土器	擂鉢	—	(5.1)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	在地　擂目 7 条　外面に磨面あり（破片を砥石に転用）　16c 代	22-15
5	I-17	陶器	小型甕 or 壺	—	(5.4)	—	ヘラナデ	ヘラナデ	在地　割れ口 2 ヶ所黒く変色　漆継ぎ？ 13c 後半～ 14c 前半	22-16
6	I-16	陶器	鉢	—	(7.6)	—	ロクロナデ 一部すっている　転用？	ロクロナデ すりへる（使用痕）	在地（白石窯？）　13c 後半～ 14c 前半	22-13

図版番号	登録番号	種別	器種	直径(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴・備考	写真図版
7	K-5	石製品	石鉢	—	(5.8)	—	—	200	内面平滑（磨面）　使用によるものか？	22-17
8	K-4	石製品	茶臼（下臼）	—	(5.6)	—	—	290	受け皿部破片	22-14
9	K-7	礫石器	磨石	—	(10.7)	9.5	6.5	530		22-19
写真のみ	K-6	石製品	凹石	—	—	—	—	40		22-18

第 55 図　SE9 井戸跡出土遺物

である。検出面から2.0ｍの深さまで掘削したが、安全性を考慮しそれ以上の掘削は行わなかったため、底面までの深さは不明である。堆積土は3層に細分され、いずれの層も地山ブロックと円礫を含むことから人為堆積層で廃絶後に埋め戻されたもと考えられる。

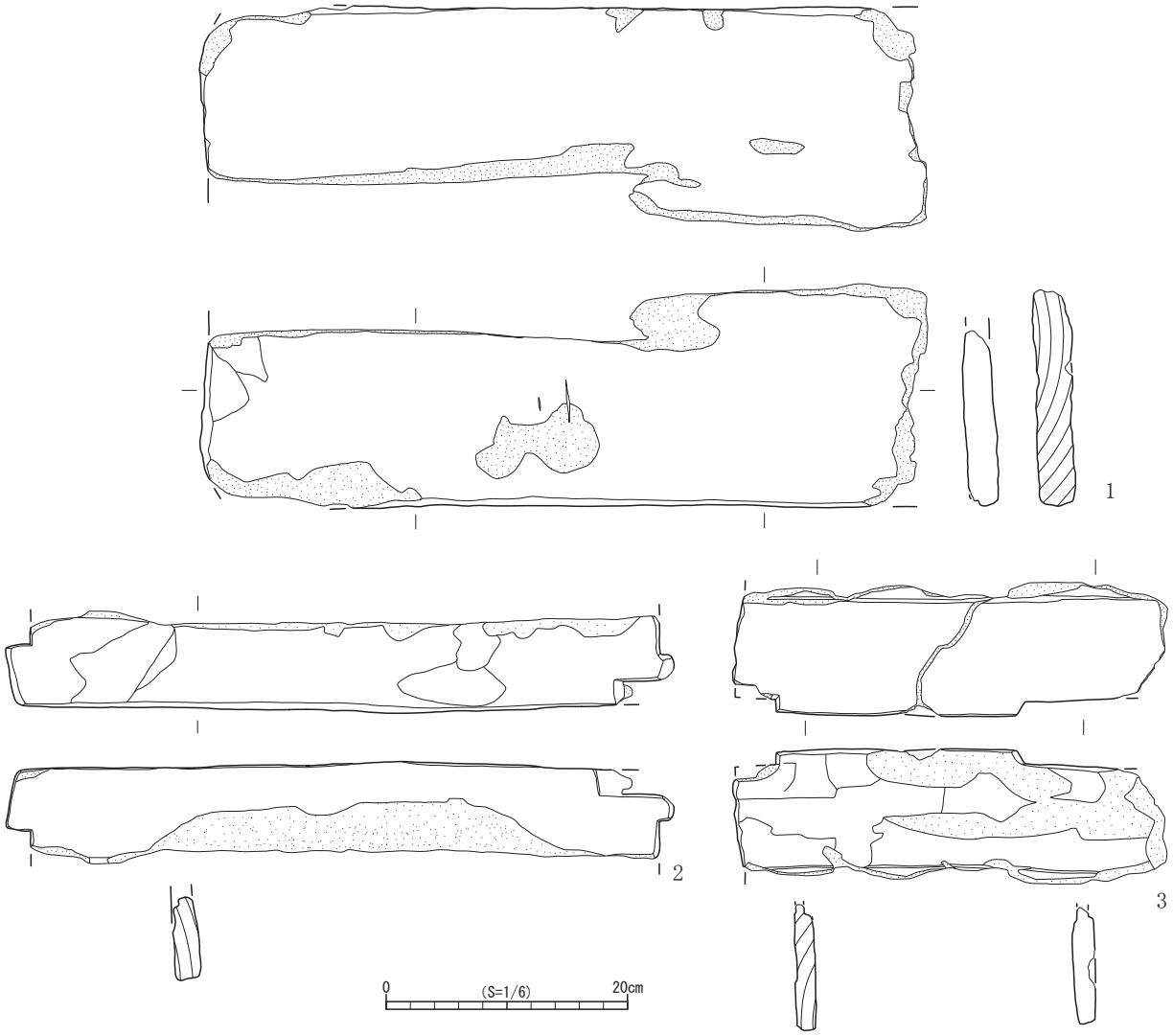
遺物は3層から板材などの木製品が多量に出土している。



SE13（R-R'）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に含む、円礫少量
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に多量に含む、円礫少量
3	10YR3/1 黒褐色	粘土	地山ブロック斑状に含む、円礫少量、木材出土

第56図　SE13井戸跡平・断面図



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	木取	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	特徴・備考	写真図版
1	L-8	3層	木製品	板材	板目	(59.4)	(18.6)	(3.3)	両面に加工痕あり　焼き加工か？　コナラ節	22-20
2	L-9	3層	木製品	板材	板目	(8.1)	55.2	2.1	両端に加工あり　コナラ節	23-1
3	L-10	3層	木製品	板材	板目	(10.8)	(35.7)	1.9	側面に加工あり　(組物容器部材？)　コナラ節	23-2

図版番号	登録番号	遺構層	種別	写真図版	特徴・備考
写真のみ	L-11	3層	木製品	23-3	ヤナギ属
	L-12	3層	木製品	23-4	モモ

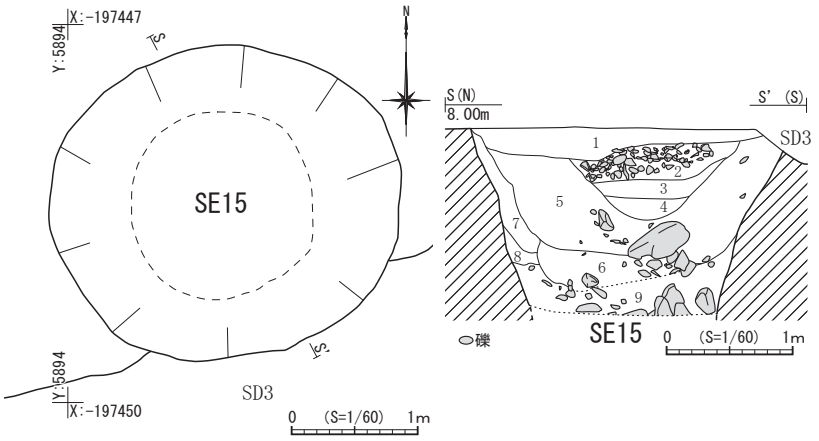
図版番号	登録番号	遺構層	種別	特徴・備考	写真図版
写真のみ	L-13	3層	木製品	ヤナギ属	23-5

第57図　SE13井戸跡出土遺物

SE15 井戸跡

本発掘調査の北区で検出された。SD3 溝跡と重複しこれよりも新しい。平面形は円形を呈する。直径 1.7 ～ 2.0 mで、遺構検出面から 1.5 mの深さまで掘削したが、安全性を考慮しそれ以上の掘削は行わなかったため、底面までの深さは不明である。堆積土は 9 層に細分され、上層と中層に大量の円礫が埋め込まれていることから、廃絶後に埋め戻されたものと考えられる。

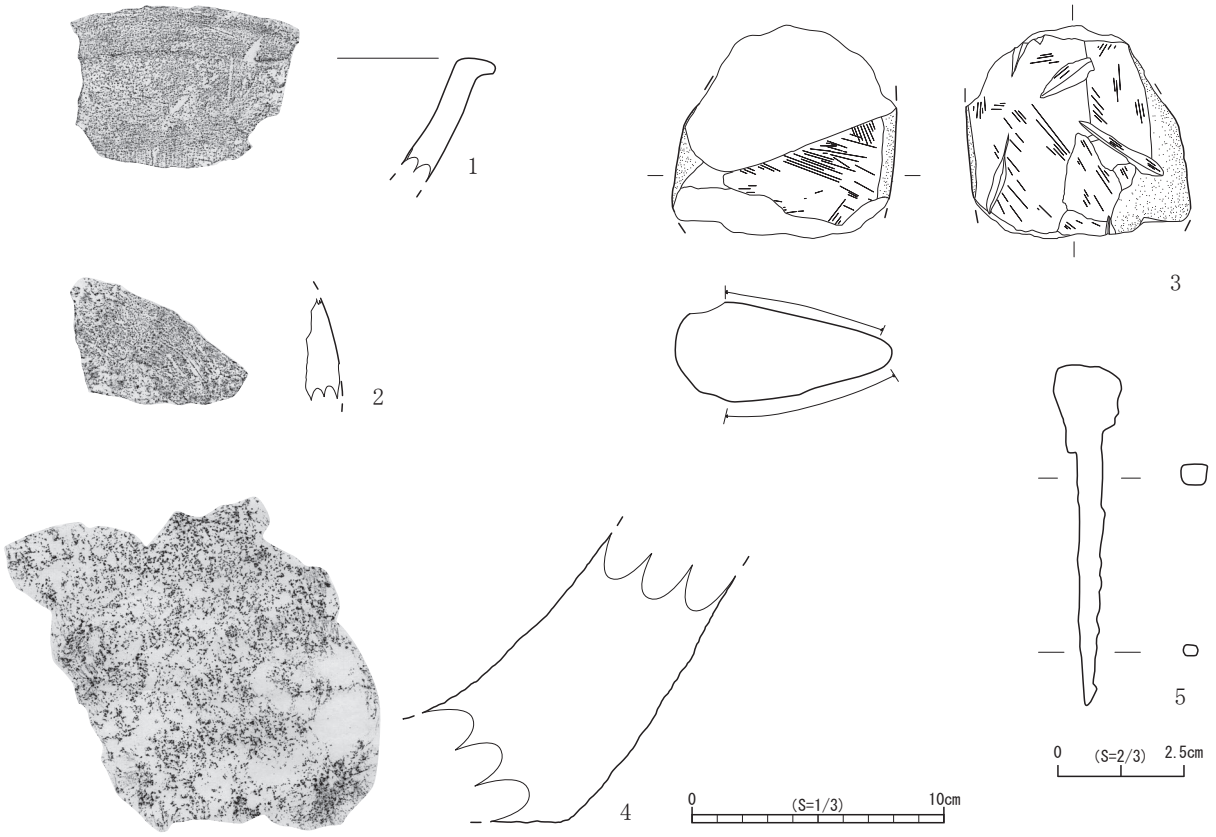
遺物は瓦質土器、釘などの鉄製品が出土している。



SE15(S-S')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量
2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	円礫多量に混入
3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅲ層）斑状に含む
4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅲ層）主体
5	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅲ層）斑状に含む、円礫混入、炭化粒少量
6	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック斑状に筋状に混入、円礫を含む
7	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅲ層）主体
8	10YR4/6 褐色	砂質シルト	地山ブロック主体、円礫少量
9	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック少量、円礫多量に混入

第 58 図　SE15 井戸跡平・断面図



図版番号	登録番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	I-23	瓦質土器	擂鉢	—	(4.9)	—	ロクロナデ　磨滅	ロクロナデ　剥落	在地？　擂目あり　骨針　16c	22-6
2	I-22	中世陶器	甕	—	(4.0)	—	ヘラナデ	剥離	在地、13c 後半～ 14c 前半	22-7

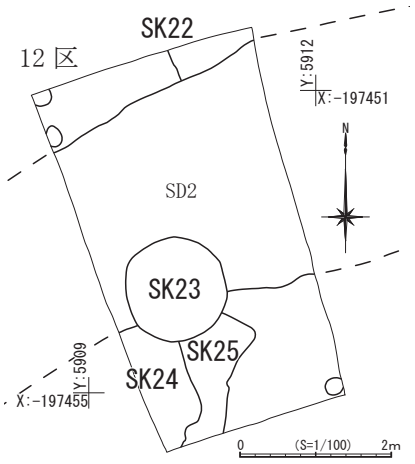
図版番号	登録番号	種別	器種	器高・長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴・備考	写真図版
3	K-8	石製品	砥石？	(8.5)	(9.0)	(3.9)	140	凝灰岩（円礫）　表面：磨痕　裏面：切削痕、磨痕　欠損品	22-8
4	K-17	石製品	石鉢	(11.5)	—	5.9	510	内面は平滑	22-11
5	N-7	鉄製品	釘	(6.7)	0.5	0.5	5.5	完形品	22-19

図版番号	登録番号	種別	器種	特徴・備考	写真図版	図版番号	登録番号	種別	器種	特徴・備考	写真図版
写真のみ	K-9	石製品	不明		22-9	写真のみ	K-10	石製品	不明		22-10

第 59 図　SE15 井戸跡出土遺物

SK22 ～ 25 土坑

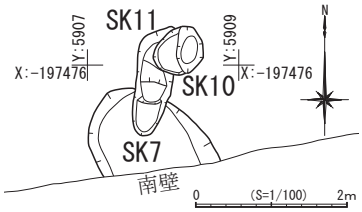
宅地造成範囲の中央部、追加調査 12 区で検出された。SD2 溝跡と重複し、SK23 は SD2 溝跡よりも新しく、SK22・24・25 土坑は古い。平面形は、SK22・24・25 土坑は方形を呈し、SK23 土坑は直径 1.4m の円形を呈する。SK23 土坑は形状から井戸跡の可能性も考えられるが、規模が 1.3 ～ 1.4 m と他の井戸跡よりも小型であり、また遺構を掘り込んでいないため、遺構の詳細な性格については不明である。いずれの遺構からも遺物は出土していない。



第 60 図　SK22 ～ 26 土坑平面図（追加調査区 12 区）

SK7・10・11 土坑

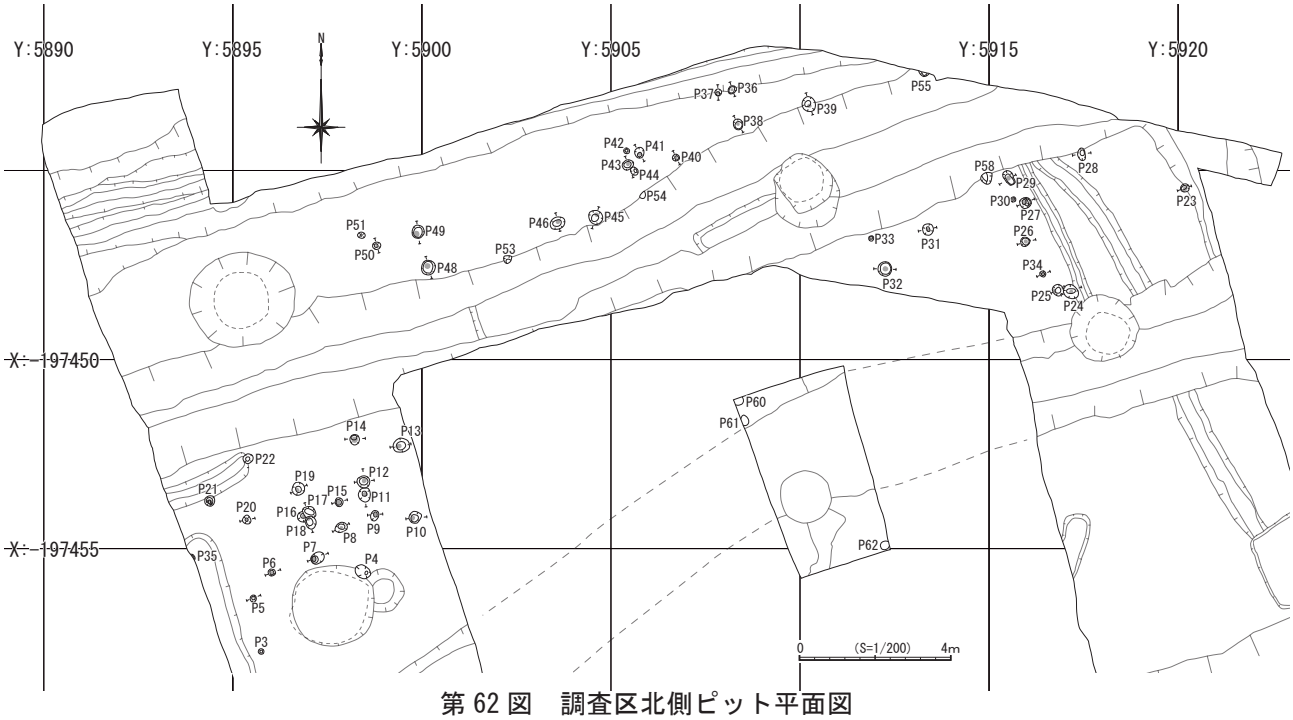
本発掘調査の南区で、基本層第Ⅴ層上面で検出された。いずれも重複しており、SK11・10・7 の順で新しい。平面形は、SK7 土坑は歪な円形を呈し、SK10 土坑は長楕円形を、SK11 土坑は楕円形を呈する。遺構の規模は SK7 土坑が直径 1.7 m で深さは 15cm、SK10 は長径が 1.4 m、短径が 50cm で深さは 15 ～ 20cm、SK11 土坑が直径 60cm で深さは 15 ～ 25cm である。堆積土はいずれも単層でⅤ層ブロックを下層との境に斑状に含んでいる、遺物は出土していない。



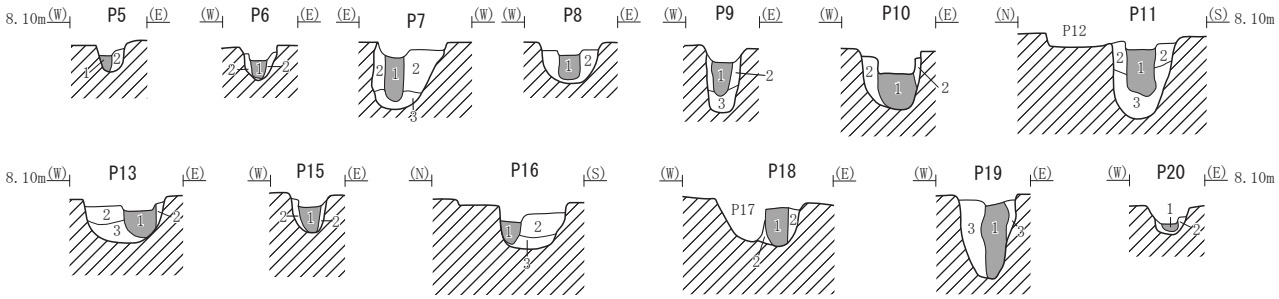
第 61 図　SK7・10・11 土坑平面図

(3) ピット

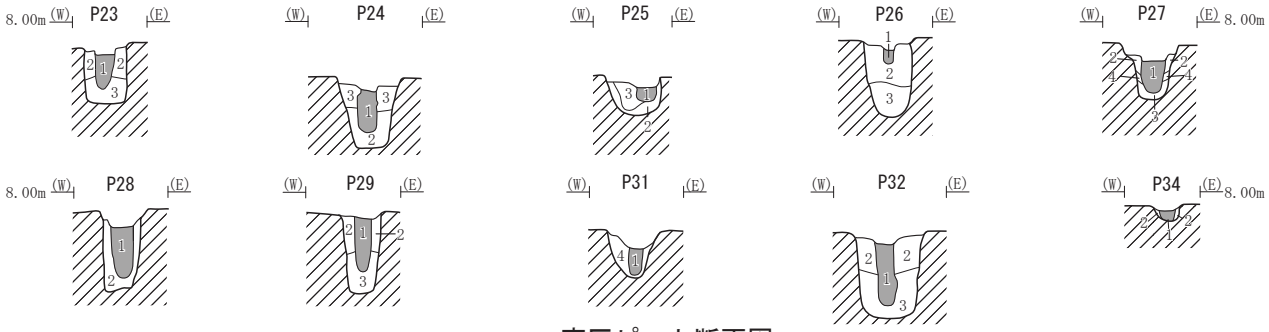
SD1 堀跡の北側を中心に調査区全体から 65 基のピットが検出された。おおむね他の遺構よりも新しい。平面形は円形を呈する。直径は 20 ～ 40cm、深さは 20 ～ 50cm を測る。ピットの大部分から直径 10 ～ 20cm の柱痕跡が検出された。SD3 溝跡に添うような形で配置しているようにも見受けられるが、建物等を構成するかは不明である。一部のピットからは土師器片や鉄滓などの遺物が出土している。



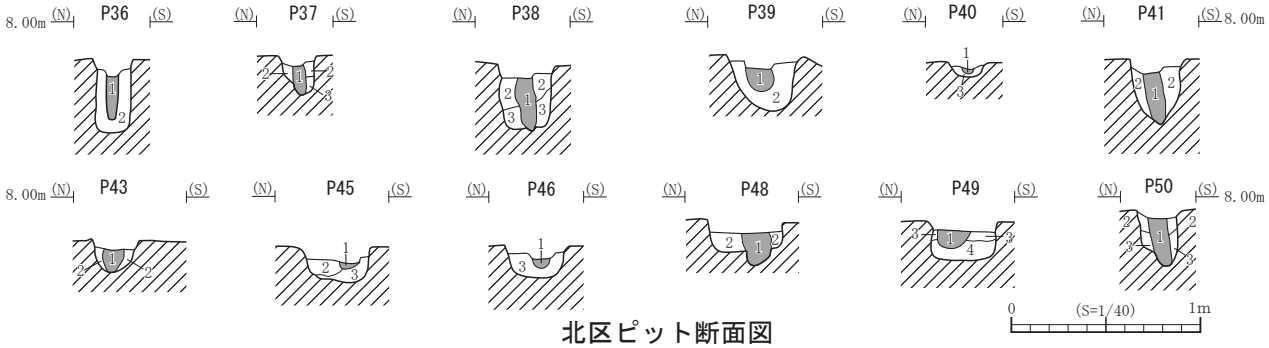
第 62 図　調査区北側ピット平面図



西区ピット断面図



東区ピット断面図



北区ピット断面図

ピット

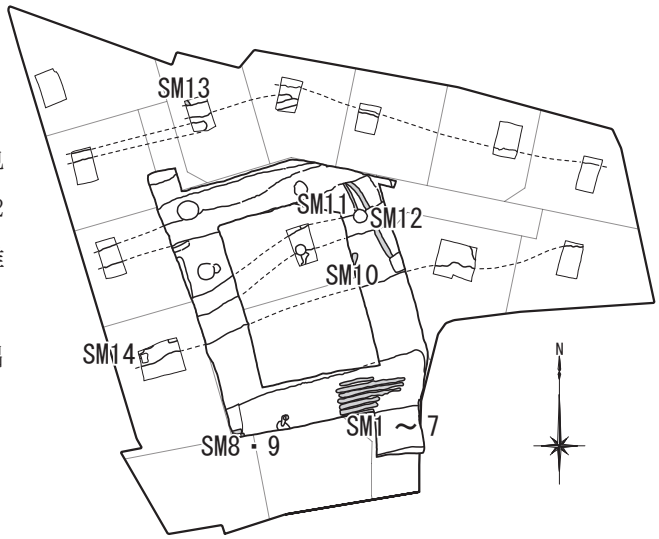
層位	色調	土質	備考・混入物		層位	色調	土質	備考・混入物	
1	10YR2/3 黒褐色	粘土	柱痕跡	炭化粒少量	3	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土	ほぼ均質
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土	地山ブロック（Ⅲ層）主体	4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト		地山ブロック（Ⅲ層）、炭化粒少量

第 63 図　本発掘調査区ピット断面図

(4) 小溝状遺構群

SM1 ～ 9・14 小溝状遺構

本発掘調査の南区と追加調査 11 区で検出された。他の遺構との重複はない。幅 35 ～ 60cm で、検出長は 0.2 ～ 9.35 m、検出面からの深さは 5 ～ 20cm である。堆積土は褐色の粘土質シルトである。基本層第 I 層に伴うことから近現代の耕作痕であると考えられる。遺物は出土していない。



第 64 図　SM1 ～ 14 小溝状遺構位置図

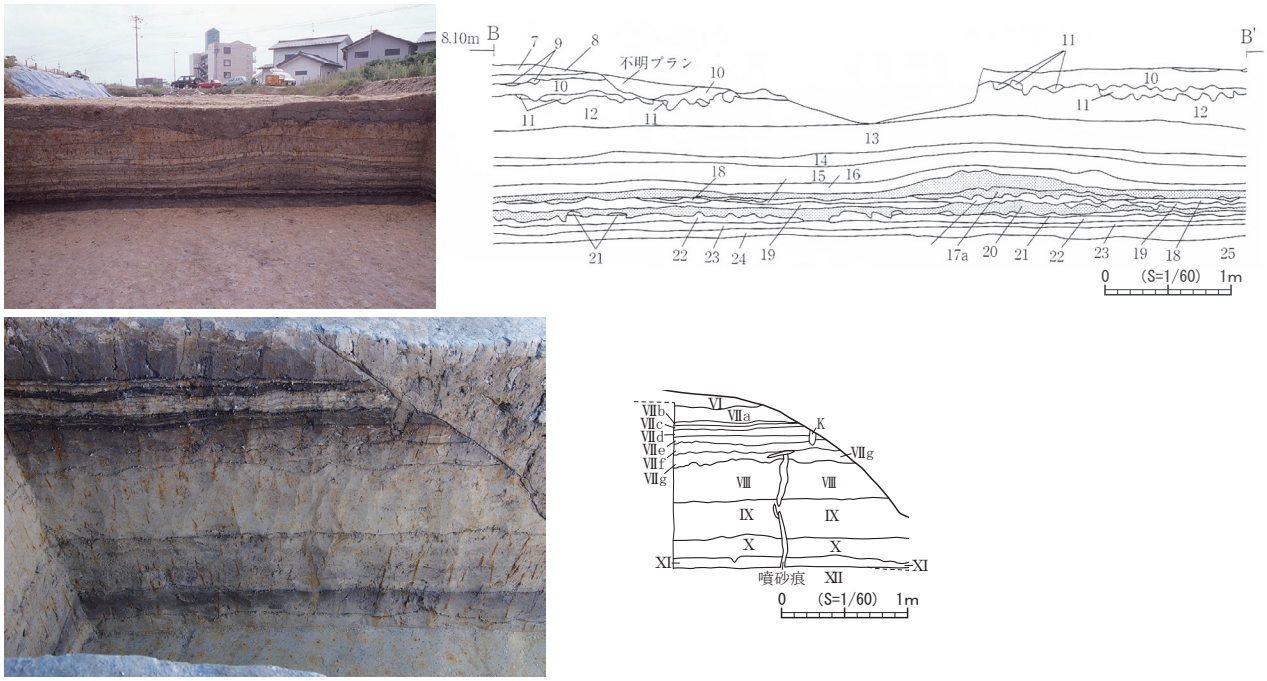
SM10 ～ 13 小溝状遺構

本発掘調査の東区北側と追加調査 7 区で検出された。

SD2・3・20 溝跡、SK5 土坑、ピットと重複し、これらよりも古い。検出長は 1.5 ～ 9.0 mで調査区外にさらに延びる。幅は30～60cmである。検出面からの深さは15～20cmである。堆積土は褐色の粘土質シルトで、灰白色火山灰ブロックが斑状に混入している。灰白色火山灰ブロックが混入し、基本層第Ⅲ層に伴うことから 10 世紀代以降の耕作痕であると考えられる。遺物は出土していない。

(5) 噴砂痕

東区と西区の SD1 堀跡の底面およびその周囲の基本層を断割ったトレンチの断面で確認された。噴砂痕は砂層である基本層第ⅩⅡ層が噴出して、水田耕作層と考えられる第Ⅶｆ層の途中まで続いているのが確認された。第Ⅶ層は第 1 次調査の基本層 17 ～ 24 層に該当するものと考えられる。このうち 17、20 層が弥生時代の水田層の可能性であることから、この噴砂痕は弥生時代中期以前の大規模な地震の際に生じた可能性が高い。

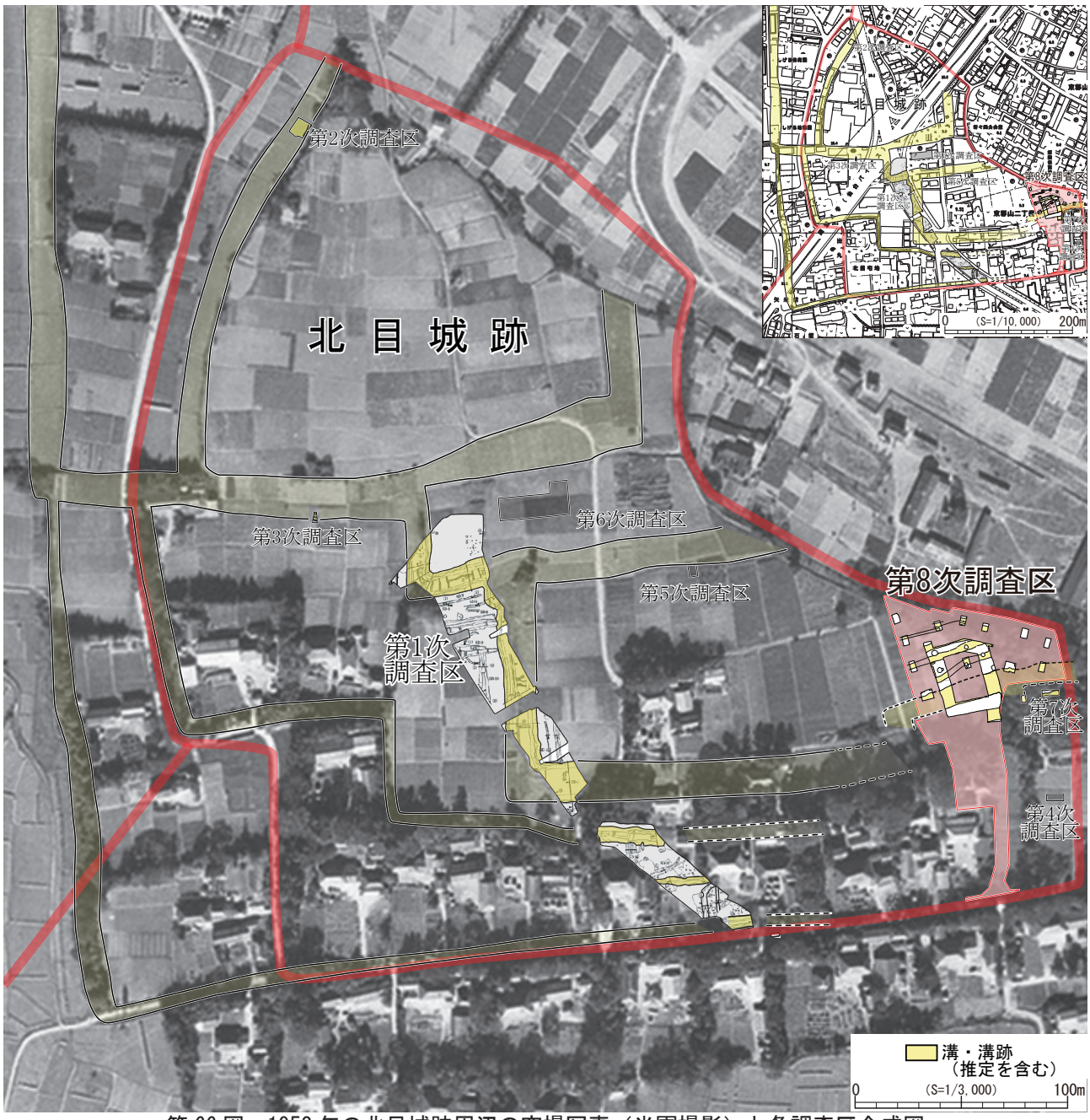


第 65 図　第 1 次調査 4 区深掘 2 区南壁土層断面（上）、第 8 次調査区東区西壁土層断面（下）

6．まとめ

今回の調査区は、平成 3 ～ 4 年度に調査が行われた第 1 次調査区の東側に、平成 19 年に調査が行われた 7 次調査区の北西側にあたる。今回の調査区からは、堀跡 2 条、整地層 1 ヶ所、溝跡 11 条、井戸跡 4 基、土坑 12 基、小溝状遺構群 14 条、ピットが 65 基検出された。

SD1 堀跡は東西方向で幅が 9.0 ～ 10.0 mと非常に大型の堀であることから城跡の南側を区画する堀跡の一部であると考えられる。検出された位置から第 1 次調査の際に検出された SD12 堀跡と同一の堀跡の可能性があるが、本発掘調査区で見つかった位置が第 1 次調査の際の延長線上からやや北側にずれた位置に存在する。SD1 堀跡は追加調査区で南に屈曲する可能性も考えられたが、追加調査の 11 区でも屈曲部分は検出されなかったことから、今回の調査範囲よりもさらに西側で南側に屈曲して連続する可能性がある。第 1 次調査の SD12 堀跡の延長部分の痕跡と推測される現地表面の高低差は、調査区の西隣の畑の境で観察することができる。北目城の堀跡の痕跡については、過去の航空写真や、地籍図、現在も残る水路などからある程度推測することが可能である。それに第 1 次調査などのこれまでの発掘調査成果を合成することにより、堀跡のおおよその推定ラインを示したのが第 66 図である。今回の調査範囲の南東側に位置する平成 12 年度調査区と第 7 次調査区からも堀跡と底面を区画する畝が検出



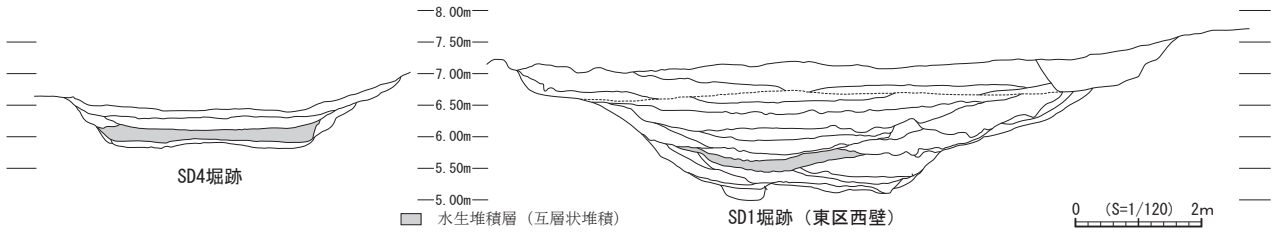
第 66 図　1952 年の北目城跡周辺の空撮写真（米軍撮影）と各調査区合成図

されているが、SD1・4 堀跡とは直線的には接続しない。追加調査の 2・3 区でも SD1 堀跡の北側のラインが検出されたことから、堀はさらに東に延びることが明らかになり、また本発掘調査東区で南に屈曲するラインが検出されたことから、SD1 堀跡と平成 12 年度調査区と第 7 次調査区の堀跡とは SD1 堀跡の南側ラインが枝分かれする形で接続している可能性があることが判明した。

SD4 堀跡も方位が東西方向で、第 1 次調査の際に見つかった SD12 堀跡の延長部分に位置する。しかし SD12 堀跡が幅約 12 mの規模なのに対し、SD4 堀跡の幅はその半分ほどの 5.5 m程度で深さも遺構検出面から約 1.2 mと比較的規模が小さい。よってこれらが同一の堀跡になるのかは今後の調査の蓄積を待って改めて検討したい。

SD1 堀跡と SD4 堀跡は底面付近が互状堆積であったことから水堀であったと考えられるが、SD4 堀跡の規模は SD1 堀跡に比べると深さが約 1.6 m浅い。しかし SD4 堀跡も水堀で、その水性堆積の痕跡の高さを SD1 堀跡のものと比べると約 80cm 高い位置に存在する（第 67 図）。もし両者が同時に堀として機能していたのであれば、SD1 堀跡は約 80cm 以上の水を湛えていたことになる。ちなみに SD1 堀跡の底面の基本層第ⅩⅡ層は砂層で、調査中も

湧水せず、非常に水はけが良い状態であった。よってこの堀に水を入れるのであれば、何らかの形で導水をしなければ水堀としては機能しなかったものと考えられる。



第 67 図　SD1・4 堀跡断面図

SD2・3・17 ～ 21 溝跡はいずれも東西方向の溝跡で、検出位置や規模などから、城の内部を区画する溝跡であると考えられる。SD2・3 溝跡はいずれも井戸跡やピットと重複しておりこれよりも古い。SD17 溝跡は掘り直されて 3 時期にわたって使用されていたことが確認されている。また土師器や須恵器、平瓦、瓦質土器の擂鉢や天目茶碗や明末期の青花碗の破片、石臼等の石製品など、今回の調査では最も多く遺物が出土した。また隣接する SD18 溝跡からも堆積土の最上層から瓦質土器や礫石器などが出土している。

SD8・12・14 溝跡は、比較的小型で SD2・3 溝跡等と直行する南北方向の溝跡であるが、堆積状況から SD2、3 溝跡とほぼ同時期かやや古い時期で、これらにも城内部を区画する溝跡の一部である可能性がある。

今回の調査区から 4 基の井戸跡が検出されたが、そのうち 3 基が溝跡と重複しており、いずれも溝跡よりも新しい。SE6・13 井戸跡から桶等のほかに、板材や丸太材と考えられる木製品が多数出土している。これらは何らかの形で周囲に存在した建物の建築材を投棄したものと推測される。

ピットは本発掘調査区の北側を中心に 65 基が確認されている。大部分のピットから柱痕跡が確認された。ピットは溝跡や井戸跡よりも新しい。

小溝状遺構は 14 条検出されたが、SM10 ～ 13 の 4 条は灰白色火山灰をブロック状に含んでおり、古代以降の畑の耕作痕でⅢ a 層に伴うものと考えられる。また各遺構の堆積土や遺構検出面などから古代の土師器や須恵器、平瓦などが出土していることから、これらの時期についても何らかの形で土地利用が行われていたものと考えられる。

出土遺物は本発掘調査範囲からは木製品のほかに、井戸跡と溝跡を中心に在地産などの陶器の壺・甕類や、瓦質土器の擂鉢、石臼等の石製品などが出土している。これらの遺物の年代は 14 世紀～ 16 世紀代であり、本発掘調査範囲からは近世陶磁器がまったく出土しなかったことから、遺構の年代はおおよそ 16 世紀代であるものと考えられる。

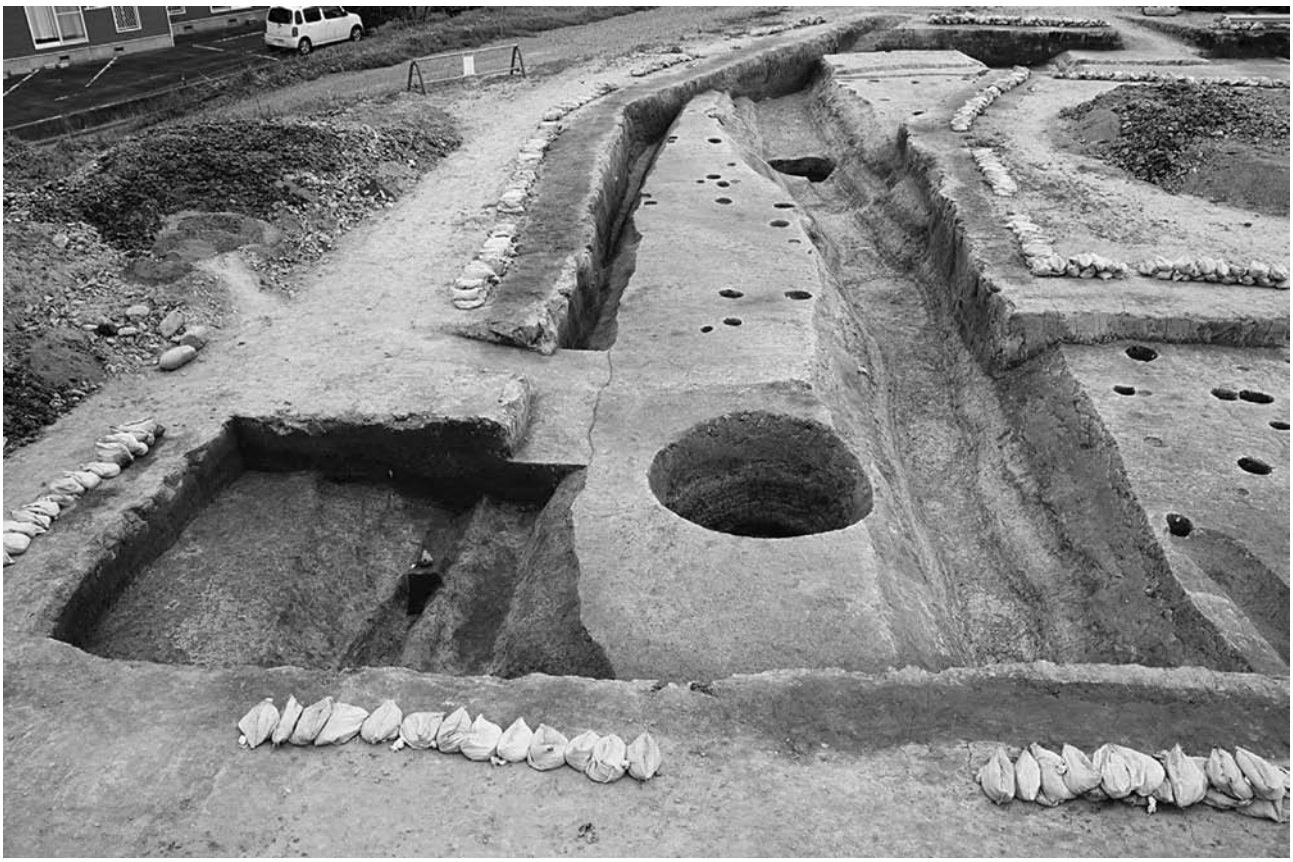
引用・参考文献

仙台市教育委員会　1995 『北目城跡』仙台市文化財調査報告書第 197 集
仙台市史編さん委員会　1995 『仙台市史　資料編 1　古代中世』
仙台市史編さん委員会　1998 『仙台市史　特別編 5　板碑』
仙台市教育委員会　1999 「北目城跡第 2 次」『陸奥国分尼寺ほか』仙台市文化財調査報告書第 238 集
仙台市教育委員会　2004 「北目城跡第 3 次」『保春院前遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 274 集
仙台市史編さん委員会　2006 『仙台市史　特別編 7　城館』
仙台市教育委員会　2006 「北目城跡第 4 次、第 5 次」『前田館跡他』仙台市文化財調査報告書第 301 集
仙台市教育委員会　2007 『北目城跡　－第 6 次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第 314 集
仙台市教育委員会　2008 「北目城跡第 7 次」『南小泉遺跡他』仙台市文化財調査報告書第 326 集

1. 東区遺構完掘状況（南から）

2. 西区遺構完掘状況（南から）

写真図版 16　北目城跡第 8 次調査（1）



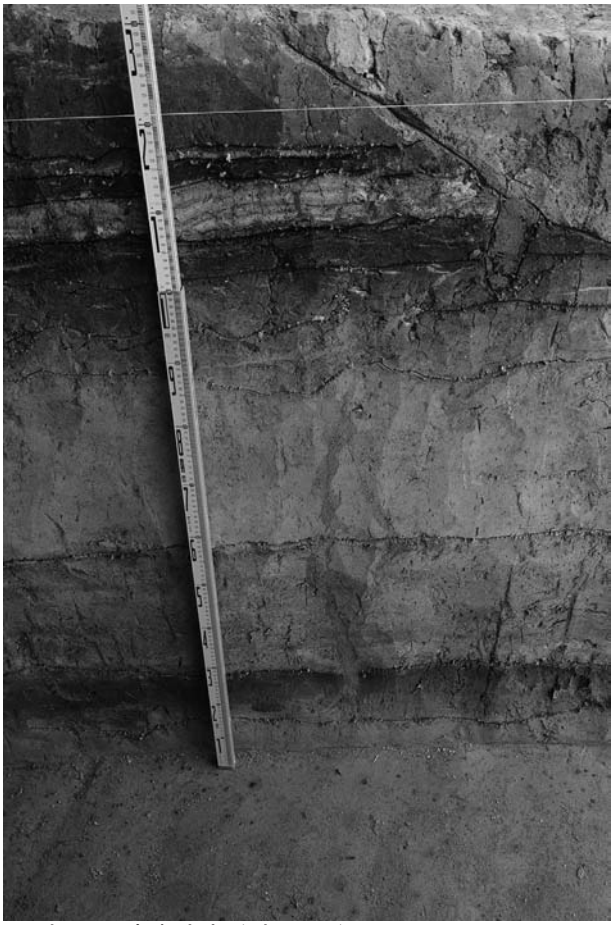
1. 北区遺構完掘状況（西から）

2. 東区 SD1 堀跡東壁土層断面（西から）

写真図版 17　北目城跡第 8 次調査（2）

1. 西区 SD1 堀跡底面噴砂痕（北東から）

2. 西区西壁基本層深堀状況（東から）


3. 東区西壁噴砂痕（東から）

4. 南区遺構完掘状況（西から）

5. 西区 SD1 完掘状況（東から）

6. 東区 SD1 堀跡完掘状況（北東から）

7. 東区 SD1 堀跡底面杭検出状況（東から）

写真図版 18　北目城跡第 8 次調査（3）

1.2 区 SD1 堀跡検出状況（南から）

2.3 区 SD1 堀跡・整地層検出状況（東から）

3.11 区 SD1 堀跡検出状況（北から）

4.12 区 SD2 溝跡検出状況（東から）

5. 西区 SD2 溝跡完掘状況（西から）

6.SD4 堀跡完掘状況（北から）

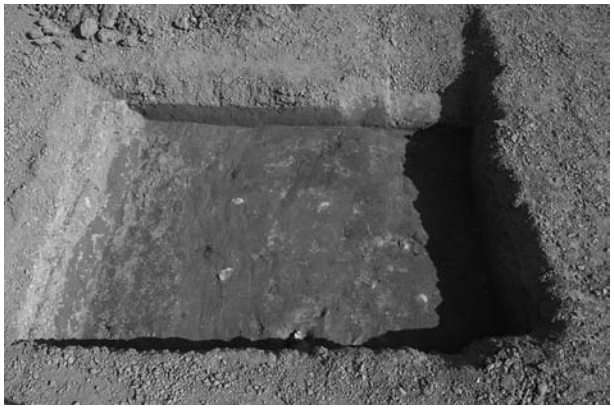
7.SD17 溝跡土層断面（東から）

8.7 区 SD18・SD20 溝跡検出状況（北から）

写真図版 19　北目城跡第 8 次調査（4）

1.9 区 SD18 溝跡検出状況（東から）

2.6 区 SD19・20 溝跡検出状況（東から）


3.5 区 SD21 溝跡検出状況（西から）

4.SE6 井戸跡完掘状況（北から）

5.SE6 井戸跡遺物出土状況（北西から）

6.SE9 井戸跡土層断面（東から）

7.SE13 井戸跡遺物出土状況（西から）

8.SE15 井戸跡土層断面（西から）

写真図版 20　北目城跡第 8 次調査（5）

写真図版 21　北目城跡第８次調査区出土遺物（1）

写真図版 22　北目城跡第８次調査区出土遺物（2）

写真図版 23　北目城跡第８次調査区出土遺物（3）

7. 北目城跡より出土した木製品の樹種同定

吉川純子（古代の森研究舎）

北目城跡は仙台市太白区の広瀬川南西に所在する。本遺跡で検出されたSD1堀跡及び井戸跡SE6,SE13から杭などの加工材が発見されたためこれら13点の樹種同定を実施した。試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取しプレパラートに封入して生物顕微鏡で観察・同定した。木製品の樹種同定結果を表1に示す。13点のうち最も多かったのは4点のヤナギ属で、コナラ属コナラ節及びヌルデは各3点、オニグルミ、モモ、針葉樹が各1点であった。以下に特筆すべき樹種の同定の根拠を示す。

モモ（Amygdalus persica L.）: 年輪はじめにやや小さい丸い管孔が数列並び徐々に径を減じて単独ないし数個放射方向に複合して散在する半環孔材で、道管は単穿孔で道管内壁にらせん肥厚があり着色物質が多く見られる。放射組織は異性で5細胞幅くらいのやや長い紡錘形である。

表1 北目城第8次出土木製品の樹種

登録番号	出土遺構	種別	器種		樹種
L-1	SE6	木製品	桶の底		針葉樹
L-2	SD1	木製品	杭		オニグルミ
L-3	SD1	木製品	杭？	樹皮付き	ヌルデ
L-4	SE6	木製品		樹皮付き	ヌルデ
L-5	SE6	木製品		樹皮付き	ヌルデ
L-6	SE6	木製品		樹皮付き	ヤナギ属
L-7	SE6	木製品		樹皮付き	ヤナギ属
L-8	SE13	木製品			コナラ節
L-9	SE13	木製品		板状	コナラ節
L-10	SE13	木製品		板状	コナラ節
L-11	SE13	木製品			ヤナギ属
L-12	SE13	木製品		樹皮付き	モモ
L-13	SE13	木製品		樹皮付き	ヤナギ属

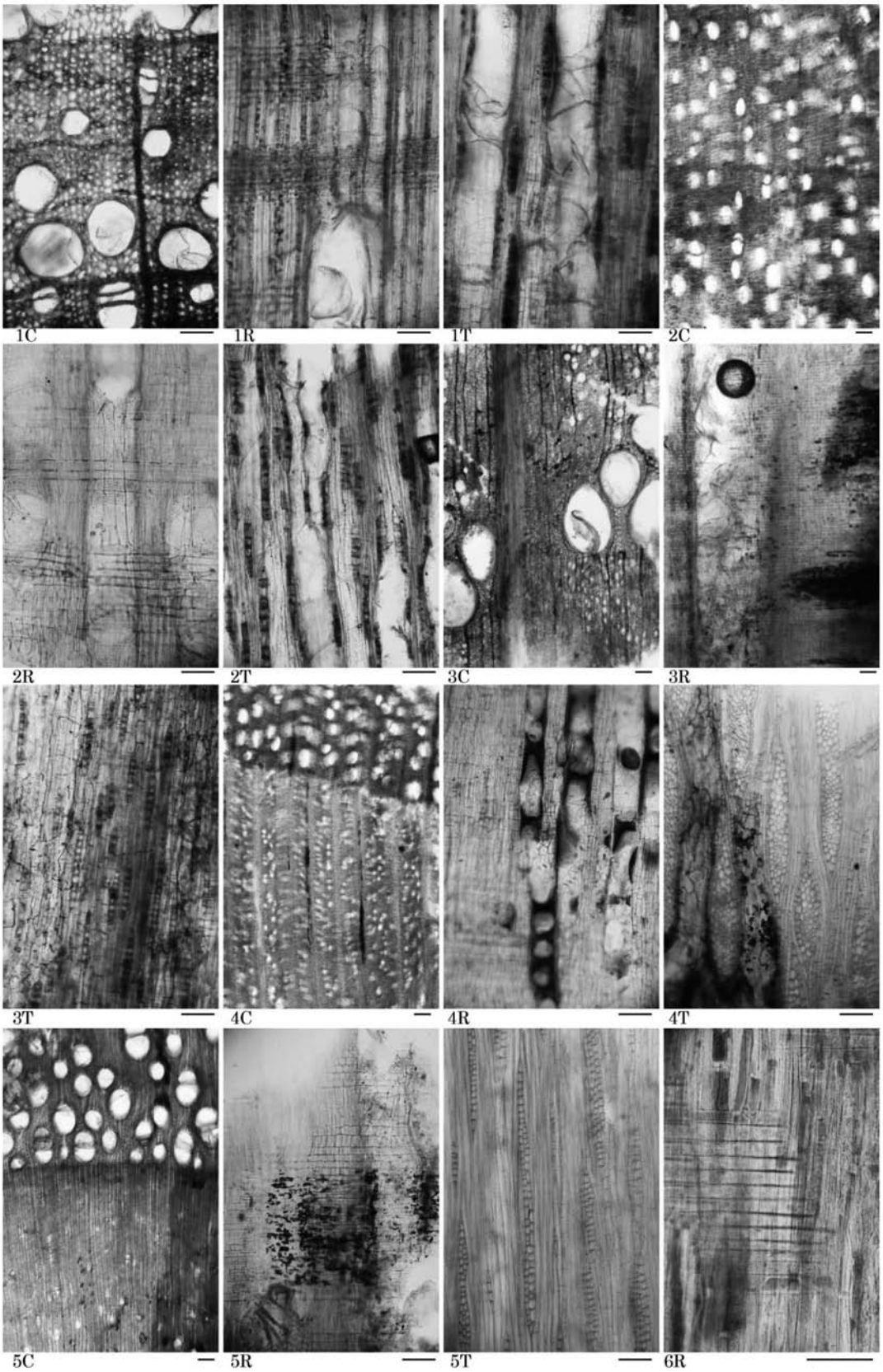
また1点確認された曲物底板は放射組織内の分野壁孔などが溶けており針葉樹との同定にとどめた。

本遺跡で出土した木製品はSE6で出土した曲物以外は杭とみられる棒状加工材や板状加工材である。宮城県では杭材にコナラ節やヤナギ属などは多く利用されているが全体としては多様な樹種を用いており、本遺跡ではヤナギ属とヌルデ、コナラ節を多く出土した。杭など12点のうち7点は樹皮が残っており、伐採してそのまま利用したと考えられることから遺跡付近で調達した可能性が高い。用材調達の利便性を考慮した場合、杭材など土木材の樹種はその多くが周辺の植生を反映していると考えられる。なおモモは宮城県内近世の出土例は少ないが近世中葉の沼向遺跡で1点だけ薬研の出土例がある（鈴木ほか2010）。また時期は異なるが市川橋遺跡では古墳末～平安初頭で杭材が2点確認されている（松葉 2001）。

引用・参考文献

松葉礼子　2001 「木製品の樹種同定」『市川橋遺跡の調査－県道泉・塩竈線関連調査報告書Ⅲ第1部本文編』宮城県教育委員会　P304-326

鈴木三男・小川とみ　2010 「第6節沼向遺跡出土木製品・炭化材の樹種同定（中野高柳遺跡を含む）」『沼向遺跡第4～34次調査　第9分冊』仙台市教育委員会　P75-125



図版１ 北目城跡出土木製品の顕微鏡写真

1. オニグルミ（L-2） 2. ヤナギ属（L-7） 3. コナラ節（L-10） 4. モモ（L-12） 5. ヌルデ（L-5） 6. 針葉樹（L-1）

C：横断面、R：放射断面、T：接線断面、スケールは 0.1mm

第５章　郡山遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

郡山遺跡は、仙台市太白区郡山二～六丁目に所在する。北を広瀬川、南を名取川に挟まれ、その両河川の合流点から北西約２㎞に位置する。遺跡の範囲は、東西約 800 m、南北 900 mで面積は約 60ha に及んでいる。その一部は、平成 18 年に「仙台郡山官衙遺跡群　郡山官衙遺跡　郡山廃寺跡」として国史跡に指定されている。

郡山遺跡は、昭和 54 年（1979）に初めて発掘調査が行われ、昭和 55 年（1980）から継続的な調査が行われてきた。官衙は「Ⅰ期官衙」と「Ⅱ期官衙」の２つの時期がある。Ⅰ期官衙は７世紀中頃から後半にかけて機能し、陸奥国の拠点となる城柵跡と考えられる。そのⅠ期官衙を取り壊し、建物や塀などの施設の基準を真北方向に変えて造営されたのがⅡ期官衙である。Ⅱ期官衙は７世紀末から８世紀初頭にかけて機能し、多賀城造営以前の陸奥国府跡と考えられる。

郡山遺跡の周辺には、西側に長町駅東遺跡と西台畑遺跡が位置しており６世紀末葉～８世紀初頭の竪穴住居跡が 600 軒以上発見されている。また、南西約 1.5㎞には大型の掘立柱建物跡が方形区画の溝の内部に規則性をもって配置されていることが確認された大野田官衙遺跡があり、建物の規模や出土遺物などから、郡山Ⅱ期官衙との関係性が考えられている。

第２節　第 260 次調査

１．調査要項

遺　跡　名　郡山遺跡（宮城県遺跡登録番号 01003）

調 査 地 点　仙台市太白区郡山５丁目 214-1 の一部、223-9、226-1、233－2

調 査 期 間　確認調査：平成 27 年 11 月 24 日～12 月 19 日
本発掘調査：平成 28 年４月 18 日～７月７日

調査対象面積　確認調査：1968 ㎡　本発掘調査：約 185 ㎡

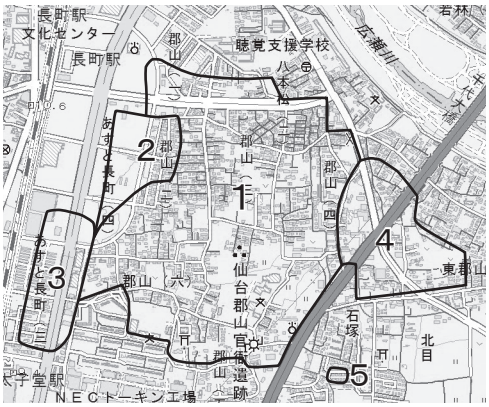
調 査 面 積　確認調査：約 217 ㎡　本発掘調査：約 170 ㎡

調 査 原 因　宅地造成工事

調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部
文化財課整備活用係

担 当 職 員　確認調査：主事　及川謙作　文化財教諭　高橋和也
本発掘調査：主事　五十嵐愛　文化財教諭　高橋和也



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	郡山遺跡	官衙跡、寺院跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
2	西台畑遺跡	集落跡、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
3	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代
4	北目城跡	城館跡、集落跡、水田跡	自然堤防	縄文、弥生、古墳、古代、近世
5	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、古代

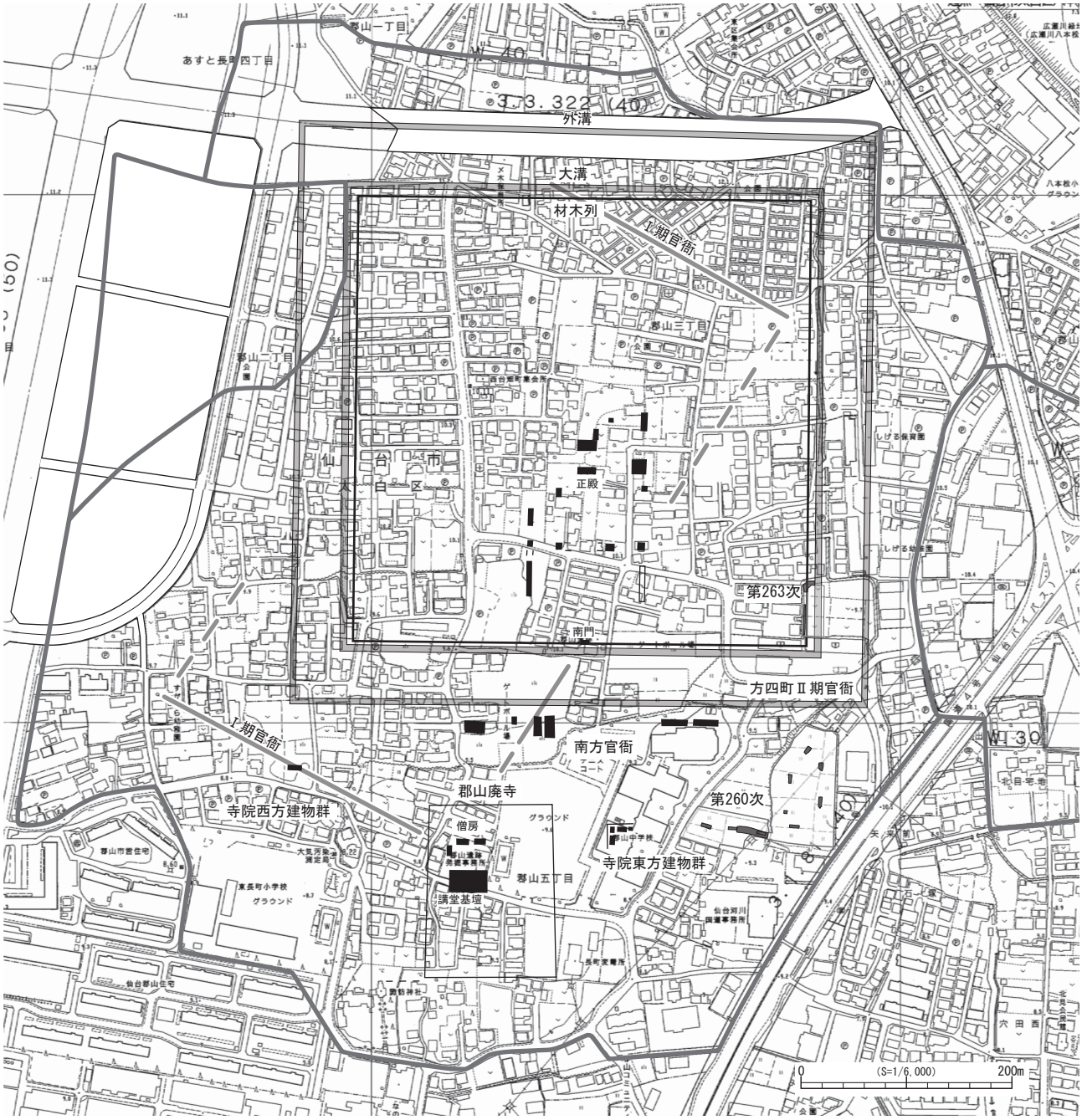
第 68 図　郡山遺跡と周辺の遺跡
（Ｓ =1/25,000）

２．調査に至る経過と調査方法

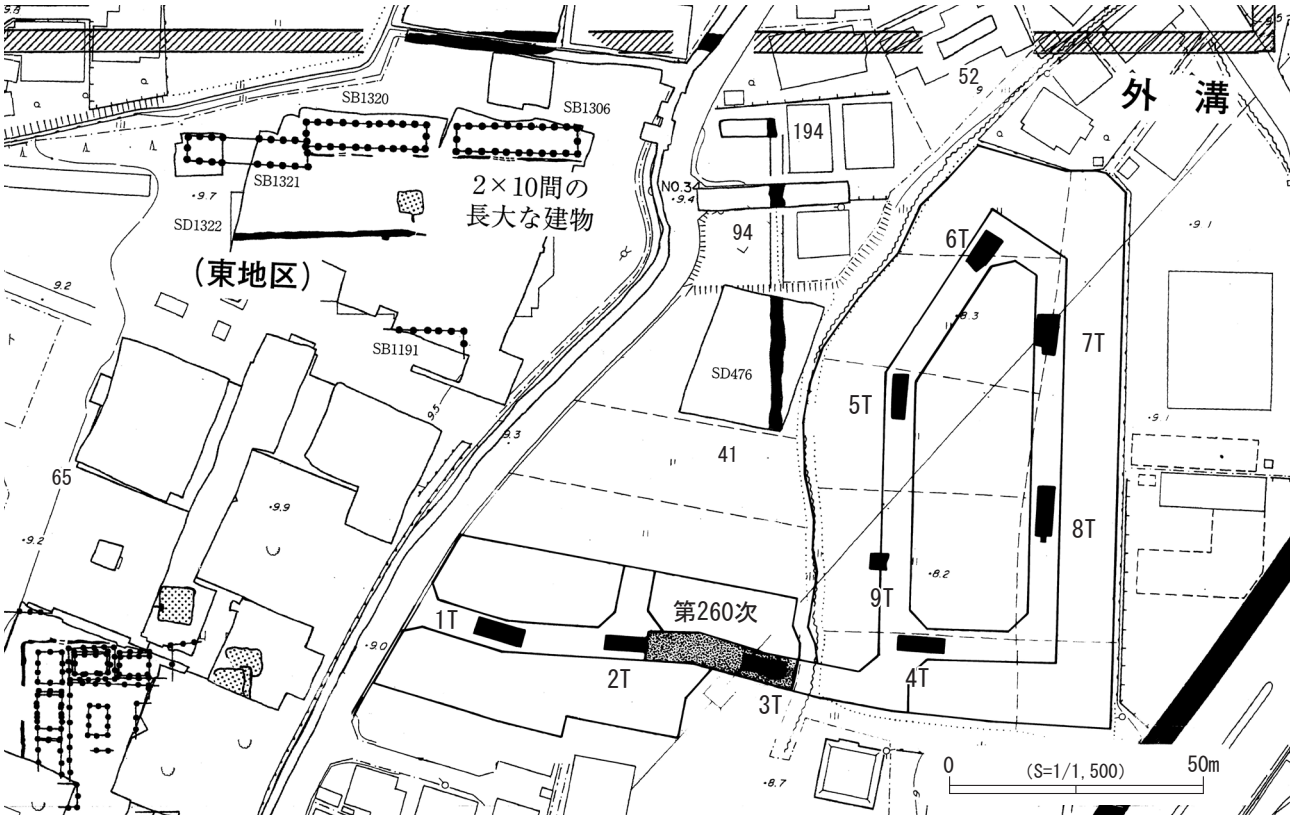
(1) 確認調査

今回の調査は申請者より平成 27 年９月 11 日付で提出された「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（平成 27 年 10 月１日付 H27 教生文第 103-112 号で回答）に基づき実施した。対象地は郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の南西側にあたり、昭和 58 年に調査が行われた第 41 次調査区、平成４・５年に調査が行われた第 94 次調査区、平成 21

年に調査が行われた第 194 次調査区の南側、昭和 57 年に調査が行われた第 34 次調査区、昭和 61 年～平成 2 年に調査が行われた第 65 次調査区の西側、昭和 63 年に調査が行われた第 81 次調査区、平成 13 年に調査が行われた第 141 次調査区の北側にあたる。第 41 次、第 94 次、第 194 次調査区から、南北方向の溝跡が検出されている。確認調査は平成 27 年 11 月 24 日に着手し、郡山遺跡の座標（№.40）から、トランシットを用いて基準点の移設を行った。調査区は道路建設予定地内に、東西 2.7 ～ 3.0 m、南北 3.0 ～ 10.0 mのトレンチを 9 箇所（対象地の西側に 3 箇所、東側に 6 箇所）設定した。



第 69 図　郡山遺跡調査地点位置図



第 70 図　郡山遺跡第 260 次調査区位置図

確認調査の記録は、調査区配置図（S=1/100）、調査区平面図・断面模式図（S=1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。12 月 19 日に調査を終了した。

確認調査で確認した基本層は、西側の 1 ～ 3 トレンチで大別 10 層、細別 16 層、東側の 4 ～ 9 トレンチで大別 12 層、細別 13 層である。調査対象地の西側と東側では土層の堆積状況が異なっていたため、個別に記載する。

各トレンチの概要については以下のとおりである。

1 トレンチ：重機により西Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層を掘り下げ、西Ⅳ層上面で遺構検出作業を行った結果、土坑 1 基が検出された。遺物は、基本層中から須恵器および近世陶磁器の小片が出土している。

2 トレンチ：重機により盛土および西Ⅰ・Ⅱ層を掘り下げ、西Ⅲ層中で遺構検出作業を行った結果、小溝 1 条が検出された。遺物は出土していない。

3 トレンチ：重機により盛土および西Ⅰ・Ⅱ層を掘り下げ、西Ⅲ層中で遺構検出作業を行った結果、溝跡 1 条、ピット 1 基を検出した。遺物は、基本層中から土師器および須恵器の小片が出土している。

4 トレンチ：重機により東Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層を掘り下げ、東Ⅴ層上面で遺構検出作業を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。古代の遺構検出面は削平されていると考えられる。

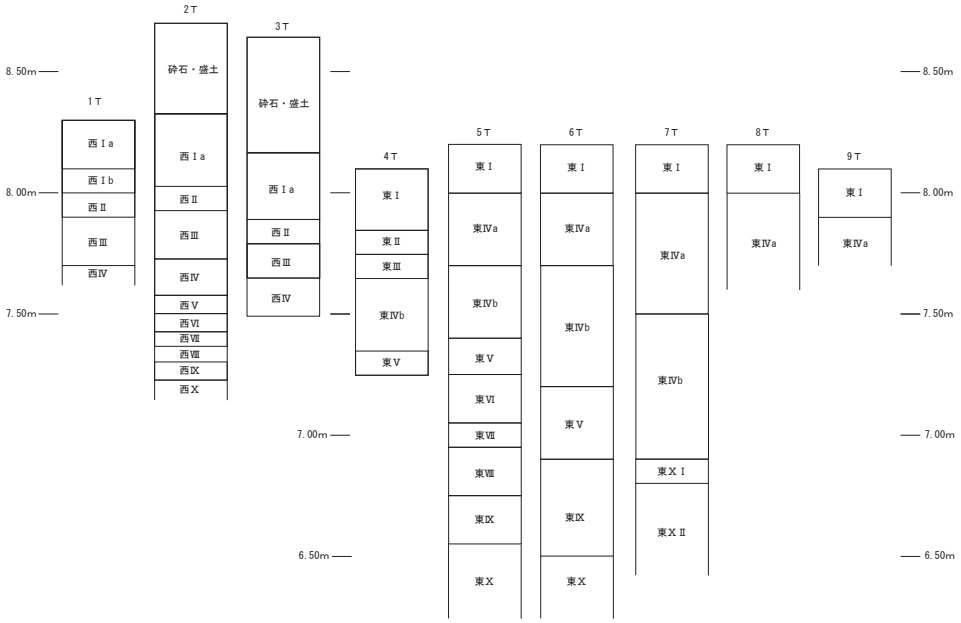
5 トレンチ：重機により東Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層を掘り下げ、東Ⅷ層上面で遺構検出作業を行ったが、遺構は検出されなかった。古代の遺構検出面は既に削平されていると考えられる。東Ⅶ層中から縄文土器片が出土している。

6 トレンチ：重機により東Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ層を掘り下げ、東Ⅸ層上面で遺構検出作業を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。古代の遺構検出面は削平されていると考えられる。

7 トレンチ：重機により東Ⅰ・Ⅳ層を掘り下げ、東ⅩⅠ層上面で遺構検出作業を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。古代の遺構検出面は既に削平を受けて存在しないと考えられる。

8 トレンチ：重機により東Ⅰ・Ⅳ層を掘り下げ、東Ⅳ層中で遺構検出作業を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。古代の遺構検出面は既に削平を受けて存在しないと考えられる。

9トレンチ：重機により東Ⅰ・Ⅳ層を掘り下げ、東Ⅳ層中で遺構検出作業を行ったが、遺構・遺物は検出されなかった。古代の遺構検出面は既に削平を受けて存在しないと考えられる。



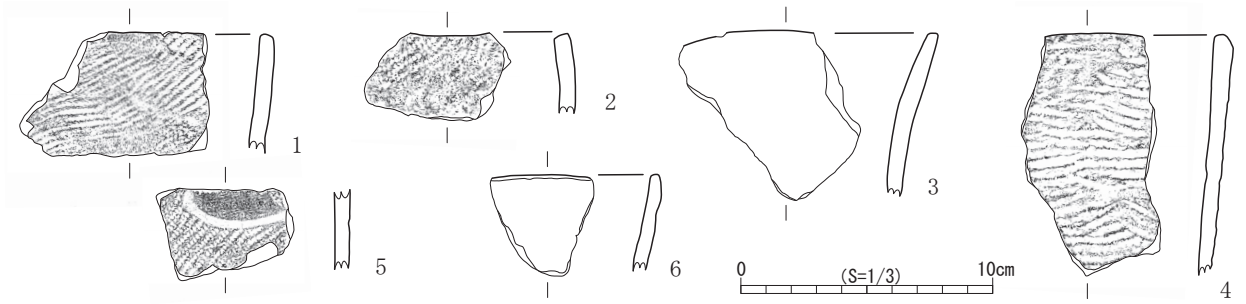
確認調査　1～3トレンチ

層位	色調	土質	備考・混入物
西Ⅰa	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	粘土	水田耕作土　酸化鉄粒（φ2～5mm）多量に斑状に含む
西Ⅰb	2.5Y3/2 黒褐色	粘土	水田耕作土（？）　下層との境にマンガン粒堆積　　酸化鉄粒（φ2～5mm）多量に斑状に含む
西Ⅱ	10YR3/4 暗褐色	粘土	ほぼ均質
西Ⅲ	10YR3/2 黒褐色	粘土	水田耕作土（？）　Ⅳ層ブロック（φ2～5cm）　ところにより斑状に含む
西Ⅳa	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	ほぼ均質　遺構検出面
西Ⅳb	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒（φ5mm）微量
西Ⅴa	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	ほぼ均質
西Ⅴb	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	ややグライ化　ほぼ均質
西Ⅵ	2.5YR6/2 灰赤色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック（φ2cm）少量
西Ⅶa	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒（φ2～5mm）斑状に多量に含む
西Ⅶb	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ2～5mm）斑状に含む
西Ⅶc	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒（φ2mm）少量　　炭化粒（φ2mm）少量
西Ⅶd	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	炭化物すじ状に堆積　下層との境に乱れあり
西Ⅷ	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック（φ2cm）少量
西Ⅸ	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック（φ3cm）少量　　下層との境に乱れあり
西Ⅹ	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	炭化物（φ1cm）斑状に含む　　酸化鉄ブロック（φ2cm）斑状に含む

確認調査　4～9トレンチ

層位	色調	土質	備考・混入物
東Ⅰ	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ2～5mm）斑状に含む　　現代の水田耕作土
東Ⅱ	7.5YR4/4 褐色	シルト	酸化鉄粒（φ2mm）斑状に多量に含む　　西側のⅡ層に対応か？
東Ⅲ	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ2～5mm）斑状に含む
東Ⅳa	10YR4/4 褐色	粘土	5T 以降で確認　酸化鉄ブロック（φ2cm）少量
東Ⅳb	10YR6/3 にぶい黄橙色	粘土	酸化鉄ブロック（φ2cm）上層との境を中心に多量に含む
東Ⅴ	10YR6/1 褐灰色	粘土	ほぼ均質　4T
東Ⅴ	10YR6/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック（φ2cm）斑状に含む　　炭化粒（φ5mm）少量　5～7T
東Ⅵ	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック（φ1～3cm）斑状に含む
東Ⅶ	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄ブロック（φ2cm）斑状に含む　　縄文の包含層　炭化粒（φ2mm）少量含む
東Ⅷ	10YR5/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック（φ2cm）少量含む　　炭化粒（φ2mm）微量に含む
東Ⅸ	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック（φ2～3cm）少量　　炭化粒（φ3mm）微量
東Ⅹ	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄ブロック（φ2cm）少量
東ⅩⅠ	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂	河川堆積層
東ⅩⅡ	10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR4/2 灰黄褐色	砂 粘土	炭化粒（φ1cm）少量　互層に堆積

第71図　郡山遺跡第260次調査 確認調査区土層断面模式図

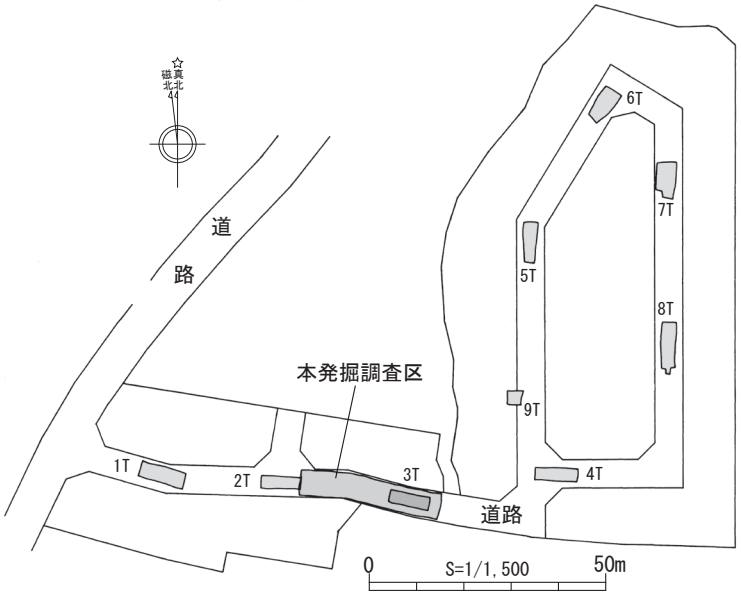


図版番号	登録番号	種別	器形	法量（cm）	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
1	A-10	縄文土器	深鉢	口径：－　器高：（残 5.0）	単節縄文 LR	ミガキ	26-1
2	A-8	縄文土器	深鉢	口径：－　器高：（残 3.4）	単節縄文 LR	ミガキ	26-2
3	A-9	縄文土器	深鉢	口径：(17.9)　器高：（残 6.8）	ミガキ	ミガキ	26-3
4	A-6	縄文土器	深鉢	口径：－　器高：（残 9.5）	無節 L	ミガキ	26-4
5	A-11	縄文土器	深鉢	口径：－　器高：（残 3.5）	単節縄文 LR　沈線文　磨消縄文	ミガキ	26-5
6	A-5	縄文土器	深鉢	口径：－　器高：（残 4.1）	ミガキ	ミガキ	26-6

第 72 図　確認調査 5 トレンチ　出土遺物

(2) 本発掘調査

確認調査で遺構が検出されたことを受け、本発掘調査は遺構が検出された 3 トレンチを含む、東西 30 m、南北 6 mの調査区を設定し、平成 28 年 4 月 18 日に着手した。重機により盛土、Ⅰ・Ⅱ層を掘り下げ、Ⅲ層中およびⅣ層上面で遺構確認作業を行った。本発掘調査の記録は、調査区平面図・断面図（S=1/20）、遺構断面図（S=1/20）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。7 月 7 日に調査を終了した。



第 73 図　郡山遺跡第 260 次調査区配置図

3．基本層序

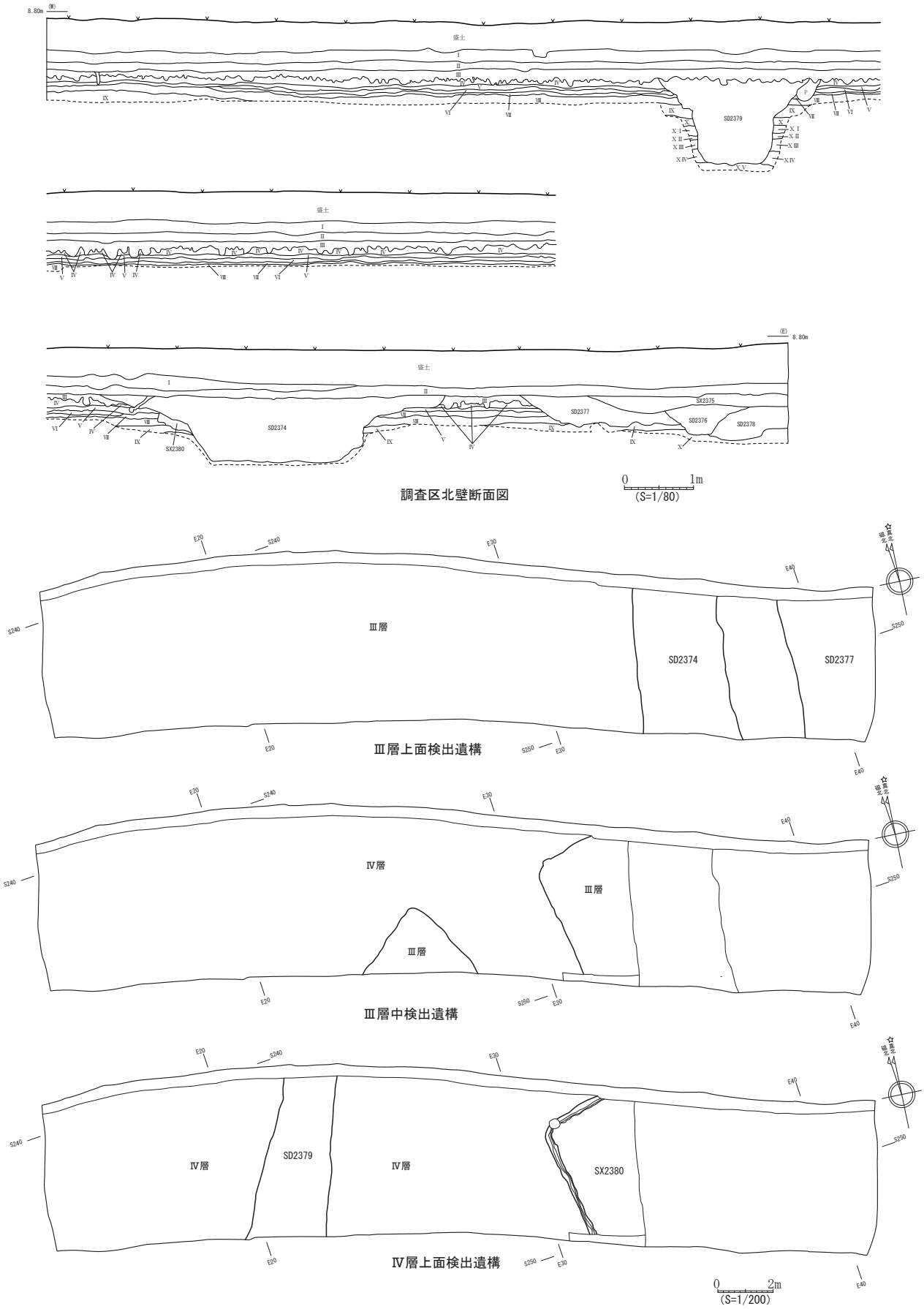
本発掘調査で確認した基本層は大別 15 層である。本発掘調査では新たに層番号を付して基本層の分層を行った。遺構を検出したⅢ層・Ⅳ層の特徴は以下のとおりである。

Ⅲ層：確認調査 3 トレンチにおける西Ⅲ層・Ⅳ層に対応する。褐灰色粘土質シルトの層であり、層上部に黒褐色粘土質シルトがまだらにみられる。Ⅳ層をブロック状に含み、層下面に起伏が認められることから、水田耕作土と考えられる。層厚は 5 ～ 25 ㎝で、調査区西側に厚く分布する箇所が認められる。

Ⅳ層：灰黄色粘土質シルトの層である。Ⅲ層下面に起伏があるため、Ⅳ層上面を検出した段階ではⅢ層がまだらに認められた。層厚は 5 ～ 15 ㎝であるが、Ⅲ層が入り込むことによって部分的に断続的な箇所が認められる。

遺構確認作業は、Ⅲ層中とⅣ層上面で行ったが、調査区壁断面の土層観察などから、Ⅲ層中で確認した遺構の中には、Ⅲ層上面で掘り込まれた遺構も含まれていることが確認された。

このため、遺構および遺物についてはⅢ層上面・Ⅲ層中・Ⅳ層上面に分けて報告する。



第 74 図　調査区北壁断面図・各層の主な遺構配置図

基本層

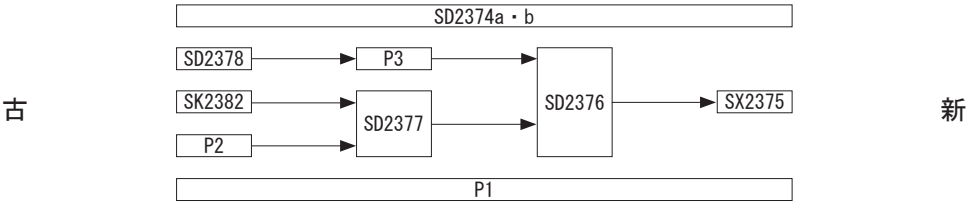
層位	色調	土質	備考
Ⅰ	5B4/1 暗青灰色	シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）やや多量に含む
Ⅱ	10YR5/1 褐灰色	シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）多量含む
Ⅲ	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）多量含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 10 ㎝）、酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）中量含む、Ⅳ層　ブロック状に含む、層上部に 10YR3/1 黒褐色粘土質シルトがみられる
Ⅳ	2.5Y6/2 灰黄色	粘土質シルト	マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）、酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 3 ㎜）多量含む、10YR4/1・10YR5/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 3 ㎝）中量含む
Ⅴ	2.5Y5/1 黄灰色	シルト質粘土	マンガン粒（φ 0.5 ～ 2 ㎜）多量含む、酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 2 ㎜）、2.5Y6/2 灰黄色シルト質粘土粒（φ 3 ～ 5 ㎜）やや多量に含む、2.5Y4/1 黄灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 3 ㎝）中量含む
Ⅵ	2.5Y7/2 灰黄色	シルト質粘土	マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）、酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 5 ㎜）やや多量に含む、2.5Y5/1 黄灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 3 ㎝）中量含む
Ⅶ	2.5Y5/1 黄灰色	粘土質シルト	マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）、酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 3 ㎜）、2.5Y7/2 灰黄色粘土ブロック（φ 0.5 ～ 3 ㎝）やや多量に含む、2.5Y5/1 黄灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 3 ㎝）中量含む
Ⅷ	7.5YR7/8 黄橙	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 1 ～ 2 ㎜）やや多量に含む、2.5Y5/1 黄灰色粘土ブロック（φ 0.5 ～ 3 ㎝）中量含む
Ⅸ	10YR8/1 灰白色 10YR1.7/1 黒色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 3 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 2 ㎝）中量含む　薄く互層に堆積
Ⅹ	2.5Y7/1 灰白色	シルト質粘土	2.5Y5/1 黄灰色粘土ブロック（φ 0.5 ～ 5 ㎝）、酸化鉄粒（φ 1 ～ 3 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）中量含む、5Y8/1 灰白色シルト質砂　薄層状に含む
ⅩⅠ	10YR6/1 褐灰色	シルト質粘土	炭化粒（φ 0.5 ㎜）、酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）やや多量に含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）中量含む、10YR8/1 灰白色粘土ブロック（φ 3 ～ 5 ㎝）斑状に含む
ⅩⅡ	10YR7/1 灰白色	粘土	10YR5/1 褐灰色粘土粒（φ 0.5 ～ 1 ㎝）、酸化鉄粒（φ 3 ～ 10 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）、10YR8/1 灰白色粘土粒（φ 5 ㎜）やや多量に含む
ⅩⅢ	7.5YR5/1 褐灰色	粘土	炭化粒（φ 0.1 ～ 5 ㎜）、10YR8/1 灰白色粘土ブロックやや多量に含む、酸化鉄粒（φ 3 ～ 5 ㎜）斑状にやや多量含む、マンガン粒（φ 1 ㎜）中量含む
ⅩⅣ	2.5Y5/1 黄灰色	粘土	炭化粒（φ 0.1 ～ 1 ㎜）やや多量に含む（まれにφ 1.5 ～ 2 ㎝程の固まりを含む）、酸化鉄ブロック（φ 1 ～ 3 ㎝）、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）中量含む
ⅩⅤ	2.5Y6/1 黄灰色	粘土	2.5Y8/1 灰白色粘土粒（φ 0.5 ～ 1 ㎝）、炭化物粒（φ 0.5 ～ 1 ㎝）、酸化鉄ブロック（φ 0.5 ～ 2 ㎝）中量含む

4．発見遺構と出土遺物

本調査で検出した遺構は、合計で溝跡 5 条、性格不明遺構 2 基、土坑 1 基、ピット 8 基である。また、各遺構及び基本層中と、遺構検出面を中心に土師器や須恵器、瓦などの遺物が出土している。

(1) Ⅲ層上面検出遺構

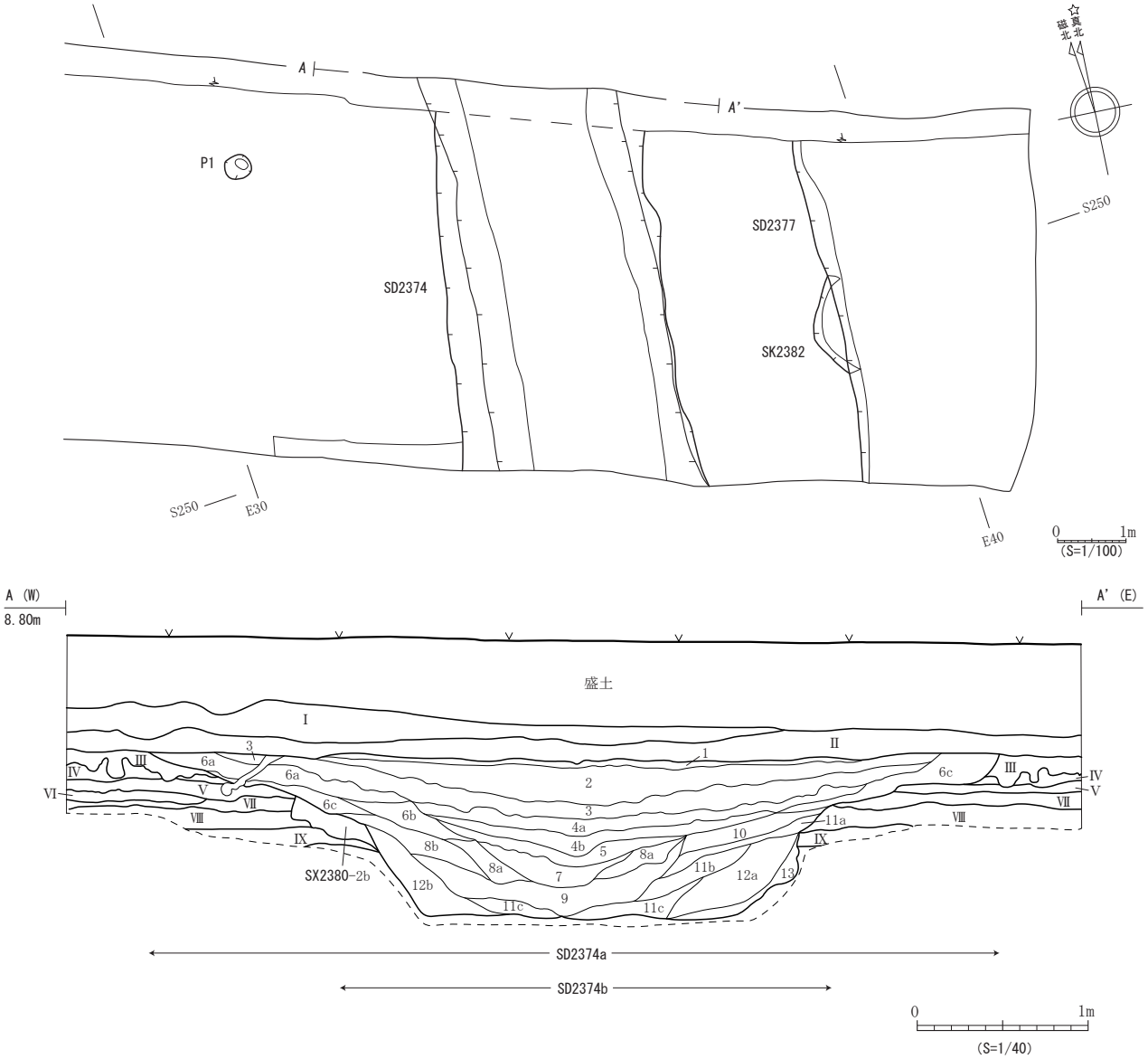
Ⅲ層上面で検出した遺構は、溝跡 2 条（SD2374・SD2377）、性格不明遺構 1 基（SX2375）、ピット 1 基（P1）である。また、これらの遺構と重複する溝跡 2 条（SD2376・SD2378）、土坑 1 基（SK2382）、ピット 2 基（P2・P3）についても本項で報告する。各遺構の重複関係や時期差については以下の通りである。ただし、並列して表記した遺構が必ずしも同時期を示すものではない。



【SD2374a・b 溝跡】

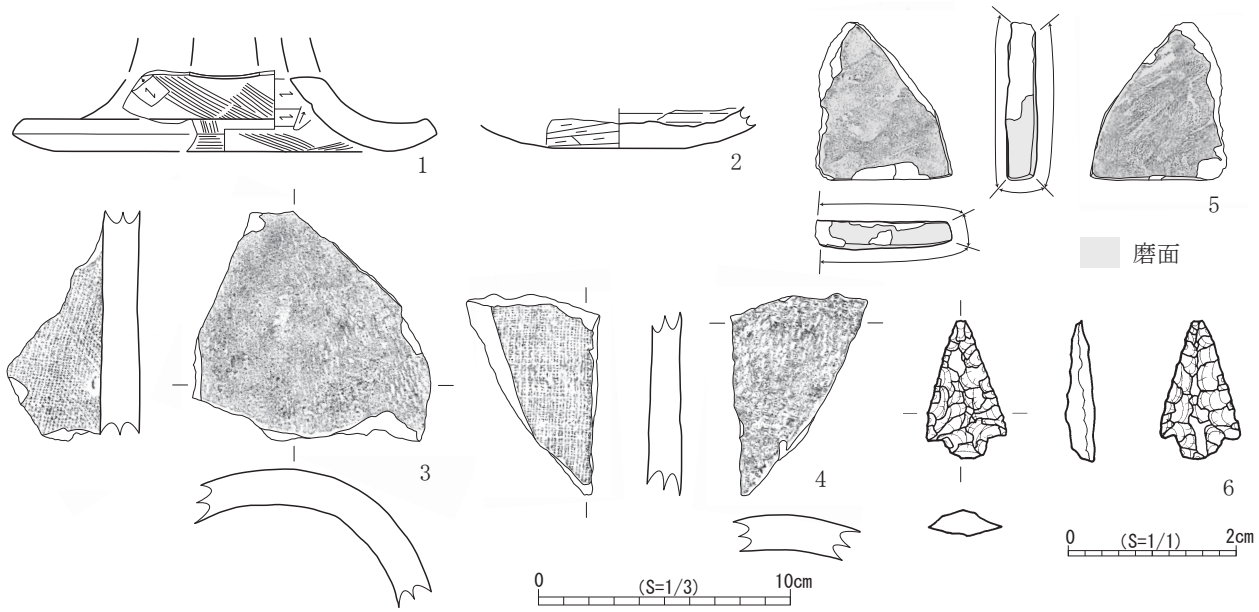
調査区の東側で検出された南北方向の溝跡である。SX2380 性格不明遺構より新しい。規模は検出長が約 5.7 ～ 6.0 ｍで調査区外にさらに延びる。方向はＮ－ 1°－Ｗで、上端幅が約 3.0 ～ 3.5 ｍ、中端幅が約 2.6 ～ 2.9 ｍ、下端幅が約 1.7 ～ 1.9 ｍである。底面は平坦で、断面形状は上半部が開く逆台形を呈する。遺構検出面から底面までの深さは約 80 ～ 90 ㎝である。堆積土層は 20 層に細分され、4a 層中に灰白色火山灰を含んでいる。土層の堆積状況から 2 時期にわたり使用されていたものと考えられる。1 層～ 6 層が新しい段階の溝の堆積土、7 層～ 13 層が古い段階の溝の堆積土と考えられ、新しい段階の溝跡を SD2374a 溝跡、古い段階の溝跡を SD2374b 溝跡とした。

遺物は脚部に透かし孔を持つ土師器高坏（C － 1200・第 76 図 1）や、須恵器坏の底部（E － 597・第 76 図 2）、丸瓦（F － 117・第 76 図 3、F － 118・第 76 図 4）などが出土している。また、SD2374a 溝跡の 4a 層よりも上層から砥石に転用した中世陶器片（Ic － 2・第 76 図 5）が、SD2374b 溝跡底面付近から石鏃（K － 358・第 76 図 6）が出土している。



遺構名	層位	色調	土質	備考・混入物
SD2374a	1	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～５㎜）やや多量に含む、10YR5/1 褐灰色粘土ブロック（φ２～３㎝）中量含む
	2	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～２㎜）少量含む、10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロック（φ１～３㎝）中量含む、5Y6/2 灰オリーブシルト質粘土厚さ５～10㎜程の薄層状に含む
	3	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～３㎜）やや多量に含む、10YR6/1 褐灰色シルト質粘土ブロック（φ２～３㎝）少量含む
	4a	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～５㎜）多量含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ１～３㎝）、10YR8/1 灰白色火山灰ブロック（φ３～５㎝）を中量含む、炭化粒（φ１～３㎜）微量含む
	4b	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～５㎜）多量含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ２～５㎝）少量含む
	5	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒（φ３～５㎜）、10YR8/1 灰白色火山灰ブロック（φ１㎝）中量含む
	6a	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～５㎜）多量含む、10YR3/1 黒褐色粘土ブロック（φ１～３㎜）中量含む
	6b	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～５㎜）やや多量に含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ１～３㎝）少量含む
	6c	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～３㎜）多量含む
SD2374b	7	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ１～５㎜）中量含む
	8a	10YR6/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ３～５㎜）やや多量に含む
	8b	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ３～５㎜）やや多量に含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ１～５㎝）少量含む
	9	10YR5/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ１～10㎜）やや多量に含む、マンガン粒（φ１～３㎜）少量含む
	10	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～５㎜）やや多量に含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ１～３㎝）中量含む
	11a	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～５㎜）やや多量に含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ１～２㎝）少量含む
	11b	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～10㎜）やや多量に含む
	11c	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ１～５㎜）やや多量に含む
	12a	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒（φ１～３㎜）多量含む、酸化鉄粒（φ３～５㎜）中量含む、10YR8/2 灰白色粘土粒（～φ１㎝）少量含む
	12b	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒（φ１～３㎜）、酸化鉄粒（φ３～５㎜）多量含む、10YR8/1 灰白色粘土ブロック（φ１～５㎝）中量含む
	13	10YR5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	マンガン粒（φ１～５㎜）やや多量に含む、10YR7/2 にぶい黄橙色粘土粒（～φ１㎝）中量含む

第 75 図　Ⅲ層上面検出遺構配置図・ＳＤ 2374 溝跡北壁断面図



図版番号	登録番号	種別	器形	法量（cm）	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
1	C-1200	土師器	高坏	口径：－　器高：（残 3.0）　脚裾径：（17.0）	ナデ→ヘラケズリ　脚部透かし孔有り	ヘラケズリ　ナデ	26-7
2	E-597	須恵器	坏？	口径：－　底径：（5.2）　器高：（残 1.6）	ヘラケズリ　底部：回転ヘラ切り？	ロクロナデ	26-8
3	F-117	瓦	丸瓦	最大長：（9.0）　最大幅：（9.2）　厚さ：1.5	凹面：布目痕→ヘラナデ　凸面：縄叩き→ヘラナデ		26-9
4	F-118	瓦	丸瓦	最大長：（7.4）　最大幅：（5.3）　厚さ：1.3	凹面：布目痕→ナデ　凸面：縄叩き→ナデ		26-10
5	Ic-2	中世陶器	甕？	残存長：（6.3）　残存幅：（5.5）　厚さ：1.0	外面：叩き→ナデ　磨面あり　内面：ロクロナデ→指ナデ？磨面あり　側面：磨面あり　砥石として再利用		26-11
6	K-358	石器	石鏃	長さ：(1.9)　幅：1.2　厚さ：0.4　重量：0.7			26-12

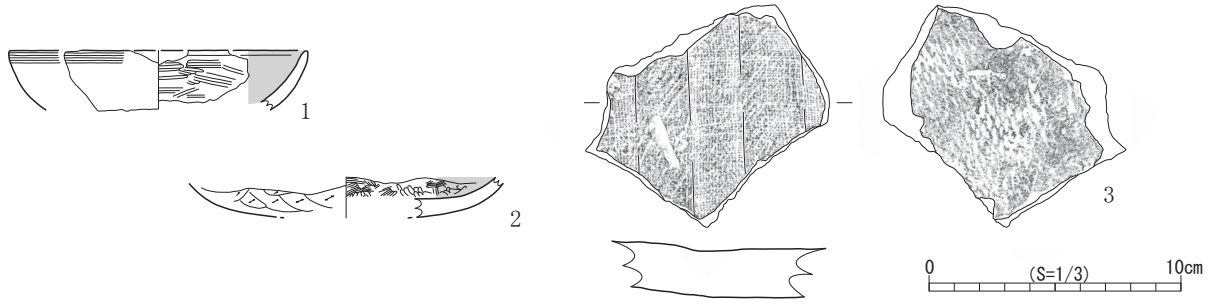
第 76 図　ＳＤ 2374 溝跡出土遺物

【SX2375 性格不明遺構】

調査区の東端に位置する。SD2376 溝跡、SD2377 溝跡、SD2378 溝跡より新しい。当初は、SD2377 溝跡として遺構確認と掘り下げを行ったが、掘り下げの途中で SD2376 溝跡が検出されたことから調査区壁断面の土層を再度検討し、別遺構と判断した。平面形や規模、断面形状は不明であるが、調査区外にさらに広がる。深さは約 15 ～ 25 cmである。堆積土層は 2 層に分層される。遺物は出土していない。

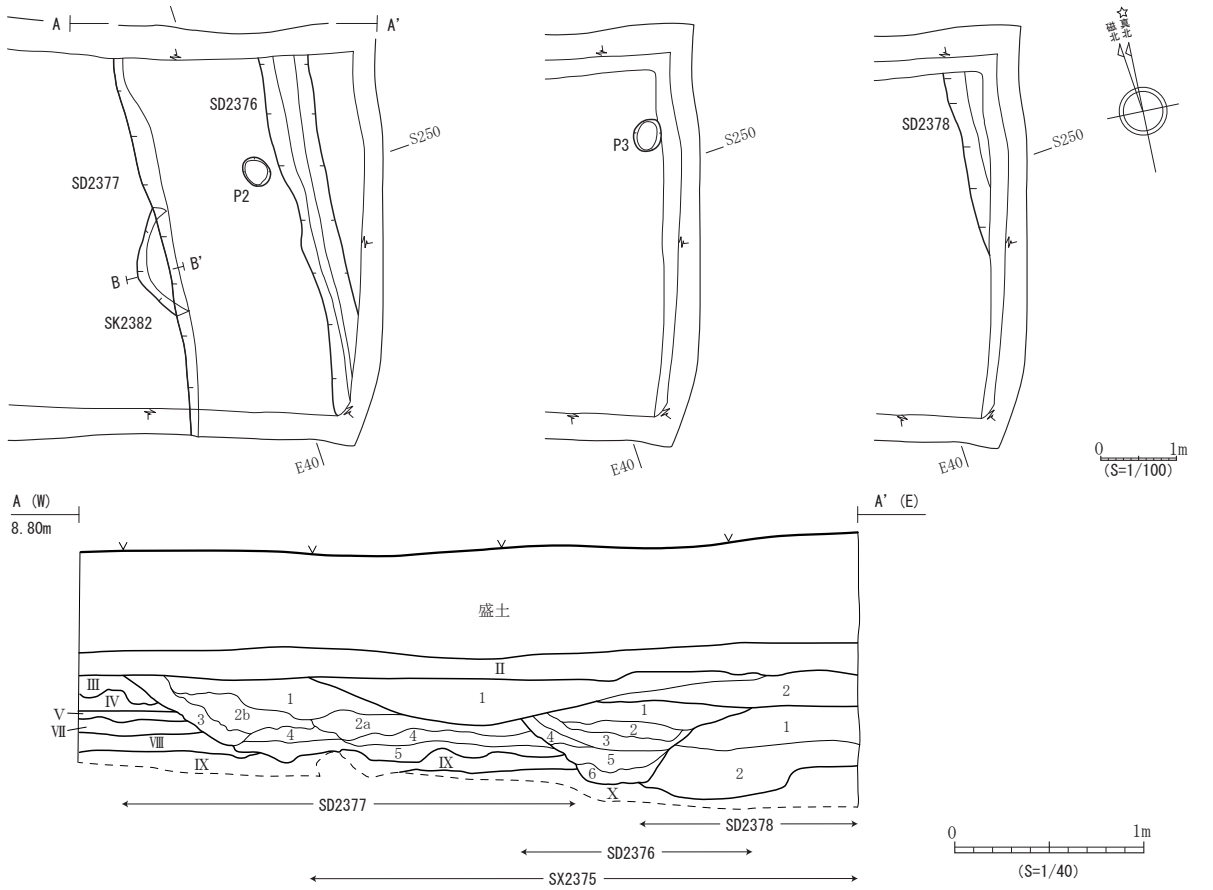
【SD2376 溝跡】

調査区の東側に位置する。SX2375 性格不明遺構より古く、SD2377 溝跡、SD2378 溝跡、ピット 3 より新しい。SD2377 溝跡を掘り下げる途中で検出した。規模は検出長が 4.8 m、幅が 40 ～ 60 cmで、調査区外にさらに延びる。方向はＮ－ 1°－Ｗで、断面形状は上幅が広い逆台形を呈すると推測される。底面は平坦で、検出した深さは約 45 cmである。堆積土層は 6 層に分層される。遺物は土師器の坏、平瓦などが出土している。



図版番号	登録番号	種別	器形	法量（cm）	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
1	C-1203	土師器	坏	口径：(11.9)　底径：－　器高：（残 2.4）	口縁部：ヨコナデ　体部：摩滅	ヘラミガキ　黒色処理	26-13
2	C-1202	土師器	坏	口径：－　底径：(5.2)　器高：（残 1.6）	体部：ケズリ	ヘラミガキ　黒色処理	26-14
3	G-165	瓦	平瓦	最大長：(7.1)　最大幅：(8.6)　厚さ：2.0	凹面：布目痕→ナデ　模骨痕　凸面：縄叩き→ナデ		26-15

第 77 図　ＳＤ 2376 溝跡出土遺物

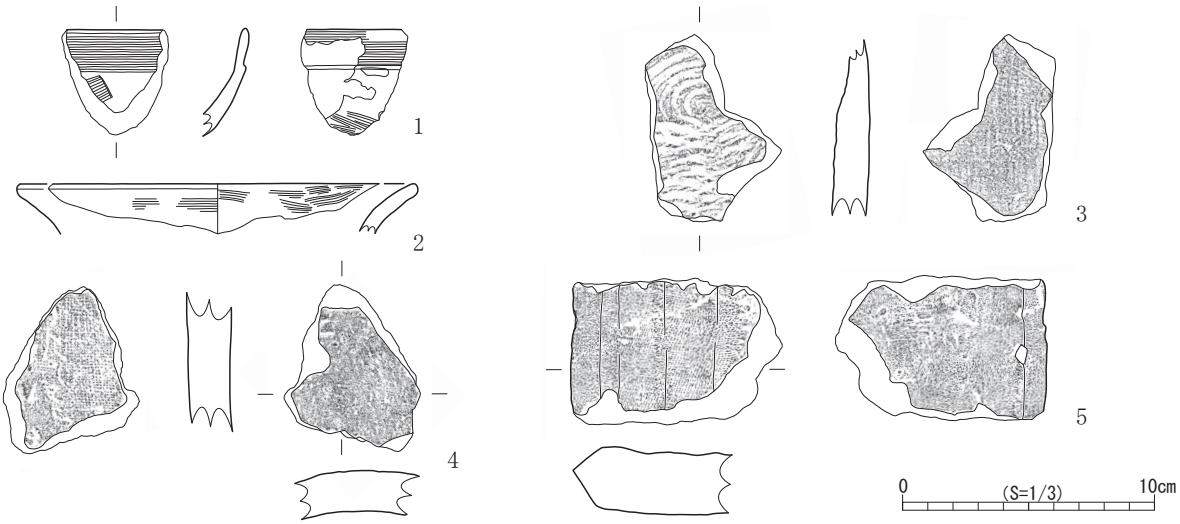


遺構名	層位	土色	土質	備考・混入物
SX2375	1	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ㎜）中量含む
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）、マンガン粒（φ 1 ～ 5 ㎜）やや多量に含む、10YR5/1 褐灰色シルト質粘土ブロック （φ 1 ～ 2 ㎝）中量含む、10YR3/1 黒褐色シルト質粘土ブロック（φ 0.5 ～ 1 ㎝）、10YR6/2 灰黄褐色シルト質 粘土ブロック（φ 1 ㎝）少量含む
SD2376	1	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）、酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 3 ㎜）やや多量に含む、5Y5/2 オリーブ色粘土粒（φ 3 ～ 10 ㎜）中量含む
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）、酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）やや多量に含む
	3	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）やや多量に含む
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）やや多量に含む 斑状に混ざる
		10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	
	5	10YR5/1 褐灰色	砂質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）多量含む、炭化粒（φ 2 ～ 3 ㎜）極微量含む
	6	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）、マンガン粒（φ 1 ～ 5 ㎜）やや多量に含む、10YR7/2 にぶい黄橙色粘土粒（φ 5 ～ 10 ㎜）中量含む
SD2377	1	2.5Y5/1 黄灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 3 ㎜）、炭化粒（φ 0.5 ㎜）やや多量に含む
	2a	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 3 ㎜）やや多量に含む、炭化粒（φ 0.5 ㎜）極微量含む
	2b	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）多量含む
	3	2.5Y5/1 黄灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 3 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）やや多量に含む、5Y5/2 灰オリーブ色粘土質シルトブロック （φ 1 ～ 5 ㎝）中量含む、10YR6/2 灰黄褐色シルト質粘土ブロック（φ 1 ～ 5 ㎝）、炭化粒（φ 0.5 ㎜）少量含む
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）多量含む、炭化粒（φ 1 ～ 2 ㎜）、5Y7/2 灰白色粘土ブロック （φ 0.5 ～ 2 ㎝）中量含む
	5	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）やや多量に含む、5Y7/2 灰白色シルト質粘土ブロック（φ 0.5 ～ 3 ㎝）、10YR3/1 黒褐色 シルト質粘土粒（φ 5 ～ 10 ㎜）中量含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）、炭化粒（φ 0.5 ㎜）少量含む
SD2378	1	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 1 ～ 2 ㎜）多量含む、10YR7/3 にぶい黄橙色粘土粒（φ 3 ～ 5 ㎜）、炭化粒（φ 3 ～ 5 ㎜）少量含む 斑状に混ざる
		10YR4/4 褐色	シルト質粘土	
	2	10YR7/2 にぶい黄橙色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 1 ～ 5 ㎜）やや多量に含む ブロックが斑状に混ざる
		10YR4/1 褐灰色	粘土	
		10YR5/1 褐灰色	粘土	

第 78 図　ＳＤ 2377 溝跡と重複する遺構配置図・北壁断面図

【SD2377 溝跡】

調査区の東側で検出された南北方向の溝跡である。SX2375 性格不明遺構、SD2376 溝跡より古く、SK2382 土坑、ピット 2 より新しい。規模は検出長が 5.1 ｍで調査区外にさらに延びる。方向はＮ－ 1°－Ｗで、検出した幅は、上端幅が 1.0 ｍ、下端幅が 1.8 ｍであり、断面形状は不明である。検出面から底面までの深さは 40 ～ 55 ㎝である。堆積土層は 6 層に細分される。遺物は土師器の坏や甕、須恵器小片、瓦などが出土している。（第 79 図）



図版番号	登録番号	種別	器形	法量（cm）	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
1	C-1205	土師器	坏	口径：(10.0)　底径：－　器高：(残 4.2)	口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラナデ	口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラナデ	27-1
2	C-1204	土師器	甕	口径：(15.8)　底径：－　器高：(残 2.0)	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ナデ	27-2
3	E-598	須恵器	甕？	口径：－　底径：－　器高：(残 7.0)	平行叩き→ヘラナデ	同心円文	27-3
4	F-119	瓦	丸瓦	最大長：(6.0)　最大幅：(5.1)　厚さ：1.65	凹面：布目痕　凸面：縄叩き→ナデ		27-4
5	G-166	瓦	平瓦	最大長：(5.9)　最大幅：(8.5)　厚さ：2.5	凹面：布目痕　模骨痕　凸面：ヘラケズリ　ナデ　側面：ヘラケズリ		27-5

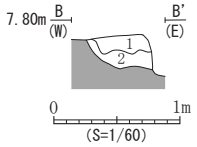
第 79 図　ＳＤ 2377 溝跡出土遺物

【SD2378 溝跡】

調査区の東端に位置する。SX2375 性格不明遺構、SD2376 溝跡より古い。SD2376 溝跡を完掘した際に検出した。規模は検出長が 2.5 m、幅が 40 ～ 60 cmで、調査区外にさらに延びる。方向はＮ－2°－Ｗで、断面形状は不明である。検出した深さは約 45 cmである。堆積土層は 2 層に分層される。遺物は出土していない。

【SK2382 土坑】

調査区の東側に位置する。SD2377 溝跡より古い。Ⅲ層中で確認された土坑である。平面形・断面形状は不明であるが、規模は南北 1.5 m以上、東西 40 cm以上であり、深さは約 25 cmである。堆積土層は 2 層に分層される。遺物は出土していない。



遺構名	層位	土色	土質	備考・混入物
SK2382	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	10YR6/4 にぶい黄橙色粘土質シルトブロック（φ 1 ～ 3 cm）中量含む　均質に混ざる
		10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	ブロックが斑状に混ざる
		7.5YR6/8 橙色	粘土質シルト	
		10YR6/4 にぶい黄橙色		

第 80 図　ＳＫ 2382 土坑土層断面図

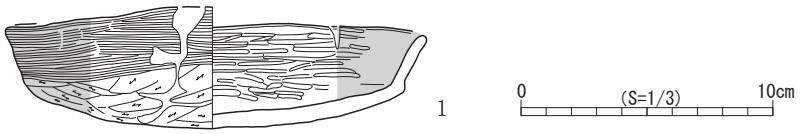
【ピット】

P1 は調査区中央部に位置する。Ⅲ層上面の遺構と考えられる。平面形状は円形を呈し、直径 40 cmで、深さは 50 cmである。P2 は調査区東部に位置する。SD2377 溝跡を完掘した際に検出した。平面形状は円形を呈し、直径 40 cmで、深さは約 5 cmである。P3 は調査区東端に位置する。SD2376 溝跡を掘り下げる途中で検出した。平面形状は円形を呈し、直径 40 cmで、深さは約 5 cmである。3 基とも柱痕跡は検出されておらず、遺物も出土していない。

(2) Ⅲ層中検出遺構

基本層Ⅲ層を平面的に掘り下げていく途中で、基本層Ⅳ層と基本層Ⅲ層及びⅢ層類似層（第 84 図の（Ⅲ）a 層と（Ⅲ）b 層）の分布を確認した（写真 24-2）。第 74 図のように、Ⅳ層上面は北西側が高く、南東側が低く、南東方へ畦畔状に分布する。Ⅲ層は、下面の乱れと直下層を小ブロックで含むことから、水田耕作土と判断される。こ

れはⅣ層上面に疑似畦畔Bと段差が形成されていることを示しており、この調査区には、基本層Ⅲ層を耕作土とする水田跡が存在していたと考えられる。なお、第84図の（Ⅲ）a層と（Ⅲ）b層は断面観察で分層したが、層相は基本層Ⅲ層とほぼ同じである。出土遺物は（Ⅲ）a層あるいは（Ⅲ）b層から口縁部が直線的に外傾し、底部との境に段を有する丸底の土師器坏が1点出土している。



図版番号	登録番号	種別	器形	法量（cm）	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
1	C-1207	土師器	坏	口径：16.9　底径：14.7　器高：4.9	口縁部:ナデ（一部ミガキ）体～底部:ヘラケズリ（→ナデ）一部黒色処理	ミガキ　黒色処理	27-6

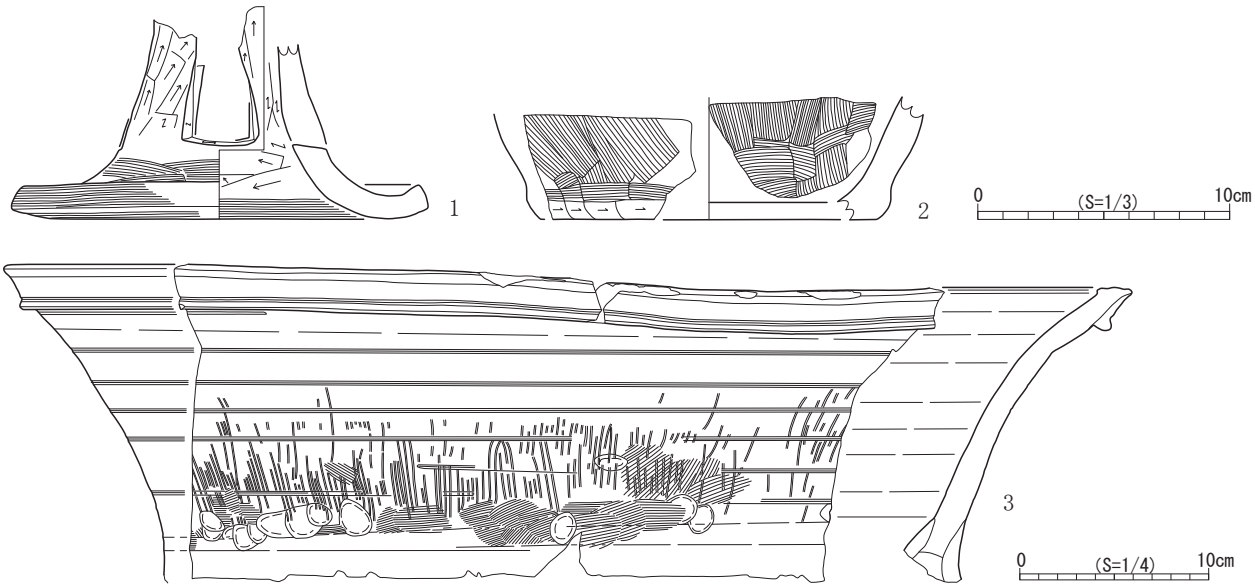
第81図　Ⅲ層類似層中出土遺物

(3) Ⅳ層上面検出遺構

Ⅳ層上面で検出した遺構は、溝跡1条（SD2379）、性格不明遺構1基（SX2380）、ピット3基（P4～P6）である。また、これらの遺構と重複するピット2基（P7・8）についても本項で報告する。

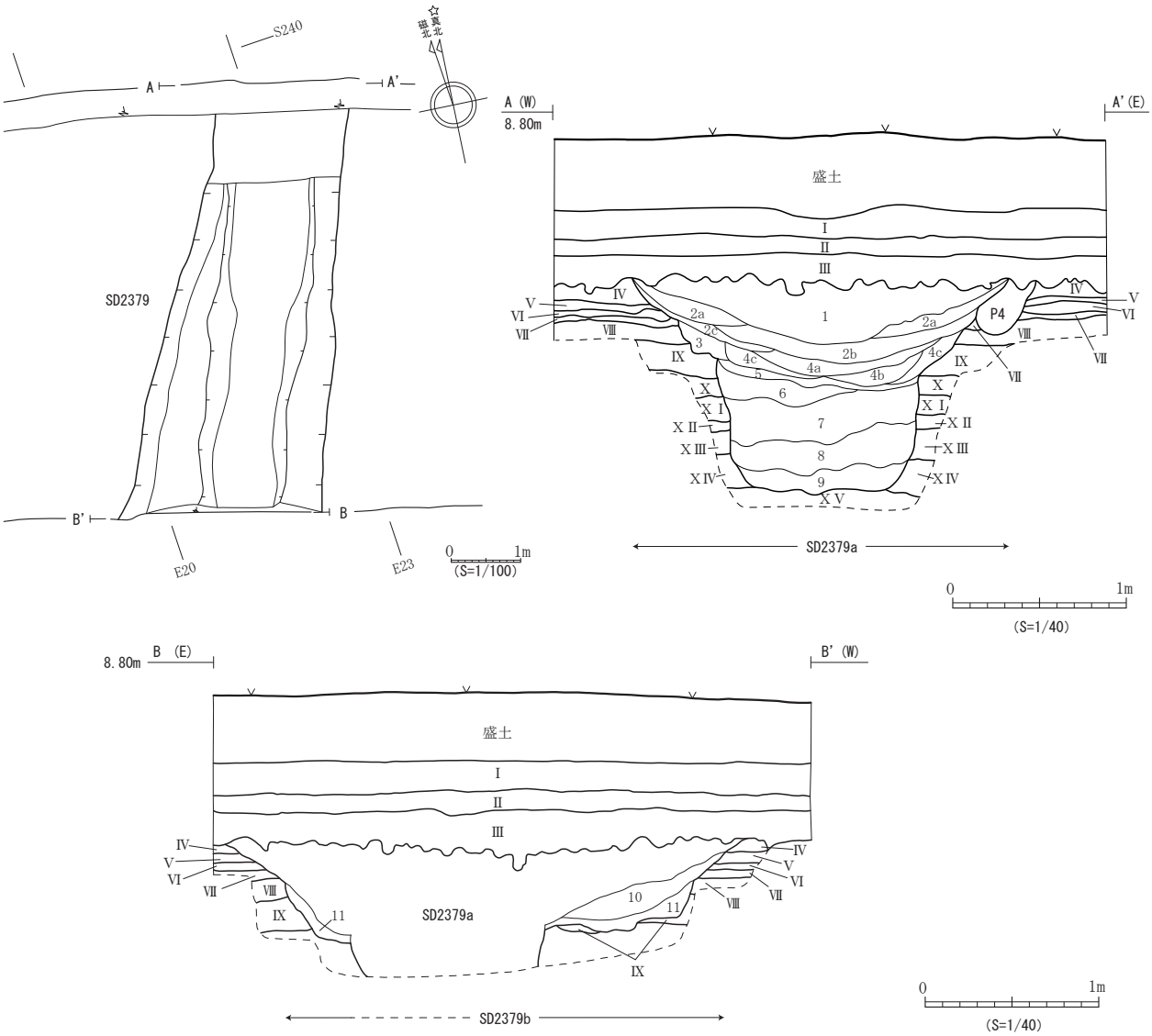
【SD2379a・b溝跡】

調査区の西側で検出された南北方向の溝跡である。規模は検出長が約6.2ｍで調査区外にさらに延びる。方向はＮ－17°－Ｅで、上端幅が1.85～2.7ｍ、中端幅が1.2～1.95ｍ、下端幅が0.75～1.1ｍである。断面形状は上半部が開く薬研形を呈する。底面はほぼ平坦で、遺構検出面から底面までの深さは1.15～1.25ｍである。堆積土層は15層に細分され、土層の堆積状況や壁断面の観察から2時期にわたり使用されていたものと考えられる。北壁で確認した1層～9層が新しい段階の溝の堆積土と考えられ、SD2379a溝跡とした。また、南壁でのみ確認された10層･11層がやや方向の異なる（Ｎ－27°－Ｅ）古い段階の溝の堆積土と考えられ､SD2379b溝跡とした。なお、SD2379a溝跡の下層部にあたる6層～9層は人為的に埋め戻された層と考えられる。遺物は、脚部に四方透かしのある土師器高坏や、土師器甕の底部、推定口径60㎝程の須恵器甕口縁部などが出土している。



図版番号	登録番号	種別	器形	法量（cm）	外面調整・付着物等	内面調整・付着物等	写真図版
1	C-1199	土師器	高坏	口径：－　器高：（残8.0）　脚裾径16.7～17.0	脚柱部：ヘラケズリ　脚裾部：ヘラナデ　ヨコナデ　四方透かし	脚柱部：ヘラケズリ 脚裾部：ヨコナデ	27-7
2	C-1201	土師器	甕？	口径：－　底径：(13.5)　器高：（残4.9）	ヘラナデ　ケズリ	ヘラナデ	27-8
3	E-596	須恵器	甕	口径：(60.0)　底径：－　器高：（残16.9）	ロクロナデ→ハケメ→沈線→ユビナデ・ユビオサエ	ロクロナデ　粘土継ぎ目あり	27-9

第82図　ＳＤ2379溝跡出土遺物

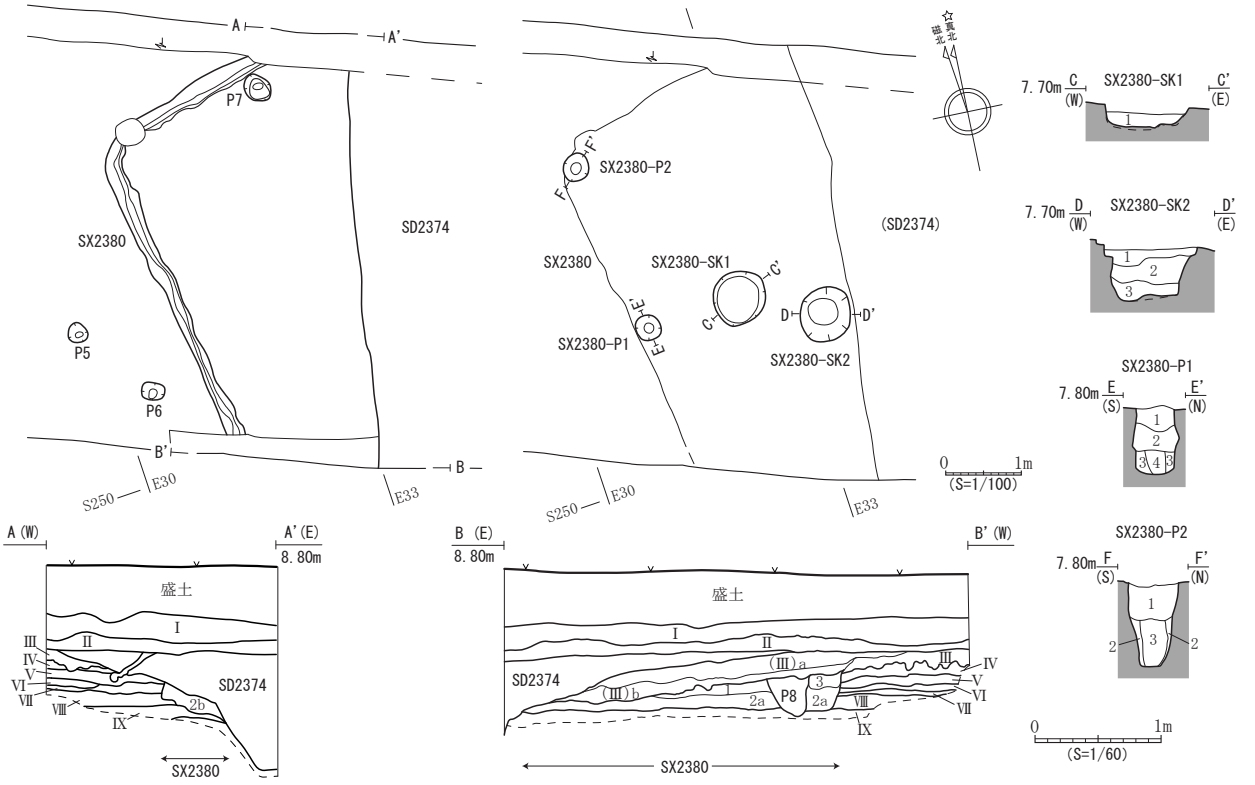


遺構名	層位	土色	土質	備考・混入物
SD2379a	1	10YR4/1 褐灰色 10YR5/1 褐灰色 10YR8/1 灰白色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）多量含む　ブロックがに斑状に混ざる
		10YR4/1 褐灰色	粘土	
	2a	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）やや多量に含む、10YR8/1 灰白色シルト質粘土粒（φ 0.5 ～ 2 ㎝）中量含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 2 ～ 5 ㎝）少量含む
	2b	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜程）やや多量に含む
	2c	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）、10YR8/1 灰白色シルト質粘土粒（φ 5 ㎜）中量含む
	3	10YR4/1 褐灰色 10YR8/1 灰白色	粘土質シルト シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）やや多量に含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 2 ㎝）中量含む　　斑状に混ざる
	4a	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）、10YR8/1 灰白色シルト質粘土粒（φ 5 ㎜）中量含む
	4b	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）多量含む、10YR8/1 灰白色シルト質粘土粒（φ 0.2 ～ 3 ㎝）やや多量に含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 2 ㎝）中量含む
	4c	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）多量含む、10YR8/1 灰白色粘土ブロック（φ 0.5 ～ 2 ㎝）やや多量に含む
	5	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）やや多量に含む、10YR8/1 灰白色粘土ブロック（φ 0.5 ～ 2 ㎝）、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 0.5 ～ 1.5 ㎝）中量含む
	6	10YR4/1 褐灰色 10YR8/1 灰白色	シルト質粘土	マンガン粒（φ 1 ㎜）多量含む、酸化鉄ブロック（φ 0.5 ～ 2 ㎝）やや多量に含む　　斑状に混ざる
	7	10YR7/1 灰白色 7.5YR5/1 褐灰色 7.5YR4/1 褐灰色	粘土	炭化物粒（φ 0.5 ～ 5 ㎜）、酸化鉄（φ 1 ㎜～ 5 ㎝）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）中量含む　　ブロックが斑状に混ざる
	8	2.5Y5/1 黄灰色 10YR7/1 灰白色	粘土	炭化物粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 2 ㎝）やや多量に含む、マンガン粒（φ 0.5 ～ 1 ㎜）中量含む、7.5YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 2 ㎝）微量含む　　ブロックが斑状に混ざる
	9	2.5Y5/1 黄灰色	粘土	グライ化した 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト質砂　層上部に薄層、層中にブロック（φ 1 ～ 10 ㎝）やや多量に含む、炭化粒（φ 0.5 ～ 3 ㎜）、酸化鉄粒（φ 0.1 ～ 1.5 ㎝）やや多量に含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）中量含む
SD2379b	10	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）、10YR8/1 灰白色粘土粒（φ 1 ～ 10 ㎜）やや多量に含む、10YR4/1 褐灰色粘土粒（φ 5 ～ 10 ㎜）少量含む
	11	10YR4/1 褐灰色 10YR8/1 灰白色	シルト質粘土 粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ㎜）やや多量に含む、基本層Ⅹ層ブロック状に少量含む　　ブロックが斑状に混ざる

第 83 図　ＳＤ 2379 溝跡平面図・土層断面図

【SX2380 性格不明遺構】

調査区の東側で検出された。SD2374 溝跡、ピット 1 より古い。平面形は方形を基調としたものと推定される。検出した規模は南東－北西方向が 4 m、南西－北東方向が 2.5 mである。壁際で周溝状の凹みを確認しており、幅は約 15 ～ 30 ㎝、深さは約 15 ～ 20 ㎝である。竪穴住居跡の可能性があるが、上面が水田耕作土と考えられるⅢ層類似層（(Ⅲ）a・b 層）による削平を受け、詳細が不明なため性格不明遺構とした。検出面から底面までの深さは約 30 ㎝である。堆積土は 4 層に細分される。遺物は土師器小片が出土している。また、2 層上面で土坑 2 基



遺構名	層位	土色	土質	備考・混入物
（Ⅲ）a		10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 3 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 1 ～ 3 ㎜）、10YR5/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 5 ㎝楕円形）中量含む、10YR8/2 灰白色粘土粒（φ 2 ～ 3 ㎜）少量含む
（Ⅲ）b		10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 3 ㎜）多量含む、10YR5/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 3 ㎝）、10YR8/2 灰白色粘土粒（φ 0.5 ～ 1.5 ㎝）中量含む、炭化物（φ 1.5 ㎝）極微量含む
SX2380	1	10YR5/1 褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む、マンガン粒（φ 0.5 ～ 2 ㎜）斑状に多量含む、10YR8/2 灰白色粘土粒（φ 1 ～ 10 ㎜）斑状にやや多量含む、10YR5/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 2 ㎝）中量含む
	2a	7.5YR6/8 橙色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 2 ㎜）多量含む、10YR8/2 灰白色粘土ブロック（φ 1 ～ 5 ㎝）、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 1 ～ 10 ㎝）斑状に中量含む
	2b	10YR5/1 褐灰色 10YR8/1 灰白色	シルト質粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 1 ～ 2 ㎜）多量含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 0.5 ～ 2 ㎝）中量含む　φ 1 ～ 5 ㎝のブロックが斑状に混ざる
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒（φ 0.5 ～ 2 ㎜）多量含む、酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 5 ㎜）やや多量に含む、10YR4/1 褐灰色粘土ブロック（φ 10 ㎝）、10YR7/2 にぶい黄橙色粘土粒（φ 0.5 ～ 10 ㎜）中量含む、周溝状の凹み堆積土
SX2380 -SK1	1	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒（φ 1 ㎜）やや多量に含む　橙色粘土質シルト、灰黄褐色シルト質粘土のブロックが斑状に混ざる
SX2380 -SK2	1	10YR4/1 褐灰色	粘土質シルト	マンガン粒（φ 1 ㎜）やや多量に含む　橙色粘土質シルト、灰黄褐色シルト質粘土のブロックが斑状に混ざる
	2	7.5YR6/8 橙色	シルト質粘土	マンガン粒（φ 1 ㎜）やや多量に含む、炭化粒（φ 2 ～ 3 ㎜）微量含む　灰黄褐色シルト質粘土、褐灰色粘土質シルトのブロックが斑状に混ざる
	3	10YR4/1 褐灰色	シルト質粘土	マンガン粒（φ 1 ㎜）、炭化粒（φ 2 ～ 3 ㎜）少量含む　橙色・灰黄褐色シルト質粘土のブロックが斑状に混ざる
SX2380 -P1	1	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む　褐灰色粘土、灰白色シルト質粘土ブロック斑状に混ざる
	2	10YR5/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）やや多量に含む、10YR8/1 灰白色粘土ブロック（φ 1 ～ 2 ㎝）少量含む
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 1 ～ 3 ㎜）多量含む　褐灰色粘土、灰白色粘土ブロック斑状に混ざる
	4	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）、マンガン粒（φ 1 ～ 3 ㎜）多量含む　灰白色粘土ブロック斑状に混ざる
SX2380 -P2	1	7.5YR6/8 橙色	粘土	酸化鉄粒（φ 0.5 ～ 5 ㎜）多量含む　、マンガン粒（φ 0.5 ～ 2 ㎜）やや多量に含む、黒色粘土少量含む　褐灰色粘土ブロック斑状に混ざる
	2	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 5 ㎜）、マンガン粒（φ 0.5 ～ 2 ㎜）やや多量に含む　褐灰色粘土、灰白色粘土斑状に混ざる
	3	10YR4/1 褐灰色	粘土	酸化鉄粒（φ 1 ～ 10 ㎜）、マンガン粒（φ 1 ～ 5 ㎜）多量含む　褐灰色粘土、灰白色粘土斑状に混ざる

第 84 図　ＳＸ 2380 性格不明遺構平面図・土層断面図

(SX2380-SK1・SK2)、底面でピット2基（SX2380-P1・P2）を確認した。SX2380-SK1・SK2土坑は直径70～80㎝の円形を呈し、深さは10～40㎝である。SX2380-P1・P2ピットは直径30～40㎝の円形を呈し、深さは55～65㎝であり、いずれも柱痕跡が確認されている。ピット2基に関しては、断面観察の結果、2層上面から掘り込まれたことを確認した。土坑・ピットから遺物は出土していない。

【ピット】

P4は調査区西側に位置する。調査区北壁断面で確認しており、SD2379溝跡より古い。P5・P6は調査区中央部に位置する。直径20～30㎝の歪な円形を呈し、深さは15～20㎝である。柱痕跡は検出されていない。

P7は調査区東側に位置する。SX2380性格不明遺構の1層上面で確認した。直径30～40㎝の歪な円形を呈し、深さは65㎝である。柱痕跡が検出され、柱痕跡の直径は10～18㎝である。P8は調査区東側に位置する。SX2380性格不明遺構南壁断面で確認しており、SX2380性格不明遺構より新しい。

いずれのピットからも遺物は出土していない。

５．まとめ

今回の郡山遺跡第260次調査区からは合計で溝跡が5条（SD2374・SD2376・SD2377・SD2378・SD2379）、性格不明遺構が2基（SX2375・SX2380）、土坑が1基（SK2382）、ピットが8基検出された。

このうち、Ⅲ層上面検出のSD2374溝跡については、方向がＮ－1°－Ｗで、SD2374aとSD2374bの2時期の変遷があると考えられる。周辺の調査区では、北側の延長線上に位置する第41次調査区、第94次調査区、第194次調査区において、Ⅱ期官衙の基準方向と同じく真南北方向を基準とした南北に延びるSD476溝跡、SD2213溝跡が検出されており、SD2374溝跡はこれに続く可能性がある（第85図）。この溝跡は、すべて合わせると長さ110ｍ以上になると予想され、Ⅱ期官衙と関連する何らかの区画施設であった可能性が考えられる。

なお、周辺の調査区ではこの溝跡について2時期の変遷があることは確認されていないが、第194次調査区で検出されたSD476溝跡とSD2213溝跡も同方向を基準とする重複した溝跡と考えられるため、当該溝跡は一部掘り直しが行われている可能性がある。この溝跡については、今後の調査によってさらに検討していく必要がある。

また、SD2379溝跡については、方向性をもった比較的規模の大きな溝跡であるが、これまでに周辺の調査区で同様の規模や方向性をもった溝跡は検出されていない。方向がＮ－17°－Ｅであり、Ⅰ期官衙・Ⅱ期官衙の造営基準とは異なっているため、官衙との関連については現時点では不明であるが、今後周辺での調査事例の蓄積を待って、官衙との関連を考えていく必要がある。

今回の調査では、Ⅳ層上面で検出されたSX2380性格不明遺構や、規模の大きな溝であるSD2379溝跡が機能した後に、Ⅲ層を耕作土とする水田が作られたと考えられ、遺跡の環境や土地利用の変遷についての新たな知見が得られた。その後、Ⅲ層上面で検出されたSD2374a・ｂ溝跡が掘られており、Ⅱ期官衙と関連する可能性が考えられた。

本調査では、基本層Ⅲ層からⅣ層にかけて層位的に遺構が検出され、その変遷を把握できたことが成果である。

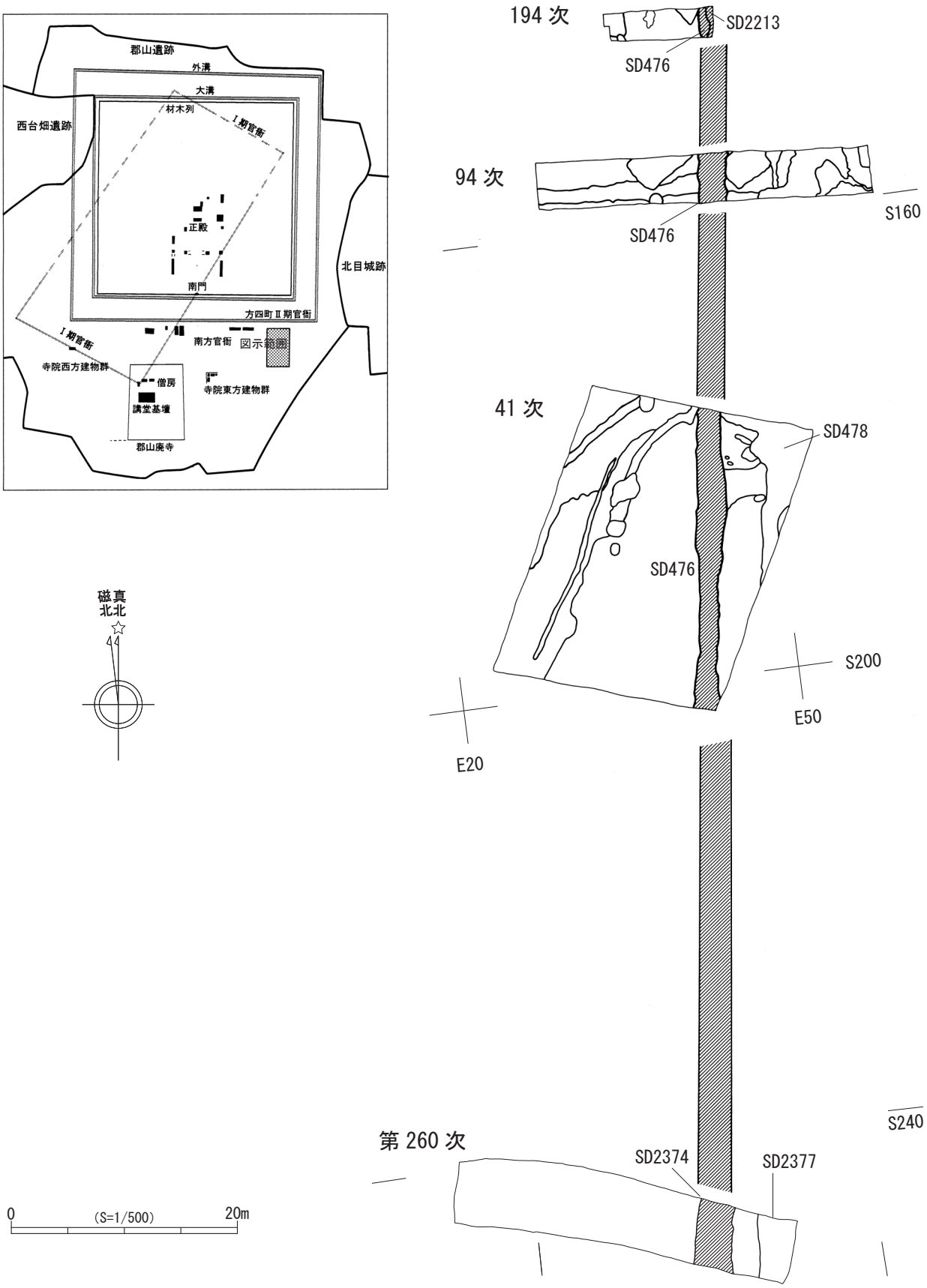
引用・参考文献

仙台市教育委員会　1984『郡山遺跡Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第64集

仙台市教育委員会　1993『郡山遺跡　第94次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第177集

仙台市教育委員会　2005『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編（1）』仙台市文化財調査報告書第283集

仙台市教育委員会　2010『郡山遺跡30』仙台市文化財調査報告書第373集



第 85 図　郡山遺跡第 260 次調査区周辺の遺構

１．Ⅲ層上面遺構検出状況（東から）

２．Ⅲ層中遺構検出状況（西から）

３．SD2374 溝跡北壁断面（南から）

４．SD2374 溝跡完掘状況（北から）

５．SD2377 溝跡等北壁断面（南から）

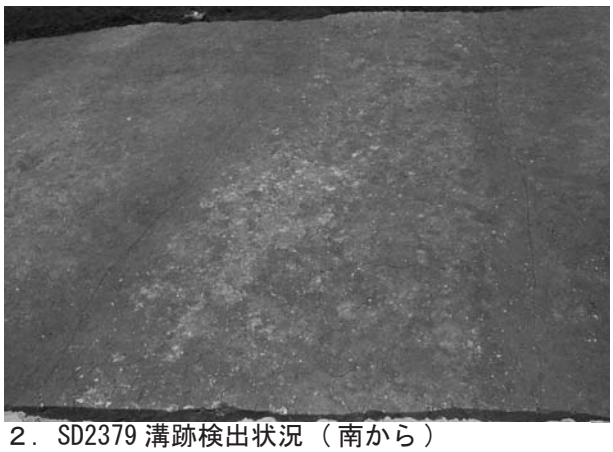
６．SD2377・SD2376 溝跡完掘状況（南から）

７．SX2380 性格不明遺構南壁断面（北から）

８．SX2380 性格不明遺構完掘状況（南から）

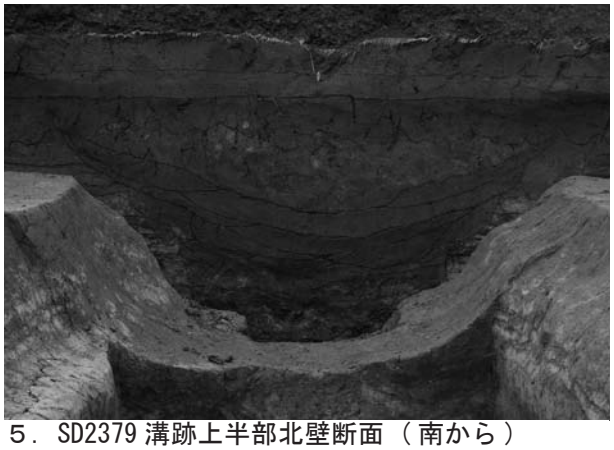
写真図版 24　郡山遺跡　第 260 次本発掘調査区（1）

１．Ⅲ層類似層遺物(C-1207)出土状況（北東から）


２．SD2379 溝跡検出状況（南から）

３．SD2379 溝跡遺物（E-596）出土状況（北から）

４．SD2379 溝跡遺物(C－1199)出土状況（東から）

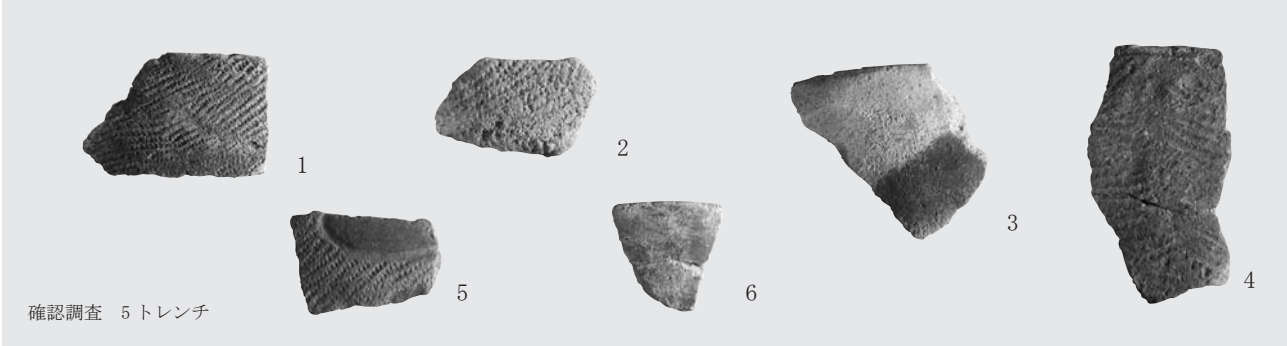

５．SD2379 溝跡上半部北壁断面（南から）

６．SD2379 溝跡下半部北壁断面（南から）

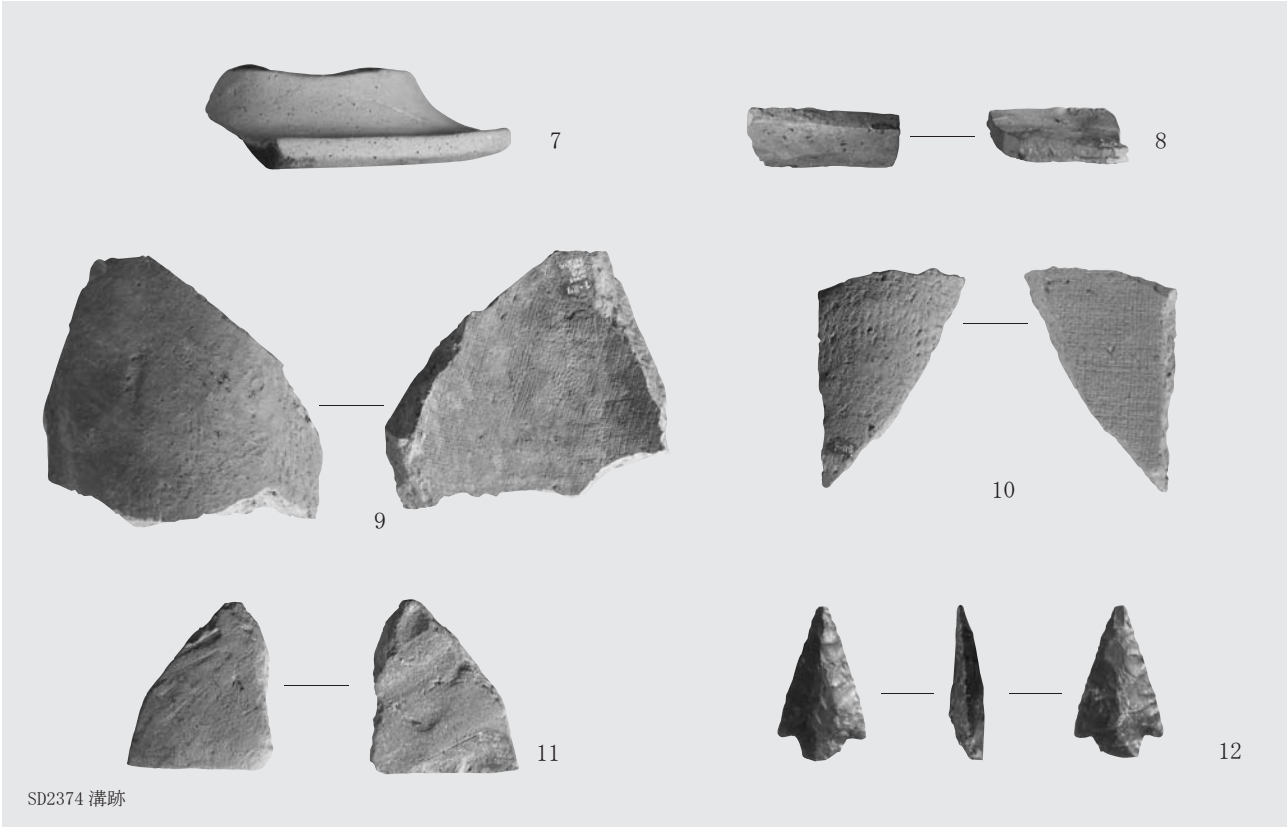
７．SD2379 溝跡完掘状況（南から）

８．調査区全景完掘状況（東から）

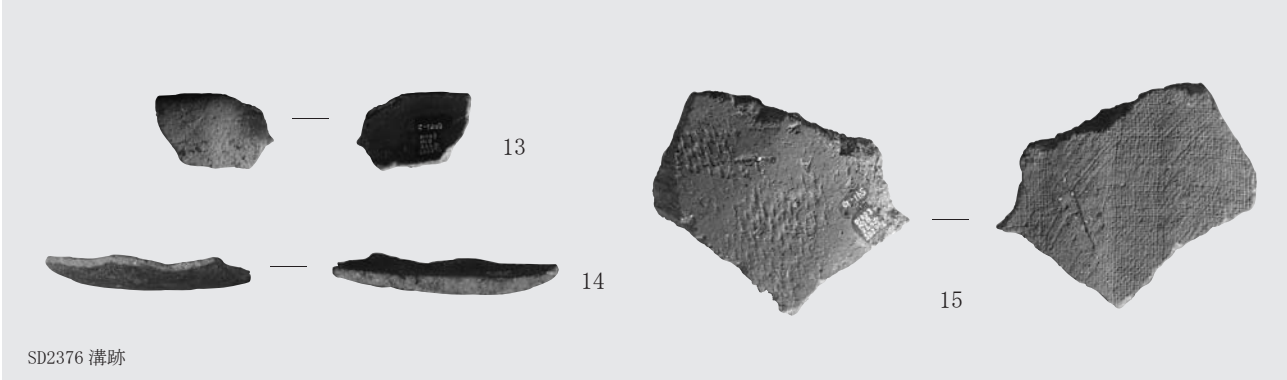
写真図版 25　郡山遺跡　第 260 次本発掘調査区（2）



確認調査　5トレンチ

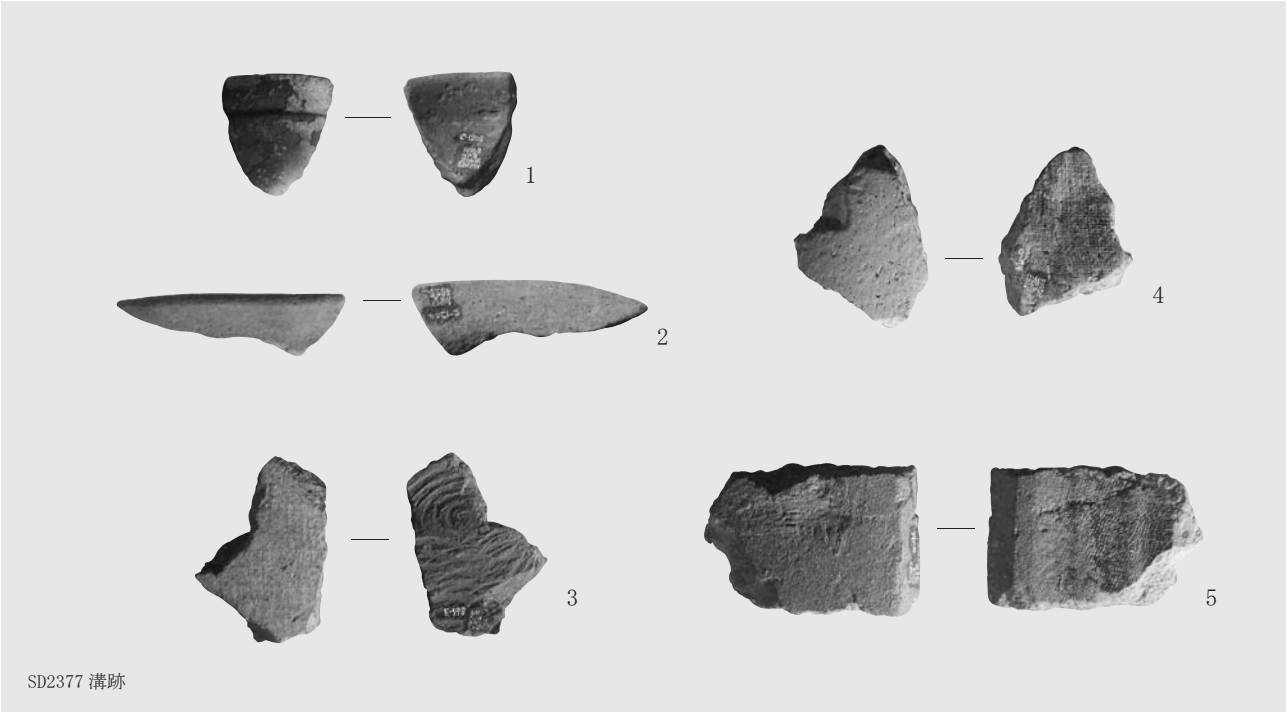


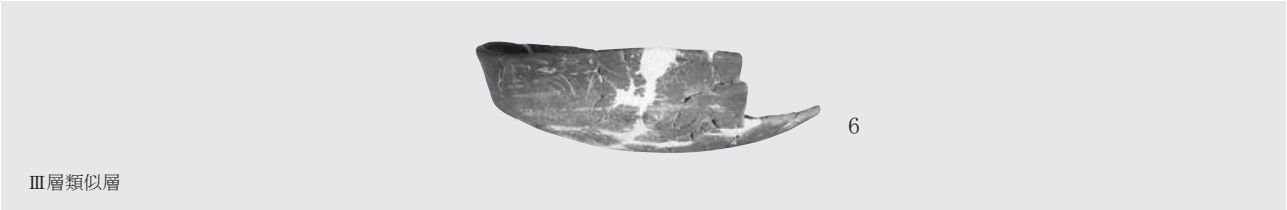
SD2374 溝跡



SD2376 溝跡

写真図版26　郡山遺跡　第260次調査出土遺物(1)





写真図版 27　郡山遺跡　第 260 次調査出土遺物（2）

第３節　第263次調査

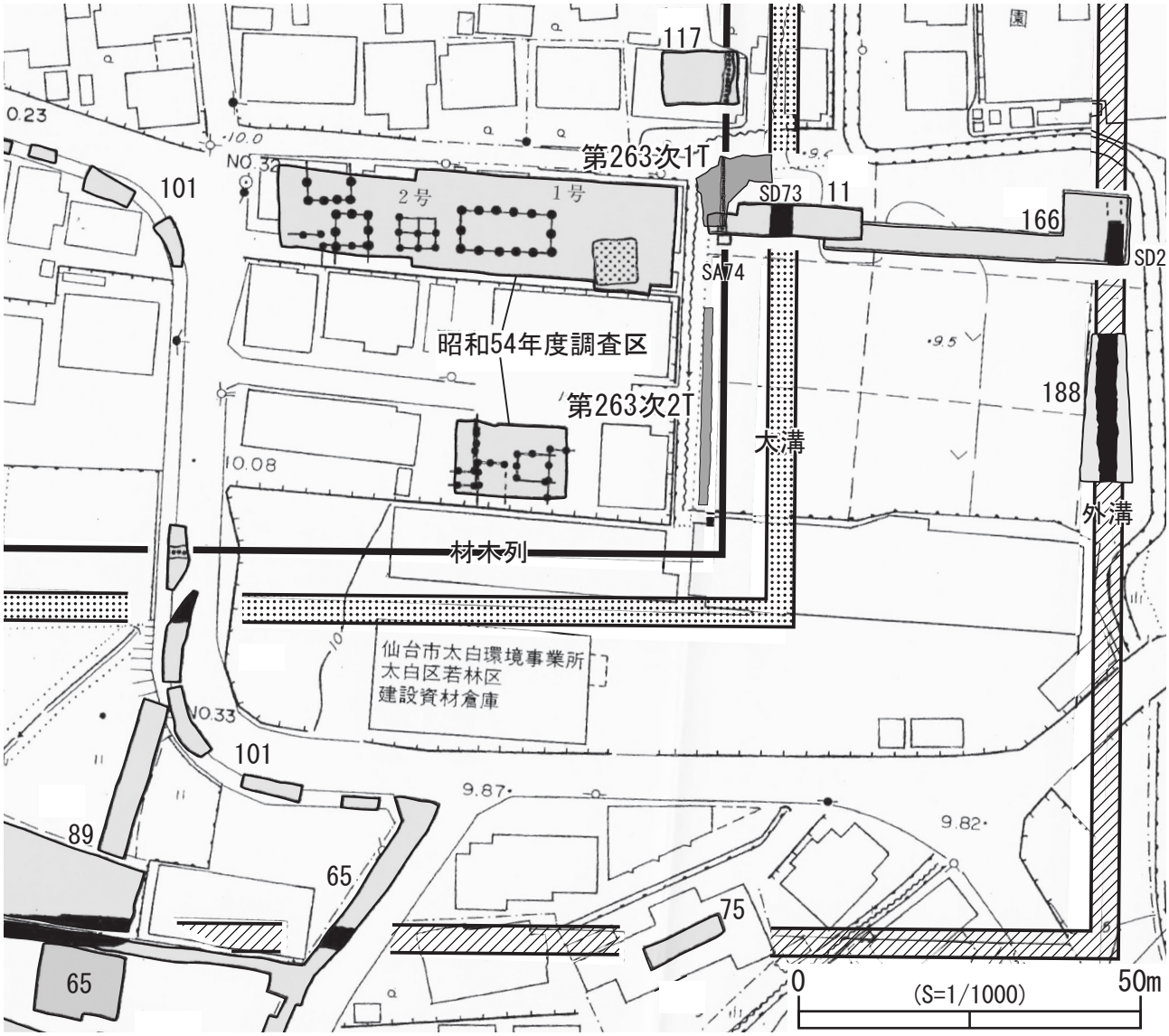
１．調査要項

遺　跡　名	郡山遺跡	**調 査 原 因**	擁壁工事を伴う宅地造成工事
	（宮城県遺跡登録番号01003）	**調 査 主 体**	仙台市教育委員会
調 査 地 点	仙台市太白区郡山三丁目208の一部	**調 査 担 当**	仙台市教育局生涯学習部
調 査 期 間	平成28年28年6月6日～7月22日		文化財課調査調整係
調査対象面積	建築面積120㎡	**担 当 職 員**	主事　及川 謙作
調 査 面 積	107.60㎡		文化財教諭　及川 基

２．調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成28年3月14日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の取扱いについて（協議）」（平成28年3月23日付けH27教生文第103－204号で回答）に基づき実施した。

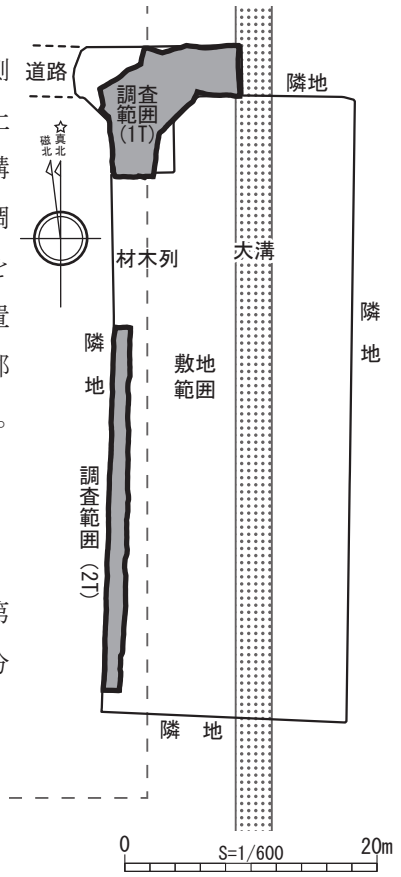
今回の発掘調査は平成28年6月6日に着手した。今回の調査地点は、昭和56年度に調査が行われた第11次調査区と一部重複し、昭和54年度調査区の東側に、平成9年度に調査が行なわれた第117次調査区の南側に、



第86図　郡山遺跡第263次調査区位置図

平成 17 年度に調査が行なわれた第 166 次調査区の西側にあたる。

今回の調査地点では事業地北西側の道路範囲を 1 トレンチとし、事業地西側の擁壁工事範囲を 2 トレンチとして調査区を設定し、重機により表土と耕作土であると考えられるⅠ層を掘り下げ、Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。遺構検出作業後に調査区配置図を S=1/200 で、各遺構の精査後に遺構平面図と調査区断面図・遺構断面図を S=1/20 で作製した。記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。また一部の遺構の形状の計測については適宜ポイントを設置し、デジタルカメラを用いて三次元計測を行った。また調査測量用のために郡山遺跡座標№.25 からトータルステーションを用いて基準点の移設を行なった。7 月 20 日に現場の引渡しと機材の撤収を行ない、調査を終了した。



第 87 図　第 263 次調査区配置図

3　基本層序

1 トレンチには砂と採石による表土が最大で 30cm、最近の耕作土層である第Ⅰ層が約 20 ～ 40 cmの厚さで存在する。また 2 トレンチの第Ⅰ層は 2 層に細分され、約 30 ～ 50cm の厚さで存在する。その下層の第Ⅱ層上面が古代の遺構検出面である。Ⅱ層上面までの深度は約 35 ～ 60 cmである。

Ⅰａ層：暗褐色粘土質シルト。旧耕作土。

Ⅰｂ層：暗褐色粘土質シルト。旧耕作土。地山ブロック（場所によっては下層の遺構堆積土）を斑状に含む。

Ⅱ層：褐色粘土質シルト。粘性しまりともやや強く、ほぼ均質。古代～近世の遺構検出面である。

4．発見遺構と出土遺物

材木列 1 条、溝跡 6 条、井戸跡 3 基、土坑 5 基、ピット 2 基が検出された。また基本層中と、遺構検出面、各遺構及び堆積土を中心に土師器、須恵器、瓦、陶器、磁器、石製品等の遺物が出土している。

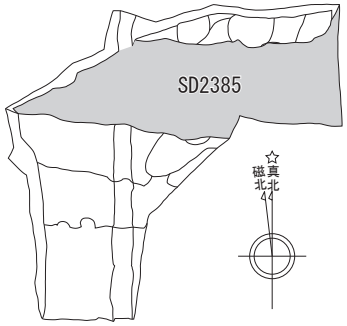
Ⅰ.1 トレンチ

(1) 溝跡

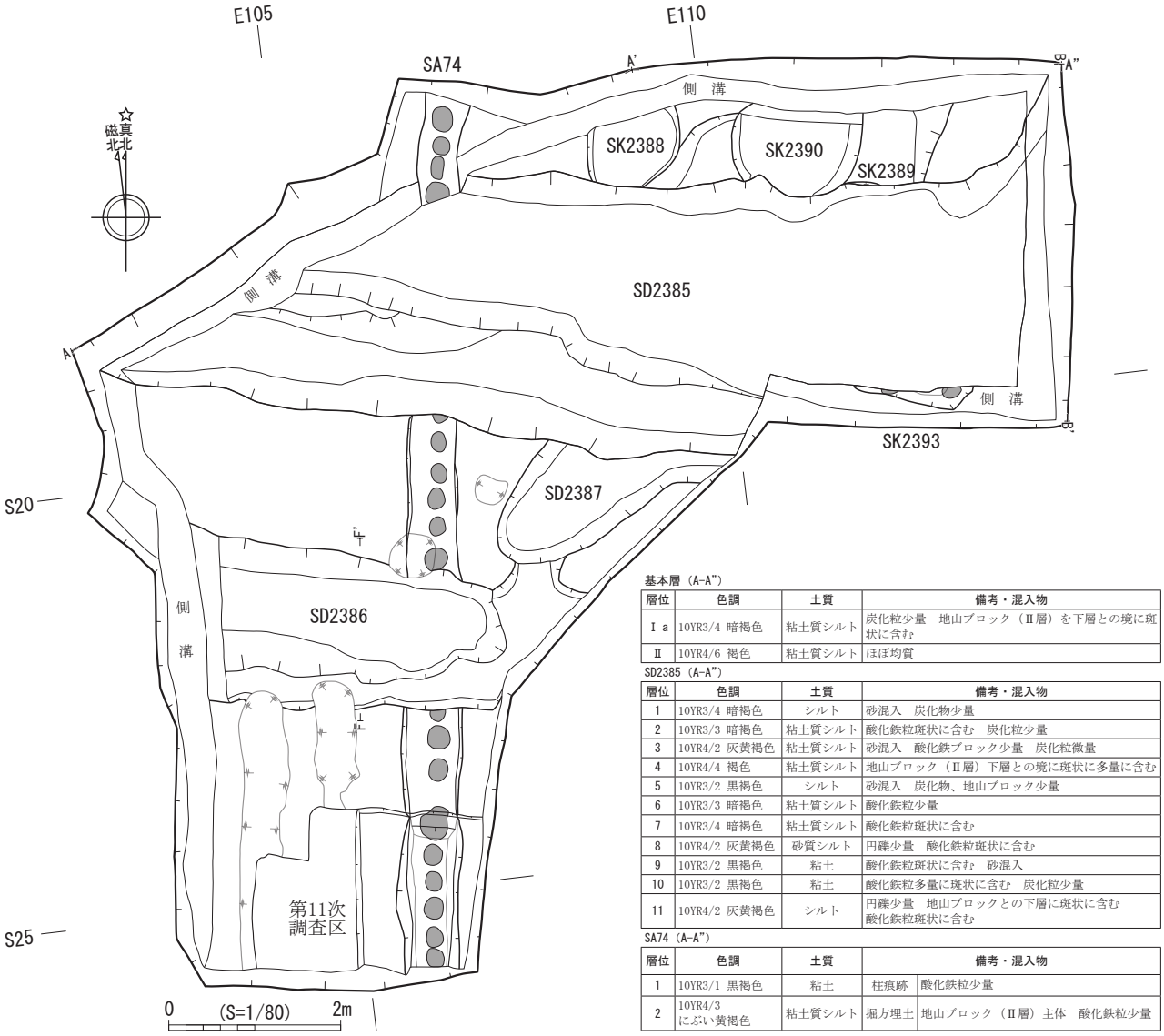
【SD2385 溝跡】

トレンチの北側で検出された。SD2387 溝跡、SA74 材木列、SK2388 ～ 90・2393 土坑、SE2391・2 井戸跡と重複し、これらの遺構よりも新しい。N-8°-E の東西方向で、検出長は 10.9 m、幅は 3.0 mで、調査区外にさらに延びる。調査区の東端で北側に屈曲する。検出面から底面までの深さは 1.05 mで、断面形状は開いた皿形を呈する。堆積土は 11 層に細分され、掘り直されており、北側が一段低く掘り込まれている。堆積土はいずれも自然堆積である。

遺物は堆積土中から土師器、須恵器、格子叩きが施された平瓦、丸瓦、中世陶器などが多数出土している。



第 88 図　SD2385 溝跡位置図



基本層（A-A"）

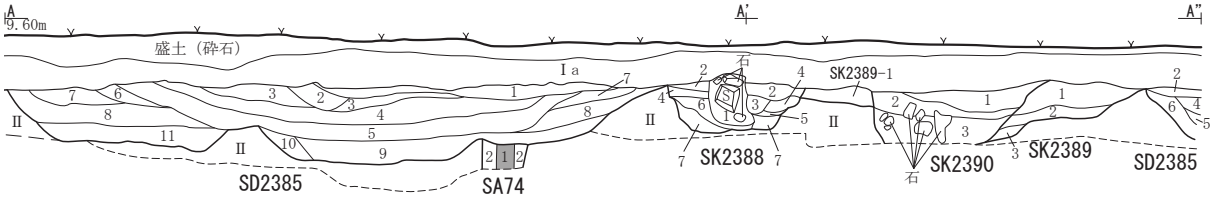
層位	色調	土質	備考・混入物
Ⅰa	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量　地山ブロック（Ⅱ層）を下層との境に斑状に含む
Ⅱ	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	ほぼ均質

SD2385（A-A"）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	砂混入　炭化物少量
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に含む　炭化粒少量
3	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	砂混入　酸化鉄ブロック少量　炭化粒微量
4	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）下層との境に斑状に多量に含む
5	10YR3/2 黒褐色	シルト	砂混入　炭化物、地山ブロック少量
6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒少量
7	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に含む
8	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	円礫少量　酸化鉄粒斑状に含む
9	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒斑状に含む　砂混入
10	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄粒多量に斑状に含む　炭化粒少量
11	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	円礫少量　地山ブロックとの下層に斑状に含む 酸化鉄粒斑状に含む

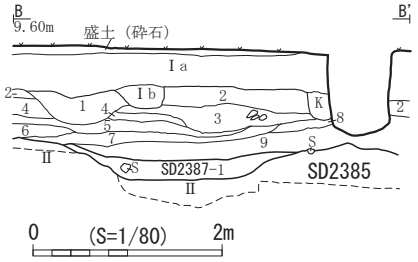
SA74（A-A"）

層位	色調	土質	備考・混入物	
1	10YR3/1 黒褐色	粘土	柱痕跡	酸化鉄粒少量
2	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	掘方埋土	地山ブロック（Ⅱ層）主体　酸化鉄粒少量



SK2388（A-A"）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	大型の礫混入　地山ブロック（Ⅱ層）少量
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	炭化粒少量　円礫少量
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に含む
4	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）斑状に多量に含む
5	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）斑状に含む
6	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化粒少量
7	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）主体　円礫少量



SK2389（A-A"）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒少量　円礫少量
2	10YR3/4 暗褐色	シルト	酸化鉄粒斑状に含む　地山ブロック（Ⅱ層）下層との境に堆積
3	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）主体

SK2390（A-A"）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2/3 黒褐色	粘土	酸化鉄粒斑状に多量に含む　炭化粒少量
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に多量に含む　炭化粒少量　円礫含む
3	10YR2/3 黒褐色	シルト	大型の礫混入　炭化粒少量

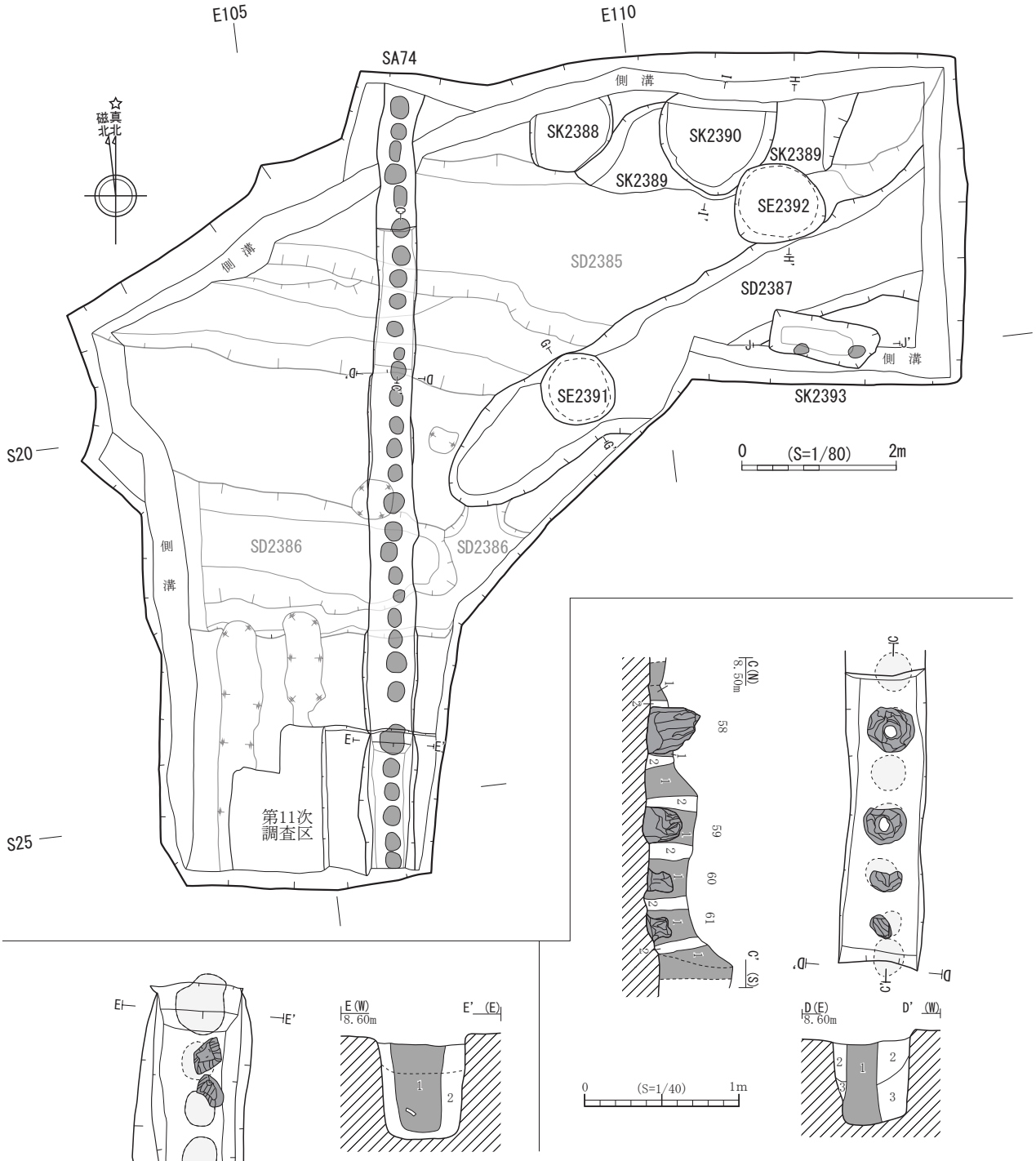
SD2385（B-B'）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/2 黒褐色	シルト	酸化鉄粒斑状に多量に含む
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒少量
3	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	円礫少量
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄ブロック斑状に含む
5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック斑状に含む
6	10YR3/2 黒褐色	粘土	円礫少量　地山ブロック（Ⅱ層）少量
7	10YR3/3 暗褐色	粘土	酸化鉄ブロック斑状に含む
8	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄粒少量
9	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂層状に混入　酸化鉄ブロック斑状に含む　炭化物少量

SD2387（B-B'）

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2/2 黒褐色	粘土	植物性遺存体混入　酸化鉄ブロック少量

第 89 図　第 263 次 1 トレンチ平・断面図（1）



SA74(C-C')

層位	色調	土質	備考・混入物	
1	10YR2/2 黒褐色	粘土	柱痕跡	酸化鉄粒少量
2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	掘方埋土	地山ブロック主体　酸化鉄ブロック少量

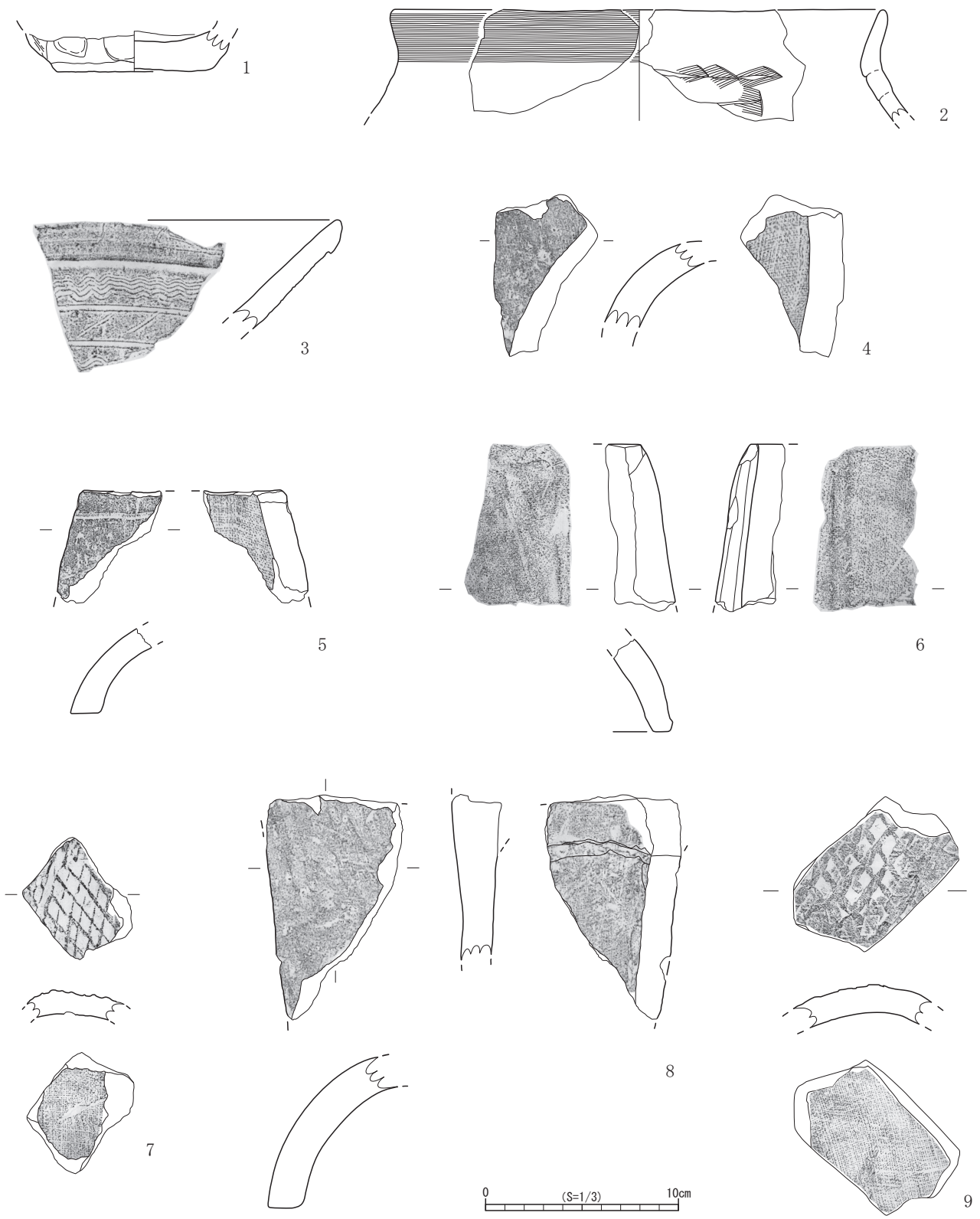
SA74(D-D')

層位	色調	土質	備考・混入物	
1	10YR2/1 黒色	粘土	柱痕跡	酸化鉄ブロック少量
2	10YR4/4 褐色	粘土質シルト	掘方埋土	黒褐色粘土ブロック少量　酸化鉄粒少量
3	10YR4/4 褐色	粘土質シルト		酸化鉄粒斑状に多量に含む

SA74(E-E')

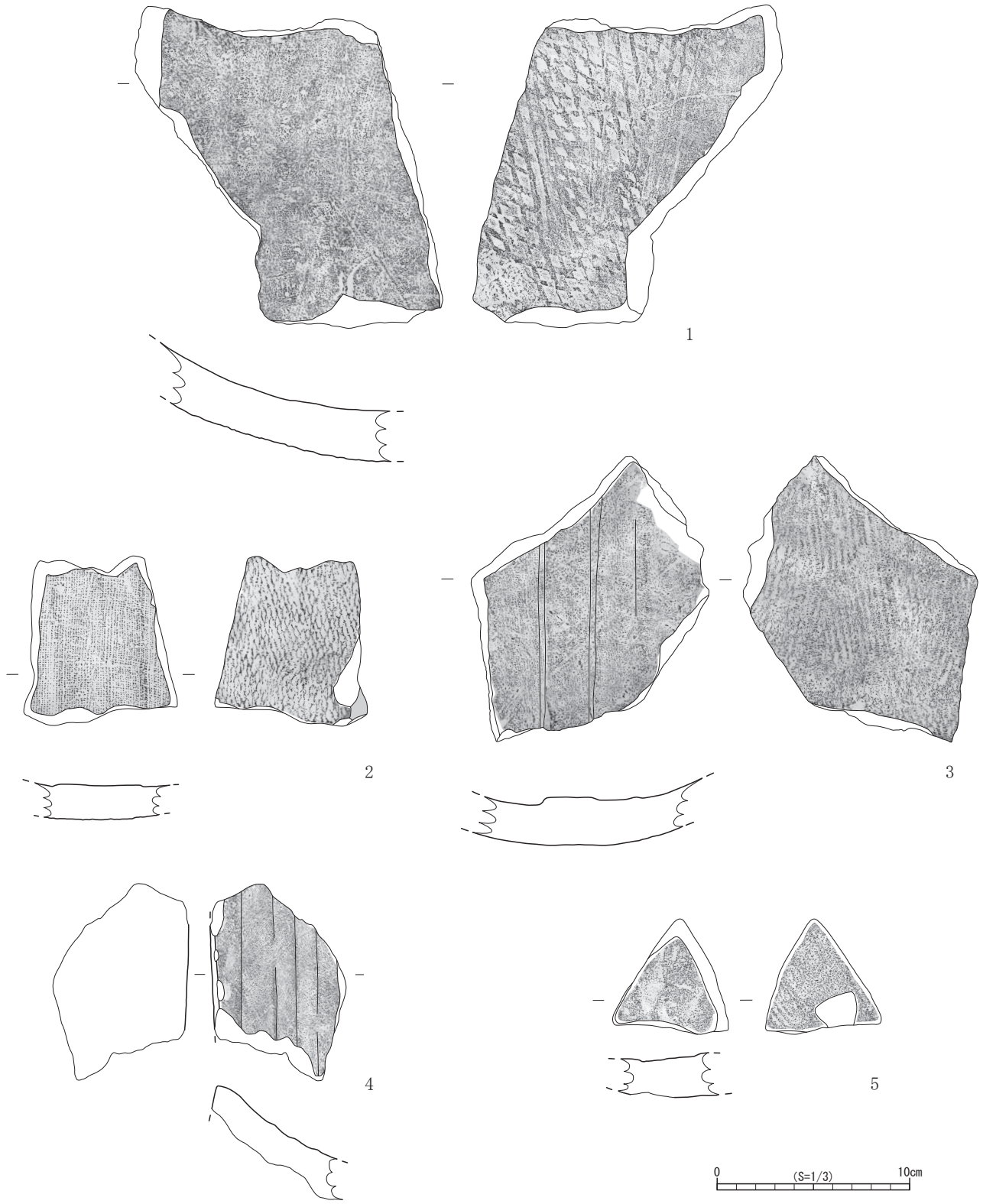
層位	色調	土質	備考・混入物	
1	10YR3/2 黒褐色	粘土	柱痕跡	酸化鉄ブロック少量
2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	掘方埋土	地山ブロック（Ⅱ層）主体

第 90 図　第 263 次 1 トレンチ平・断面図（2）



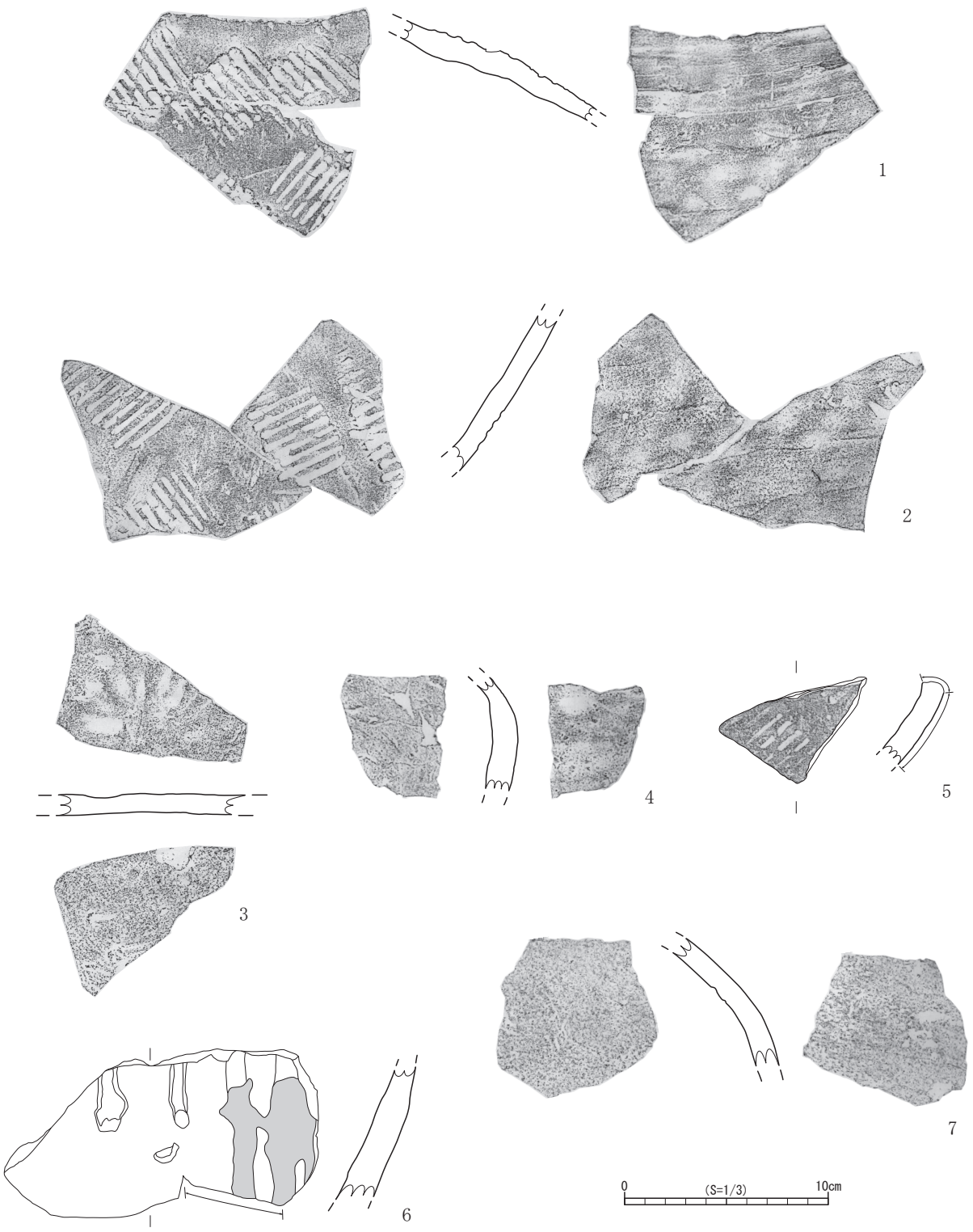
図版番号	登録番号	種別	器種	口径・長（cm）	底径・幅（cm）	器高・厚（cm）	外面（凹面）	内面（凸面）	特徴・備考	写真図版
1	C-1223	非ロクロ土師器	甕	―	8.0	(2.1)	体部指頭痕（押え？）　磨滅	体部磨滅		31-1
2	C-1222	非ロクロ土師器	甕	(25.4)	―	(5.8)	口縁ヨコナデ　体部磨滅	体部ヘラナデ　口縁磨滅		31-2
3	E-603	須恵器	甕	―	―	(5.6)	波状文　斜位沈線	ロクロナデ	骨針	31-4
4	F-121	瓦	丸瓦	(8.0)	(5.4)	1.9	布目痕	ナデ	骨針	
5	F-122	瓦	丸瓦	(8.7)	(3.2)	1.6	布目痕　ケズリ（面取り）	ナデ　ケズリ		
6	F-120	瓦	丸瓦	(5.8)	(5.4)	1.5	布目痕	ヘラナデ	骨針	31-5
7	F-124	瓦	丸瓦	(6.2)	(5.7)	1.3	布目痕	斜格子叩き		31-6
8	F-119	瓦	軒丸瓦	(116)	(7.1)	1.9	布目痕	ケズリ	丸瓦部（瓦頭部欠）	31-3
9	F-123	瓦	丸瓦	(8.0)	(8.7)	1.4	布目痕	斜格子叩き		31-7

第 91 図　SD2385 溝跡出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	凹面	凸面	特徴・備考	写真図版
1	G-167	瓦	平瓦	(16.1)	(12.0)	2.6	布目痕　模骨痕（不明僚）　磨滅	斜格子叩き　一部ヘラナデ 一部磨っている（転用？）　磨滅	骨針	31-10
2	G-169	瓦	平瓦	(9.0)	(8.0)	1.8	布目痕　模骨痕	縄叩き	骨針	31-9
3	G-168	瓦	平瓦	(14.8)	(12.3)	2.5	布目痕　模骨痕　磨滅	縄目痕　磨滅		31-8
4	G-170	瓦	平瓦	(10.4)	(9.4)	2.9	布目痕　模骨痕	剥落	凹面被熱	
5	G-171	瓦	平瓦	(5.9)	(6.1)	2.2	布目痕　模骨痕　磨滅	縄目痕　磨滅	褐色粒（スコリア？）含む	

第 92 図　SD2385 溝跡出土遺物（2）



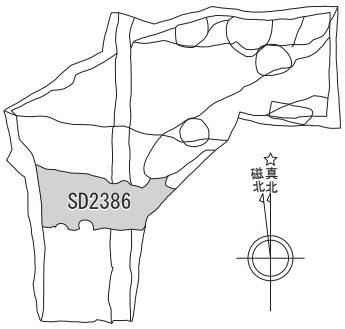
図版番号	登録番号	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	Ic-5	陶器	壺	—	—	—	押印　一部（割れ口）磨っている	ヘラナデ	渥美　12c	31-12
2	Ic-4	陶器	壺	—	—	—	押印　一部磨っている	ヘラナデ　降灰	渥美　12c	31-11
3	Ic-8	陶器	甕 or 壺	—	—	—		指頭痕（連続）	常滑　中世　座部片	
4	Ic-7	陶器	壺	—	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	在地　13 ～ 14c	
5	Ic-6	陶器	壺	—	—	—	押印　磨っている	ヘラナデ	渥美　12c　砥石転用	31-16
6	Ic-3	陶器	甕	—	—	—	磨面	ヘラナデ	砥石転用	31-15
7	Ic-9	陶器	甕	—	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	常滑　中世	
写真のみ	Q-9	骨		—	—	—			四肢骨？	31-18

第 93 図　SD2385 溝跡出土遺物（3）

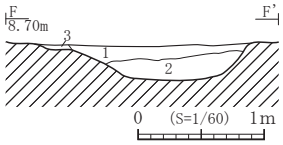
【SD2386 溝跡】

トレンチの中央部で検出された。SA74 材木列と重複し、これよりも新しい。N-4° -E の東西方向で、検出長は 3.3 m、幅は 1.5 ～ 1.9 mで、調査区外にさらに延びる。検出面からの深さは 5 ～ 30cm で、断面形状はやや開いた皿形を呈する。堆積土は 3 層に細分され、2 時期にわたって掘り直されているが、いずれも自然堆積であると考えられる。溝跡の東側は約 20 cm浅くなっており、そこで同一の溝跡の可能性がある SD2387 溝跡と接続する。

遺物は堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器、礫石器などが出土している。中世陶器には砥石に転用された古瀬戸の灰釉壺が出土していることから 14 世紀、もしくはそれ以降の溝跡であると考えられる。



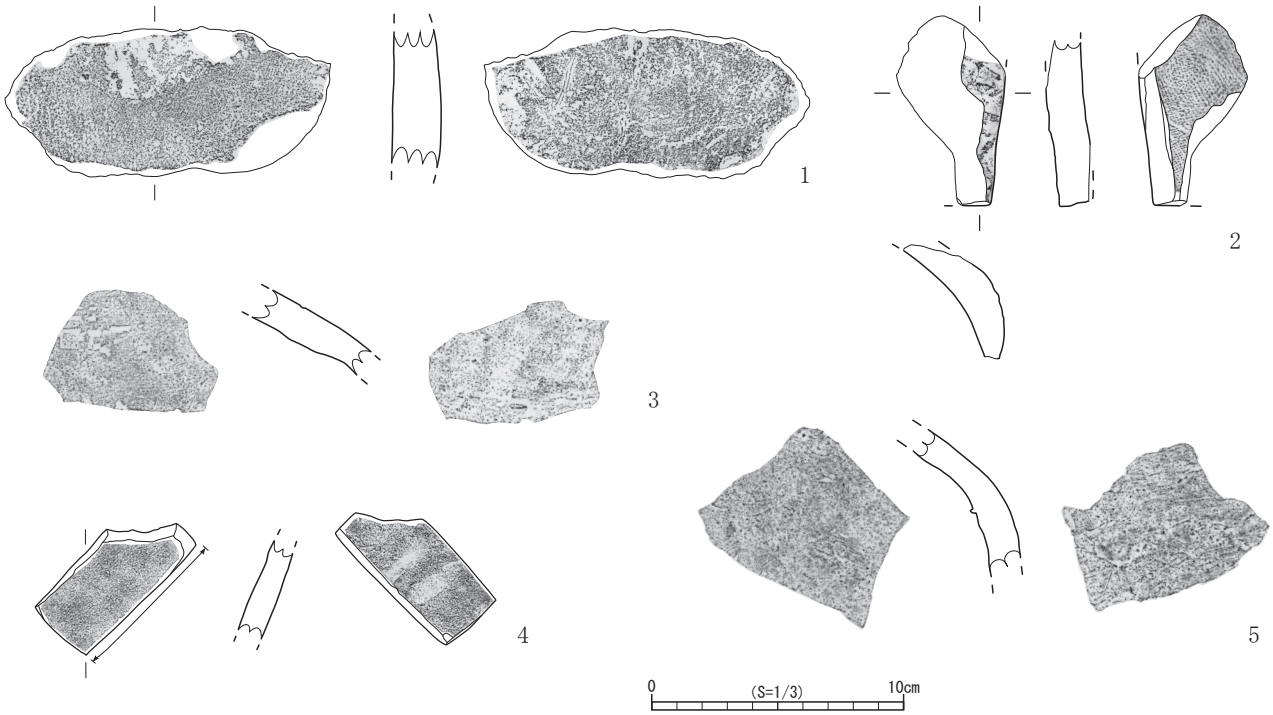
第 94 図　SD2386 位置図



SD2396(F-F')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄粒砂状に堆積　炭化粒少量
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック斑状に含む　炭化物少量
3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒少量

第 95 図　SD2386 溝跡土層断面図

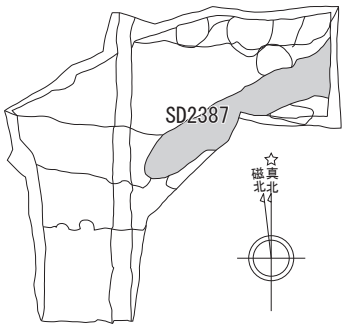


図版番号	登録番号	種別	器種	口径・長（cm）	底径・幅（cm）	器高・厚（cm）	外面（凹面）	内面（凸面）	特徴・備考	写真図版
1	E-607	須恵器	甕	(5.9)	(12.8)	1.9	磨っている	青海波紋→磨っている	砥石転用　磨面 3	
2	F-125	瓦	丸瓦	(7.6)	(4.3)	(1.5)	布目痕	斜格子叩き		
3	Ic-11	陶器	甕	―	―	―	押印（降灰）一部磨っている	ヘラナデ？	常滑	
4	Ic-10	陶器	壺	(5.2)	(6.4)	1.0	灰釉	ヘラナデ	古瀬戸　砥石転用　14c ？	31-17
5	Ic-12	陶器	甕	―	―	―	ヘラナデ	ヘラナデ	常滑	

第 96 図　SD2386 溝跡出土遺物

【SD2387 溝跡】

トレンチの中央部から東側にかけて検出された。SD2385 溝跡、SA74 材木列、SK2393 土坑、SE2391・92 井戸跡と重複し、SD2385 溝跡よりも古く、その他の遺構よりも新しい。N-34°-E の南西 - 北東方向で、検出長は 7.0 m、幅は 1.2 ～ 1.5 mで、検出面からの深さは 30cm で、調査区外にさらに延びる。断面形状はやや開いた皿形を呈する。堆積土は自然堆積である。溝跡の南西端で同一の遺構の可能性がある SD2386 溝跡と接続する。遺物は堆積土中から土師器、須恵器、平瓦、丸瓦、中世陶器、礫石器などが出土している。いずれの遺物も小破片であるため図示できなかったが、中世陶器が出土していることから 13 ～ 14 世紀、もしくはそれ以降の溝跡であると考えられる。

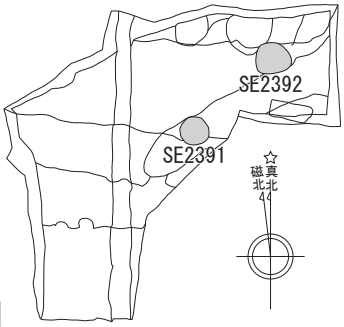


第 97 図　SD2387 位置図

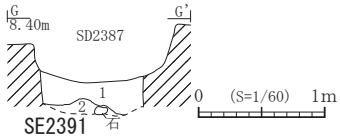
(2) 井戸跡

【SE2391 井戸跡】

トレンチの中央部で検出された。SD2385・2387 溝跡と重複し、いずれの遺構よりも古い。平面形状は円形を呈し、検出規模は直径 1.2 mである。検出面から 45 cmの深さまで掘削したが、湧水などの影響を考慮しそれ以上の掘削は行わなかったため、底面までの深さは不明である。堆積土は 2 層確認されており、いずれも酸化鉄ブロックが混入している。遺物は堆積土の下層から土師器片などが出土している。



第 98 図　SE2391・2 位置図



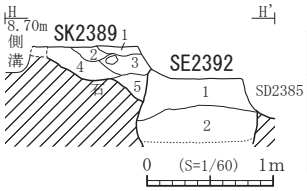
SE2391 (G-G')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土	酸化鉄ブロック、炭化粒少量
2	10YR4/1 褐灰色	粘土	ややグライ化　酸化鉄ブロック少量　砂を含む

第 99 図　SE2391 井戸跡土層断面図

【SE2392 井戸跡】

トレンチの北側で検出された。SD2385・87 溝跡、SK2389・90 土坑と重複し、溝跡よりも古く、土坑よりも新しい。平面形状は円形を呈し、検出規模は直径 1.0 mである。検出面から 60 cmの深さまで掘削したが、湧水などの影響を考慮しそれ以上の掘削は行わなかったため、底面までの深さは不明である。堆積土は 2 層確認されており、いずれも酸化鉄ブロックが混入している。遺物は土師器と脚部に装飾の施された円面硯（第 101 図 1・E-605）が出土している。



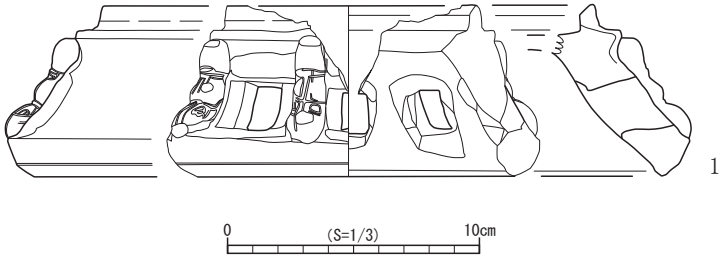
SK2389 (H-H')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック、酸化鉄粒少量
2	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック主体
3	10YR3/2 黒褐色	粘土	砂混入　炭化物少量
4	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄ブロック、炭化物少量
5	10YR6/4 にぶい黄橙色	砂質シルト	炭化粒少量

SE2392 (H-H')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/2 黒褐色	粘土	酸化鉄ブロック含む　炭化粒少量
2	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	酸化鉄ブロック斑状に含む　炭化粒少量

第 100 図　SK2389 土坑・SE2392 井戸跡土層断面図



図版番号	登録番号	遺構層	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	写真図版
1	E-605	2 層	須恵器	円面硯	(19.5)	(27.1)	6.8	31-14
外面				内面				特徴・備考
ロクロナデ 独鈷状の装飾　透かし 3 個 (全周で約 16 個と推定)				ロクロナデ　窓の周辺をヘラケズリにより面取り				底部から陸部残存

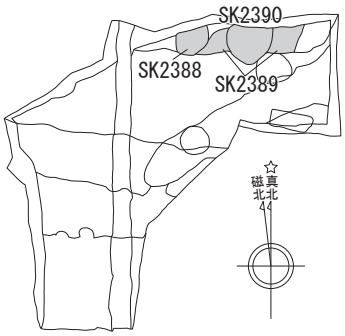
第 101 図　SE2392 井戸跡出土遺物

(3) 土坑

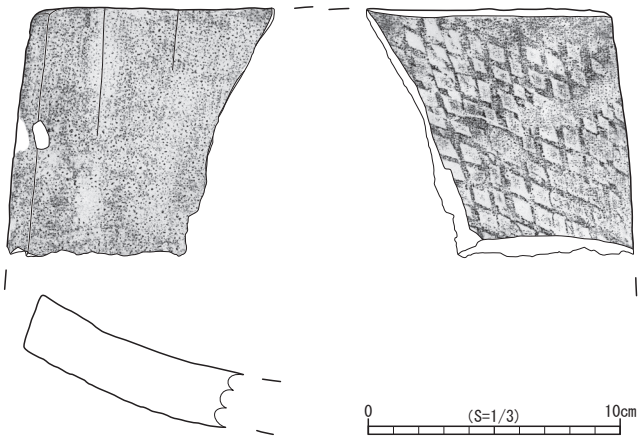
【SK2388 土坑】

トレンチの北側で検出された。SD2385 溝跡と SK2389 土坑と重複し、SD2385 溝跡よりも古く、SK2389 土坑よりも新しい。

平面形状は円形で、直径約 1.1 mで、調査区北側にさらに広がる。検出面から底面までの深さは 50 cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は 7 層に細分される。1 層中には直径約 20 ～ 40 cmの角礫が比較的多く混入している。堆積状況から人為堆積であると考えられる。遺物は土師器や平瓦などが出土している。



第 102 図　SK2388 ～ 90 位置図



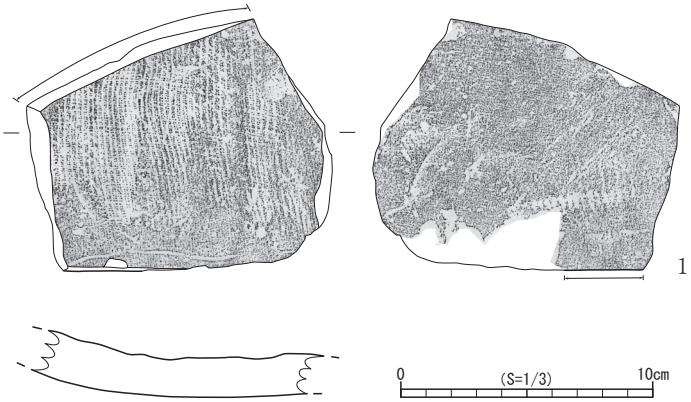
図版番号	登録番号	種別	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	特徴・備考	写真図版
1	G-172	瓦	平瓦	(9.9)	(10.4)	2.3		32-2
	凹面			凸面				
	布目痕　模骨痕			格子叩き 一部ナデのち叩き				

第 103 図　SK2388 土坑出土遺物

【SK2389 土坑】

トレンチの北側で検出された。SD2385 溝跡、SK2388 土坑と SE2392 井戸跡と重複し、これらの遺構よりも古い。平面形状は不正形で、底面も凹凸に富んでいる。長径 2.9 mで、調査区北側にさらに広がる。検出面から底面までの深さは 10 ～ 40 cmで、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は 3 ～ 5 層に細分される。各層中には炭化物が比較的多く混入している。

遺物は須恵器、平瓦などが出土している。



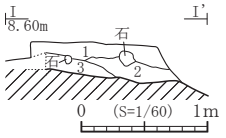
図版番号	登録番号	種別	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	特徴・備考	写真図版
1	G-173	瓦	平瓦	(10.0)	(12.1)	1.8	砥石転用	32-3
	凹面			凸面				
	布目痕　ヘラケズリ すり痕　模骨痕			縄叩き　すり痕				

第 104 図　SK2389 土坑出土遺物

【SK2390 土坑】

トレンチの北側で検出された。SD2385 溝跡、SK2389 土坑と SE2392 井戸跡と重複し、SD2385 溝跡よりも古く、SK2389 土坑、SE2392 井戸跡よりも新しい。平面形は円形を呈し、直径 1.5 mで調査区北側にさらに広がる。検出面から底面までの深さは 80 cmで、壁は下面に近い部分は緩やかに、上面に近い箇所はやや急に立ち上がる。堆

積土は3層に細分される。2・3層中には直径15～40cmの角礫が比較的多く混入している。遺物は土師器が出土している。



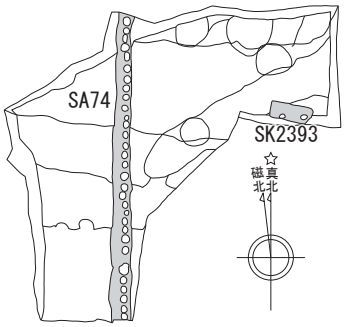
SK2390(I-I')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2/1 黒色	粘土	酸化鉄ブロック斑状に含む　地山ブロック、炭化粒少量
2	10YR2/2 黒褐色	粘土	地山ブロック、酸化鉄粒少量
3	10YR3/1 黒褐色	粘土	酸化鉄ブロック少量

第105図　SK2390土層断面図

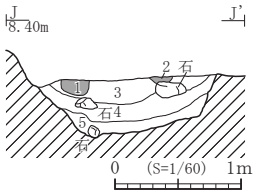
【SK2393土坑】

トレンチの東側で検出された。SD2385・7溝跡と重複し、いずれの遺構よりも古い。検出規模は長径1.5m、短径0.5mで、平面形は東西に長いやや歪な長方形を呈する。上面は重複するSD2385溝跡とSD2387溝跡により削平されているが、深さは45cmで、壁の東西は斜めに、南北はほぼ垂直に立ち上がる。直径15～20cmの柱痕跡が2基、遺構のやや南寄りの箇所で検出されている。土層断面を確認したところ、柱痕跡の下に円礫と格子叩きが施された平瓦が礎板のような形で据えられているのが確認されたことから、掘立柱の柱穴である可能性がある。掘り方埋土は3層に細分され、炭化粒が比較的多く混入している。



第106図　SA74・SK2393位置図

遺物は掘り方埋土から土師器や須恵器のほか、格子叩きの平瓦（第108図2）が出土している。格子叩きの平瓦は遺構の中で見つかった2つの柱痕跡の下にそれぞれ据えられていたものが接合し、瓦の全長が判明した。



SK2393(J-J')

層位	色調	土質	備考・混入物	
1	10YR2/2 黒褐色	粘土	柱痕跡	炭化粒少量
2	10YR3/2 黒褐色	粘土		炭化粒少量
3	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	掘方埋土	砂混入　酸化鉄ブロック少量
4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト		炭化粒少量
5	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト		地山ブロック（Ⅱ層）少量

第107図　SK2393位置図

(4) 材木列

【SA74材木列】

トレンチを南北に縦断する形で検出された。SD2385～87溝跡と重複し、これらの遺構よりも古い。N-0～1°-Eでほぼ真北方向である。検出長は10.2m、上端幅は55～70cm、下端幅は35～50cmで、調査区外にさらに延びる。南側は第11次調査で検出されている。遺構検出面から底面までの深さは70cmで、断面形状は箱形を呈する。堆積土は柱痕跡と掘方埋め土で構成されている。今回の調査では直径15～40cmの柱痕跡が31個、各々隣接して検出された。埋設管などにより遺構が破壊される範囲以外は基本的に検出までにとどめ、遺構の保存を図っている。一部掘り下げた範囲からは、直径10～30cmの柱材が6個体出土した柱材はいずれもクリである。(詳細についてはP115の樹種同定を参照)

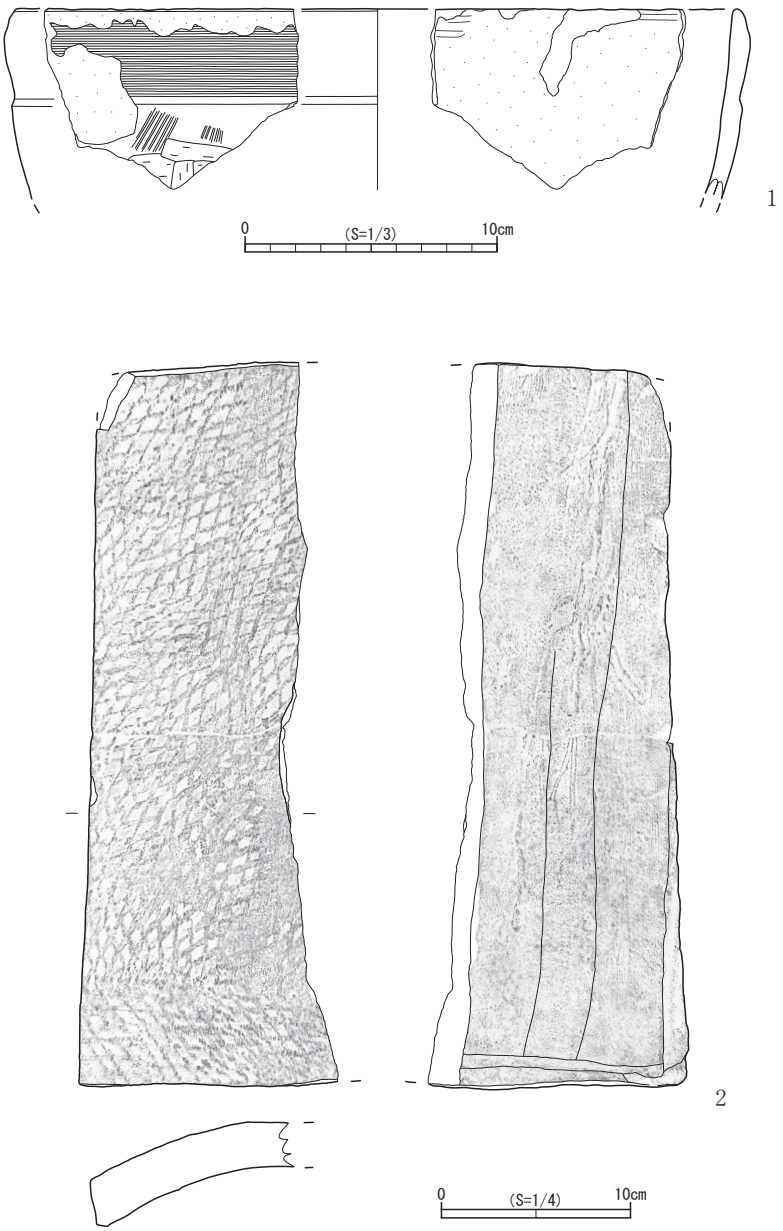
遺物は掘方埋土から土師器の鉢（第108図1）が出土している。

Ⅱ.2 トレンチ

(1) 溝跡

【SD2394溝跡】

トレンチの北側で検出された。SX2399性格不明遺構と重複し、これよりも新しい。方位はN-20°-Eの南西-



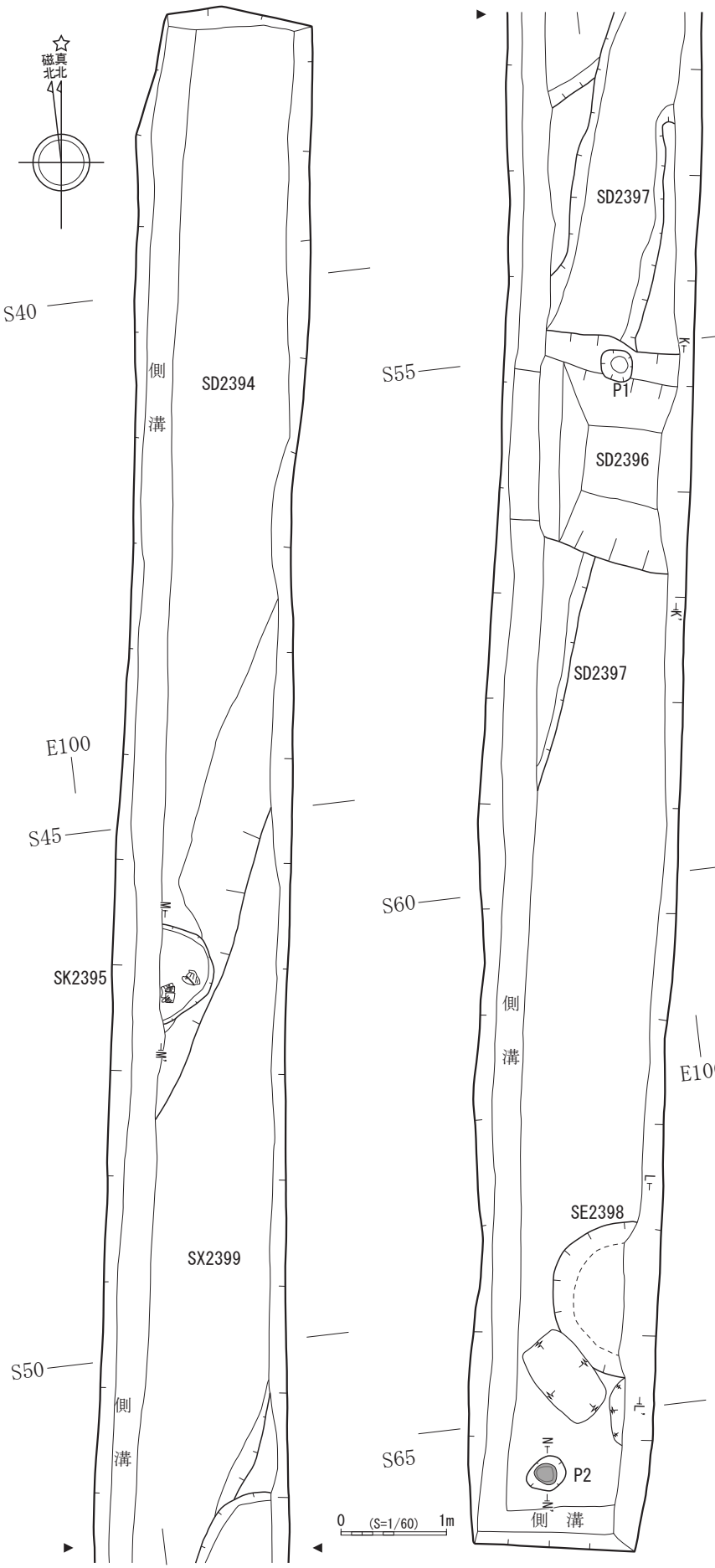
図版番号	登録番号	出土遺構	遺構層	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	C-1224	SA74	掘方埋土	非ロクロ土師器	鉢	(28.6)	―	(7.2)	口縁部ヨコナデ ハケメ→ケズリ　磨滅　剥落	口縁部ミガキ　磨滅　剥落		
図版番号	登録番号	出土遺構	遺構層	種別	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	凹面	凸面	特徴・備考	写真図版
2	G-174	SK2393	3層	瓦	平瓦	38.4	(13.7)	2.6	布目痕　模骨痕　すり消し	格子叩き　一部すり消し		32-13

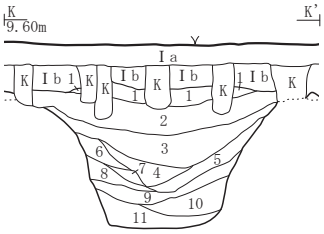
第108図　SK2393土坑・SA74材木列出土遺物

北東方向である。検出長は10.4ｍ、幅は1.3ｍで、調査区外にさらに延びる。遺構検出面から底面までの深さは30cmで、断面形状は開いた皿形を呈する。堆積土は2層に細分され、いずれも自然堆積である。遺物は堆積土中から土師器、須恵器などが出土している。

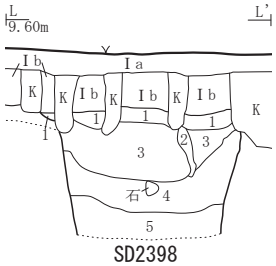
【SD2396溝跡】

トレンチの南側で検出された。SK2397溝跡とP1と重複し、これらよりも新しい。S-10°-Eの東西方向の溝跡で、東側が若干南に振れる。検出長は1.5ｍ、幅は2.0ｍで、調査区外にさらに延びる。検出面から底面までの深さは1.15ｍで、断面形状は逆台形を呈する。堆積土は11層に細分され、いずれも自然堆積である。遺物は堆積土中から土師器、須恵器などが出土している。





SD2396



SD2398

基本層

層位	色調	土質	備考・混入物
Ⅰa	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	白色粒、炭化粒少量
Ⅰb	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）を斑状に含む
Ⅱ	10YR4/6 褐色	粘土質シルト	ほぼ均質

SD2396

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）斑状に含む
2	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に含む 炭化粒少量
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	砂混入 酸化鉄粒斑状に多量に含む 炭化物少量
4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック斑状に含む
5	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄ブロック少量
6	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	酸化粒少量
7	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）主体 酸化鉄ブロック斑状に含む
8	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	地山ブロック（Ⅱ層）層状に含む 酸化鉄ブロック斑状に含む
9	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）層状に含む 酸化鉄粒斑状に含む 炭化粒少量
10	10YR2/3 黒褐色	粘土	酸化鉄ブロック斑状に含む
11	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	地山ブロック（Ⅱ層）主体 砂混入 酸化鉄ブロック斑状に含む

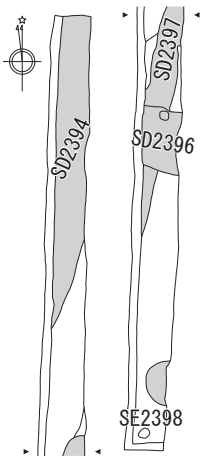
SE2399

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に含む
2	5YR3/3 暗赤褐色	シルト	焼土層、炭化材の一部か
3	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に多量に含む 炭化物少量
4	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄ブロック斑状に含む 地山ブロック（Ⅱ層）少量
5	10YR2/3 黒褐色	粘土	砂混入 酸化鉄ブロック少量

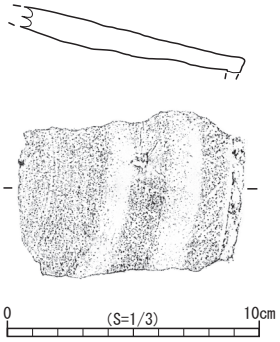
第 109 図　2 トレンチ平・断面図

【SD2397 溝跡】

トレンチの中央部で検出された。SK2396 溝跡、SX2399 性格不明遺構と重複し、SK2396 溝跡よりも古く、SX2399 性格不明遺構よりも新しい。N-13°　-E の南西 - 北東方向である。検出長は 8.0 m、幅は 0.8 mで、北側が東に屈曲しつつ調査区外にさらに延びる。検出面から底面までの深さは 20cm で、断面形状は浅い皿形を呈する。堆積土は 2 層に細分される。遺物は堆積土中から土師器、須恵器の蓋などが出土している。



第 110 図 SD2394・6・7・SE2398 位置図



図版番号	登録番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	特徴・備考	写真図版
1	E-604	須恵器	蓋	(29.2)	―	(2.6)	ロクロナデ　自然釉	ロクロナデ	大型坏の蓋	

第 111 図　SD2394 溝跡出土遺物

(2) 井戸跡

【SE2398 井戸跡】

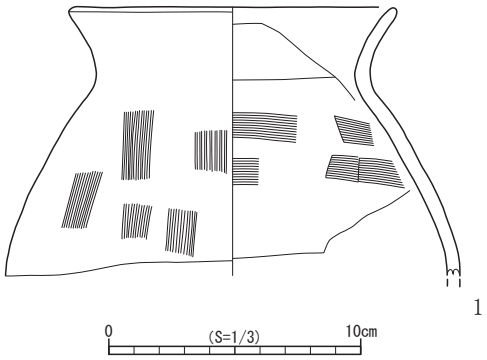
トレンチの南側で検出された。他の遺構との重複はない。検出規模は直径約 1.5 mで、調査区東側にさらに広がる。平面形は円形を呈する。検出面から 0.9 mの深さまで掘削したが、安全性を考慮しそれ以上の掘削は行わなかったため､底面までの深さは不明である。堆積土は 5 層に細分され､いずれも酸化鉄ブロックが混入している。また検出面から中層にかけて棒状の焼土塊が確認されている。

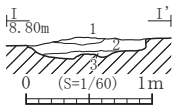
遺物は土師器、須恵器および堆積土の中～下層から近世陶器が出土していることから、近世の井戸跡であると考えられる。

(4) 土坑

【SK2395 土坑】

トレンチの北側で検出された。SD2394 溝跡と重複し、これよりも古い。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.9 mで、調査区西側にさらに広がる。上面は重複する SD2394 溝跡により削平されているが、遺構検出面からの深さは 25 cmで、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は 3 層に細分され、底面からは土師器の甕の一括資料が出土している。





SK2395(I-I')

層位	色調	土質	備考・混入物
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒斑状に含む
2	10YR4/2 灰黄褐色	粘土	酸化鉄粒斑状に含む　炭化粒少量
3	10YR4/1 褐灰色	粘土	地山ブロック（Ⅱ層）斑状に含む

第 113 図　SK2395 土坑土層断面

図版番号	登録番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	写真図版
1	C-1225	非ロクロ土師器	甕	13.0	―	(10.7)	31-13
	外面		内面		特徴・備考		
	ハケメ 口縁部磨滅		ヘラナデ 磨滅		褐色粒（スコリア？）含む 火山灰起源の粘土？		

第 112 図　SK2395 土坑出土遺物

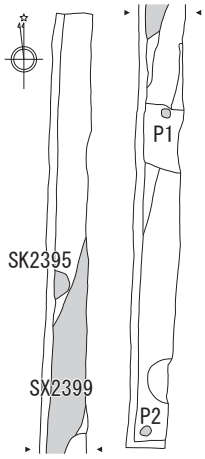
(5) 性格不明遺構

【SX2399 性格不明遺構】

トレンチの中央部で検出された。SD2394・7 溝跡と重複し、これらの遺構よりも古い。平面形は不正形で、検出長径 8.0 m、幅は 1.3 mを測り、調査区外にさらに広がる。検出面から底面までの深さは 15 ～ 25 ㎝で、壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は 3 層に細分され、中層の第 2 層は地山ブロックを主体としている。遺構の形状などから溝跡になる可能性がある。

遺物は土師器の小片、動物遺存体（馬歯？・写真図版 30-19）などが出土している。

図版番号	登録番号	種別	特徴・備考	写真図版
写真のみ	Q-10	歯	馬の上顎歯？ 4 本	31-19

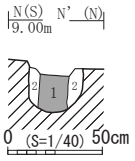


第 114 図
SK2395・SX2399
・ピット位置図

(4) その他の遺構・出土遺物

【ピット】

トレンチの中央部および南側から 2 基のピットが検出された。平面形状は隅丸方形かやや歪な楕円形を呈する。直径は約 20 ～ 30cm、深さは約 15 ～ 25cm である。P2 からは直径約 15 ㎝の柱痕跡が検出された。遺物は P2 から土師器が出土している。



層位	色調	土質	備考・混入物	
1	10YR3/2 黒褐色	粘土	柱痕跡	地山ブロック（Ⅱ層）少量　炭化粒少量
2	10YR3/2 黒褐色	シルト	掘方埋土	地山ブロック（Ⅱ層）斑状に含む

第 115 図　P2 土層断面

調査区一括出土遺物

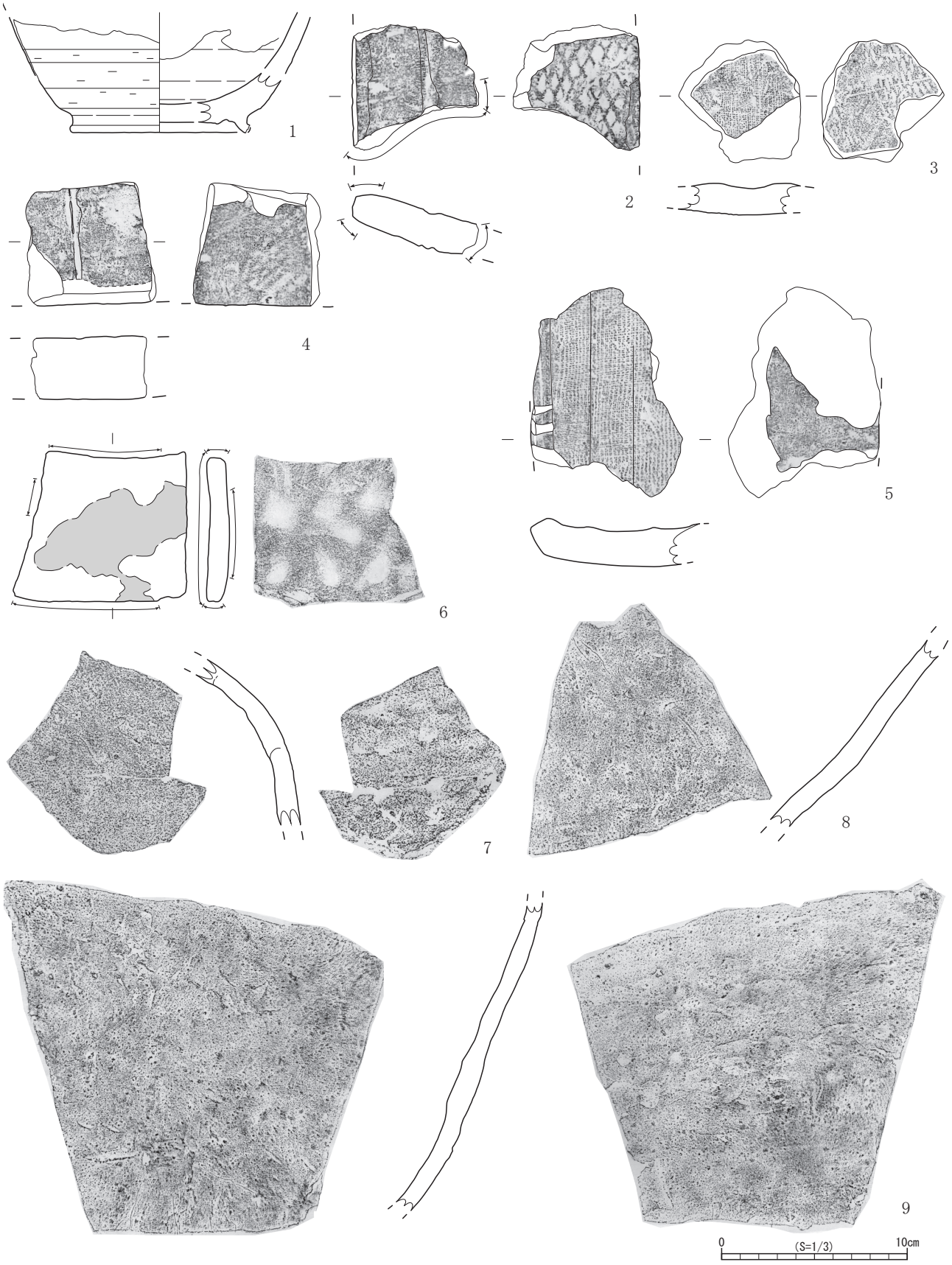
今回の調査では遺構検出面の上面を中心に、土師器、須恵器、瓦、陶器などが数多く出土した。そのうち 1 トレンチから出土した資料の大部分は SD2385 溝跡を中心に出土したものであると考えられる。

5．まとめ

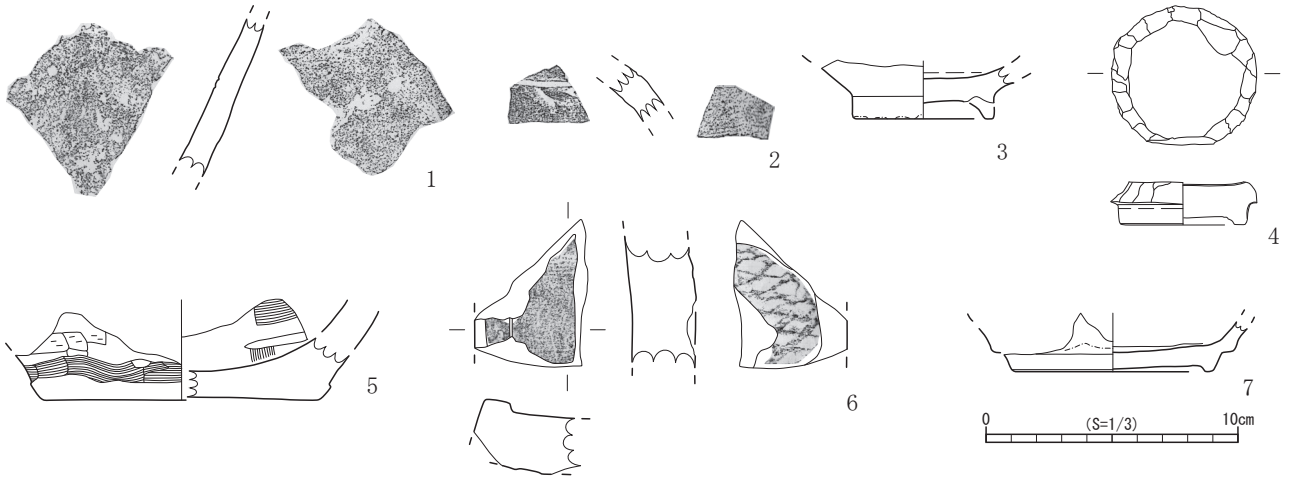
今回の調査地点は、方四町郡山Ⅱ期官衙南東側部分に当たり、昭和 56 年度に調査が行われた第 11 次調査区と一部重複し、昭和 54 年度の調査区の東側、平成 9 年度に調査が行われた第 117 次調査区の南側、平成 17 年度に調査が行われた第 166 次調査区の西側にあたる。今回の調査区からは材木列 1 条、溝跡 6 条、井戸跡 3 基、土坑 5 基、性格不明遺構 1 基、ピットが 2 基検出された。

1 トレンチで検出された SA74 材木列は方位がほぼ真北で、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の東辺材木列の一部であり、第 11 次調査区で検出された材木列と同一の遺構である。今回の調査では 31 個の柱痕跡を確認し、第 11 次調査区と重複している南側と遺構の中央部を完掘し、6 本の柱材が出土した。このうち掘削が及ぶ中央部分の 4 本を取り出し、南側で検出された 2 本は現状のまま埋め戻した。出土した柱材はいずれも底面が平坦に加工されている。比較的大型のものは丸材で、直径 28cm を計る。またやや小型の柱材も出土しているが、これは割材を利用したものであると考えられる。今回遺構から取り上げた柱材 4 点は樹種同定作業を行った。材質などの詳細については「6. 郡山遺跡第 263 次　SA74 材木列出土柱材について」を参照していただきたい。遺構の掘方の深さは約 70cm と、他の地点で確認されているⅡ期官衙の材木列の掘方よりも約 50 ～ 80cm 浅いことから、第 263 次調査区周辺の遺構検出面は削平されていると考えられる。

SK2393 土坑は SD2385・2387 溝跡と重複し、それらよりも古い土坑で、形はやや歪ながら 2 ヶ所柱痕跡が確認され、その柱痕跡の底面に礎板のような形で格子叩きの平瓦と円礫が据えられていたことから、掘立柱建物跡を構成する柱穴の可能性がある。



第 116 図　調査区一括出土遺物（1）



図版番号	登録番号	出土区	種別	器種	口径・長（cm）	底径・幅（cm）	器高・厚（cm）	外面（凹面）	内面（凸面）	特徴・備考	写真図版
116-1	E-606	1T	須恵器	長頸壺	－	(6.5)	6.5	ヘラケズリ	ロクロ	内底面付近すれている　骨針	32-4
116-2	G-175	1T	瓦	平瓦	(6.8)	(6.8)	1.8	布目痕　模骨痕　磨面あり	斜格子叩き　磨面あり	砥石転用？	32-9
116-3	G-178	1T	瓦	平瓦	(6.7)	(6.5)	1.6	布目痕　模骨痕　磨面あり	縄目痕	骨針	
116-4	G-177	1T	瓦	平瓦	(6.6)	(6.9)	3.4	ナデ　磨滅	縄叩き　磨滅		
116-5	G-176	1T	瓦	平瓦	(11.3)	(8.4)	2.0	布目痕　模骨痕	磨滅		
116-6	Ic-13	1T	陶器	壺？	(8.1)	(9.4)	1.1	磨面あり　灰釉施釉？	磨面あり	渥美　押印　砥石転用（5面）	32-6
116-7	Ic-16	1T	陶器	甕	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	常滑　肩部破片（降灰）　中世	
116-8	Ic-17	1T	陶器	甕	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	常滑　内面に降灰あり（体部の下部）	
116-9	Ic-15	1T	陶器	甕	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ　（あて具痕）	常滑　破片下部に降灰（内面）	32-1
117-1	Ic-18	1T	陶器	甕	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	常滑	
117-2	Ic-14	1T	陶器	壺	－	－	－	ヘラナデ　沈線　降灰	ヘラナデ	常滑の三筋壺？　単線 12 ～ 13c　中世陶器	32-11
117-3	I-63	1T	陶器	碗	－	5.5	(2.3)	透明釉	透明釉	肥前陶器　畳付　磨面あり　17c 後半	32-5
117-4	J-14	1T	磁器	碗	－	4.9	(1.7)	青磁釉	青磁釉	中国龍泉窯系青磁碗 転用（縁辺を円板状に加工　用途不明）	32-8
117-5	C-1226	2T	非ロクロ土師器	甕	－	(11.0)	(4.0)	ヘラケズリ　磨滅	ヘラナデ 磨滅		
117-6	G-179	2T	瓦	平瓦	(5.9)	(4.5)	(2.5)	布目痕　模骨痕	斜格子叩き		
117-7	I-64	2T	陶器	皿	－	8.0	(2.4)	長石釉	長石釉	志野織部？ 見込（内面）目跡 3 個 高台内ピン痕 3 個　長石釉皿　17c 初 高台内に墨痕	
写真のみ	J-15	1T	磁器	折縁皿	－	－	－	青磁釉	青磁釉　沈線	波佐見？　17c	32-7
	I-65	2T	陶器	小皿	－	－	－	灰釉	灰釉	緑釉小皿　近世	32-10

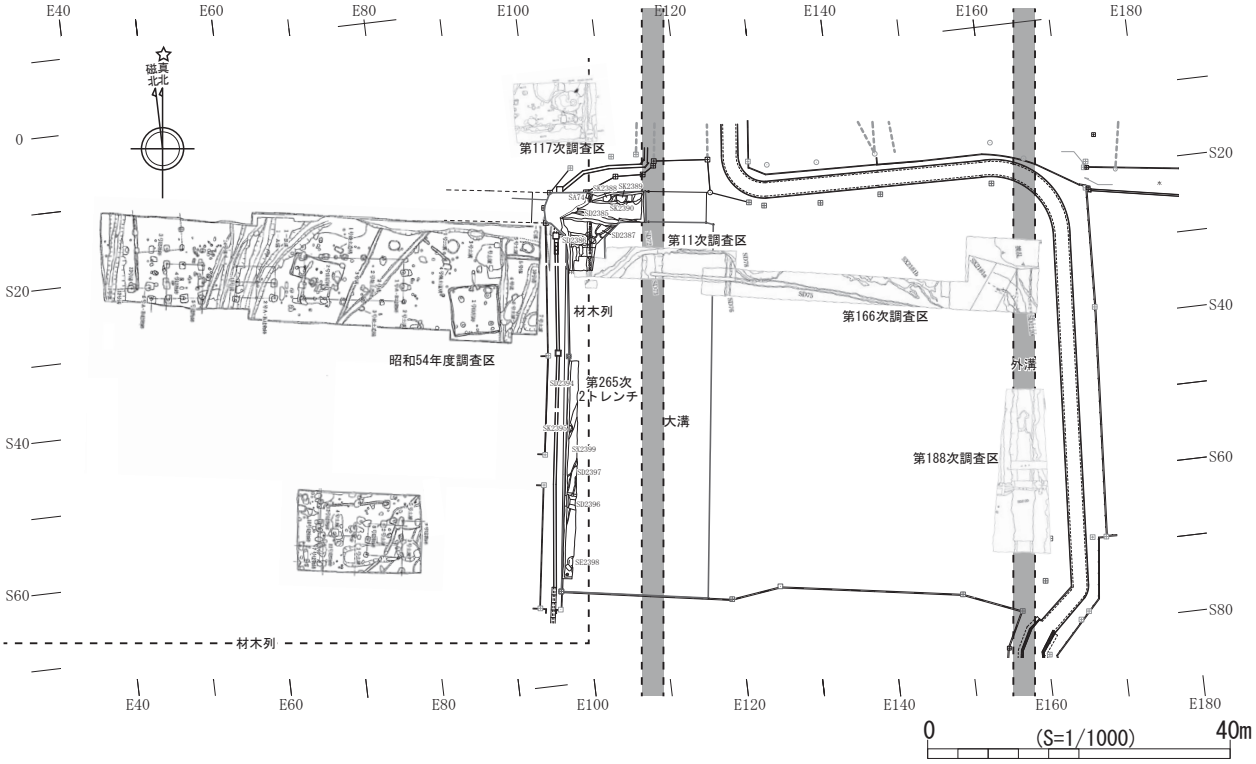
第 117 図　調査区一括出土遺物（2）

1 トレンチから見つかった溝跡は 3 条で、いずれも東西方向か、北東－南西方向を基調としている。SD2385 溝跡は幅 3.0 m、深さ 1.0 mの比較的規模の大きい溝跡である。堆積土の状況から掘り直されていることが確認されている。SA74 材木列よりも新しく、堆積土中から渥美焼や在地産の陶器が一定量以上出土し、近世陶磁器が一切出土していないことから、13 ～ 14 世紀代の溝跡の可能性が高い。調査区の東端部分で北に屈曲する。1 トレンチの東端からは方四町Ⅱ期官衙の大溝が検出されることが予想されたが、調査の結果、SD2385 溝跡に削平されていると考えられ、大溝は検出されなかった。

この SD2385 溝跡よりも古く、SA74 材木列よりも新しい SD2387 溝跡と SD2386 溝跡も、堆積土の状況が SD2385 溝跡に類似することから、SD2385 溝跡よりも古いものの、ほぼ同時期の可能性が考えられる。また SD2386 溝跡は検出された位置関係から、昭和 54 年度調査区の 1-C 溝跡と同一の溝跡の可能性がある。

SE2391・2392 井戸跡は、いずれも SD2385・2387 溝跡と重複し、SA74 材木列との位置関係などからⅡ期官衙の時期以降の井戸跡であると考えられる。

2 トレンチでは 3 条の溝跡が検出された。そのうち SD2394 溝跡は、方位は若干異なるものの、検出された位置関係や遺構の深さなどの規模がほぼ同一であることから、第 11 次調査の際に検出された材木列よりも新しい SD72 溝跡と同一の遺構の可能性がある。また SD2396 溝跡は幅 2.0 m、検出面までの深さが 1.15 mと比較的規模の大きな溝跡である。遺物は土師器や須恵器の小片などが出土している。時期については断定できないが、遺構の方位がＥ -15°－Ｓになることから、方四町Ⅱ期官衙とは異なる時期のものと考えられる。



第 118 図　第 263 次調査区と周辺調査区の遺構

SK2395 土坑からは古代の土師器の甕が一括で出土している。検出状況から他の遺構に付随する土坑であった可能性がある。SE2398 井戸跡は堆積土の中層から近世の陶器片などが出土していることから、近世の井戸跡であると考えられる。

遺構名	土師器		須恵器		瓦				陶器				磁器				石		鉄		その他		合計
					丸瓦		平瓦		中世		近世		中世		近世		製品						
1T	44	600.5 g	20	1180.5 g			4	518.5 g	6	848.5 g	1	3.5 g	2	77.5 g	1	3.5 g			2	22.5 g			3255.0 g
2T	40	344.5 g	14	910.5 g			3	316.0 g			2	92.5 g					1	8.5 g			1	62.0 g	914.0 g
SD2385	121	1381.0 g	63	4584.4 g	6	624.5 g	5	1667.5 g	15	1051.1 g									1	13.0 g	1	18.0 g	9339.5 g
SD2386	64	625.0 g	14	400.0 g	2	113.5 g	6	374.5 g	6	349.0 g							1	1.0 g	2	7.5 g	3	75.5 g	1946.0 g
SD2387	1	4.0 g																			3	6.5 g	10.5 g
SE2391	2	13.0 g																					13.0 g
SE2392	1	12.5 g	2	146.0 g																			158.5 g
SK2388	2	13.5 g					1	351.5 g											1	25.0 g			390.0 g
SK2389	1	3.0 g	2	67.0 g			1	289.0 g															359.0 g
SK2390	1	10.5 g																					10.5 g
SK2393			1	15.0 g			1	1850.0 g	2	83.5 g													1865.0 g
SA74	4	84.5 g	1	37.5 g																			122.0 g
SD2394	75	400.0 g	9	414.5 g															1	42.5 g			857.0 g
SD2396	5	15.5 g	4	62.5 g																			78.0 g
SE2398	3	20.0 g	1	4.5 g							1	7.5 g			1	1.5 g			1	17.5 g			51.0 g
SK2395	3	352.0 g										g											352.0 g
SX2399	11	68.0 g										g									1	9.0 g	77.0 g
P2	2	7.0 g										g											7.0 g
遺構外	22	197.0 g	1	33.0 g					2	54.0 g		g							2	53.0 g			337.0 g
合計	402	4151.5 g	132	7855.4 g	8	738.0 g	21	5367.0 g	29	2302.6 g	4	103.5 g	2	77.5 g	2	5.0 g	2	9.5 g	10	181.0 g	9	171.0 g	20142.0 g

表 1　郡山遺跡第 263 次調査区出土遺物数一覧

引用・参考文献

仙台市教育委員会　2005　『郡山遺跡発掘調査報告書　－総括編－』仙台市文化財調査報告第 283 集

仙台市教育委員会　2006　『郡山遺跡 26』仙台市文化財調査報告第 296 集

仙台市教育委員会　2009　『郡山遺跡 29』仙台市文化財調査報告第 347 集

1. SA74 材木列検出状況（南から）

2. 北拡張区・SA74 材木列検出状況（南から）

3. SA74 材木列土層断面（SDE・南から）

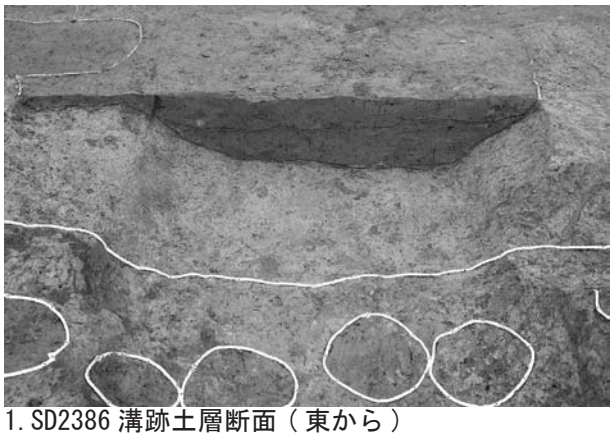
4. SA74 材木列土層断面（SPC・西から）

5. SA74 材木列完掘・柱材検出状況（南から）

6. SA74 材木列検出状況（北西から）

7. SA74 材木列土層断面（SPD・北から）

写真図版 28　郡山遺跡第 263 次調査区（1）


1.SD2386 溝跡土層断面（東から）

2.SE2391 井戸跡土層断面（南西から）

3.SK2389（北）・SE2392（南）土層断面（西から）

4.SK2390 土坑土層断面（西から）

5.SK2393 土坑土層断面（北から）

6.1 トレンチ東壁土層断面（西から）

7.1 トレンチ東側遺構完掘状況（北から）

8.1 トレンチ西側遺構完掘状況（北から）

写真図版 29　郡山遺跡第 263 次調査区（2）

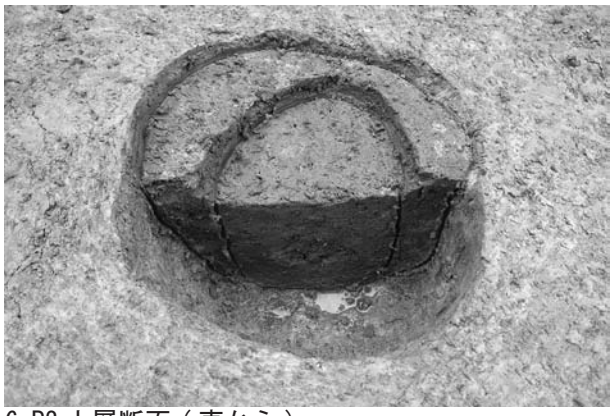
1.2 トレンチ全景遺構検出状況（南から）

2.2 トレンチ全景遺構完掘状況（南から）

3.SK2395 土坑遺物出土状況（西から）

4.SD2394 溝跡完掘状況（西から）

5.SE2398 井戸跡完掘状況（西から）


6.P2 土層断面（東から）

写真図版 30　郡山遺跡第 263 次調査区（3）

写真図版 31　郡山遺跡第 263 次調査出土遺物（1）

写真図版 32　郡山遺跡第 263 次調査出土遺物（2）

６．郡山遺跡第 263 次発掘調査より出土した柱材の樹種同定

吉川純子（古代の森研究舎）

郡山遺跡は仙台市太白区の広瀬川と名取川の合流点から北西方向約 3km に所在する古代の官衙遺跡である。本遺跡の第 263 次調査において 7 世紀末～ 8 世紀前半とされる方四町Ⅱ期官衙の材木列が確認された。そこで当時の木材利用状況を把握する目的で柱材 4 点の樹種同定を実施した。試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の 3 方向の切片を採取しプレパラートに封入して生物顕微鏡で観察・同定した。柱材の樹種同定結果を表 1 に示す。4 点全てがクリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）と同定された。

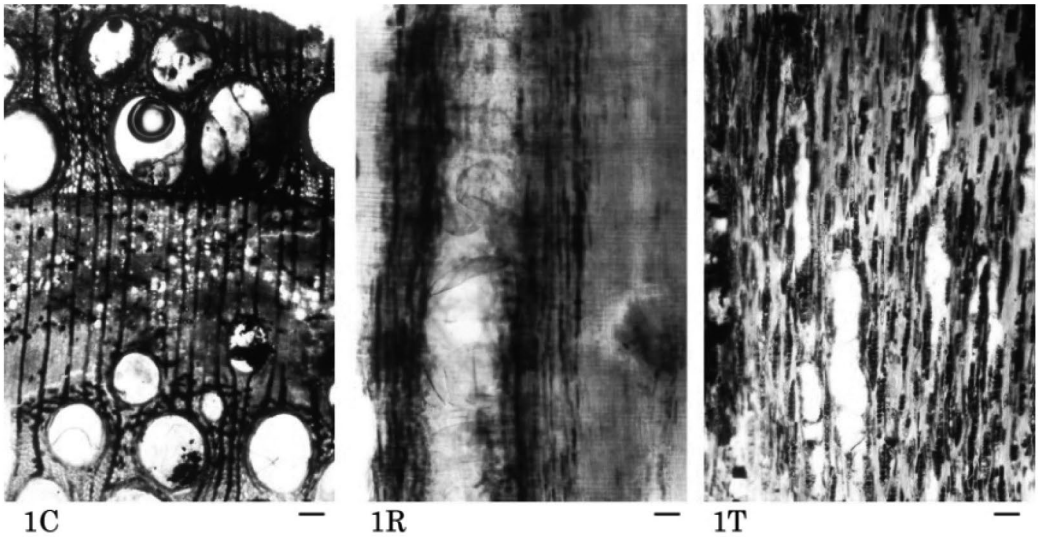
表 1 郡山遺跡第 263 次出土柱材の樹種

登録番号	出土遺構	種別	樹種
58	SA74	柱材	クリ
59	SA74	柱材	クリ
61	SA74	柱材	クリ
60	SA74	柱材	クリ

本遺跡では 1980 年の調査において方四町Ⅱ期官衙南辺の南門及び材木列にクリが使われているとされ（長島 2009）、今回の結果でも柱材全てがクリであったことから選択的にクリが使われていたと考えられる。クリ材は水湿に強く耐久性があり、大径材が容易に調達できることから建築・土木材として縄文時代以降の東北地方では多用されてきた。近隣の遺跡では仙台市沼向遺跡でも古墳時代以降土木・建築材にクリが多用されており（鈴木ほか 2010）、古代における土木材のクリ利用は宮城県で一般的な傾向であったと考えられる。

引用文献

鈴木三男・小川とみ　2010 「第 6 節　沼向遺跡出土木製品・炭化材の樹種同定（中野高柳遺跡を含む）」
『沼向遺跡第 4 ～ 34 次調査　第 9 分冊』仙台市文化財調査報告書第 360 集
仙台市教育委員会　1985 『郡山遺跡Ⅴ』仙台市文化財調査報告書第 74 集
長島榮一　2009 『日本の遺跡 35 郡山遺跡』同成社



図版 1 郡山遺跡出土クリ柱材の顕微鏡写真

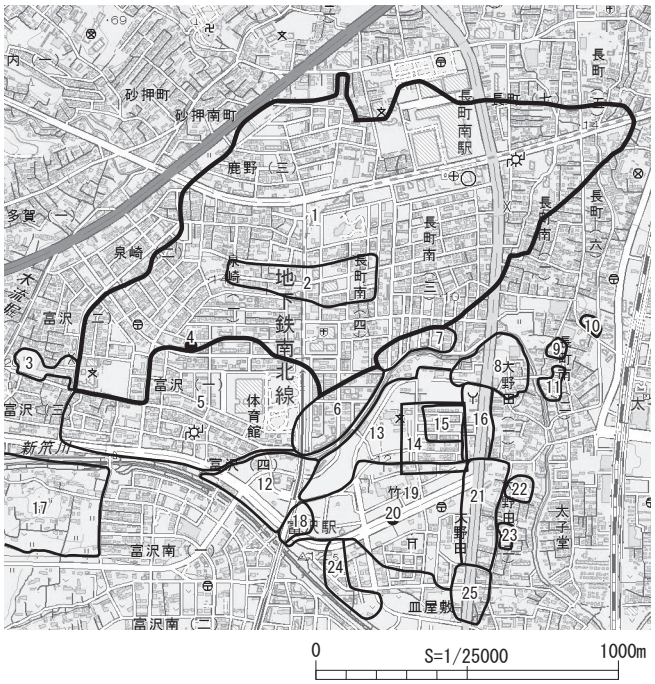
C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm

第6章　富沢遺跡

第1節　遺跡の概要

富沢遺跡は、仙台市の南東部、太白区の富沢・長町南・泉崎・鹿野等に位置し、水田跡を中心とする総面積約90haに及ぶ広大な複合遺跡である。遺跡の南には名取川、北東には広瀬川が流れ、その両岸には自然堤防が発達している。青葉山丘陵と高舘丘陵の間から平野部に流れ込む名取川の下流域西半部は扇状地性の沖積平野で、左岸は郡山低地、右岸は名取低地と呼ばれる。富沢遺跡は、郡山低地の中央西寄りで、広瀬川の自然堤防、名取川の支流で青葉山丘陵の太白山付近から流れる笊川の自然堤防に囲まれた後背湿地に立地する。

発掘調査は、現在までに147回を数える調査が継続的に実施されており、弥生時代から近世に至る水田跡が重層的に検出されている。また、1987年～1988年に実施された第30次調査では、旧石器時代の遺構と遺物が確認され、さらに樹木や植物化石、動物のフン、昆虫化石等が出土し、当時の自然環境を知るうえでの貴重な資料となっている。第30次調査範囲の一部は仙台市富沢遺跡保存館（地底の森ミュージアム）において保存公開されている。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～中世
2	泉崎浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～古墳、平安、近世
3	富沢清水遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
4	教塚古墳	円墳	後背湿地	古墳
5	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文～中世
6	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文～中世
7	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代
8	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、古代～近世
9	長町南遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
10	長町六丁目遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
11	新田遺跡	集落跡	自然堤防	奈良～平安
12	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～奈良
13	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～古代、近世
14	大野田官衙遺跡	官衙跡	自然堤防	古代
15	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳～平安
16	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文～古代
17	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世
18	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、古墳、古代
19	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
20	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
21	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文～中世
22	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良～平安
23	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
24	伊古田B遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	古墳～古代
25	皿屋敷遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	古代、中世

第119図　富沢遺跡と周辺の遺跡

第2節　第148次調査

1.　調査要項

遺　跡　名　富沢遺跡
（宮城県遺跡登録番号 01369）

調 査 地 点　仙台市太白区鹿野3丁目217－1

調 査 期 間　平成28年8月1日～10月28日

調査対象面積　287.76㎡

調 査 面 積　127.2㎡

調 査 原 因　保育園の建築工事

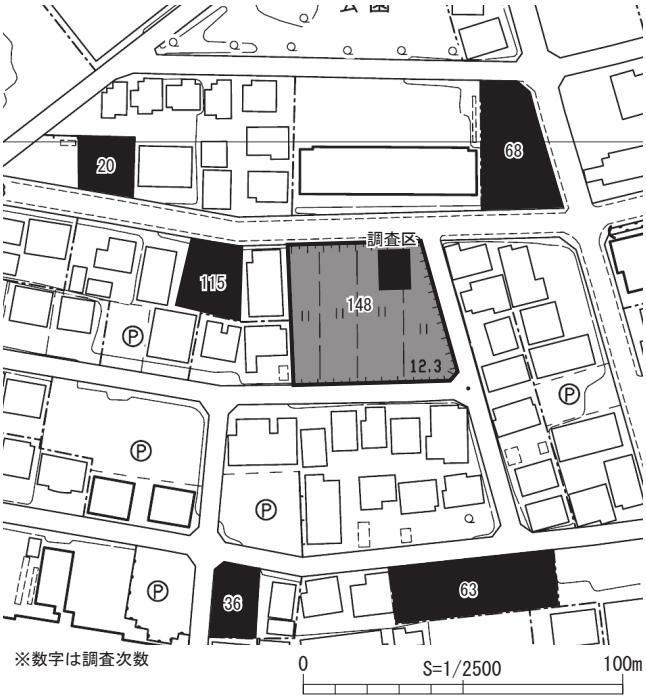
調 査 主 体　仙台市教育委員会

調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部
文化財課調査調整係

担 当 職 員　主事　高橋 純平
文化財教諭　佐藤 慶一

2.　調査に至る経緯と調査方法

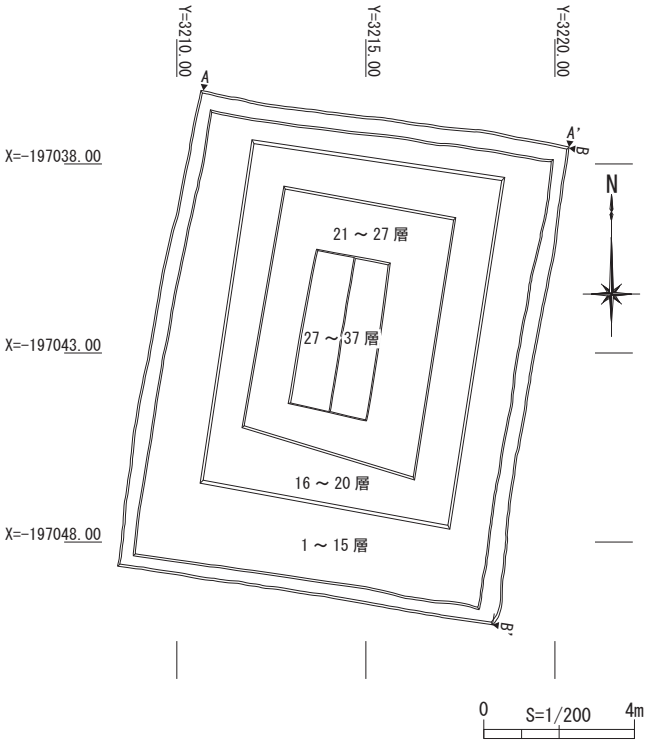
今回の調査は申請者より平成28年4月12日に提出された「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（平成28年4月22日付H28教生文第103－002号で回答）に基づき実施した。調査対象地は仙台市太白区鹿野3丁目217－1に位置する。建物範囲内に調査区を設定し、平成28年8月1日から着手した。重機を用いて基本層1層を除去し、2層から遺構検出作業を行った。15層上面までの調査を調査区全域で行い、10月5日から調査区を第3図のように縮小しながら下層の調査を行った。調査では必要に応じて、平面図及び断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真の撮影を行った。10月25日から27日まで調査区の埋め戻しを行い、10月28日に器材を撤収し調査を終了した。



第120図　富沢遺跡148次調査区位置図

3.　基本層序（第122・123図）

今回の調査では、37層の基本層を確認した。このうち4・7・11層から遺構を検出した。各層の特徴については以下のとおりである。なお、16層以下の層はグライ化している。



第121図　富沢遺跡第148次調査区設定図

1層：オリーブ黒色シルトで、層厚は7.5～27cmである。現代の水田耕作土である。

2層：オリーブ黒色シルトで、層厚は4.5～19.5cmである。1～7㎜程度の白色小石、酸化鉄を含む。近代の磁器片が出土し、ビニールが混入することから近現代の堆積層と考えられる。

3層：黒褐色粘土質シルトで、層厚は2.7～9.8cmである。1～10㎜程度の白色小石を含み、4層よりも砂を多く含む。18世紀代の陶器片が出土していることから近世の堆積層と考えられる。

4層：黒褐色粘土で、層厚は6～23.4cmである。黄褐色砂ブロックを少量含み、1～5㎜程度の白色小石を含む。中世から近世の水田耕作土と考えられる。

5層：黄褐色砂で、層厚は5.2～23.8cmである。調査区北側に堆積する自然堆積層で、洪水によって堆積した可能性がある。

6層：暗赤灰色粘土質シルトで、層厚は2.9～21.2cmである。黒色粘土ブロック、灰白色火山灰ブロックを少量含み、1～5㎜程度の白色小石を多量に含む。調査区中央から南側に堆積する古代以降の自然堆積層と考えられる。

7層：黒褐色粘土で、層厚は5.2～17.8cmである。灰白色火山灰ブロックを少量含み、層下面に酸化鉄が帯状に

集積する。古代の水田耕作土と考えられる。

８層：黒褐色粘土で、層厚は2.5～10cmである。暗褐色粘土ブロック、砂を多量に含む。調査区北側に部分的に堆積する自然堆積層である。

９層:黒褐色シルトで、層厚は2.3～13.5cmである。砂を多量に含む。調査区北西側に堆積する自然堆積層である。

10層：灰オリーブ色砂で、層厚は2.1～29cmである。黒色粘土ブロックを少量含む。調査区北西側に堆積する自然堆積層で、洪水によって堆積した可能性がある。

11層：黒褐色粘土で、層厚は9.1～20.6cmである。1～3㎜程度の白色小石、植物遺体を含む。層下面に凹凸が見られることから水田耕作土の可能性が考えられるが、畦畔は確認できなかった。

12層：黒褐色粘土で、層厚は2.4～8.9cmである。植物遺体を含む。調査区北側に部分的に堆積する自然堆積層である。

13層：黒褐色粘土で、層厚は4.3～10.9cmである。調査区全体で部分的に堆積する畦畔痕跡を構築する土である。

14層：黒色粘土で、層厚は23.7～36.4cmである。植物遺体を含む。層下面に凹凸が見られることから水田耕作土の可能性が考えられるが、畦畔は確認できなかった。

15層：黒褐色粘土で、層厚は4.8～16.1cmである。黒色粘土ブロック、植物遺体を含む。自然堆積層である。

16層：灰色粘土質シルトで、層厚は4.8～30.2cmである。黒色粘土ブロックを含む。自然堆積層である。

17層：オリーブ灰色砂で、層厚は3.9～30.1cmである。黒色粘土ブロックを少量含み、同色の粘土ブロックを多量に含む。自然堆積層である。

18層：オリーブ灰色砂で、層厚は6.9～46.5cmである。黒色粘土ブロックをわずかに含み、同色の粘土ブロックを多く含む。17層より粒が粗い。自然堆積層である。

19層：緑灰色粘土で、層厚は4.2～27.8cmである。同色の砂をわずかに含む。自然堆積層である。

20層：暗緑灰色砂で、層厚は3.4～32.6cmである。同色のシルトを少量含む。自然堆積層である。

21層：オリーブ灰色粘土で、層厚は2.4～21.8cmである。同色のシルトを多量に含み、固くしまっている。自然堆積層である。

22層：褐灰色粘土で、層厚は1.8～5cmである。調査区北壁で部分的な堆積が確認できる自然堆積層である。

23層：暗赤灰色粘土で、層厚は2.3～12.5cmである。旧石器時代の腐食土層と考えられる。

24層：褐灰色粘土で、層厚は2.1～18.2cmである。自然堆積層である。

25層：緑灰色粘土で、層厚は3.4～27.4cmである。自然堆積層である。

26層：緑灰色砂で、層厚は4～37cmである。同色のシルトを含む。自然堆積層である。

27層：緑灰色砂で、層厚は42.8～56.7cmである。26層よりも粒が粗い。自然堆積層である。

28層：緑灰色砂で、層厚は5.6～22.3cmである。27層よりも粒が粗い。自然堆積層である。

29層：青灰色粗砂で、層厚は10.9～37cm以上である。小礫を多く含み、固くしまっている。自然堆積層である。

30層：暗緑灰色砂で、層厚は3.5～4.7cmである。自然堆積層である。

31層：緑灰色砂で、層厚は2.9～5.4cmである。自然堆積層である。

32層：緑灰色粘土で、層厚は2.2～5.5cmである。同色のシルトを含む。自然堆積層である。

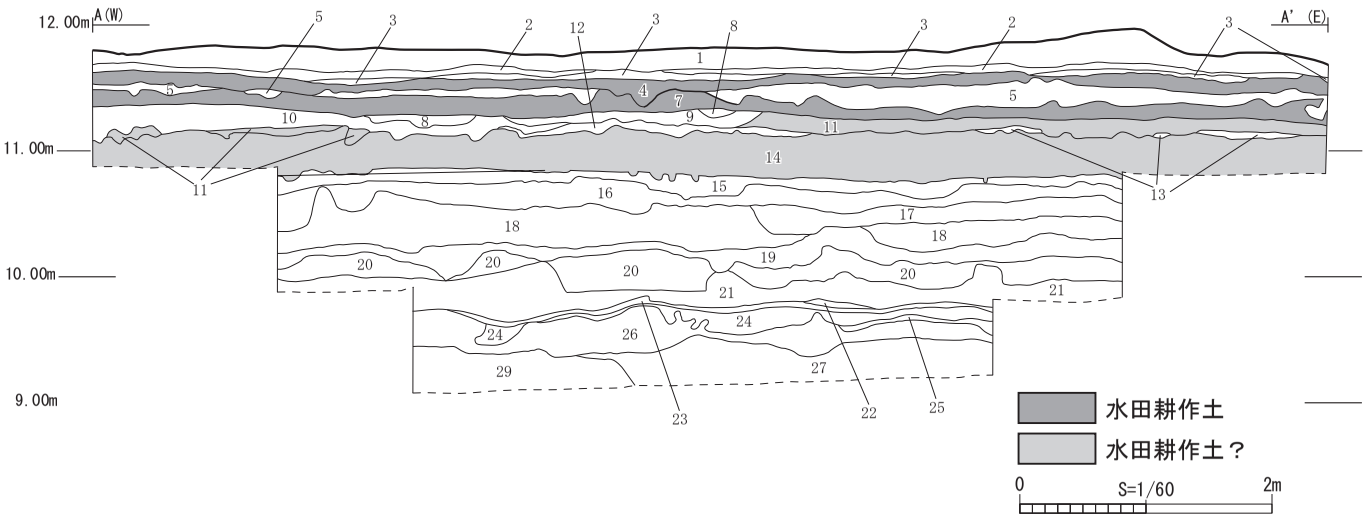
33層：灰色粘土で、層厚は0.1～3.5cmである。自然堆積層である。

34層：オリーブ灰色砂で、層厚は1.5～3.7cmである。自然堆積層である。

35層：緑灰色粘土で、層厚は2.9～15.1cmである。自然堆積層である。

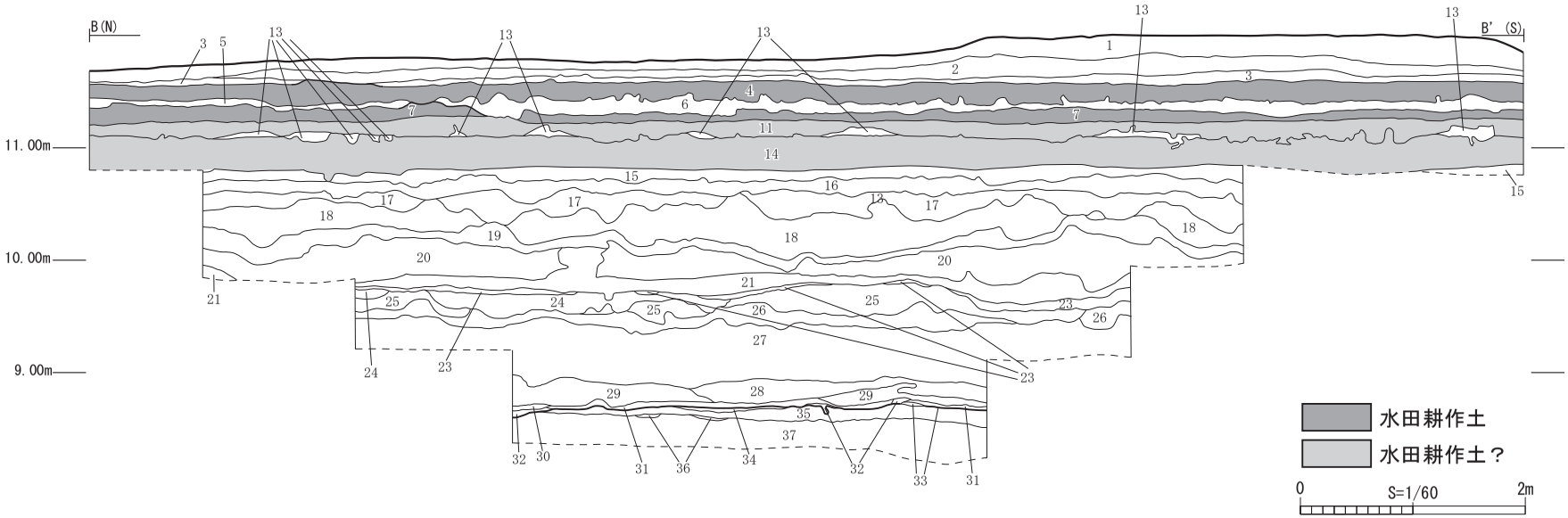
36層：暗緑灰色粘土で、層厚は1.6～2.4cmである。自然堆積層である。

37層：オリーブ灰色砂質シルトで、層厚は37cm以上の自然堆積層である。



層位	色調	土質	備考・混入物
1	5Y3/2　オリーブ黒色	シルト	現代の水田耕作土
2	7.5Y3/1　オリーブ黒色	シルト	1～7㎜程度の白色小石、酸化鉄を含む。
3	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	1～10㎜程度の白色小石を含む。4層よりも砂を多く含む。
4	10YR3/2　黒褐色	粘土	黄褐色砂ブロックを少し含む。1～5㎜程度の白色小石を含む。（水田耕作土）
5	2.5Y5/6　黄褐色	砂	洪水堆積
6	2.5YR3/1 暗赤灰色	粘土質シルト	黒色粘土ブロック、灰白色火山灰ブロックを少し含む。1～5㎜程度の白色小石を多く含む。
7	5YR3/1　黒褐色	粘土	灰白色火山灰ブロックを少し含む。底に酸化鉄が帯状の集積。（水田耕作土）
8	10YR3/1　黒褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック、砂を多く含む。
9	10YR3/2　黒褐色	シルト	砂を多く含む。
10	5Y5/3　灰オリーブ色	砂	黒色粘土ブロックを少し含む。洪水堆積。
11	10YR3/1　黒褐色	粘土	1～3㎜程度の白色小石を含む。植物遺体を含む。（水田耕作土？）
12	7.5YR2/2 黒褐色	粘土	植物遺体を含む。
13	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	
14	N2/　黒色	粘土	植物遺体を含む。（水田耕作土？）
15	10YR3/2　黒褐色	粘土	黒色粘土ブロック、植物遺体を含む。
16	7.5Y4/1　灰色	粘土質シルト	黒色粘土ブロックを含む。グライ化。
17	5GY5/1　オリーブ灰色	砂	黒色粘土ブロックを少し含む。同色の粘土ブロックを多く含む。グライ化。
18	5GY5/1　オリーブ灰色	砂	黒色粘土ブロックをわずかに含む。同色の粘土ブロックを多く含む。17層より粒が粗い。グライ化。
19	10GY5/1　緑灰色	粘土	同色の砂をわずかに含む。グライ化。
20	10GY4/1　暗緑灰色	砂	同色のシルトを少し含む。グライ化。
21	10GY6/1　緑灰色	粘土	同色のシルトを多く含む。固くしまっている。グライ化。
22	10YR4/1　褐灰色	粘土	グライ化。
23	2.5YR3/1 暗赤灰色	粘土	
24	10YR4/1　褐灰色	粘土	グライ化。
25	10GY5/1　緑灰色	粘土	グライ化。
26	7.5GY5/1 緑灰色	砂	同色のシルトを含む。グライ化。

第123図　調査区北壁土層断面図



層位	色調	土質	備考・混入物
27	7.5GY5/1 緑灰色	砂	26 層よりも粒が粗い。グライ化。
28	7.5GY5/1 緑灰色	砂	27 層よりも粒が粗い。グライ化。
29	5BG5/1 青灰色	粗砂	小礫を多く含む。固くしまっている。グライ化。
30	10GY4/1 暗緑灰色	砂	グライ化。
31	7.5GY5/1 緑灰色	砂	グライ化。
32	7.5GY6/1 緑灰色	粘土	同色のシルトを含む。グライ化。
33	N4/ 灰色	粘土	グライ化。
34	5GY5/1 オリーブ灰色	砂	グライ化。
35	7.5GY5/1 緑灰色	粘土	グライ化。
36	10GY4/1 暗緑灰色	粘土	グライ化。
37	5GY5/1 オリーブ灰色	砂質シルト	グライ化。

第 124 図　調査区東壁土層断面図

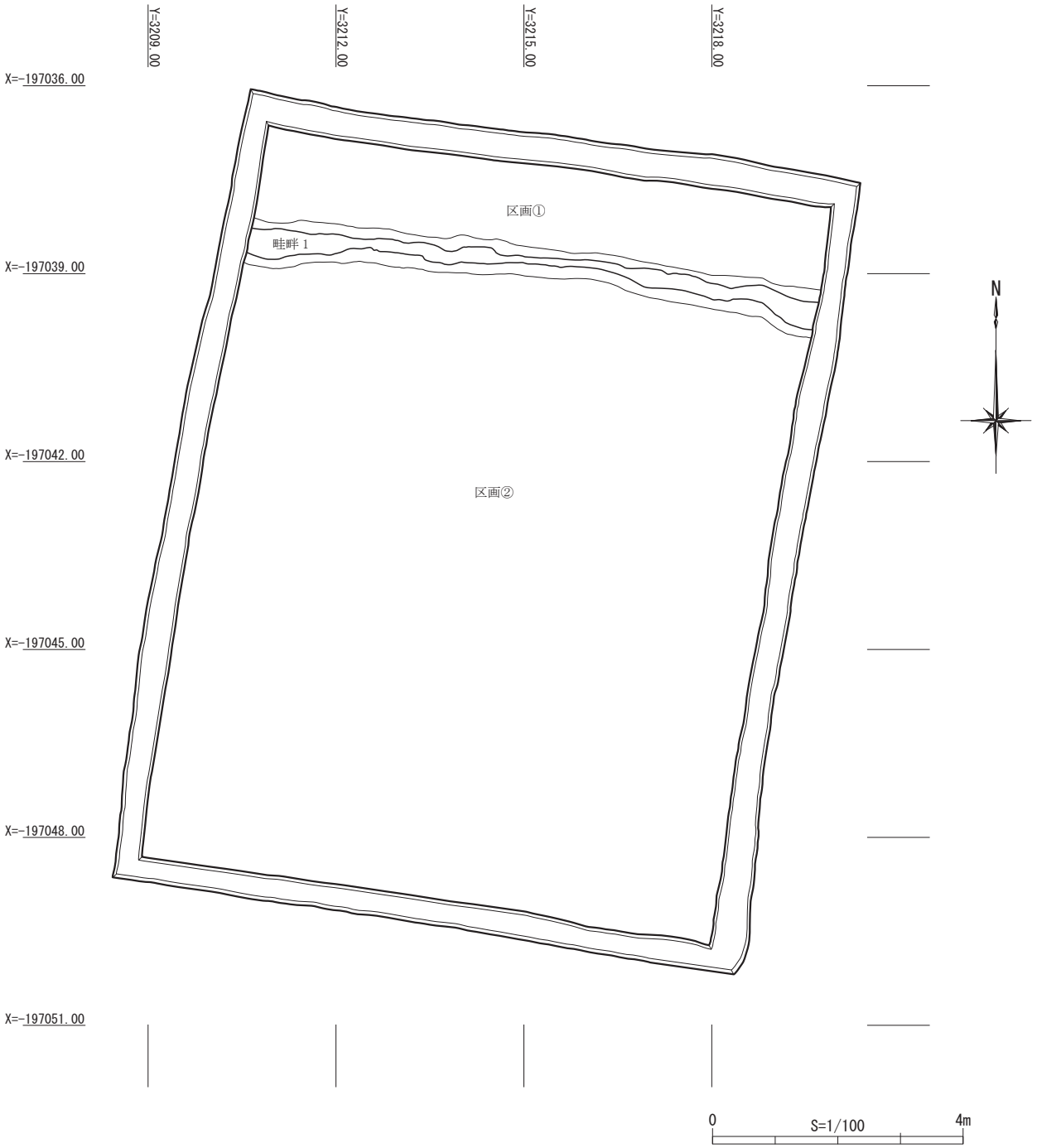
４．発見遺構と出土遺物

今回の調査では、4 層と 7 層から水田跡、11 層から溝跡 1 条、水田区画痕跡を検出した。4 層水田跡からは土師器甕片と土師器坏片が出土している。

(1) 4 層上面

水田跡（第 124 図、写真図版 32 － 1・2）

4 層を水田土壌とする水田跡である。調査区北側で東西方向に延びる畦畔(畦畔 1)を検出した。規模は上端幅 9.7 ～ 44.5cm、下端幅 46.5 ～ 77.4cm、検出長 9.13m、方向はＮ－ 83°－Ｗである。



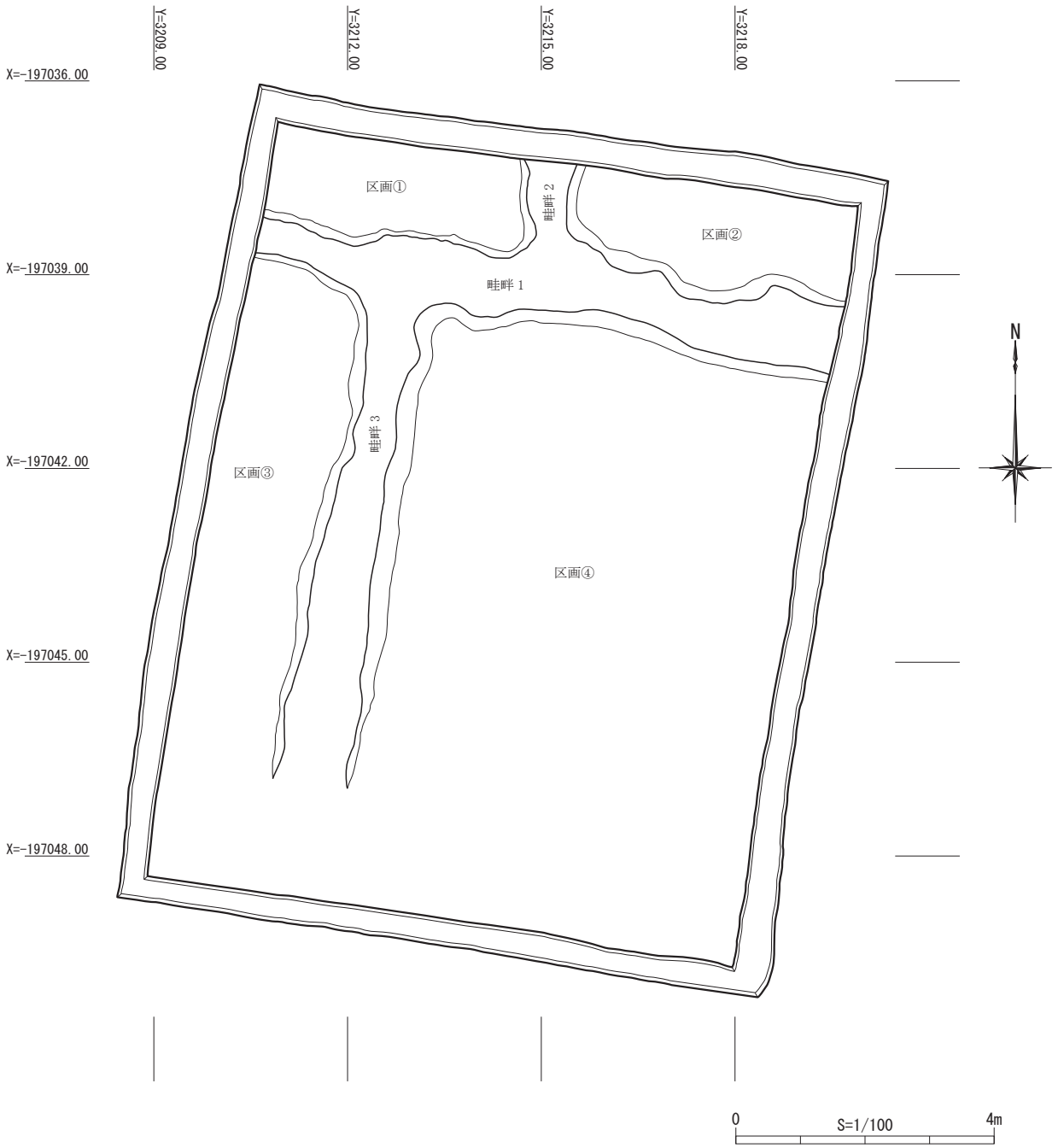
第 124 図　4 層水田跡平面図

水田区画は２区画（区画①・②）を確認した。区画①の規模は長軸 9.13m 以上、短軸 1.49m 以上、標高は 11.4 ～ 11.5m、畦畔１との比高差は１～ 5.3cm である。区画②の規模は短軸 9.15m 以上、長軸 9.84m 以上、標高は 11.41 ～ 11.49m、畦畔１との比高差は 3.2 ～ 7.5cm である。いずれの区画も部分的に検出されたのみで正確な規模は不明である。出土遺物は、ロクロ土師器高台付坏の底部片１点、土師器甕片１点、土師器坏片１点が出土している。

(2) ７層上面

水田跡（第 125 図、写真図版 32 － 3・4）

７層を水田土壌とする水田跡である。調査区のほぼ全域で東西方向に延びる畦畔１条（畦畔 1）と南北方向に延



第 125 図　７層水田跡平面図

びる畦畔２条（畦畔２･3）を検出した。畦畔１の規模は上端幅 0.57 ～ 1.20m、下端幅 0.75 ～ 1.55m、検出長 9.1m、方向はＮ－ 78°－Ｗである。

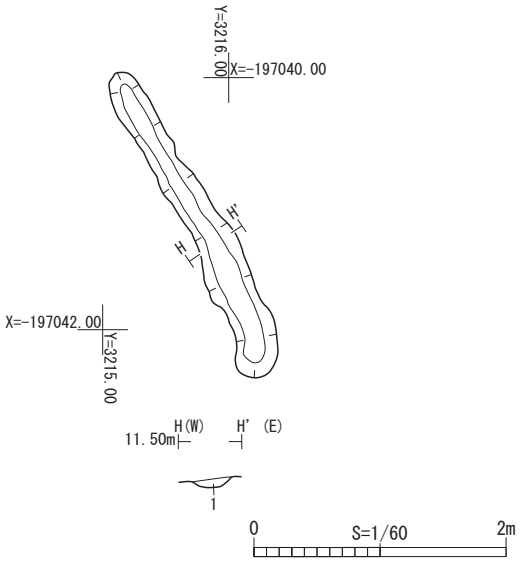
畦畔２の規模は上端幅 47.4 ～ 81cm、下端幅 0.83 ～ 1.02m、検出長 1.38m、方向はＮ－ 9°－Ｗである。畦畔１の西端から約 4.4m のところで直交するように北へ延びている。畦畔３の規模は上端幅 0.52 ～ 1.17m、下端幅 1.04 ～ 1.42m、検出長 7.33m、方向はＮ－ 11°－Ｅである。畦畔１の西端から約 2.2m のところで直交するように南へ延びている。

水田区画は４区画（区画①～④）を確認した。区画①の規模は長軸 3.83m 以上、短軸 1.44m 以上、標高は 11.37 ～ 11.44m、畦畔１との比高差は 1.1 ～ 2.8cm、畦畔２との比高差は１～ 3.5cm である。区画②の規模は長軸 4.32m 以上、短軸 0.84m 以上、標高は 11.3 ～ 11.39m、畦畔１との比高差は１～ 4cm、畦畔２との比高差は 2.5 ～ 4cm である。区画③の規模は短軸 1.74m 以上、長軸 7.14m 以上、標高は 11.36 ～ 11.42m、畦畔１との比高差は 1.4 ～ 3.8cm、畦畔３との比高差は 1.1 ～ 5.2cm である。区画④の規模は短軸 5.93m 以上、長軸 7.37m 以上、標高は 11.22 ～ 11.34m、畦畔１との比高差は 2.5 ～ 7cm、畦畔３との比高差は 4.3 ～ 7.6cm である。いずれの区画も部分的に検出されたのみで正確な規模は不明である。遺物は出土していない。

(3) 11 層上面

SD1 溝跡（第 126 図、写真図版 32 － 5）

調査区中央北寄りで検出した北西から南西に延びる小規模な溝跡である。規模は上端幅 21.4 ～ 35.1cm、下端幅 9.2 ～ 19.4cm、検出長 2.65m で、深さは約 8 cm、断面形は浅い皿形を呈する。方向はＮ－ 24°－Ｗである。堆積土は１層で基本層 10 層と同じ土が堆積している。遺物は出土していない。



SD1			
層位	色調	土質	備考・混入物
1	5Y5/3 灰オリーブ色	砂	黒色粘土ブロックを少し含む。10 層と同じ。

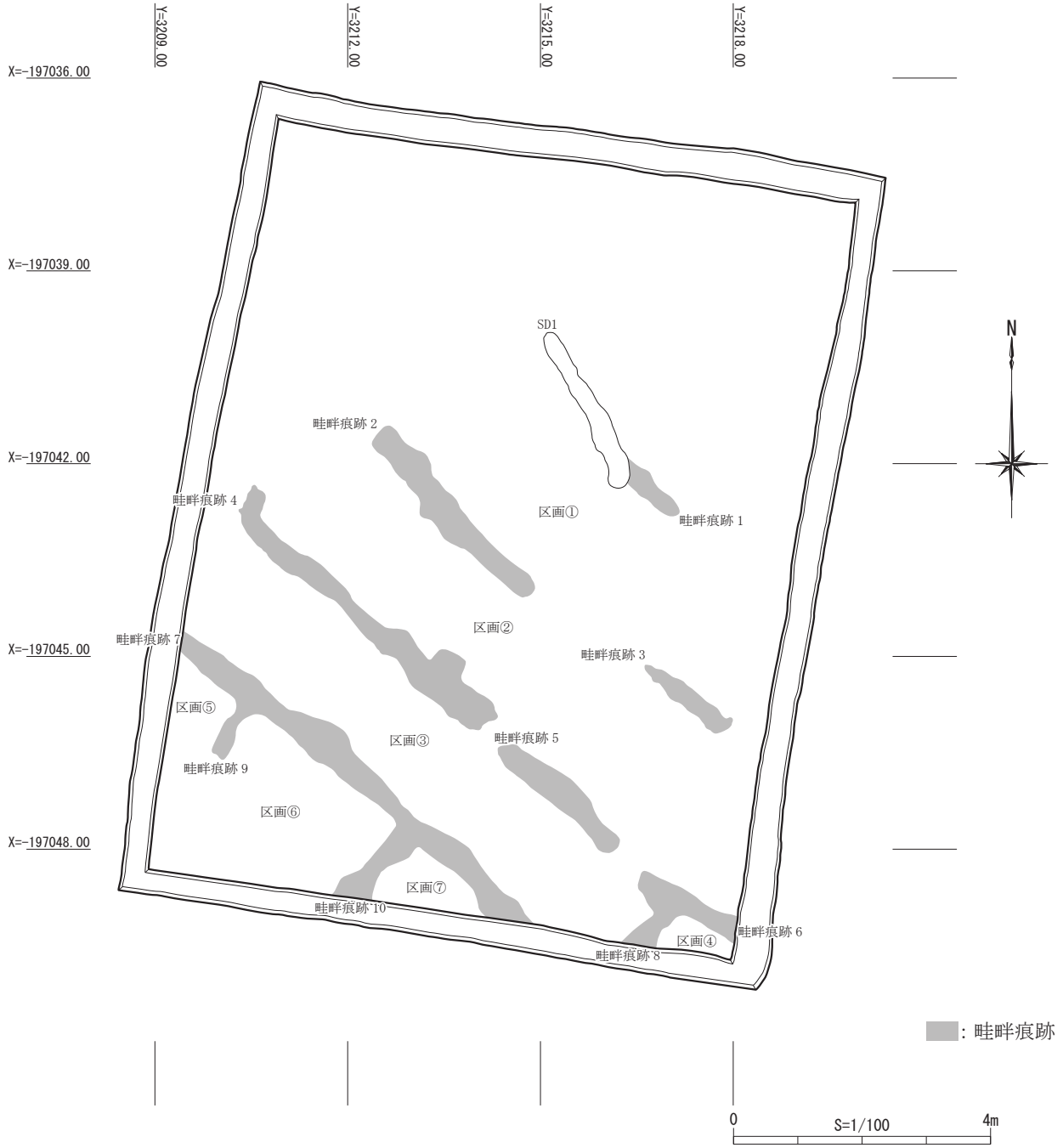
第 126 図　SD1 溝跡平・断面図

(4) 11 層下面

水田区画痕跡（第９図、写真図版２－ 14）

13 層からなる畦畔の痕跡で区画された水田区画である。調査区南側で北西から南東に延びる畦畔痕跡７条（畦畔痕跡１～７）と北東から南西に延びる畦畔痕跡３条（畦畔痕跡８～ 10）を検出した。畦畔痕跡１の規模は幅 25 ～ 36.4cm、検出長 1.17m、方向はＮ－ 52°－Ｗである。畦畔痕跡２の規模は幅 33 ～ 58cm、検出長 3.43m、方向はＮ－ 43°－Ｗである。畦畔痕跡３の規模は幅 12.4 ～ 35.1cm、検出長 1.6m、方向はＮ－ 50°－Ｗである。畦畔痕跡３は畦畔痕跡２の延長線上に位置することから畦畔痕跡２と同一のものと考えられる。畦畔痕跡４の規模は幅 22.7 ～ 79.3cm、検出長 5.17m、方向はＮ－ 48°－Ｗである。畦畔痕跡５の規模は幅 28 ～ 47.7cm、検出長 2.43m、方向はＮ－ 51°－Ｗである。畦畔痕跡６の規模は幅 29.7 ～ 47.3cm、検出長 1.62m、方向はＮ－ 64°－Ｗである。畦畔痕跡５・６は畦畔痕跡４の延長線上に位置することから畦畔痕跡４と同一のものと考えられる。畦畔痕跡７の規模は幅 27.9 ～ 64.5cm、検出長 7.1m、方向はＮ－ 49°－Ｗである。

畦畔痕跡８の規模は幅 26.6 ～ 45.2cm、検出長 64.4cm、方向はＮ－ 43°－Ｅである。畦畔痕跡６の北西端から約 0.6m のところで直交するように南西へ延びている。畦畔痕跡９の規模は幅 17.3 ～ 27.9cm、検出長 87.4cm、方向はＮ－ 36°－Ｅである。畦畔痕跡７の北西端から約 1.4m のところで直交するように南西へ延びている。畦畔痕跡 10 の規模は幅 27.1 ～ 54.3cm、検出長 1.5m、方向はＮ－ 42°－Ｅである。畦畔痕跡７の北西端から約 4.6m のと



第 127 図　7 層下面畦畔痕跡平面図

ころで直交するように南西へ延びている。

水田区画は 7 区画（区画①～⑦）を確認した。区画①の規模は長軸 7.06m 以上、短軸 2.09m である。区画②の規模は長軸 9.74m 以上、短軸 2.2m である。区画③の規模は長軸 8.82m 以上、短軸 1.75m である。区画④の規模は長軸 0.96m 以上、短軸 0.66m 以上である。区画⑤の規模は長軸 1.19m 以上、短軸 0.8m 以上である。区画⑥の規模は長軸 2.74m、短軸 1.54m 以上である。区画⑦の規模は長軸 1.52m 以上、短軸 1.09m 以上である。いずれの区画も部分的に検出されたのみで正確な規模は不明である。遺物は出土していない。

(5) 下層の調査

15 層上面までの調査を調査区全域で行い、その後調査区を第 3 図のとおりに縮小しながら、旧石器時代の調

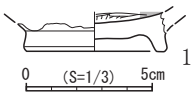
査を行い、腐食土層 23 層を確認した。23 層は標高 9.54m から 9.85m の間で波状に堆積している。層厚は 2.3 ～ 12.5cm であるが、調査区の北端で 2.6cm、南端で 12.5cm と南側に厚く堆積している。樹木や毬果などの植物遺体は確認できなかった。

(6) 出土遺物

遺物は、2 層から土師器甕片 2 点、土師器坏片 1 点、土師器片 2 点、17 世紀代の岸窯産陶器の擂鉢片 1 点、肥前産陶器の皿か鉢の小片 1 点、18 世紀代の小野相馬産陶器の折縁皿片 1 点、19 世紀前葉から中葉頃の大堀相馬産磁器の皿片 1 点、19 世紀半ばの大堀相馬産陶器の瓶類の小片 1 点、瀬戸・美濃産磁器の染付碗片 1 点、19 世紀後半の瀬戸・美濃産磁器の端反り碗片 1 点、近世の瀬戸・美濃産陶器の小片 1 点、在地産陶器の擂鉢片 1 点、肥前産磁器の染付碗片 1 点、肥前産磁器の染付皿片 1 点、近代の瀬戸・美濃産磁器の小片、年代不明の大堀相馬産陶器の碗片 1 点、大堀相馬産陶器の瓶類の小片 1 点、瀬戸産陶器の碗片 1 点、陶器甕片 1 点、陶器片 2 点、磁器の染付碗片 1 点、が出土している。

3 層からは土師器片 7 点、須恵器甕片 1 点、須恵器坏片 2 点、須恵器片 2 点、18 世紀代の大堀相馬産陶器の碗片 1 点が出土、4 層からはロクロ土師器高台付坏の底部片 1 点、土師器甕片 1 点、土師器坏片 1 点が出土している。土師器坏の底部片は水田耕作による巻き上げによって 4 層から出土したと考えられる。5 層からは土師器甕片 1 点が出土している。6 層からはロクロ土師器高台付坏の底部片 1 点、土師器甕片 2 点が出土している。4 層出土のロクロ土師器高台付坏の底部片は 6 層出土のものと接合する。全体に小片が多く、図示できたのは土師器坏の底部のみである（第 128 図、写真図版 34-7-1）。

また、29 層からは人為的に加工された可能性のある礫が 1 点出土している。29 層は小礫を多く含む層だが、この礫はその中でも大きいものである（最大長 4.5cm、最大幅 2.6cm）。観察してみると、先端部に擦痕がみられ刃のような形状をしている。人工遺物である可能性が考えられるため、写真を掲載した（写真図版 34-7-2）。



掲載番号	登録番号	出土層位	種別	器種	法量（cm）			調整		備考	写真図版
					口径	底径	器高	外面	内面		
1	D-1	4・6 層	ロクロ土師器	高台付坏	—	5.5	(1.6)	ヘラミガキ？、黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理	底部に指または棒状工具によるナデ	34-7-1

第 128 図　第 148 次調査出土遺物

富沢遺跡第 148 次調査区における最終氷期最寒冷期の花粉化石群と珪藻化石群

吉川昌伸（古代の森研究舎）

1. 試料と方法

富沢遺跡第 148 次調査区は、沖積低地に位置し段丘縁から東側に約 200m離れる。本遺跡では、有機質の堆積物が確認された 23 層と 33 層について、堆積環境と周辺植生を明らかにするための資料を得ることを目的に花粉化石群と珪藻化石群を調査した。23 層は層状ないしレンズ状に分布し、褐灰色シルトに黒褐色有機質シルトが互層状に狭在する。33 層は一部でレンズ状に分布し、灰色シルトに有機質シルトの薄層が狭在する。23 層は第 68 次調査区の 25a 層に対比されるとされている。

花粉化石群の調査は、23 層（試料 16）と 33 層（試料 15）の 2 層準で行った。花粉化石の抽出は、試料約 1～3g を秤量し体積を測定後に 10%KOH （湯煎約 15 分）、傾斜法により粗粒砂を取り除き、48%HF（約 15 分）、重液分離（比重 2.15 の臭化亜鉛）、アセトリシス処理（濃硫酸 1: 無水酢酸 9 の混液で湯煎 5 分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分撹拌後、マイクロピペットで取り重量を測定（感量 0.1mg）しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、花粉分析試料の砂分、シルト以下の細粒成分、有機物各量及び、生業等の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により 750℃で 3 時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトの ImageJ で 75 μm^2 より大きいサイズの微粒炭の積算面積を測定した。

珪藻分析は 23 層（試料 16）の 1 試料である。珪藻化石の抽出は、試料約 1g をトールビーカーにとり、35%過酸化水素水を加えて加熱し、有機物の分解と粒子の分散を行う。反応終了後に、沈底法により水洗を 5～6 回行った。次に分散した試料を適当な濃度に調整し、十分撹拌後マイクロピペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させる。スライドグラスにマウントメディア（封入剤）を適量のせ、これに先程のカバーグラスをかぶせ、加熱して封入剤の揮発成分を気化させて永久プレパラートを作成した。検鏡は 1000 倍の光学顕微鏡を使用して、珪藻殻が 1/2 以上残存したものについて同定・計数を行った。珪藻の同定および各種の生態情報は、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、Round et al.（1990）、渡辺（2005）、小林ほか（2006）を参考にし、古環境の復元のための指標としては安藤（1990）の環境指標種群や渡辺（2005）の有機汚濁と pH などを用いた。

2. 結　果

1）花粉分析

23 層と 33 層より出現した分類群のリストとその個数を表 2 に、花粉分布図を図 1 に示す。出現率は、樹木は樹木花粉、草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。

表1　分析試料の堆積物の特性(重量%)

試料	層位	堆積物の特徴	砂	泥	強熱減量(有機物量)
15	33	にぶい黄橙色シルト	4.8	84.8	10.4
16	23	黒褐色有機質シルト	2.6	78.7	18.7

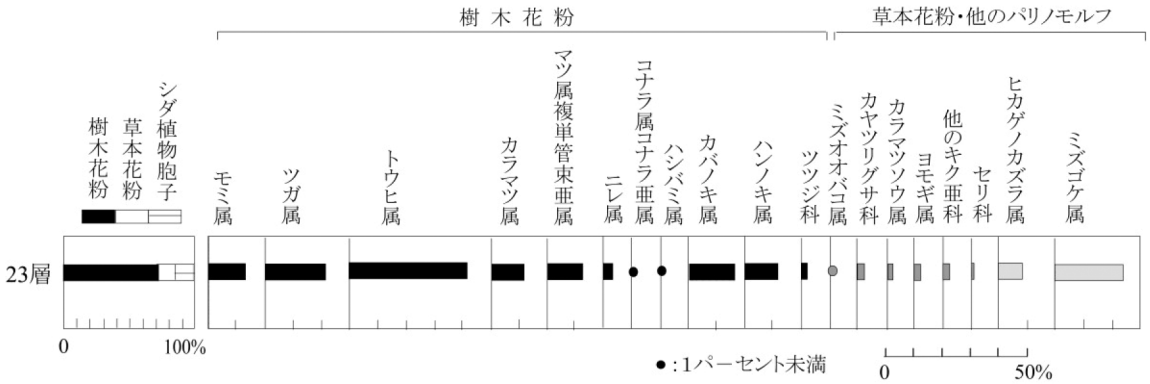


図1 富沢遺跡第148次調査地点の主要花粉分布図
（出現率は，樹木は樹木花粉数，草本・胞子は花粉胞子数を基数として百分率で算出）

花粉化石は、23 層には多量に含まれていたものの、33 層からは検出されなかった。23 層では、針葉樹のトウヒ属が高率で出現し、針葉樹のツガ属とモミ属、カラマツ属、マツ属単維管束亜属、落葉広葉樹のカバノキ属とハンノキ属が比較的多く占めた。他にニレ属やコナラ亜属、ハシバミ属、ツツジ科などが僅かに出現した。また、ツガ属は環状の帯部分を含む直径と本体の直径の比を計測した 9 粒のうち 8 粒が 1.25 以上（高原，1992）であり、コメツガ型からなる。草本花粉は低率でカヤツリグサ科やカラマツソウ属などが出現し、シダ植物のヒカゲノカズラ属や蘚苔類のミズゴケ属が比較的多く出現した。沈水植物のミズオオバコ属が出現したが、現在、ミズオオバコの北限は青森県であり、他に水生植物が出現していないことから誘導化石と考えられる。33 層からはシダ植物の胞子が僅かに検出されたものの、花粉化石は検出されなかった。細粒微粒炭量は、2 試料とも極めて少なく 23 層で 7 ㎟/㎤であった。

表2　富沢遺跡第148次調査区より出現した花粉化石の一覧表

和　名	学　名	試料No. 16 23層	15 33層
樹　木			
モミ属	*Abies*	28	-
ツガ属	*Tsuga*	45	-
トウヒ属	*Picea*	87	-
カラマツ属	*Larix*	25	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	26	-
ニレ属	*Ulmus*	6	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	1	-
ハシバミ属	*Corylus*	1	-
カバノキ属	*Betula*	35	-
ハンノキ属	*Alnus*	26	-
ツツジ科	Ericaceae	4	-
草　本			
ミズオオバコ属	*Ottelia*	3	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	10	-
カラマツソウ属	*Thalictrum*	7	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	4	-
フウロソウ属	*Geranium*	2	-
イヌタデ属	*Persicaria*	1	-
ヨモギ属	*Artemisia*	10	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	10	-
セリ科	Apiaceae	4	-
シダ植物			
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	41	1
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	22	5
他のパリノモルフ			
ミズゴケ属	*Sphagnum*	96	-
樹木花粉	Arboreal pollen	284	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	51	0
シダ植物胞子	Fern spores	63	6
花粉・胞子数	Pollen and Spores	398	6
不明花粉	Unknown pollen	4	0
樹木花粉量（粒/cm^3）		9583	0
細粒微粒炭量（mm^2/cm^3）		7	0.4

2）珪藻分析

23 層より産出した珪藻化石群のリストとその個数を表 3 に示す。珪藻化石群の組成は、陸域指標種群の *Pinnularia borealis* と、淡水産公布種の *Aulacoseira canadensis* と *Aulacoseira* spp. が比較的多く占め、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* や沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia viridis*、淡水産公布種の *Eunotia praerupta* などが出現した（図 2）。また、誘導化石と考えられる海水～汽水生種が 16%と比較的多く含まれていた。なお、陸域指標種群は「コケ類を含めた陸上植物

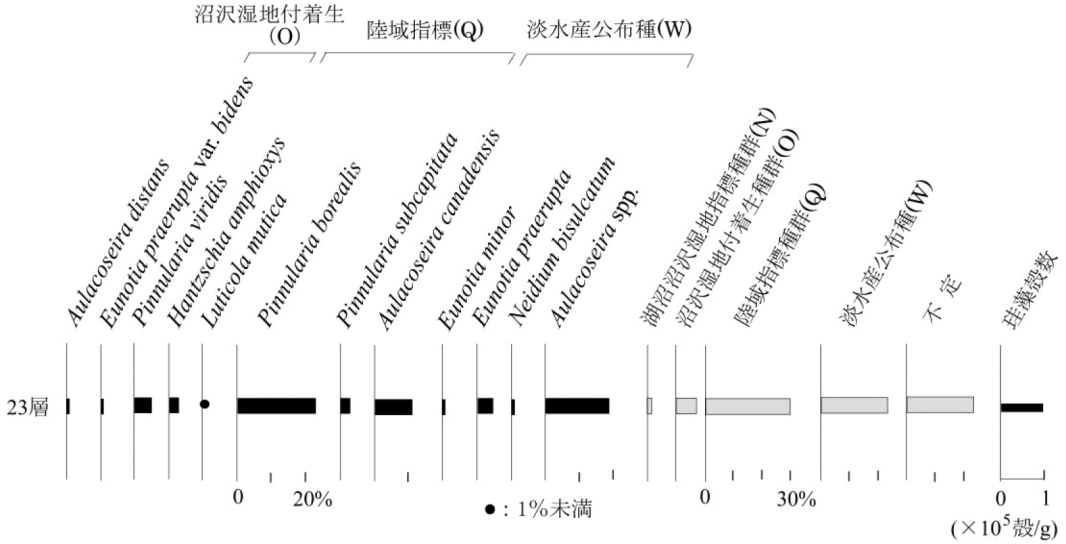


図２　富沢遺跡第148次調査区の主要珪藻分布図

表3　第148次調査区の珪藻分析結果一覧表（指標種群は安藤(1990)，有機汚濁とpHは渡辺(2005)に基づく）

分類群	生態	指標種群	有機汚濁	pH	No.16 23層
Actinoptychus senarius (Ehrenberg) Ehrenberg	M	-	-	-	1
Auliscus sculptus (W.Smith) Ralfs in Pritchard	M	-	-	-	4
Azpeitia nodulifer (A.Schmidt) Fryxell et Sims	M	-	-	-	5
Coscinodiscus marginatus Ehrenberg	M	-	-	-	1
Diploneis didyma (Ehrenberg) Cleve	M	-	-	-	1
Diploneis smithii (Brebisson ex W.Smith) Cleve	B, M, F	E2	-	-	2
Giffenia coconiformis (Grunow) Round & Basson	B	E1	-	-	1
Melosira moniliformis (O.F.Müller) Agardh	B, M		-	-	3
Palaria sulcata (Ehrenberg) Cleve	B, M	B	-	-	6
Rhopalodia acuminata Krammer	B		-	-	1
Tryblionella granulata (Grunow) D.G.Mann	M	E1	-	-	9
Aulacoseira canadensis (Hustedt) Simonsen	F	W	-	acph?	24
Aulacoseira distans (Ehrenberg) Simonsen	F	N	ind	acph	2
Aulacoseira spp.	F	-	-	-	39
Cyclotella sp.	F	-	-	-	2
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	F	W	-	-	2
Epithemia sp.	F	-	-	-	2
Eunotia minor (Kützing) Grunow in Van Heurck	F	W	saxe	neut	2
Eunotia pectinalis （Dillwyn) Rabenhorst	F	O	saxe	acph	1
Eunotia praerupta Ehrenberg	F	W	saxe	neut	9
Eunotia praerupta var. *bidens* (Ehrenberg) Grunow	F	O	saxe	neut	2
Eunotia serra Ehrenberg	F	W	ind	acph	2
Hantzschia amphioxys (Ehrenberg) Grunow in Cleve & Grunow	F	Q	ind	neut	6
Luticola mutica (Kützing) D.G.Mann	F	Q	saph	alph	1
Neidium bisulcatum (Lagerstadt) Cleve	F	W	ind	acph	2
Orthoseira roeseana (Rabenhorst) O'Meara	F	Q	-	-	1
Pinnularia borealis Ehrenberg	F	Q	ind	acph	48
Pinnularia brebissonii (Kützing) Rabenhorst	F	W	-	-	1
Pinnularia similis Hustedt	F	W	-	-	3
Pinnularia stomatophora Grunow	F	W	acph	-	1
Pinnularia subcapitata Gregroy	F	Q	-	-	6
Pinnularia subnodosa Hustedt	F	W	-	-	1
Pinnularia viridis (Nitzsch) Ehrenberg	F	O	ind	neut	11
Pinnularia spp.	F	-	-	-	6
Rhopalodia gibba (Ehrenberg) O.Muller	F	W	ind	-	1
Stauroneis phoenicenteron (Nitzsch) Ehrenberg	F	O	ind	neut	1
環境指標種群（個数）					
海水～汽水種					34
湖沼沼沢湿地指標種群（N）					2
沼沢湿地付着生種群（O）					15
陸域指標種群（Q）					62
淡水産公布種（W）					48
不定					49
珪藻殻数					210
珪藻殻数(×1000個/g)					99

生態－M：海水生種，B：汽水生種，F：淡水生種
saxe：好清水性種，　saph：好汚濁性種，　ind：広適応性種
acbi：真酸性種，　acph：好酸性種，　neut：中性種，　alph：好アルカリ性種，　albi：真アルカリ性種

の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群」（小杉，1986）で他の生育地には出現しないか出現しても主要でない（安藤, 1990）とされ、沼沢湿地生種群は水深が 1m 内外で一面に植物が繁茂しているところ、および湿地で付着の状態で優勢な出現がみられる種群、淡水産公布種は淡水域に広く分布する種群である（安藤，1990）。

3．考　察

23 層は、陸域指標種群が比較的高率で出現し、淡水産公布種や沼沢湿地付着生種群を伴うことから、地表面がじめじめした陸域から水湿地であったと推測される。つまり、陸域指標種群の *Pinnularia borealis* と、淡水産公布種の *Aulacoseira canadensis* と *Aulacoseira* spp. が比較的多く占め、異なった環境に分布する珪藻化石から構成されている。*Aulacoseira* は湖沼や河川に分布し、生活形は浮遊性であるが付着基物上にもしばしば出現し（小林ほか，2006）、*Aulacoseira canadensis*

は石への付着藻として出現している（渡辺，2005）。また、花粉分析ではミズゴケ属が多く出現していることから、ミズゴケが生育する地表面がじめじめした陸域と水湿地が分布していたと考えられる。さらに、誘導化石の海水～汽水生種が比較的多く含まれており、河川による堆積もしばしばあった。地表面がじめじめした陸域環境は、30 次調査区の 26 層において湿地帯の周辺に広がっていたことが復元されており（森，1992）、第 147 次調査区の 18 層下部（約 19,500 yr BP；約 23,400 cal BP）でも認められる（吉川，2014）ことから、湿地帯の周辺にはミズゴケ属が生育するじめじめした陸域が広がっていたとみられる。

周辺の植生は、トウヒ属、カラマツ属、ツガ属、モミ属、マツ属単維管束亜属の亜寒帯性針葉樹と、落葉広葉樹のカバノキ属とハンノキ属、ニレ属、ツツジ科からなる森林が形成されており、地表面がじめじめした場所にトウヒ属とカラマツ属が分布し、モミ属とツガ属、マツ属単維管束亜属、カバノキ属などはより乾いた場所に分布していたと考えられる。ツガ属は花粉の形態からコメツガが分布していたと考えられ、モミ属は126次調査区の最終氷期最寒冷期の堆積物から出現した花粉のDNAの塩基配列に基づき、ウラジロモミまたはシラビソが生育していた可能性がある（長谷川・鈴木，2013）。トウヒ属は、球果からトウヒ属バラモミ節（アカエゾマツ、ヒメバラモミ、ヤツガタケトウヒ、ハリモミ、イラモミがある）が分布していたことは明らかであるが、球果でバラモミ節の種の識別は困難とする見解がある（野手ほか，1999）。また、富沢遺跡から出土したトミザワトウヒの種鱗には波打ちが認められる個体が産出していないことから（鈴木，1992；吉川，1995）、トミザワトウヒはアカエゾマツとは別種である可能性がある。一方で、東北地方北部からヤツガタケトウヒが産出し、富沢遺跡のトミザワトウヒがヤツガタケトウヒに似ること、関東地方ではヤツガタケトウヒに似た球果が産出している状況からは、ヤツガタケトウヒが関東地方から東北地方北部までの低地に連続的に分布していた可能性がある（吉川，2016）。最終氷期最寒冷期には、東北地方南部まで北方系針葉樹が南下したことが強調されてきた。しかし、現在、中部地方に分布するチョウセンゴヨウが関東地方から東北地方の低地の広い範囲に分布し、さらに東北地方北部からヤツガタケトウヒが産出しており、関東地方から東北地方の低地の広範囲に本州中部系針葉樹が分布していた可能性がある（吉川，2016）。最終氷期最寒冷期におけるアカエゾマツやヤツガタケトウヒの分布は明らかでなく、トウヒ属バラモミ節の種の解明が期待される。

引用文献

安藤一男．1990．淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理 42：73-88.

長谷川陽一・鈴木三男．2013．仙台市富沢遺跡のモミ属花粉化石からの DNA 増幅と種同定に関する試み．植生史研究 22：3-12.

小林　弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲　保・長田敬吾．2006．小林弘珪藻図鑑　第 1 巻．531p．内田老鶴圃，東京.

小杉正人．1986．陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望．植生史研究 1：29-44.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b) Bacillariophyceae, 1. Teil, 2.Teil, 3.Teil, 4.Teil, 876p., 539p., 576p., 437p, In Ettl, H., Gerloff, J., Heyning, J., Mollenhauer, D.,Susswasserflora von Mitteleuropa, 2(1), 2(2), 2(3), 2(4), Gustav Fischer. Jena.

森勇一．1992．珪藻分析から復元される旧石器時代の地表環境．「富沢遺跡 - 第 30 次調査報告書第Ⅱ分冊 - 」（仙台市教育委員会）：347-369.

野手啓行・沖津進・百原新．1998．日本のトウヒ属バラモミ節樹木の現在の分布と最終氷期以後の分布変遷．植生史研究6：3－13.

Round,F.E., Crawford,R.M. & Mann,D.G. 1990. The Diatom. Biology and morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.

鈴木敬治．1992．大型植物化石．「富沢遺跡 - 第 30 次調査報告書第Ⅱ分冊 - 」（仙台市教育委員会）：244-273.

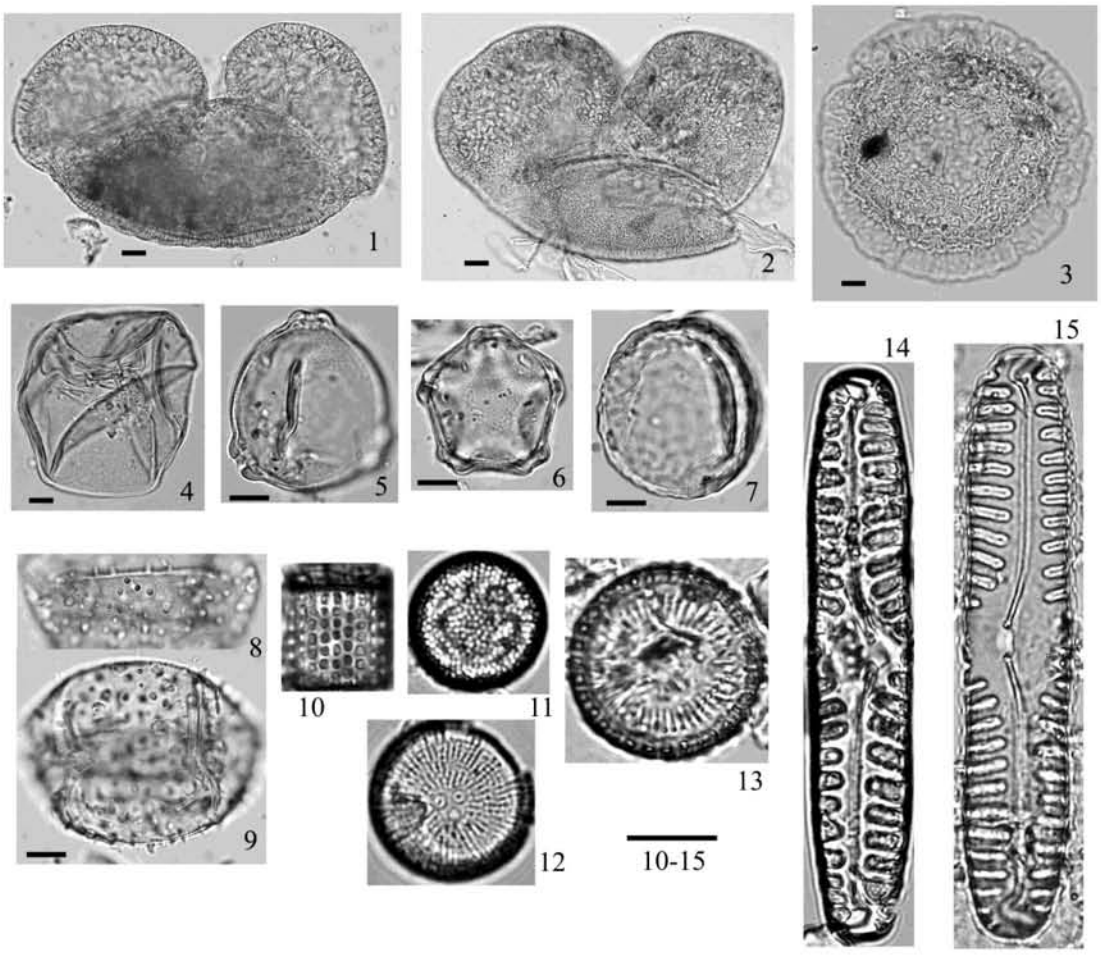
高原　光．1992．日本産ツガ属の花粉形態．京都府立大学農学部演習林報告 36：45-55.

吉川純子．1995．仙台市富沢遺跡第 88 次調査で産出した大型植物化石．「富沢遺跡第 88 次・89 次発掘調査報告書第」（仙台市教育委員会 ）：50-67.

吉川昌伸．2014．富沢遺跡第 147 次調査区の最終氷期最寒冷期の植物遺体包含層の珪藻化石群．「富沢遺跡　第 147 次発掘調査報告書」（仙台市教育委員会）：39-42.

吉川昌伸．2016．更新世末から完新世初頭の東北日本の植生史．旧石器研究 12：1-12.

渡辺仁治．2005．淡水珪藻生態図鑑．666 p．内田老鶴圃，東京.



図版1　富沢遺跡第148次調査区の23層より産出した花粉化石と珪藻化石（AFR.MYは単体標本番号）

1 モミ属,　AFR.MY 2414.　2 トウヒ属, AFR.MY 2423.　3 コメツガ型, AFR.MY 2415.　4 カラマツ属, AFR.MY 2416.
5 カバノキ属,　AFR.MY 2423.　6 ハンノキ属, AFR.MY 2421.　7 ニレ属, AFR.MY 2418.　8-9 ミズオオバコ属, AFR.MY 2419.
10 *Aulacoseira canadensis*.　11 *Aulacoseira* sp.　12 *Orthoseira roeseana*.　13 *Palaria sulcata*.　14-15 *Pinnularia borealis*.
スケール= 10μm

６．まとめ

今回の調査では、4 層と 7 層から水田跡、11 層から溝跡 1 条（ＳＤ１）、水田区画痕跡を確認した。4 層水田跡では東西方向の畦畔を検出した。水田区画は 2 区画確認されたが､正確な規模や区画の形状については不明である。遺物は土師器甕片 1 点、土師器坏の底部片 1 点、土師器坏片 1 点が出土しているが、時期が推定できるものは出土していない。4 層水田跡の時期については、近世の堆積層と考えられる 3 層より古く、古代以降の堆積層と考えられる 6 層よりも新しいことや、近接する第 68 次調査で確認された中世から近世の水田耕作土 4 層の特徴と類似していることから中世から近世の水田跡と考えられる。

7 層水田跡では、東西方向に延びる畦畔 1 条と南北方向に延びる畦畔 2 条を検出した。水田区画は 4 区画確認されたが、正確な規模は不明である。区画の形状は、畦畔の形状から方形と考えられる。遺物は出土していない。7 層水田跡の時期については、層中に灰白色火山灰ブロックを含むことや、古代以降の堆積層と考えられる 6 層よりも古いことから、延喜 15 年（915 年）以降の平安時代の水田跡と考えられる。

11 層上面検出の SD1 溝跡からは出土遺物がなく、遺物から時期の推定はできないが、7 層水田跡よりも古いことから、古代以前のものである可能性が考えられる。

11 層下面検出の水田区画痕跡では、北西から南東に延びる畦畔痕跡 7 条と北東から南西に延びる畦畔痕跡 3 条を検出した。正確な規模は不明である。区画の形状は、畦畔痕跡の形状から方形と考えられる。出土遺物がなく、時期は不明である。

下層の調査において確認した腐植土層 23 層は、第 68 次調査で確認された旧石器時代の腐食土層 25a 層の特徴と類似していることから、旧石器時代の腐食土層と考えられる。

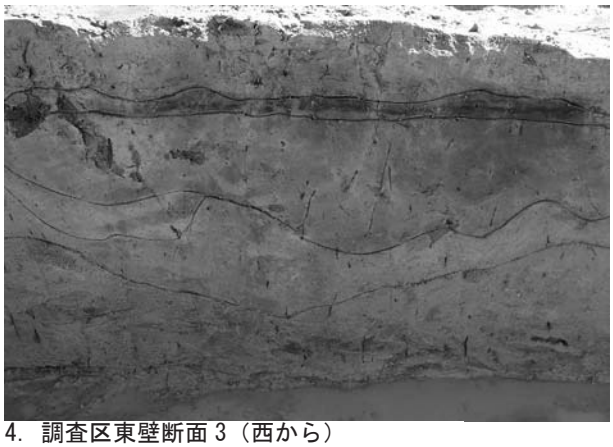
引用・参考文献

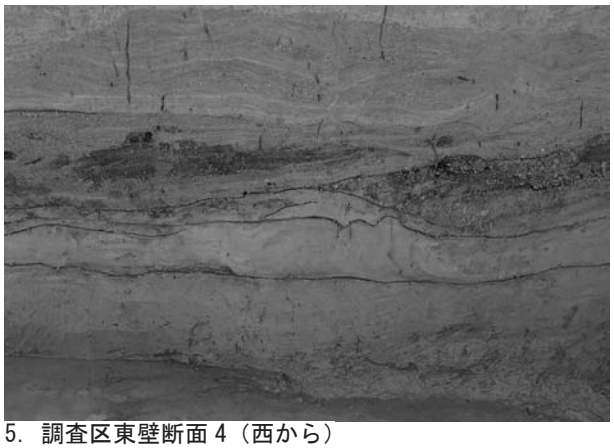
仙台市教育委員会 1991「第 2 章　調査結果　第 12 節　富沢遺跡第 68 次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3)』－富沢遺跡第 57 ～ 68 次，山口遺跡第 13・14 次発掘調査報告書－　仙台市文化財調査報告書第 152 集

1. 調査区全景（南西から）

2. 調査東壁断面 1(西から）

3. 調査区東壁断面 2（西から）


4. 調査区東壁断面 3（西から）

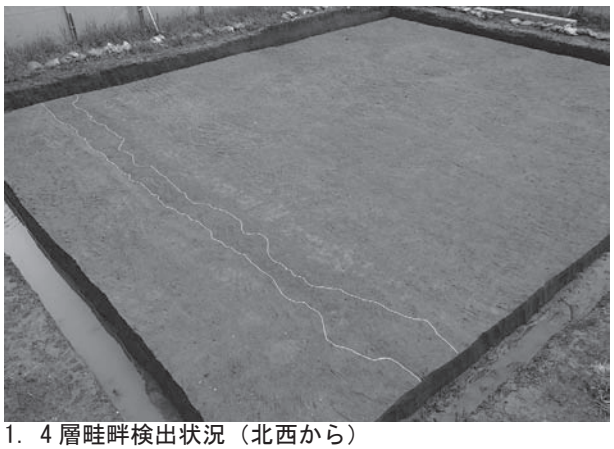

5. 調査区東壁断面 4（西から）

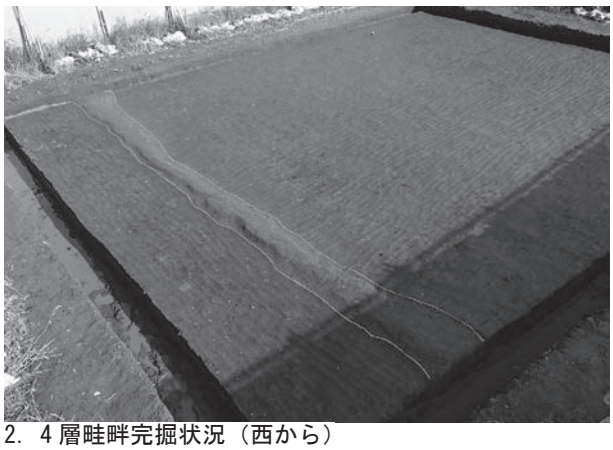
6. 調査区北壁断面 1（南から）

7. 調査区北壁断面 2（南から）

8. 調査区北壁断面 3（南から）

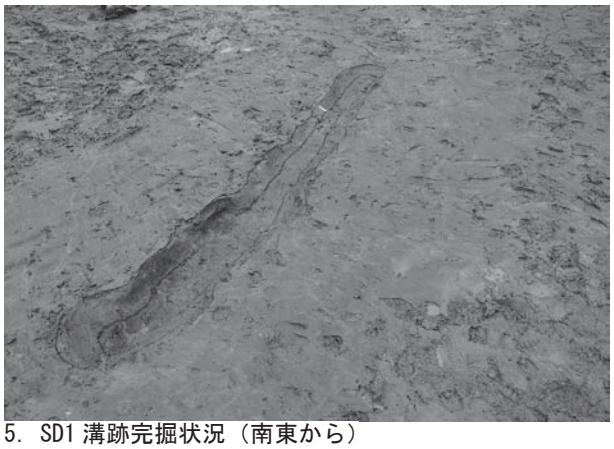
写真図版 33　富沢遺跡第 148 次調査（1）


1. 4 層畦畔検出状況（北西から）

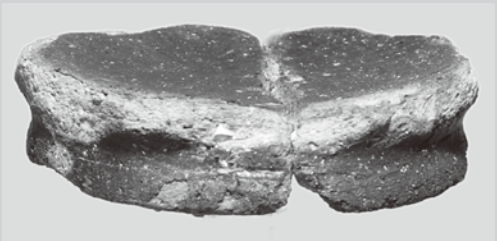

2. 4 層畦畔完掘状況（西から）

3. 7 層上面畦畔検出状況（南西から）

4. 7 層上面畦畔完掘状況（南西から）


5. SD1 溝跡完掘状況（南東から）

4. 11 層下面畦畔痕跡検出状況（南西から）


1

2

7. 出土遺物（S=1/1）

写真図版 34　富沢遺跡第 148 次調査（2）

1．沓形遺跡第 7 次調査

調査地点は沓形遺跡の南部に位置し、北東側と南東側は第 2 次調査区と隣接している。今回の調査では弥生時代中期中葉の水田跡と水田に伴う畦畔痕跡を検出した。水田跡は約 2000 年前の津波堆積物に覆われた状態で検出されている。また第 2 次調査の大畦畔の延長部分を検出したが、調査面積の制約もあり水田の構造や区画の平面形と面積を捉えることはできなかった。

2．南小泉遺跡第 80 次調査

調査地点は南小泉遺跡の南部に位置する。今回の調査では竪穴住居跡 1 軒、土坑 3 基、性格不明遺構 3 基、小溝状遺構 2 条、ピット 5 基を検出した。SI1 竪穴住居跡からはカマドが検出され、燃焼部からはロクロ土師器の坏と甕、須恵器の坏、磨石が合計で 11 固体、折り重なった状態で検出された。検出状況からカマドの支脚が利用されていた状態を保持したまま住居は廃絶したものと考えられる。出土遺物の様相から SI1 竪穴住居跡の年代は 9 世紀後半から 10 世紀にかけての年代であると考えられる。また SK1 土坑からもロクロ土師器と赤焼土器が出土している。

3．南小泉遺跡第 81 次調査

調査地点は南小泉遺跡の北東部に位置する。今回の調査では竪穴住居跡 1 軒、ピットを 1 基検出した。竪穴住居跡からは土師器の高坏、甕、壺などが出土した。出土遺物の様相から竪穴住居跡の年代は 5 世紀代であると考えられる。南小泉遺跡の北東部で当該期の遺構、遺物はこれまで出土したことがなく、今回の発見により 5 世紀代の遺構群が遺跡の北東側にも広がることが判明した。

4．今泉遺跡第 13 次調査

調査地点は遺跡の南西側に位置する。今回の調査では事業地内に 3 箇所のトレンチを設けたが、いずれのトレンチからも東西方向の溝跡が検出された。溝跡はいずれもこれまで想定されている今泉城の堀跡と平行する。特に 2 トレンチから検出された SD2 溝跡は、規模が横幅 6.5 m、深さ 1.0 m以上ある大規模な溝跡で、またこれまで他の調査区で見つかっている堀跡の規模と比べても遜色ないことから、今泉城の堀跡の一部の可能性があるが、これまで推定されている堀跡のラインよりも外側に位置する。最近の今泉遺跡の調査では、これまで推定されている堀跡よりも外側で大規模な堀跡が検出されていることから、従来想定されていた以上に多くの防御施設があったのではないかと考えられる。

5．北目城跡第 8 次調査

調査地点は遺跡東側に位置する。今回の調査では堀跡 2 条、整地層 1 ヶ所、溝跡 11 条、井戸跡 4 基、土坑 12 基、ピット 65 基および弥生時代中期以前の噴砂痕が検出された。SD1 堀跡は水性堆積を伴うことから水堀であると考えられる。検出された規模は横幅が 9.0 ～ 10.0 m、深さ約 2.0 ～ 2.5 m、長さは 60.5 mである。堀の底面は南側の一部が一段低く掘り込まれており、その掘り込みの間に杭が打ち込まれていた。また堀の堆積土の一部は人為堆積で、周囲に存在していた土塁を崩して堀を埋め戻した可能性がある。また土塁の痕跡と思われる整地層も堀の北側の一部から検出された。SD4 堀跡にも水性堆積が伴うことから水堀であると考えられるが、SD1 よりも規模が小さく、幅も深さも半分程度に収まる。

SD1 堀跡の北側からは溝跡が 9 条検出されたが、いずれも堀跡と平行するか、直行することから、城の内部を区

画する溝跡であると考えられる。

井戸跡の一部は溝跡と重複するが、いずれも溝跡よりも新しい。井戸跡からは瓦質土器の擂鉢や、石臼等が出土した。また一部の井戸跡からは曲物の底部や板材などの木製品が多数出土した。

本発掘調査区で検出された遺構から中世の陶器や、瓦質土器や擂鉢、磁器などが出土したが、近世の遺物はまったく出土しなかったことから、遺構の時期は16世紀代であると考えれる。

6. 郡山遺跡第260次調査

調査地点は遺跡の南東部に位置する。今回の調査では溝跡5条、性格不明遺構2基、土坑1基、ピット8基が検出された。

今回の調査ではⅣ層上面検出のSX2380性格不明遺構や、SD2379溝跡が機能した跡に、Ⅲ層を耕作土とする水田が作られたと考えられ、その後、SD2374溝跡が掘られたと考えられる。

Ⅲ層上面検出のSD2374溝跡は、ほぼ真南北方向であり、北側の第41次・94次・194次調査区で確認されているSD476・2213溝跡に続く可能性がある。あわせると長さが110 m以上になると予想され、Ⅱ期官衙と関連する何らかの区画施設であった可能性がある。

Ⅳ層検出のSD2379溝跡は、比較的大型の溝跡であるが、周辺の調査区ではこれに続く溝跡は確認されておらず、現時点で官衙との関連は不明である。

基本層Ⅲ層からⅣ層にかけて層位的に遺構が検出されたことにより、遺構の環境や土地利用の変遷について新たな知見が得られた。

7. 郡山遺跡第263次調査

調査地点は郡山方四町Ⅱ期官衙の南東部分に位置する。今回の調査では材木列1条、溝跡6条、井戸跡3基、土坑5基、性格不明遺構1基、ピット2基が検出された。1トレンチで検出されたSA74材木列は過去の調査でも検出された方四町2期官衙の東辺を区画する材木列の一部である。掘り下げた範囲からは柱材が6本出土した。今回取り上げた4本の樹種同定を行ったところいずれもクリ材であることが判明した。

1トレンチの各遺構からは格子叩きの瓦が一定量出土したことから、当調査区の周囲に格子叩きの瓦を用いた建物が存在していた可能性がある。またSE2392井戸跡は官衙の時期よりも新しい井戸跡であると考えられるが、堆積土からは装飾を施した円面硯が出土している。

SA74材木列よりも新しい溝跡が3条検出されたが、溝跡からは渥美焼や材地の中世陶器が多数出土した。遺物の様相から遺構の年代は14世紀以降であると考えられる。

8. 富沢遺跡第148次調査

調査地点は富沢遺跡の北西部に位置する。今回の調査では中世から近世の水田跡1面、また延喜15年（915年）以降の平安時代の水田跡を1面検出した。また平安時代の水田跡よりも古い溝跡と水田区画痕跡を検出したが、遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。下層の調査においては旧石器時代のものと考えられる腐植土層を確認した。

報告書抄録

ふりがな	くつかたいせき　ほか
書名	沓形遺跡　他
副書名	発掘調査報告書
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 458 集
編著者名	及川謙作　小林航　佐藤洋　庄子裕美　高橋純平
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒 980-0011　仙台市青葉区上杉一丁目 5-12　仙台市役所　上杉分庁舎 10 階　　TEL：022-214-8894
発行年月日	平成 29 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間		調査面積	調査原因
	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物			特記事項
	要約								
沓形遺跡（第 7 次）	仙台市若林区荒井字広瀬	4100	01563	38°14′5″	140°57′1″	2016.10.3 2016.10.18		153 ㎡	記録保存（事務所新築）
	生産遺跡	弥生～中世		水田跡		なし			
	約 2000 年前の津波堆積物に覆われた弥生時代の水田跡を 1 面検出した。								
南小泉遺跡（第 80 次）	仙台市若林区遠見塚一丁目	4100	01021	38°14′9″	140°54′39″	2016.7.20 2016.7.26		30 ㎡	記録保存（共同住宅新築）
	集落跡・屋敷跡	弥生～近世		土坑・竪穴住居跡		土師器・須恵器・赤焼土器			
	土坑、竪穴住居跡、性格不明遺構などを検出した。いずれの遺構からも 9 世紀後半～ 10 世紀にかけての遺物が出土した。								
南小泉遺跡（第 81 次）	仙台市若林区遠見塚二丁目	4100	01021	38°14′26″	140°54′55″	2016.10.11 2016.10.12		12 ㎡	記録保存（建売住宅新築）
	集落跡・屋敷跡	弥生～近世		竪穴住居跡・ピット		土師器			
	竪穴住居跡、ピットを検出した。竪穴住居跡からは南小泉式の土師器が出土している。								
今泉遺跡（第 13 次）	仙台市若林区今泉 2 丁目	4100	01235	38°12’34″	140°55’38″	2016.4.11 2016.4.13		48 ㎡	記録保存（宅地造成）
	集落跡・城館跡・包含地	縄文～近世		溝跡		弥生土器			
	堀跡想定範囲の南側で、溝跡を 4 条検出した。このうち SD2 溝跡は幅 6.5 m と非常に大型であることから、今泉城の堀跡の可能性がある。								
北目城跡（第 8 次）	仙台市太白区東郡山二丁目	4100	01029	38°13′16″	140°54′2″	確認調査	2016.1.8 2016.1.22	1012.34 ㎡	記録保存（宅地造成、建売住宅新築）
						本発掘調査	2016.4.12 2016.5.31		
						追加調査	2016.10.17 2016.10.24		
	城館跡	中世・近世		堀跡・井戸跡・溝跡		土師器・瓦・土師質土器・陶磁器・木製品・鉄製品等			
	堀跡、溝跡、井戸跡、土坑、ピット、小溝状遺構などを検出した。このうち SD1・4 堀跡は城の南側を区画する堀跡であると考えられる。また井戸跡からは木製品が出土した。								
郡山遺跡（第 260 次）	仙台市太白区郡山二丁目	4100	01003	38°13’12″	140°53’41″	確認調査	2015.11.24 2015.12.18	355 ㎡	記録保存（宅地造成）
						本発掘調査	2016.4.18 2016.7.7		
	官衙跡・寺院跡・包含地	縄文～中世		溝跡・性格不明遺構		土師器・須恵器・陶器			
	溝跡と性格不明遺構、土坑などを検出した。このうち SD2374 溝跡は方位がほぼ真北であることから郡山Ⅱ期官衙に関連するものと考えられる。								
郡山遺跡（第 263 次）	仙台市太白区郡山三丁目	4100	01003	38°13’19″	140°53’43″	2016.6.6 2016.7.22		107.60 ㎡	記録保存（宅地造成）
	官衙跡・寺院跡・包含地	縄文～中世		材木列・溝跡・土坑・井戸跡		土師器・須恵器・瓦・円面硯・陶器・磁器			
	材木列、溝跡、井戸跡、土坑などを検出した。材木列は方四町Ⅱ期官衙の東辺にあたる。底部には柱材が残存していた。また調査区内からは格子叩きの平瓦が多数出土した。								
富沢遺跡（第 148 次）	仙台市太白区鹿野三丁目	4100	01369	38°13’30″	140°52’12″	2016.8.1 2016.10.28		127.2 ㎡	記録保存（保育園新築）
	生産遺跡	旧石器～近世		水田跡・溝跡		石器、土師器、陶器			
	水田面を 2 面検出し、水田区画痕跡を検出した。								

仙台市文化財調査報告書第 458 集

沓形遺跡 他

発掘調査報告書

2017 年 3 月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区上杉 1 丁目 5-12
仙台市役所上杉分庁舎 10 階
文化財課　TEL 022（214）8894

印刷　株式会社　仙台紙工印刷
仙台市宮城野区苦竹三丁目 1-14
TEL 022（231）2245㈹